静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第168集

上ノ山遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－1

2006

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

中日本高速道路株式会社横浜支社

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第168集

上ノ山遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－1

２００６

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

中日本高速道路株式会社横浜支社

序

第二東名高速道路は約170kmにわたって静岡県内を東西につらぬく形で建設が予定されている。本書は、その建設に伴い実施された、島田市志戸呂に所在する上ノ山遺跡の発掘調査報告書である。

島田市金谷地区では、周知の遺跡である駿河山遺跡、上志戸呂古窯も第二東名高速道路建設に伴う発掘調査が行われ、別に報告がなされる予定であるが、本書で報告されている上ノ山遺跡は今回の調査で新たに発見された弥生時代の集落遺跡である。金谷地区での弥生時代の遺跡は、そのほとんどが土器片の出土が報じられているにすぎず、本格的な発掘調査により遺跡の内容が明確となったのは、この上ノ山遺跡と駿河山遺跡が初めてである。

弥生時代を特徴づけるものといえば水田稲作である。大井川流域に水田稲作技術が伝わってきたのは弥生時代中期～後葉と考えることができる。金谷地区でそのころ水田稲作が行われた可能性の高い候補地は大代川流域と考えられており、上ノ山遺跡はその大代川左岸の丘陵上という立地に存在する。今回の調査では水田稲作を示す直接的な発見はなかったが、今後の調査・研究の進展につながる資料を提供したことになろう。金谷町域のみならず、周辺地域との関わりのなかで今回の調査の成果が活かされることを期待するものである。

今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたって、中日本高速道路株式会社横浜支社、島田市教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位、地元住民の方々より多大な御理解と御協力をいただいた。さらに、多くの方から御指導・御助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げる。最後に、現地調査、資料整理に関わった調査研究員、作業員諸氏にも感謝の意を表する次第である。

平成18年３月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　齋藤　　忠

例　言

1　本書は、島田市金谷地区における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の総論と、静岡県島田市志戸呂971-6外に所在する上ノ山遺跡の発掘調査報告書である。

2　第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区(市町村)単位で実施している。島田市域では本書が第１冊目であるため「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　島田市-1」とした。

3　調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、島田市（旧金谷町）の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4　現地調査・資料整理の期間と担当者は以下のとおりである。なお、調査体制は第１章に明記した。

　　確認調査：平成11年１月　川上　努

　　本 調 査：平成11年４月～９月　石田　勉、川上　努

　　資料整理・報告書作成：平成16年４月～平成17年３月　川上　努

　　平成17年４月～平成18年３月　河合　修、鈴木淑子

5　本書の執筆は第１章第１節を及川　司が、第１章第２節を河合が、他の部分を川上が行い、河合が一部加筆した。

6　調査における協力者等は、文末に記載した。

7　現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構測量の一部は玉野総合コンサルタント株式会社に委託した。

8　整理作業における石器の実測は株式会社アルカ及び株式会社フジヤマに委託した。

9　本書で使用した遺物写真図版は、すべて当研究所写真室が撮影した。

10　脆弱遺物の取り上げ及び保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。

11　調査の概要は、当研究所の出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。

11　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

12　発掘調査の資料は、静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

1　座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

2　本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。

　　例）ＳＦ16　（ＳＦ：遺構の種別　16：遺跡内の遺構種類別通し番号）

　　ＳＢ：竪穴住居跡　　ＳＨ：掘立柱建物跡　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＦ：土坑

　　ＳＰ：ＳＢ外の小穴　　Ｐ：ＳＢ内の小穴

3　遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。

4　遺物番号は、挿図掲載遺物について種類・挿図の別に関わらず、通し番号を付している。

5　観察表にある石器等の石材は、株式会社アルカ及び株式会社フジヤマの鑑定による。

6　本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1992）を使用した。

7　本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。

目　次

序／例言／凡例／目次

第１章　総　論 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 3
　　１　第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯 …… 3
　　２　現地調査の体制 …… 4
　第２節　島田市西部の位置と環境 …… 6
　　１　地理的環境 …… 6
　　２　歴史的環境 …… 7
　第３節　確認調査 …… 11
　　１　確認調査の対象地点 …… 11
　　２　確認調査の方法と経過 …… 12
　第４節　本調査 …… 13
　　１　本調査の方法と経過 …… 13
　　２　本調査の概要 …… 13
　第５節　資料整理 …… 15
　　１　資料整理の体制 …… 15
　　２　資料整理の方法と経過 …… 16

第２章　上ノ山遺跡 …… 17
　第１節　位置と環境 …… 19
　　１　位置と地理的環境 …… 19
　　２　歴史的環境と調査歴 …… 20
　第２節　調査の方法と経過 …… 21
　　１　発掘調査の方法 …… 21
　　２　発掘調査の経過 …… 21
　　３　資料整理の方法と経過 …… 23
　第３節　調査の成果 …… 24
　　１　概要 …… 24
　　２　遺構と遺物 …… 27
　第４節　まとめ …… 93
写真図版
抄録

挿図目次

総論
第１図　金谷地区の地質
第２図　金谷地区の地形と地名
第３図　周辺の遺跡分布図
第４図　第二東名の路線と対象地点
上ノ山遺跡
第５図　本遺跡の位置と周辺の遺跡
第６図　本調査範囲と周辺の地形
第７図　グリッド配置図
第８図　調査区土層断面図
第９図　遺構全体図
第10図　竪穴住居跡ＳＢ14
第11図　土坑ＳＦ９遺物出土状況及び出土遺物
第12図　土坑ＳＦ６・10・11・12
第13図　竪穴住居跡ＳＢ１・２
第14図　竪穴住居跡ＳＢ１・２出土遺物
第15図　竪穴住居跡ＳＢ３
第16図　竪穴住居跡ＳＢ４及び出土遺物
第17図　竪穴住居跡ＳＢ５及び出土遺物
第18図　竪穴住居跡ＳＢ６及び出土遺物
第19図　竪穴住居跡ＳＢ７及び出土遺物
第20図　竪穴住居跡ＳＢ７内Ｐ３遺物出土状況
第21図　竪穴住居跡ＳＢ９及び出土遺物
第22図　竪穴住居跡ＳＢ10
第23図　竪穴住居跡ＳＢ10出土遺物
第24図　竪穴住居跡ＳＢ11
第25図　竪穴住居跡ＳＢ11出土遺物
第26図　竪穴住居跡ＳＢ12・13・18
第27図　竪穴住居跡ＳＢ12･13、溝ＳＤ５出土遺物
第28図　竪穴住居跡ＳＢ15・17
第29図　竪穴住居跡ＳＢ15出土遺物
第30図　竪穴住居跡ＳＢ16及び出土遺物
第31図　竪穴住居跡ＳＢ19
第32図　遺構出土の石器・石製品１
第33図　遺構出土の石器・石製品２
第34図　掘立柱建物ＳＨ１
第35図　掘立柱建物ＳＨ２・３
第36図　掘立柱建物ＳＨ４
第37図　掘立柱建物ＳＨ５
第38図　掘立柱建物ＳＨ６
第39図　掘立柱建物ＳＨ７
第40図　掘立柱建物ＳＨ８
第41図　竪穴住居跡ＳＢ８及び出土遺物
第42図　土坑ＳＰ181及び出土遺物
第43図　溝ＳＤ８出土遺物
第44図　主要遺物の分布状況
第45図　遺構外出土遺物１
第46図　遺構外出土遺物２
第47図　遺構外出土遺物３
第48図　遺構外出土遺物４
第49図　遺構外出土遺物５
第50図　遺構外出土遺物６
第51図　遺構外出土遺物７
第52図　遺構外出土遺物８
第53図　遺構外出土遺物９
第54図　遺構外出土遺物10
第55図　遺構外出土遺物11
第56図　遺構外出土遺物12
第57図　遺構外出土遺物13
第58図　遺構外出土遺物14

挿表目次

総論
第１表　金谷地区現地調査の体制
第２表　周辺の遺跡一覧表
第３表　調査実施期間
第４表　資料整理の体制
上ノ山遺跡
第５表　竪穴住居跡小穴計測表
第６表　掘立柱建物柱穴計測表

第７表　出土遺物観察表（土器・陶器１）
第８表　出土遺物観察表（土器・陶器２）
第９表　出土遺物観察表（土器・陶器３）
第10表　出土遺物観察表（石器・石製品１）
第11表　出土遺物観察表（石器・石製品２）
第12表　出土遺物観察表（石器・石製品３）
第13表　出土遺物観察表（石器・石製品４）

写真目次

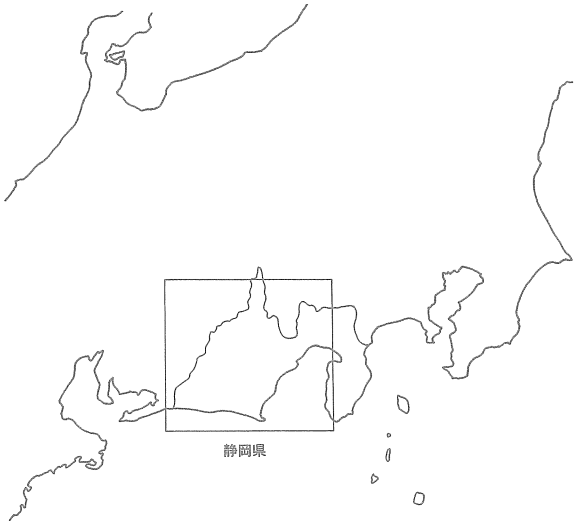
総論
写真１　上志戸呂窯跡の調査
写真２　駿河山遺跡の調査

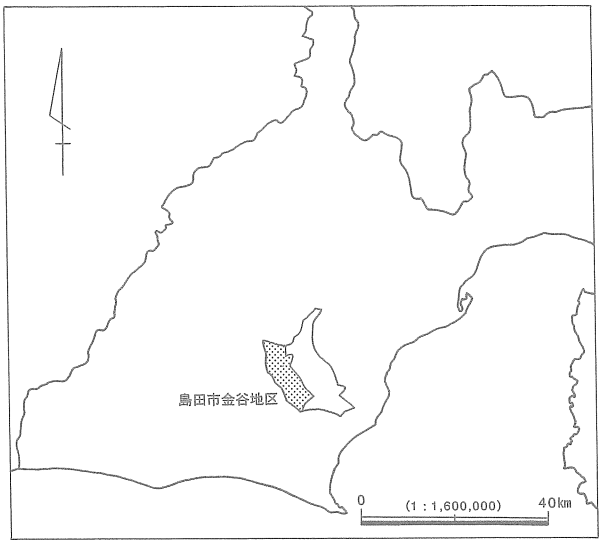
上ノ山遺跡
写真３　遺物接合・復元作業
写真４　遺物実測作業
写真５　版下作成作業
写真６　原稿執筆作業

図版目次

図版１　南からの遺跡遠景
　　東からの遺跡遠景
図版２　西からの遺跡遠景
　　南からの遺跡遠景
図版３　調査区全景（俯瞰）
図版４　ＳＢ１～３
　　ＳＢ４・５
図版５　ＳＢ５～８・19
　　ＳＢ10～13・18
図版６　ＳＢ12・13・18・15～17、ＳＨ８
　　ＳＢ11～18
図版７　ＳＢ14（北より）
　　ＳＦ９遺物出土状況
図版８　ＳＦ11半截状況（北より）
　　ＳＦ11（東より）
図版９　ＳＢ１・２（東より）
　　ＳＢ２西側炉跡
　　ＳＢ２東側炉跡
　　ＳＢ２遺物出土状況（壷　南東より）
　　ＳＢ２遺物出土状況
　　（乳棒状石斧　北より）
図版10　ＳＢ３（北より）
　　ＳＢ４（南より）
図版11　ＳＢ４遺物出土状況（土器）
　　ＳＢ５遺物出土状況（壷）
　　ＳＢ７内小穴Ｐ３遺物出土状況
　　ＳＢ５（南より）
図版12　ＳＢ６（南より）
　　ＳＢ７炭化物検出状況
図版13　ＳＢ７（北より）
　　ＳＢ８（南より）
図版14　ＳＢ９遺物出土状況
　　ＳＢ９（南より）
図版15　ＳＢ９遺物出土状況（壷）
　　ＳＢ10遺物出土状況（扁平片刃石斧）
　　ＳＢ11炉跡検出状況
　　ＳＢ11遺物出土状況
　　ＳＢ10（南より）
図版16　ＳＢ11（南より）
　　ＳＢ12・13・18（北より）
図版17　ＳＢ12遺物出土状況
　　（柱状片刃石斧　東より）
　　ＳＢ12遺物出土状況
　　（用途不明石製品　東より）
　　ＳＢ12遺物出土状況
　　ＳＢ12・13遺物出土状況
　　ＳＢ15・17（東より）

図版18　ＳＢ15焼土検出状況（北より）
ＳＢ15遺物出土状況１（壷　西より）
ＳＢ15遺物出土状況２
ＳＢ15遺物出土状況３
ＳＢ16（北より）
図版19　ＳＢ16遺物出土状況
ＳＢ19（西より）
図版20　ＳＦ10
ＳＤ８遺物出土状況（打製石斧）
遺物出土状況（磨製石鏃）
図版21　ＳＰ141遺物出土状況（南より）
ＳＨ１・２・３（西より）
図版22　ＳＨ４（南東より）
ＳＨ６（北東より）
図版23　ＳＰ181遺物出土状況１
ＳＰ181遺物出土状況２
図版24　溝ＳＤ８（北側）
溝ＳＤ８（南側）
埋没谷と調査状況
図版25　ＳＦ９、ＳＢ１・２・４出土土器
図版26　ＳＢ５～８出土土器
図版27　ＳＢ９～11出土土器
図版28　ＳＢ12・13・15、ＳＤ５出土土器
図版29　ＳＢ出土土器・石製品
図版30　ＳＢ出土石製品
図版31　ＳＢ出土石製品、ＳＰ181出土灰釉陶器、
ＳＤ８出土土器
図版32　遺構外出土土器１
遺構外出土土器２
図版33　遺構外出土土器３
遺構外出土土器４
図版34　遺構外出土土器５
打製石鏃・石錐
図版35　石匙
スクレイパー
図版36　打製石鏃・磨製石斧
打製石斧１
図版37　打製石斧２
図版38　打製石斧３
図版39　打製石斧４
打欠石錘１
図版40　打欠石錘２
敲石





第1章　総　論

第１節　調査に至る経緯

１　第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年１月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜市から東海市に至る延長約270㎞の第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170㎞である。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成３年９月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成４年２月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成４年５月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成４年８月27日付で日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成４年９月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成５年３月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あて回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成５年11月19日付けで日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成６年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759㎡となっている。

平成７年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成６年２月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関

連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第１回の協議が平成７年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成８年７月１日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成８年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成８年９月24日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結、さらに調査実施機関である㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成８年９月25日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成８年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真の№94地点、浜北市大平の№136地点、同市四大地の№137地点の確認調査が実施されている。その後、平成９年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地の確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成９年１月31日付けで建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成９年12月25日付けで施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成６年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年９月２日付けで日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年９月25日付けで再踏査の依頼をするとともに、10月２日には踏査の実施に関する打合せ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付けで県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年３月５日付けで協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査の事業量の増大に㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

こうした経過の中で、島田市金谷地区における第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査について、最終的には後述する３地点を調査対象にした。発掘調査の実施については、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所があたったが、用地買収が進んで、一部調査実施が可能となった平成10年度より、№91地点（駿河山遺跡）、№92地点（上志戸呂窯跡）、№93地点（上志戸呂）の確認調査から開始した。

2　現地調査の体制

金谷地区の確認調査及び本調査は、平成10～13年度に実施した。その体制は第１表のとおりである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、「本事業」という。）においては、平成11年度以降に本事業担当課を設けて対応した。さらに、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の範囲に合わせて工区を設定し、数多くの調査に工区単位で対応した。なお、上ノ山遺跡の所在する金谷地区は掛川工区内の一地区である。

金谷地区の担当は、確認調査段階では島田市旭に所在する島田事務所を、本調査段階では各現地事務

所を拠点として各現地調査を実施した。なお、調査担当者については、例言にあげることとする。

また、現地調査を優先するという方針から、整理作業は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。ただし、基礎的な整理作業（各種台帳作成、写真の整理・収納、図面の修正・整理・収納、出土遺物の注記・接合・復元・収納、遺構所見・遺跡概要の整理）については、現地事務所及び島田事務所にて、現地と並行して実施した（以下、「基礎整理」という。）。

各現地調査・基礎整理には第１表以外にも多くの者が参加した。

第１表　金谷地区現地調査の体制

			平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
所長			齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠
副所長				山下　晃	山下　晃	山下　晃
総務部	常務理事兼総務部長		伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸
総務部	次長					
総務部	総務課長		杉木敏雄	杉木敏雄	杉木敏雄	本杉昭一
総務部	担当	経理担当員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸
総務部	担当	総務係長	田中雅代			
総務部	担当	会計係長	杉田　智			
総務部	担当	副主任			鈴木秀幸	鈴木秀幸
総務部	担当	主事		鈴木秀幸		
調査研究部	部長		石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄
調査研究部	次長			佐野五十三	及川　司	栗野克己 及川　司
調査研究部	次長心得		佐野五十三			
調査研究部	担当課長		遠藤喜和	及川　司	及川　司	及川　司
調査研究部	工区主任			飯塚晴夫	飯塚晴夫	加藤理文
調査研究部	主任調査研究員		飯塚晴夫			
調査研究部	調査研究員		石田　勉 諸星雅一 河合　修 川上　努	石田　勉 諸星雅一 木崎道昭 河合　修 川上　努 大林　元	大畑　要 諸星雅一 川上　努 中田　出 河合　修	中田　出 河合　修
調査研究部	保存処理室長					西尾太加二

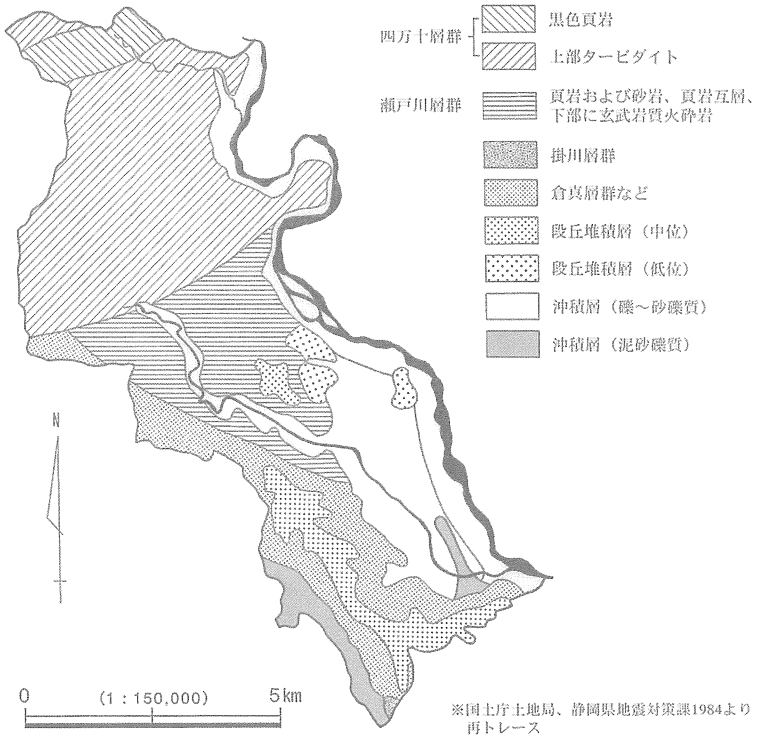
第２節　島田市西部の位置と環境

１　地理的環境

島田市西部（以下、「金谷地区」という。）は、北緯34度50分、東経138度７分30秒付近の静岡県中部に位置し、北側は榛原郡川根町や周智郡森町、東は大井川をはさみ島田市東部（島田地区）や藤枝市、西は掛川市や菊川市、南は牧ノ原市に接している。金谷地区は島田市のうちでも、大井川の西岸地域北側に当たり、平成17年５月の島田市との合併以前は、金谷町であった。金谷地区の面積は64.35㎢を測り、島田市の面積である195.39㎢のおよそ３割３分を占める。

金谷地区は、南アルプスの南端に当たる丘陵と、大井川が主体となって形成した沖積平野から構成されている。丘陵は市域の北側～西側に広く分布し、平野部は横岡・相賀付近から急激に幅を広げ、市域の南東側を占める。この丘陵は、地区の北部では中生界白亜系の四万十層群、半ばでは古第三系の瀬戸川層群、南部では新第三系の倉間層群などに属する。これらのうち四万十層群、瀬戸川層群には頁岩や砂岩を含む層位が発達している。大井川の河床にも流出した転石が多く含まれており、流域の縄文時代遺跡から頁岩や砂岩製の石器が多く出土することにも反映している。これら丘陵部は白亜期末以降の造山運動によって隆起したものといわれるが、現在では大井川や白光川、大代川等丘陵部一帯の雨水を集める河川によって開析された急峻な谷地形により、大きく３つの山塊に分けられる。

最も北側が八高山（標高832.1m）と裾部に広がる尾根である。この山塊は、北は川根町家山から切山にかけての大きな谷によって、南は島田市福用から西へ入る谷に区切られる。西側は掛川市域の大尾山（標高661m）との間にある掛川市黒俣付近から北に入る谷が境となる。中ほどが経塚山（標高669.9m）と裾部に広がる尾根である。北は金谷町福用から西へ入る谷に区切られ、南と西は大代川とその源流部が開析した谷部で区切られる。この丘陵の、特に南東部の尾根上は台地状の平坦面が発達する。もっとも南側が粟ヶ岳（標高532.1m）と裾部に広がる尾根である。この山塊の南側は漸移的に牧ノ原台地の北縁につながる。これらの丘陵の東縁となるのは、大井川である。特に島田市高熊・鍋島・神尾付近では丘陵の張り出しにさえぎられてＳ字状の蛇行を繰り返す。また、同地域と島田市横岡付近の丘陵端部には、大井川の影響による河岸段丘が発達する。これらの丘陵のほかに、島田市牛尾には頂上が台地状になる牛尾山がある。この山は現在では独立丘となっているが、かつては島田市相賀の丘陵部と牛尾山の先端部（山鼻という。）が低い尾根によってつながっていたといわれる。



第１図　金谷地区の地質

これらの丘陵部には、高位におい

ては杉や檜の人工林や広葉樹の自然林がモザイク状に入り組んでいる。低位においては、等高線に沿って茶の栽培が盛んに行われ、静岡県中西部における特徴的な景観をかもし出している。

主に大井川の堆積物による沖積平野は、島田市横岡付近から金谷河原付近にかけて発達する。この平野部は、中村一氏が天正18年（1590）に牛尾山と横岡の間に堤を築き、相賀・牛尾山間を掘割って大井川の本流を西側に導いたため、耕作域として安定したといわれる。つまりそれ以前は、「島」地名に見えるような中州が点在する大井川の氾濫原であった。

この平野部の堆積作用には、大井川のみならず経塚山から流出する大代川も大きく影響している。大代川はいまなお大量の土砂を運びながら平野部を南下し、牧ノ原台地の北縁で東へ流れを変えて大井川に合流する。なお、旧来の金谷の集落は、粟ヶ岳南東麓と牧ノ原台地の裾に挟まれた大井川の影響を比較的受けにくい高地に営まれているのである。

第２図　金谷地区の地形と地名

2　歴史的環境

旧石器時代・縄文時代　現在までに金谷地域では、明らかな旧石器時代の遺跡は把握されていない。ただし、平成11～13年度に現地調査を実施した駿河山遺跡（牛尾）からは、洪積層と思われる黄橙色粘土層上位から若干量の石器が出土している。これが旧石器時代の遺物である可能性が高いという見解（金谷町2003）もある。

縄文時代の遺跡は、牧ノ原台地以北の丘陵の、丘陵頂部に広がる台地状平坦部や大井川による河岸段丘上に点在する。このほか牧ノ原台地の縁辺部にも広がっている。

丘陵頂部に広がる台地状平坦部にある遺跡は、比較的高位にある場合（長者原遺跡、安田原遺跡、加藤原遺跡、杉の沢遺跡、西原遺跡、矢坪沢遺跡）と、低位にある場合（駿河山遺跡）がある。この差は、遺跡の性格によるものではなく、集落を営むことが容易な安定した地形がどの位置にあるのかという、地勢的な要因が大きい。比較的高所にある遺跡では調査が及んでいないために内容が把握できるものがないが、大井川中・下流域の縄文時代遺跡に類して、中期を主体とするものであろう。また、遺跡の分布では、加藤原遺跡、杉の沢遺跡、西原遺跡の３遺跡が同じ尾根上に所在し、興味深い。低位にある駿河山遺跡が占地する丘陵上平坦部の面積は、他の縄文遺跡のものよりも卓越した広さを有する。採集遺物の分布から、複数遺跡が近接して存在するものと考えられていた（金谷町1983）が、平成10～13年度の調査によってくまなく遺構が検出され、平坦地一面が連続した遺跡であることが把握された。中期を

中心として、丘陵の西側斜面を集落の廃棄場所、平坦地中央部を居住域に、東側を墓域とすることが明らかになった。また、調査区一面から多数の風倒木痕が検出されたことは、これらの機能が森に包まれた中に存在していたことを示唆している（財団2002）。

河岸段丘上の遺跡には神尾遺跡、宮ノ段遺跡、川根沢遺跡がある。神尾遺跡の状況は判然としないが、宮ノ段遺跡、川根沢遺跡からは打製石斧、磨製石斧、石錘などが採集されている。土器が明らかでないが、おそらく中期に属するもの推測される。牧ノ原台地縁辺部の遺跡は、唐沢遺跡である。黒曜石製、頁岩製の石鏃、石錐、スクレイパーが採集されている。ここでも土器は明らかでないが、おそらく中期に属するもの推測される。

弥生時代　弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡に比べ土器等時期のわかる遺物が採集されている例が多い。今回の調査地である上ノ山遺跡は中期後半の遺物が出土したことからも、周囲の前身的な集落であることが把握され注目される。他の遺跡は後期を主体とするもので、河岸段丘上や低位の丘陵上にある遺跡（駿河山遺跡、宮ノ段遺跡、横岡城遺跡）と、大井川を望む牧ノ原台地斜面の遺跡（天王町遺跡、下坂遺跡）がある。駿河山遺跡では、調査区全域から200軒以上の後期後半の竪穴住居跡や方形周溝墓群が検出され、当該期の中心的な集落のひとつであったことが判明している。また、横岡城遺跡からも後期後半の壺形土器が出土し、集落遺跡と考えられている。

古墳時代　古墳時代の遺跡は、前期初頭の遺構・遺物が駿河山遺跡から出土しているほかは、後期の横穴式石室墳が顕著である。しかし、中期～後期の集落遺跡は判然としない。

駿河山遺跡からは、前期の竪穴住居跡、方形周溝墓、区画溝等が検出されている。方形周溝墓は平坦部の西側縁辺に連続して築かれている。竪穴住居跡は、平坦部の半ばから東側縁辺にかけて造られており、外縁には区画溝が巡って居住域と墓域を分っている。全面からくまなく竪穴住居跡が検出された弥生時代後期とはまったく異なる土地利用がなされており、両時代の間に何らかの断絶が強く感じられる。また、竪穴住居跡からは、伊勢湾沿岸のＳ字甕と在地の甕が供伴する出土例が得られており、二つの文化の接点として興味深い。

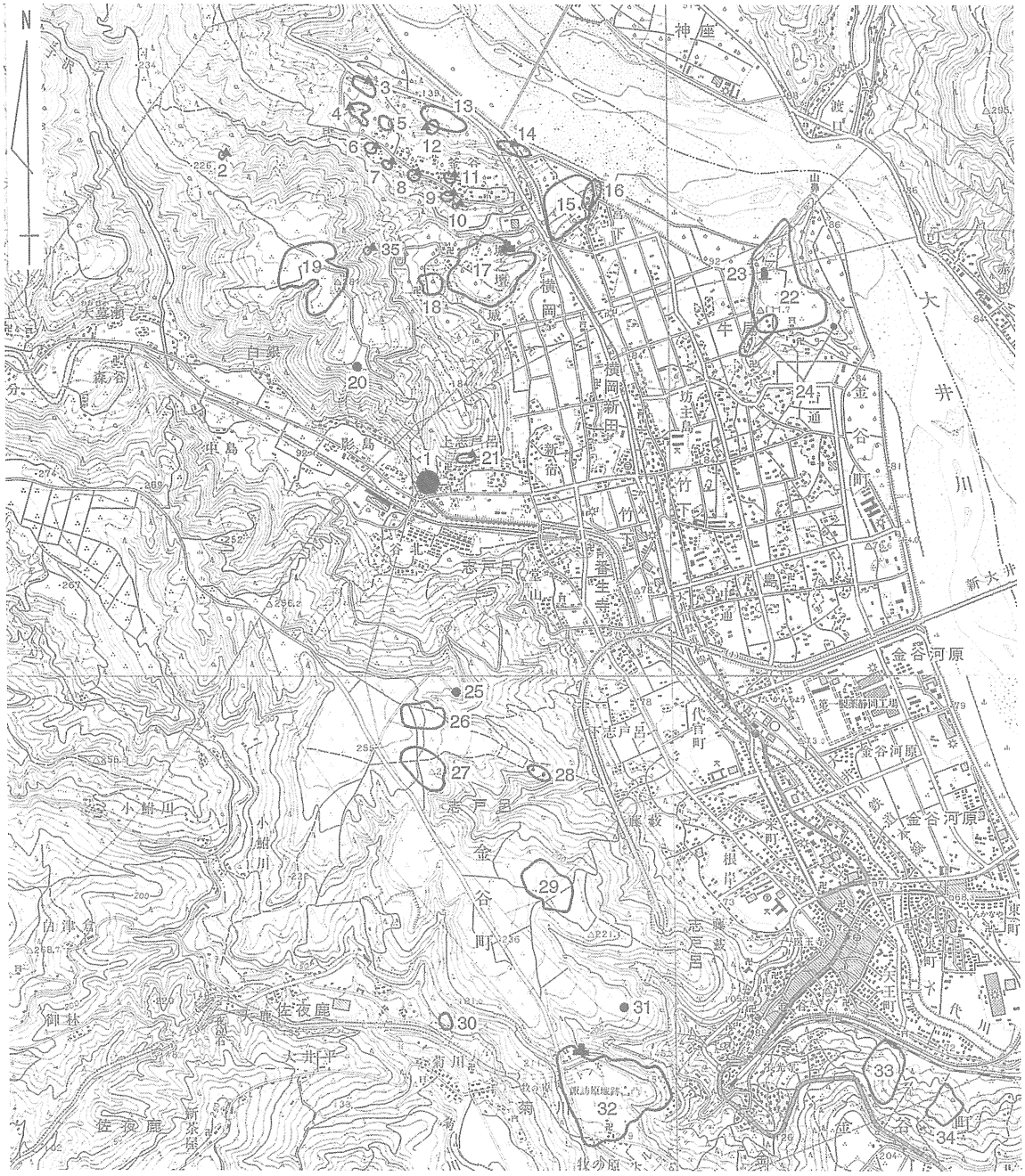
後期の横穴式石室墳は７箇所15基が把握されている。群集する例は、宮ノ段古墳群と駿河山古墳群である。前者は少なくとも３基で構成される。１号墳は最も遺存状況がよく、玄室部分は完存している。２号墳は茶畑の造成によりほぼ破壊され、３号墳も石室の一部が露出している。後者は６基で構成され、丘陵の南側縁辺に築かれる。周囲は茶畑に造成されているので、現況では把握できない古墳が存在する可能性がある。２号墳が昭和57年（1982）に茶畑の改植に伴い発掘調査され、長さ6.7mにわたる横穴式石室が検出されている。一方、孫エ門原古墳や狐平古墳、伊之助原古墳など単独墳は、丘陵縁辺の比較的高所に築かれる傾向が窺える。

古代　古代の集落遺跡は、上ノ山遺跡から奈良～平安時代の遺物と掘立柱建物等が、駿河山遺跡から平安時代後期の掘立柱建物、区画溝が検出された以外は判然としない。一方生産遺跡では、灰釉陶器窯が把握されている。釜谷西窯は11世紀代の窯で、静岡県教委が実施した窯業遺跡調査に伴って発掘調査が行われている。当該期の窯は引き続く山茶椀生産とともに、折戸53号窯式並行期から灰釉陶器生産が開始される大井川東岸の旗指窯と密接に関わるものと考えられる。周辺地域には同時期の窯が複数基所在するようであるが、判然としない。

平安時代の金谷地域は、大井川西岸域を広く荘域とする質侶荘に含まれる。この荘園の来歴は、大治３年（1128）８月の藤原永範寄進状に詳しく記されている。11世紀末には国守大江公資の私領であったものを藤原長家に寄進し本家とし、領家は孫娘が嫁した藤原成季、その子の永実、孫の永範に相伝されたと伝えられる。天永３年（1112）ごろ、本家職が永範に買い取られ、実質のすべてが公資の子孫に帰したといわれる。史料には、永久２年（1114）10月14日の源基俊請文案にみえる記載が初見である。永

第２表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	時　代	番号	遺　跡　名	時　代	番号	遺　跡　名	時　代
1	上ノ山遺跡	弥生～古墳	13	釜谷Ⅰ遺跡	縄文	25	狐平古墳	古墳
2	三ツ沢古窯	戦国	14	すやん沢古窯群	平安・鎌倉	26	加藤原遺跡	縄文
3	きつね沢古窯	平安・鎌倉	15	宮ノ段遺跡	縄文・弥生・中世	27	杉ノ沢遺跡	縄文
4	ほろん沢古窯	平安・鎌倉	16	宮ノ段古墳群	古墳	28	杉沢古墳群	古墳
5	ほろん沢東遺跡	近世	17	横岡城跡	戦国	29	西原遺跡	縄文
6	北古窯	江戸	18	観勝寺遺跡	中世	30	宗行郷塚	中世
7	新兵衛古窯	江戸	19	長者原遺跡	縄文	31	伊之助原古墳	古墳
8	中古窯	江戸	20	孫エ門原古墳	古墳	32	諏訪原城跡	戦国
9	南古窯	江戸	21	上志戸呂古窯	戦国	33	天王町遺跡	弥生
10	釜谷西古窯	平安	22	駿河山遺跡	縄文～中世	34	下坂遺跡	弥生
11	内藤古窯	江戸	23	駿河山経塚	中世	35	川根沢古窯	戦国
12	土山原古窯	江戸	24	駿河山古墳群	古墳			



第３図　周辺の遺跡分布図

範は、荘域が遠江守源基俊に横領されそうになったため、大治３年に再び本家職を待賢門院御願寺円勝寺に寄進し、自らは領家職として保身を図ったのである。後の建久元年（1190)、駿河守護武田信義の子息板垣兼信が地頭として質侶荘に入るが、後白河法皇の反発によって兼信は更迭されたうえ、流罪となる。これ以降、地頭は補任されていない。円勝寺領としての質侶荘は、文永年間（1264～75）まで継続していたようであるが、その後は定かではない。

中世　当地域の中世遺跡は潤沢で、中世前期・戦国期の窯と、戦国期の山城が顕著である。

窯業生産は、前述のように平安時代後期から開始されているが、盛んになるのは中世前期の山茶椀生産以降である。現在金谷地区の山茶椀窯は５地点約50基が把握され、灰色味が強い東遠系の器種を生産する。

12世紀前半の窯は、すやん沢ときつね沢、つばき沢で把握されている。このうちきつね沢とつばき沢は隣接する谷地形にあるが、すやん沢は南東に離れている。12世紀後半の窯はすやん沢ときつね沢にあるが、採集遺物からすると生産量はさほど多くないようである。最も生産が盛んになるのは13世紀前半から半ば過ぎの時期であり、すやん沢ときつね沢にほろん沢が加わる。最終段階に当たる13世紀末ではほろん沢に集約される。この時期の窯業生産には、当時の本家職である円勝寺が関わっていたのであろうか。

ついで、15世紀後半に川根沢窯と三ツ沢窯において、古瀬戸後期Ⅳ段階に近似した製品が生産される。これらの窯は単独窯であり、川根沢窯が三ツ沢窯よりも若干先行して生産を開始する。しかし、15世紀末には廃絶され、再び窯の火は途絶える。この時期は今川氏親の遠江進攻とおおむね一致する。在地支配の今川傘下への転換が、窯業生産の終焉に関わっている可能性がある。

16世紀後半に至り、上志戸呂窯で大窯３段階後半に近似した製品が生産され始める。上志戸呂窯の工人には、天正16年（1588）に徳川家康から朱印状が与えられ、分国中の商売の役（税）が免除されていることが知られる（『県史』資料編８－1974)。大窯４段階では、島田市神座に所在する神座窯に生産が波及する。神座窯の工人は、中村一氏の家老横田村詮の書状から、焼物の上納義務が課せられていたことと共に、半工半農であったことが窺える（『県史』資料編９－中村家26)。ついで連房期には、横岡一帯に生産が集約される。この流れが現在の志戸呂焼につながるものである。これら川根沢・三ツ沢・上志戸呂の３地点ではいずれも発掘調査が実施されている。特に本事業の一環で調査された上志戸呂窯は、平成元年に金谷町教育委員会が調査された分量と合わせると200箱以上に及ぶ潤沢な遺物が出土しており、当地域の窯業生産を理解するうえではまたとない資料を提供している。

戦国期の山城には、横岡に所在する横岡城跡（市指定史跡）と菊川に所在する諏訪原城跡（国指定史跡）がある。横岡城跡は河岸段丘上に築かれており、15世紀末、今川氏親によって討たれた鶴見氏の居城であったといわれる。外縁に堀と土塁を備えた約60m四方の矩形の区画が中心となり、周囲に小規模な腰曲輪を配置したもので、館としての様相が濃い構造をとる。現在は土塁の一部と井戸が残るほかは、茶畑の造成によって削平・埋め立てられている。諏訪原城跡は永禄12年（1569）に武田信玄が築いた金谷城が前身となり、天正元年（1573)、武田勝頼の命によって大改修を受けた城で、東遠江地区の徳川方に対する武田方の最前線のひとつに位置づけられる。東海道を見下ろす位置にあり、交通の要衝を押さえる意味を併せ持っている。急峻な崖を背後にもつＩ郭を中心に、平坦な台地側に複数の曲輪とともに土塁、堀、馬出しを備えて、地形の不備を補っている。この城は天正３年、徳川家康によって攻略され、一時今川氏真が城将となっている。そして、家康の関東移封後に廃城になったといわれる。

近世以降　江戸幕府の開闢後、金谷地域は各村落や時期ごとに幕府、駿府藩、田中藩、掛川藩、相良藩、三河国伊保藩、旗本などの領地が入り組んでいる。比較的頻繁に見られるのが幕府領と掛川領の村落である。

金谷地区で特徴的な産業は、志戸呂焼である。近世からは連房式登窯での生産に転化し、明治12年（1879）には窯屋が60戸所在したと記録される。

第３節　確認調査

１　確認調査の対象地点

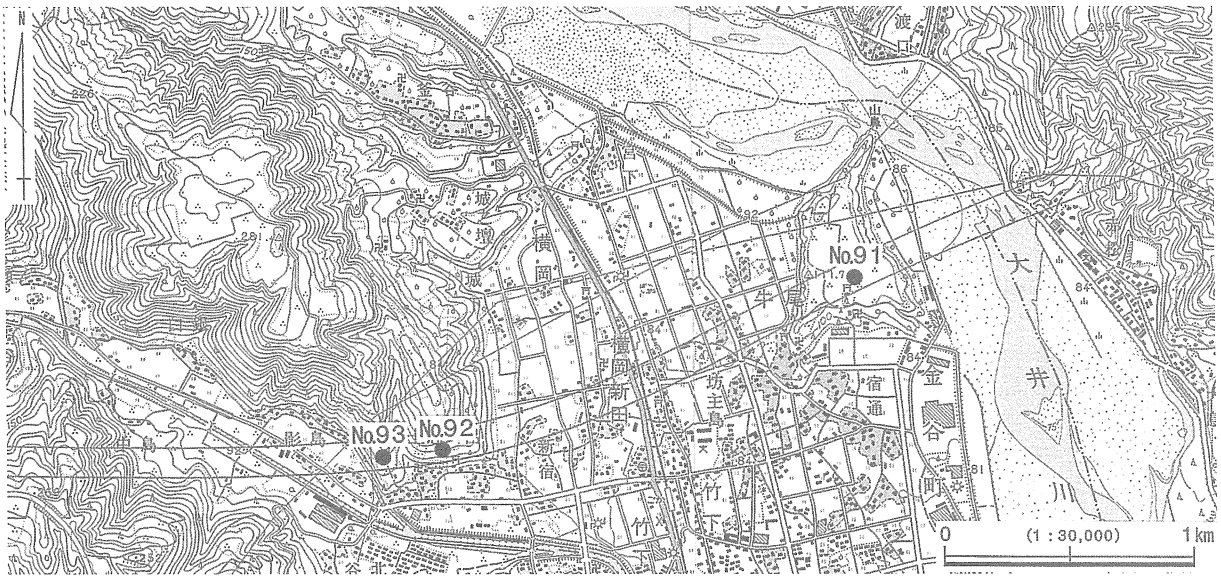
(1)　位置と現況

第二東名の路線は、金谷地区の中央を東西に横断する。金谷地区での路線は平野部で延長約3.5kmを測る。横岡新田付近には国道473号線（主要地方道金谷・中川根線）から接続するインターチェンジが計画されている。

まず、路線の位置を東から西へと説明する。大井川のほぼ中心線上となる金谷地区の西境を、島田地区から西に下る橋梁をもって横断し、平野部に入り約150mで牛尾山の東側に突き当たる。ここを掘り割って西側の平野部にいたる。横岡新田付近のインターチェンジを介して上志戸呂付近の丘陵南向き斜面をカットし、大代川の形成した谷底平野である影島、中島付近を通過する。ここからは粟ヶ岳を貫通する金谷トンネルに入る。丘陵のカットが生じる牛尾山、上志戸呂付近以外は、インターチェンジ部分が盛土、他の平野部分が橋梁となる。

路線内の丘陵地の現況は、多くが茶畑として利用される。土採りによって大きく改変されている丘陵は見当たらない。したがって、各丘陵の地形は、ほぼ本来の形状が残されているとみられる。

一方、平野部・谷平野においては、道路や建築物・宅地によって開発されている部分もあるものの、水田や畑に利用されている部分の方が多い。



第４図　第二東名の路線と対象地点

(2)　対象地点の選定

第二東名路線範囲において、静岡県教育委員会および金谷町教育委員会が確認調査を必要とする対象地点とその範囲を選定している。その後においても、路線範囲の変更や側道等といった本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡の所在の再確認等によって、対象地点の範囲の変更や新たな対象地点の追加も同様に行われた。最終的に、金谷地区では３ヶ所の対象地点が選定された。

３ヵ所の対象地点の内、２地点は既に周知されていた埋蔵文化財包蔵地（以下、周知の遺跡）を含ん

だ場所、その他１地点は周知の遺跡を含まないが、遺跡の存否を含めて確認調査は行う必要があるとされた場所である。

№91地点は、丘陵上に縄文時代～弥生時代の遺跡（駿河山遺跡）及び古墳群（駿河山古墳群）の存在が知られていた場所である。丘陵上はほぼ平坦であり、全面に遺跡が及ぶ可能性が高いことから、開発範囲のすべてを対象地点の範囲とした。№92地点は、丘陵南側斜面の裾部に戦国時代の窯（上志戸呂窯跡）が存在する。工事によってカットされる範囲も類似した南向き斜面であったので、現況では把握できていない窯が存在する可能性も考えられ、より広い範囲を対象地点の範囲とした。また、№92地点と谷をひとつ隔てて西側の№93地点は、これまで遺跡の存在が確認されていなかった箇所であるが、遺跡の立地に適した南向きの緩斜面であるのでより広い範囲を対象地点の範囲とした。

２　確認調査の方法と経過

確認調査は、いずれの地点でも対象範囲の一部を実際に掘り下げて遺跡の有無と範囲を把握した。詳細は各地点の報告書を参照いただきたい。以下の調査の方法についての記述は、対象とした３地点の共通する部分を主とする。

まず駐車場・作業員棟設置等の準備と並行して、対象地点の位置と範囲を確認した。ただし、№92・93地点は調査対象地内に駐車場・作業員棟がともに確保できなかったので、別途近接地に確保した。その後、対象範囲内に調査区を設定した後、掘削を開始した。調査区は、対象地点が全て丘陵上であることから、トレンチを基本とし、把握の難しい場合はその周囲を拡張した。また、遺跡の有無とともにその範囲を把握するため、調査区を対象範囲の全域にわたるように設定することに努めたが、急斜面部においては、作業の安全上を考慮してやむなく調査区の設定を避けた部分もある。調査区の掘削は、№92地点の多くは重機が入らない場所であったので、表土から人力で行った。

土層については、特に遺物や遺構を発見した場所について、遺物包含層と遺構面の判断に重点を置いて、平面や調査区各壁の土層断面によって検討し、記録した。ただし、丘陵上では表土や流土・崩落土層直下が遺構面となる場合が多く、遺構の有無確認の方に重点を置いて調査を行った。

発見した遺構については、遺構面・覆土・平面形を調査区内で把握し、記録した。遺構であるか、根痕や撹乱・自然地形等であるか判断できない場合は、実際に覆土を掘り下げるか、遺構全体を把握できるように部分的に調査区を拡張して判断に努めた。

出土遺物については、基本的には位置と層位を確認・記録した後に取り上げたが、遺構内でまとまって出土した遺物など遺構の性格をあらわすものについては、本調査をすることを前提として、出土位置に残したままとした。以上の方法によって、遺構や遺物の確認と層位の把握を行い、遺跡の有無、さらに発見した遺跡の範囲について判断した。

現地の記録図面は、全体図は1/100、土層断面もしくは柱状図は1/20を基本とし、必要と判断した遺構図等は1/20もしくは1/10で作成した。なお、測量基準杭は、三角点や第二東名の工事関係用基準杭を使用し、その国土座標をもって作成した。また、条件を満たす基準杭がなかった場合は、任意に基準杭を設定して記録作業を実施した。現地記録写真は、作業工程撮影用と併行して35㎜判カラーネガを用い、必要に応じて、35㎜判や６×７判のモノクロも使用した。

調査区の埋め戻しについては、各地点あるいはその部分の事情に合わせて行った。埋め戻し作業は、調査区の掘削と同様、№92地点では人力で行い、他は重機を用いた。一連の確認調査によっていずれの地点も本調査対応となったので、各地点の概要は各報告書にゆだねることとする。

第４節　本調査

１　本調査の方法と経過

ここでは、主に金谷地区の本調査全体に関わる事項について触れる。

本調査を実施した対象地点とその範囲は、前節で述べた確認調査の結果に基づいて静岡県教育委員会から示されたものである。なお、本調査を実施した対象地点および対応する遺跡名は、№91地点駿河山遺跡、№92地点上志戸呂古窯、№93地点上ノ山遺跡の３箇所である。

本調査の実施においては、調査範囲及び調査に必要な諸用地（作業員棟・駐車場用地等）が確保できたこと、立木伐採・除去等の調査環境が整うこと、調査を行う体制が整うことといった条件がそろい、要請のあった順に開始することとなった。したがって、西から東、東から西へといったような整理された順序で調査を実施することはできなかった。また、№91地点（駿河山遺跡）では、調査対象範囲をさらに大きく４分割（Ａ～Ｄ区）し、Ａ区、Ｄ区、Ｂ区、Ｃ区の順で継続して調査を実施した。

調査の方法は、第１節の調査体制の中である程度の統一を図った。しかし、詳細においては各調査で異なるため、各遺跡の調査方法と経過については、各遺跡の報告で述べることとする。

第３表　調査実施期間

遺跡名	地点・期	面積（㎡）	平成10年度												平成11年度												平成12年度												平成13年度							
			6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
駿河山遺跡	91（確認）																																													
	91（本調査）	27,000																																												
上志戸呂古窯	92（確認）																																													
	92（本調査）	100																																												
上ノ山遺跡	93（確認）																																													
	93（本調査）	3,929																																												

２　本調査の概要

金谷地区の調査結果の概要は以下のとおりである。ここでは時代ごとに発見された遺構・遺物を概観してみたい。

縄文時代

縄文時代の遺構は、駿河山遺跡と上ノ山遺跡で検出されている。特に駿河山遺跡で検出された中期の集落は、丘陵西側の斜面を不用品の廃棄場所として利用していたとみえ、多量の土器、石器が包含層を形成していた。丘陵の中ほどからは竪穴住居跡と、おびただしい数の風倒木痕が、東側からは墓域と思われる配石遺構や翡翠製の大珠を埋納する土坑が検出されている。

弥生時代

弥生時代の遺構もやはり上ノ山遺跡と駿河山遺跡で検出されており、駿河山遺跡の資料が潤沢である。

上ノ山遺跡では、丘陵の尾根上を中心とした中期後半～後期の集落が検出されている。周辺の遺跡よりも先行する資料であり、駿河山遺跡の成立を考える上でもきわめて興味深い。

駿河山遺跡からは後期の竪穴住居跡が約200軒検出されており、空閑地を中心としてその外周に数棟を１グループとして配置する傾向が窺える。墓域は方形周溝墓で構成され、台地状平坦面のほぼ中央に造られる。この墓は、後続する古墳時代前期の溝に切られるため、相互の集団には何らかの断絶があるものと思われる。また、炉も床ももたない長方形状の平面形状を持つ竪穴状遺構が検出されている。この遺構は、竪穴住居のグループよりもやや外側に外れた位置にあり、住居とは異なる機能を有するものと考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構は、駿河山遺跡で検出されている。前期初頭に当たるものであるが、西側に方形周溝墓群が、半ばから東よりに竪穴住居が配置され、これらの間は溝で区切られている。弥生時代後期の遺構からこの時期にいたる間にはさほど時期的な断絶は感じられないが、何らかの強い影響によって、土地の利用状況が一変したことが感じられる。中期以降の集落は検出されていないが、古墳時代末にあたる７世紀後半の遺物が上ノ山遺跡から得られている。

古代

古代の資料は上ノ山遺跡と駿河山遺跡から得られている。上ノ山遺跡では、出土量はさほど多くないものの、奈良時代の遺物が出土している。検出された掘立柱建物のうち、少なくとも２棟がこの時期にあたると思われる。また、平安時代後期（11世紀）にあたる蔵骨器を収めた土坑も検出されている。駿河山遺跡でも、灰釉陶器の椀を複数枚埋納する小土坑が検出されている。平安時代では丘陵部が居住域としてではなく、墓域として利用されていたことを想定できる興味深い例である。

中世以降

いずれの遺跡からも、島田市横岡で生産されたと考えられる東遠系山茶椀類が出土している。きわめて小範囲にしか流通しないⅢ期－３の椀も駿河山遺跡から出土している。№92地点の上位の斜面からも山茶椀類が出土しているが、当該期の窯の存在は把握できなかった。

№92地点の下位の斜面からは、16世紀後半の上志戸呂古窯が検出されている。この窯は以前から存在が把握されていたものであるが、少なくとも２基の窯で構成されることなど、新所見が得られている。

このように、各遺跡からは多くの新たな発見が得られている。特に、駿河山遺跡には集落の組成を把握できる資料が各時代にあり、今後の検討が期待される。

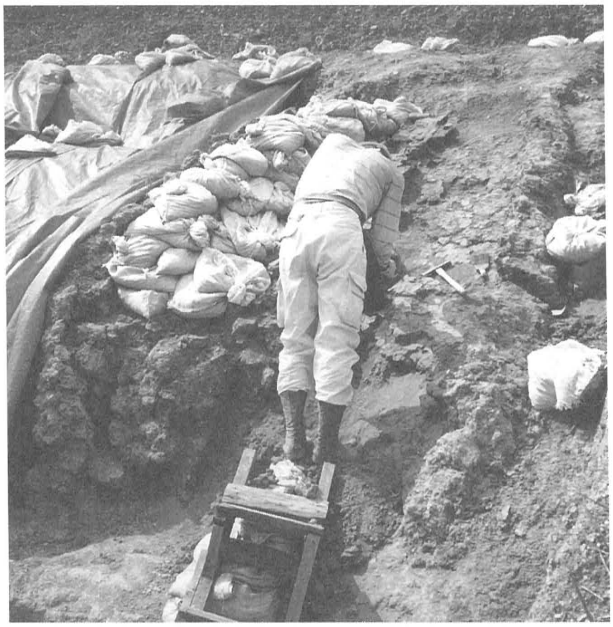


写真１　上志戸呂窯跡の調査

写真２　駿河山遺跡の調査

第５節　資料整理

１　資料整理の体制

本事業では、第１節のとおり現地調査を優先したため、基礎整理は継続的に実施してきたものの、本格的な資料整理・報告書作成の作業はしばらく実施することができなかった。

現地調査・基礎整理を工区・地区ごとに実施してきたこと、現地調査を優先したことから多くの資料整理が必要となってきたこと、その多くの遺跡の資料整理を各現地担当者が同時に実施することが物理的に不可能なことなどから、資料整理および報告書の作成は、現地調査の実施と同様に工区や地区ごとのまとまりの中で、順次遺跡ごとに実施することとなった。

金谷地区の資料整理は、平成13年度上半期末時点で現地調査が全て終了できたことから、平成14年度から部分的に開始した。現在（平成18年３月時点）、金谷地区の資料整理は中原整理事務所で実施している。なお、遺物の写真撮影は当研究所写真室、金属製遺物のクリーニングおよび保存処理は当研究所保存処理室での実施を基本としている。

金谷地区の資料整理体制については、現在も資料整理継続中のために、現地調査の体制のように一括掲載することはできない。よって、各報告書にてそれに関わる資料整理の体制を示すこととする。なお、本書に関わる資料整理の体制は下の第４表のとおりであるが、他にも多くの者が参加している。

第４表　資料整理の体制（平成17年度まで）

			平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
所長			齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠
副所長			山下　晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	
総務部	常務理事兼総務部長		粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫
総務部	次長				鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎
総務部	総務課長		本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎
総務部	担当	経理担当員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸
総務部	担当	総務係長					
総務部	担当	会計係長					
総務部	担当	副主任	鈴木秀幸			中鉢京子	
総務部	担当	主事		鈴木秋博	鈴木秋博		
総務部	担当	事務員					調所由美
調査研究部	部長		佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川素久
調査研究部	次長		栗野克巳 及川　司	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫
調査研究部	担当課長		及川　司	篠原修二	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫
調査研究部	工区主任		加藤理文				
調査研究部	主任調査研究員						河合　修
調査研究部	調査研究員		河合　修	川上　努	川上　努	川上　努	鈴木淑子

2　資料整理の方法と経過

例言２にも示したが、現地調査・資料整理とも工区・地区ごとに実施していくことから、報告書も地区ごとに作成していくこととなった。また各地区の最初には、工区・地区単位で実施してきた調査の経過や概要等を地区ごとにまとめたもの（総論）を掲載することとなった。

以上により、島田市域における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書は、本書を「島田市－１」として、総論と上ノ山遺跡の報告を掲載し、続く「島田市－２」以降の報告書に島田市西部の総論と残る遺跡（駿河山遺跡、上志戸呂窯跡、上伊太遺跡）の調査報告を掲載することとした。

資料整理の作業についてであるが、前述した資料整理の体制同様、現在資料整理継続中のために金谷地区について一括掲載することはできない。したがって、各遺跡に関わる資料整理の方法と経過は各遺跡の報告中に記すこととする。

上ノ山遺跡の資料整理および報告書作成作業については次章第２節に記している。本章（総論）に関しては、調査日報等の調査資料（書類）の整理、挿図表の作成、報告の執筆・編集といった資料整理および報告書作成作業を、平成14年度以降に断続的に実施した。

第２章　上ノ山遺跡

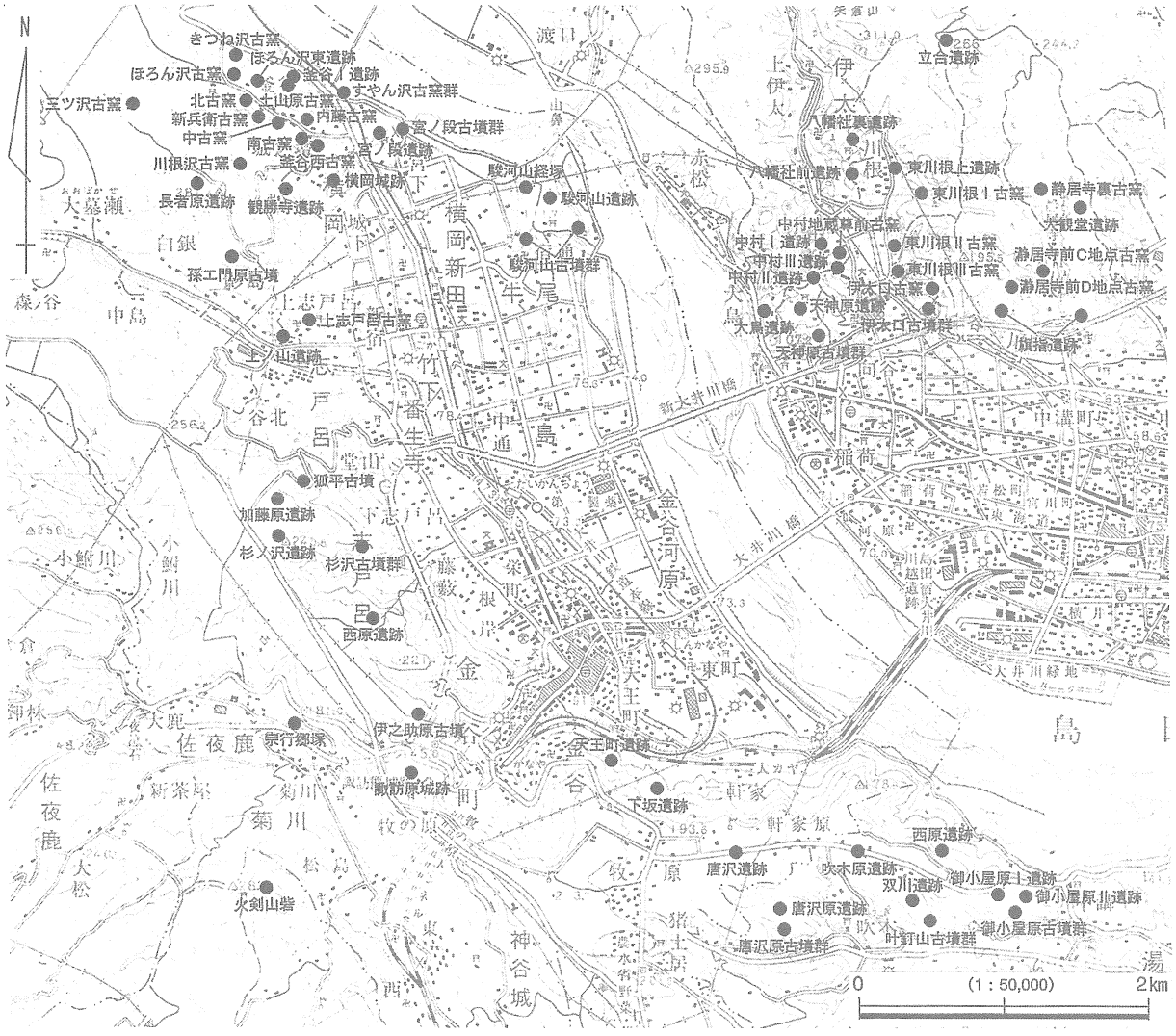
第二東名No.93地点

第１節　位置と環境

１　位置と地理的環境

上ノ山遺跡は、静岡県島田市（旧金谷町）志戸呂の、標高107～116m程度の南～南東向き丘陵緩斜面上に位置する。この丘陵は、赤石山脈南端からのびた尾根状台地の末端であり、東側斜面を主体に大井川による河岸段丘を形成している。金谷地域に分布する丘陵は、北部の四万十層群、中ほどの瀬戸川層群、南部の倉間層群を基盤とする。遺跡の立地する地域は砂岩と頁岩を主とした互層からなる瀬戸川層群にあたる。これは金谷付近から瀬戸川、藁科川、安倍川の上流を経て山梨県の早川流域に至る帯状の分布を示している。

丘陵南側裾部には大代川が流れており、東側は殿ノ沢とよばれる沢が流下する。いずれに面する斜面も、浸食により切り立っている。したがって、遺跡のある丘陵は南に向かって舌状につきだした形を呈する。この丘陵上は、眺望も日当たりも大変良く、遺跡の眼下には大代川が形成した谷底平野が広がる。遺跡の最も低い地点と平野面との比高差は20mほどである。



第５図　本遺跡の位置と周辺の遺跡

2　歴史的環境と調査歴

上ノ山遺跡は、第二東名事業に伴って把握された新発見の遺跡である。したがって本事業に着手する以前の調査歴は皆無である。遺跡の南側直下に広がる大代川の堆積による谷底平野には、上ノ山遺跡と同時期の耕作域が広がっていた可能性も否定できないが、埋蔵文化財包蔵地として周知化されていないため、探求が及んでいない。

遺跡より東側に殿ノ沢によって隔てられた丘陵末端には、上志戸呂古窯が所在する。上志戸呂古窯は平成元年に灰原が茶畑の改植等で、平成12年に窯体が第二東名建設事業で発掘調査されている。これらの調査で窯体２基と灰原の広がりが確認され、200箱を越える遺物が出土している。窯はいずれも南向きに焚口を備えるもので、焚口側から向かって右側（東側）を１号窯、左側（西側）を２号窯とし、約３ｍの間隔でほぼ平行して築かれている。灰原は主に窯の東側で発達している。

上ノ山遺跡と上志戸呂窯が築かれた丘陵を北側に登ると、標高281ｍ付近で尾根の頂部に達する。ここは長者原と呼ばれる、長さ１㎞、幅500ｍ程度の比較的平坦な台地状の地形を呈している。南端に古墳時代後期の孫エ門原古墳が築かれ、半ばには縄文時代の長者原遺跡が営まれている。調査がなされていないため、両者とも内容は判然としない。

第６図　本調査範囲と周辺の地形

第２節　調査の方法と経過

１　発掘調査の方法

本調査に先立って平成11年１月５日から１月末日までに、調査対象範囲のほぼ中央にある農道を基準に東側、西側に調査区を分け、15本のトレンチを設定し確認調査を実施した。等高線に直交する南北方向と平行する東西方向に、幅１ｍのトレンチを重機により掘削した。重機による表土及び耕作土の掘削後、人力によりトレンチ内の精査を行った。その結果、調査対象面積の東側半分で弥生土器を中心に土器、石器等の遺物と竪穴住居跡と思われる遺構が確認された。西側半分は茶園開墾時に天地返しが行われており、遺構の確認はできなかった。したがって、本調査は調査対象地東側部分で実施することとした。本調査の対象は、標高116～107ｍの南に面する緩斜面上の、3,929㎡の地域となった。なお、調査の記録は、掘削作業と併行して実測と写真撮影を行った。実測は主にトータルステーションを使用し、トレンチ設定図、遺構検出状況図、土層断面図を図化した。写真撮影は35㎜判のカラーネガを使用した。

本調査においては、重機を用いて耕作土等を除去した後、国土座標に乗った10ｍメッシュのグリッドを設定した。グリッド杭は業務委託により、グリッド間隔と同様に打設した。グリッド番号は、東西方向に西からＡ～Ｆとし、Ａ列西側の追加調査部分をＺ列とした。南北方向は南から１～９とした。

遺構の掘削はすべて人力によって実施し、排土は場内に仮置きした。遺構番号は調査の進展に合わせて、調査区の際頂部Ｚ８グリッドから最下部Ｆ２グリッドに向かい随時付けていった。ただし、追加して実施した精査によって検出されたものについては、発見時で最も若い番号を付けて整理した。また、本来ひとつの遺構を構成する掘立柱建物などは、柱穴個々の遺構番号と別に、アルファベットと数字によって構成される記号（ＳＨ１など）を別に冠している。遺構内の出土遺物については、元位置にあると思われるものは1/10～20の縮尺で出土状況を図化して取り上げ、混入したと思われるものについては、遺構ごとに取り上げた。また、遺構外出土遺物は、グリッドごとに取り上げた。

測量はトータルステーションを使用し、遺構全体図は空中写真測量を行った。写真撮影は６×７判のモノクロと35㎜判のカラーネガ、モノクロ、カラーリバーサルを使用し、全景写真は空中写真撮影を委託により実施した。

２　発掘調査の経過

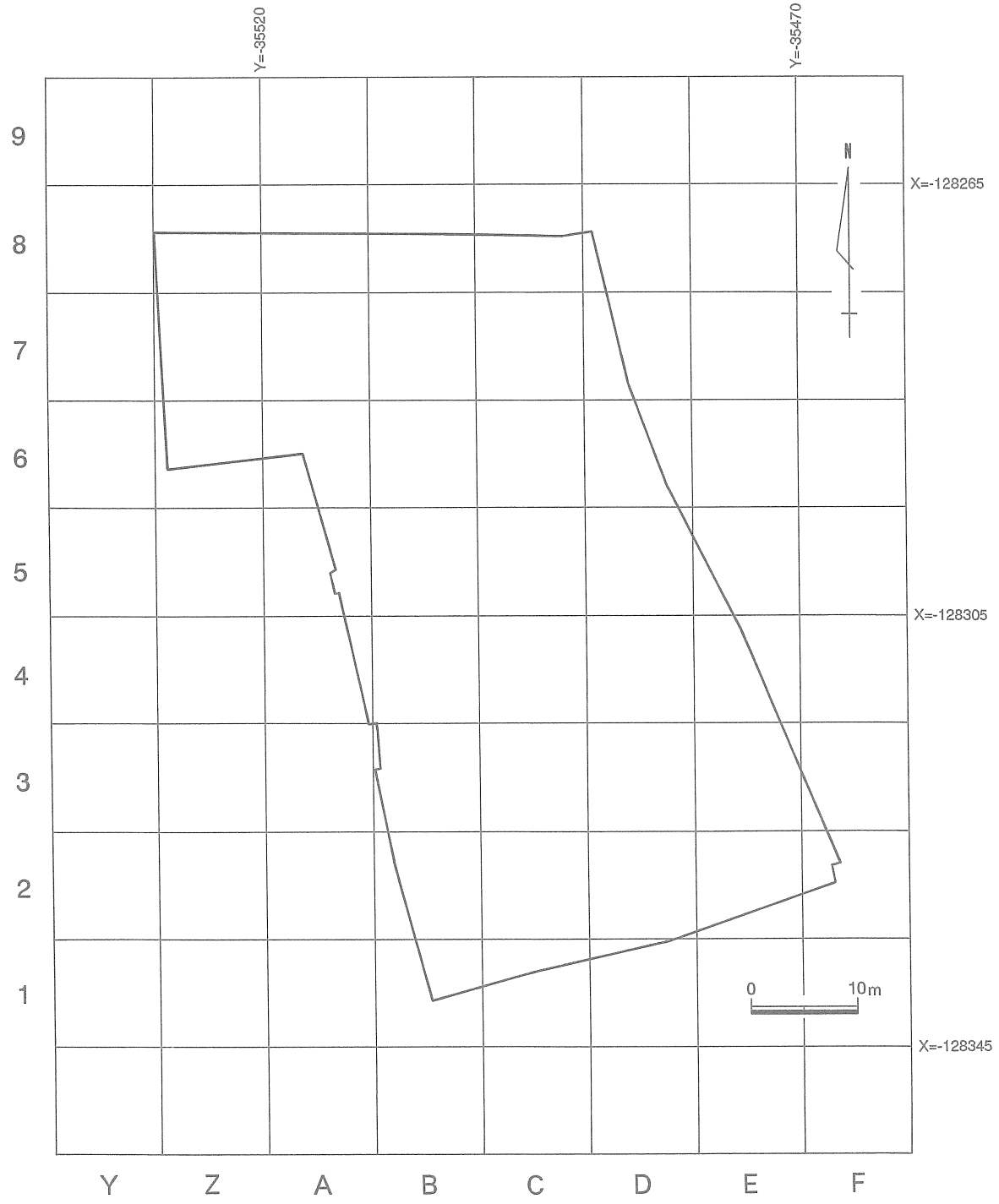
本調査は、平成11年４月12日から23日まで重機による表土除去を行うことから開始した。26日から人力により、調査区西側のグリッドＡ、Ｂ列を北側から中間層の除去及び遺物包含層の掘削を開始した。グリッドＢ列には埋没谷があり、埋土に打製石斧等縄文時代の石器が多く含まれたため、他に先行して掘削を実施したが掘り上げに時間を要し、終了したのは７月初旬であった。４月には本調査と並行して工事用道路部分の確認調査を実施したが、遺構、遺物は確認されなかった。

検出面以上の層位を除去したグリッドＡ・Ｂ列では、６月下旬より遺構検出を開始し、プランを確定した竪穴住居跡から順次遺構掘削を実施した。８月後半には竪穴住居跡の掘削と並行してピット、土坑等の掘削も行い、８月末までに遺構掘削をほぼ終了した。９月に入り、写真測量のため調査区内外の全体清掃を開始し、９月半ばに写真測量の撮影を行った。

一番茶の刈り取り後から茶木の伐採に着手したＺ列はグリッドＡ６、７、８の西側部分に当たり、６月から重機による表土除去を開始した。次いで人力による遺物包含層の掘削を行った。ここは、調査区

内の最上位に突出した部分であるので、他の区画より先行して遺構検出、遺構掘削を行い、７月のはじめに調査を終了した。

すべての遺構の測量が終了した後、検出面より下層の遺構を確認するために試掘坑を５箇所設定して掘削した。しかし、いずれからも遺構、遺物が確認されなかったため下層に遺跡は存在しないものと理解し、９月末をもって全ての調査を終了した。



第７図　グリッド配置図

3　資料整理の方法と経過

第二東名建設に伴う発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。これに先行する基礎的整理作業（出土遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測、写真整理、図面整理・修正、各種台帳作成等）は、上ノ山遺跡の現地調査終了後、他の現地調査と並行して実施した。

平成15年度末の時点で静岡工区静岡地区の現地調査がほぼ終了したことから、平成16年度から静岡工区藤枝地区と一部の遺跡を除いた静岡工区とともに金谷地区の基礎整理および資料整理を、本格的に開始した。資料整理を必要していた複数の遺跡の中で、上ノ山遺跡は基礎整理が比較的進展していたため、他の資料整理及び基礎整理と並行しながら、優先的に資料整理を行うことになった。遺構図、遺物実測図の修正・編集・トレース、遺物の写真撮影、報告の執筆等を行い、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は６×７判のモノクロ及びカラーポジを用いた。

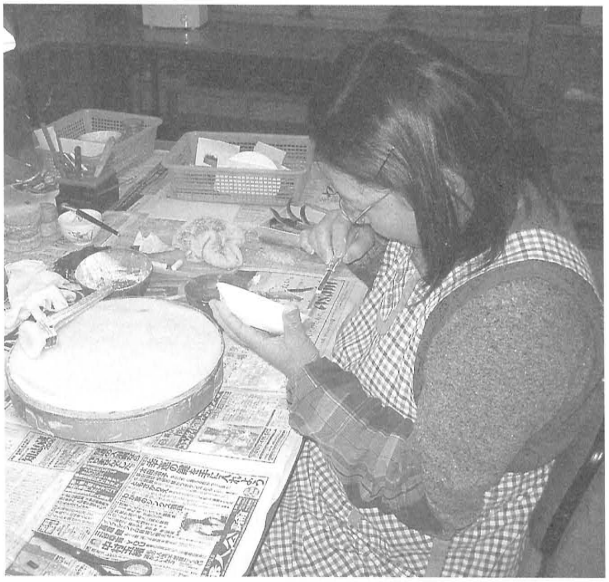


写真３　遺物接合・復元作業

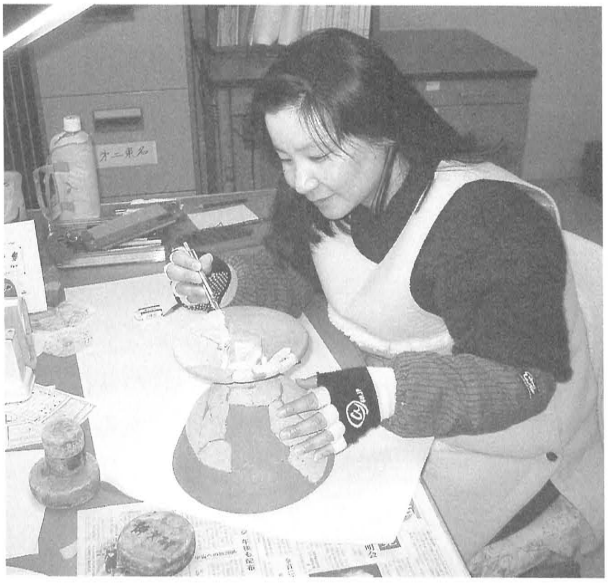


写真４　遺物実測作業

写真５　版下作成作業

写真６　原稿執筆作業

第３節　調査の成果

１　概要

(1)　地形

上ノ山遺跡が営まれている丘陵は幅50～60mの、南～南東へ12％前後で下る日当たりに恵まれた緩斜面である。調査区西よりで検出された埋没谷は、ほぼ埋まっていたために現地表上からは明確に把握できないものであった。この埋土は、黒ボクに下位の層位が混入して形成されたもので、丘陵上位からの流出土が再堆積しているものと思われる。この中には縄文時代に遡る石器が多く、それ以降の遺物が少ない傾向から、縄文時代末～弥生時代中期初頭までにはほぼ埋まり尽し、弥生集落が形成された時分には、穏やかなくぼみになっていたものと思われる。このような埋没谷は、東側に約1.5km隔たった駿河山遺跡でも観察されたため、あるいは周辺の丘陵部に恒常的に見られる現象であるのかもしれない。

丘陵の東側にある谷地形は、殿ノ沢の開析によるものである。このような沢による谷地形は山塊のいたるところに観察できる。これらから流出した土砂が、丘陵南側の大代川が流れる谷底平野を埋め立てる一助となっている。

(2)　土層

遺跡は南ないし南東側に傾斜した地形である。丘陵の上位に堆積した土壌は、風雨によって下位へ流出するため、下位に行くに従って厚くなる傾向がある。この作用は、上位には薄いながらも黒ボクが遺存し、下位には黒ボクが見られない替わりに、より下位に堆積する黄色、あるいは褐色味の強い土と黒ボクが混じり合った暗褐色の土が堆積することにも反映している。つまり、この丘陵上にみられる堆積土は、比較的元位置を保つ混じりけのない更新世の堆積物と考えられる礫層（Ⅵ層）、黄色土（Ⅴ層）と完新世の黒ボク（Ⅱ層）と、これらが流出し混じって再堆積した土層の３種から構成されるのである。今回の調査区では、これらの土層の中でも普遍的に見られるものを上位からⅠ～Ⅵ層とした。

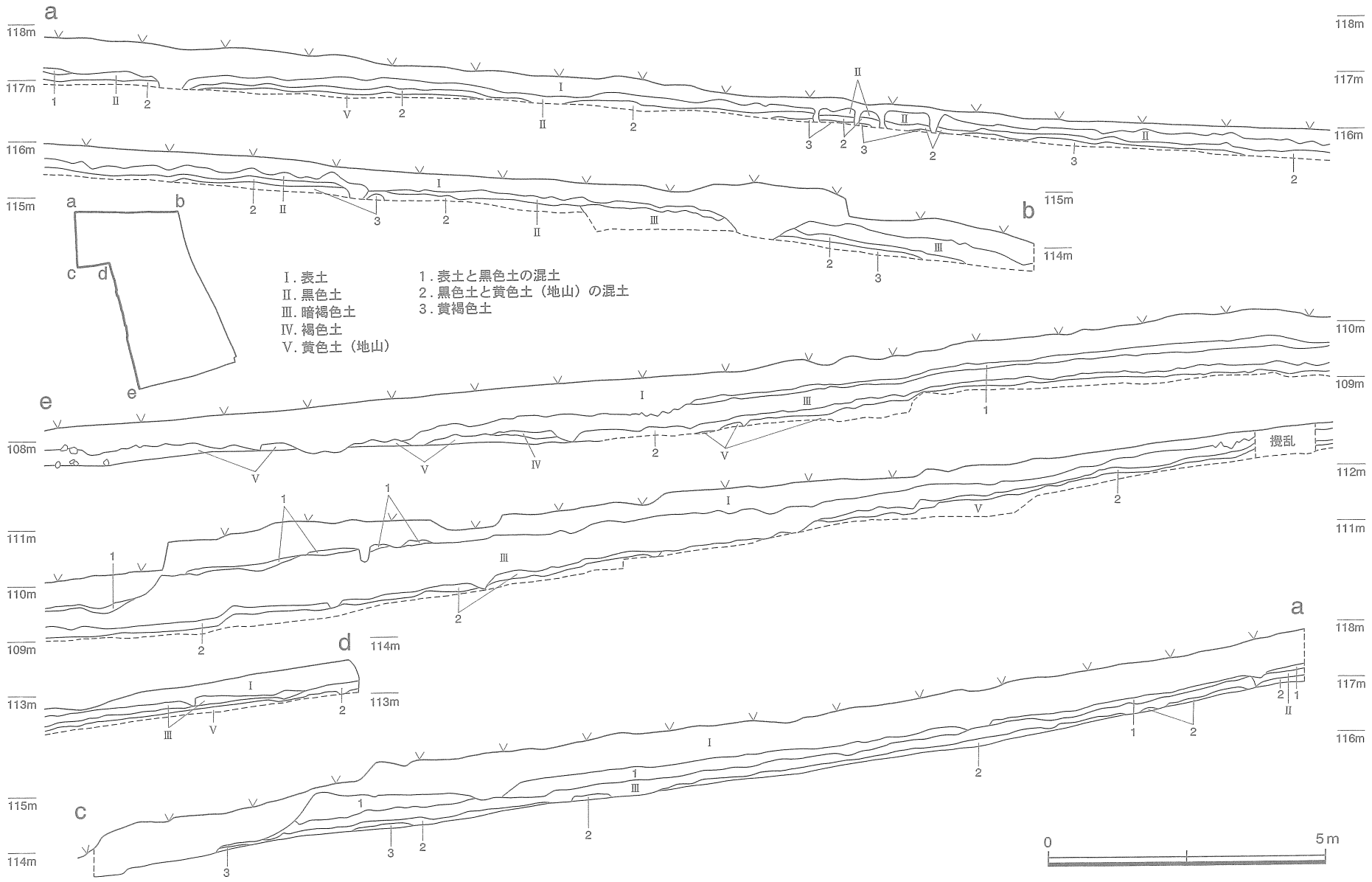
Ⅰ層：黒ボクに有機質が混入した厚さ50cmほどの黒褐色土である。黒ボク上位を茶畑として耕作したことが成因である。

Ⅱ層：黒ボクと呼ばれる、粘性の強い粒子の細かい黒色土である。遺物包含層や遺構の覆土となる。

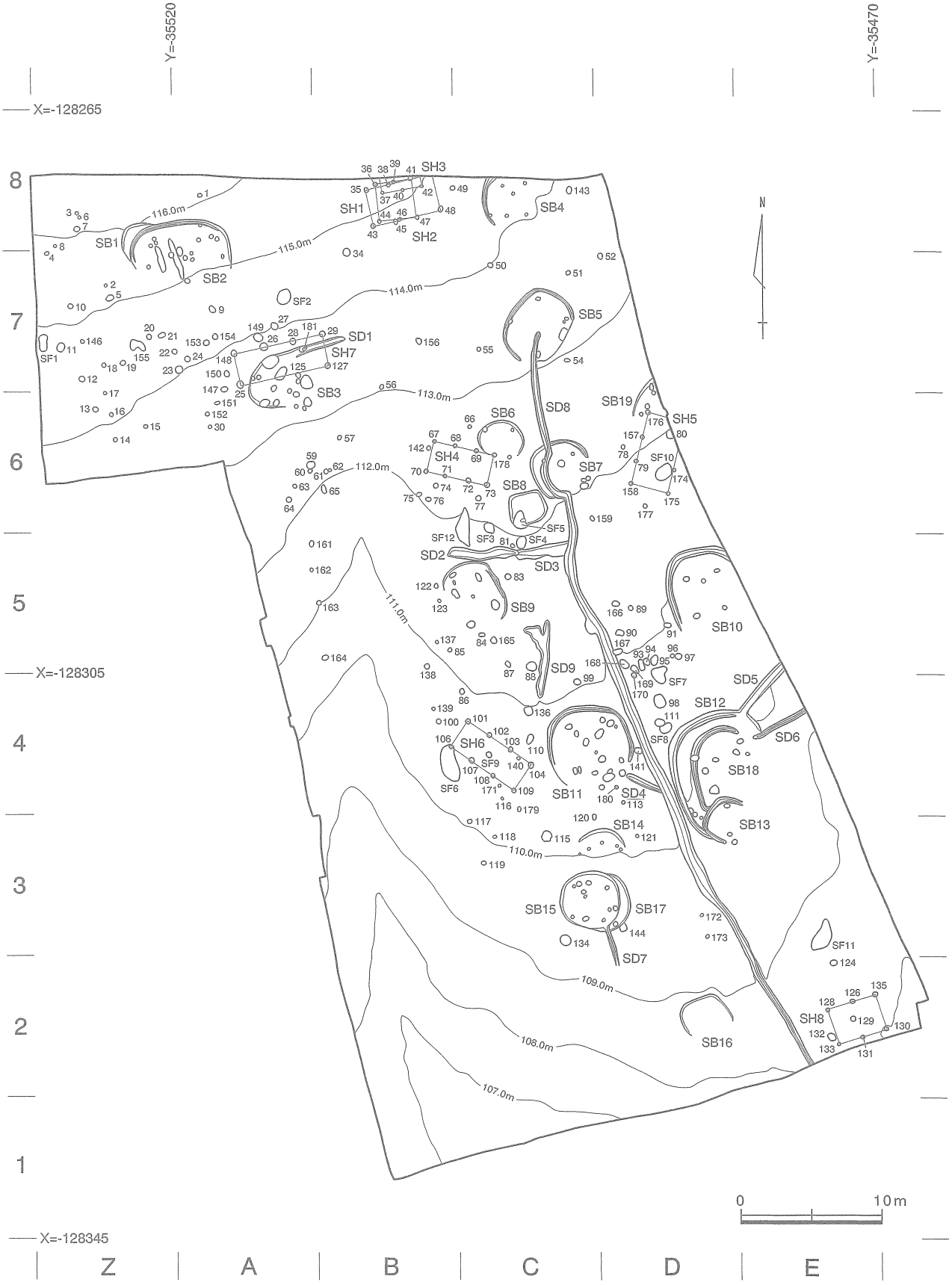
Ⅲ層：褐色の風化礫が混じった粘性の弱い暗褐色土であり、Ⅱ層とⅤ層、Ⅵ層との再堆積層と考えられる。調査区西側の埋没谷を中心に厚く、尾根上に近づくにしたがって薄くなる。近似した土を覆土とする遺構は、埋没谷の頂部にあたるＺ８～Ｂ６グリッド付近と調査区中ほどのＤ４～５グリッド付近に比較的まとまってみられる。

Ⅳ層：やや粘性のある、礫が混じる褐色土である。この土層の下位はやや粘性が強く、白色味を帯びた黄褐色となる。その差は漸移的であり明確に区別できなかったため、同一層位として理解した。近似した土を覆土とする遺構は尾根上のＣ５グリッドからＥ３～Ｃ４グリッド付近で比較的広汎に分布する。

Ⅴ層：白っぽい風化礫が混ざった黄色粘土で、無遺物層である。礫層（Ⅵ層）に漸移的に移行する。これらの層は、丘陵の基盤上位に当たる地山である。



第８図　調査区土層断面図


Y=-35520
Y=-35470
X=-128265
X=-128305
X=-128345
8
7
6
5
4
3
2
1
Z
A
B
C
D
E
N
0
10m
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SB6
SB7
SB8
SB9
SB10
SB11
SB12
SB13
SB14
SB15
SB16
SB17
SB18
SB19
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
SD9
SH1
SH2
SH3
SH4
SH5
SH6
SH7
SH8
SF1
SF2
SF3
SF4
SF5
SF6
SF7
SF8
SF9
SF10
SF11
SF12
116.0m
115.0m
114.0m
113.0m
112.0m
111.0m
110.0m
109.0m
108.0m
107.0m

第９図　遺構全体図

(3) 遺構、遺物の概要

遺構は、縄文時代中期の土坑・小穴、弥生時代中期後半～後期前半の竪穴住居跡・土坑・溝状遺構・小穴、古代～中世前期の掘立柱建物が検出された。

縄文時代の遺構で特筆されるのは中期後半の埋甕である。褐色土を覆土とする土坑内に、深鉢が逆位で埋め込まれるものである。周囲には近似した覆土の土坑、小穴が散在する。また、Ｃ・Ｄ３グリッドで検出された円形の掘方を持つ竪穴住居跡２軒も覆土が類似するため同時期の可能性がある。

弥生時代の遺構の代表となるのは竪穴住居跡であり、17軒が検出されている。平面形状は円形、楕円形、隅丸方形の３種類に分類される。調査範囲は傾斜地で堆積土も薄いため、多くは茶畑の開墾時に斜面の下位に当たる南側の肩が削られてしまっている。貼床は部分的に残存していたＳＢ２以外からは検出されていない。他の住居跡は堀方とその覆土が確認できたのみであった。出土した土器から年代を検討したが、短期間で住居の形状が変化しているようである。覆土が周辺に堆積する土層を反映していると考え、①褐色土が覆土となる住居、②褐色土と黒色土が混ざって覆土となる住居、③下層が暗褐色土、上層が黒色土の住居、④黒色土が覆土となる住居の順につくられたと想定した。ただし、②と③の新旧関係は判然としない。またこのうち４軒には、南ないし南東方向に延びる溝が取り付いている。その形状から排水あるいは住居間の区画の機能を持った溝ではないかと考えられる。

また、調査区西寄りには埋没谷が確認された。弥生時代にはある程度埋没してくぼみとなっていたと思われる。検出された住居跡はこのくぼみを避けてつくられている。茶園の開墾で天地返しされていて遺構が確認されなかった西側部分にも同様な竪穴住居跡が存在した可能性がある。

掘立柱建物跡は８棟分が確認された。２間×１間ないし３間×１間の側柱建物であり、概ね等高線に平行していることからも、地形の制約を生かして建てられていることがわかる。上屋の構造は、柱穴の大きさを考慮しても比較的簡易なものであったと思われる。柱穴掘方からは時期を示唆する遺物は出土していないが、周辺の包含層から須恵器や灰釉陶器、山茶椀類が多く出土していることからも（第44図）、古代～中世前期にあたる建物と考えられる。また、Ａ７グリッドから検出された小土坑ＳＦ181からは、蔵骨器と考えられる椀をかぶせた灰釉陶器の壷が出土している。

2　遺構と遺物

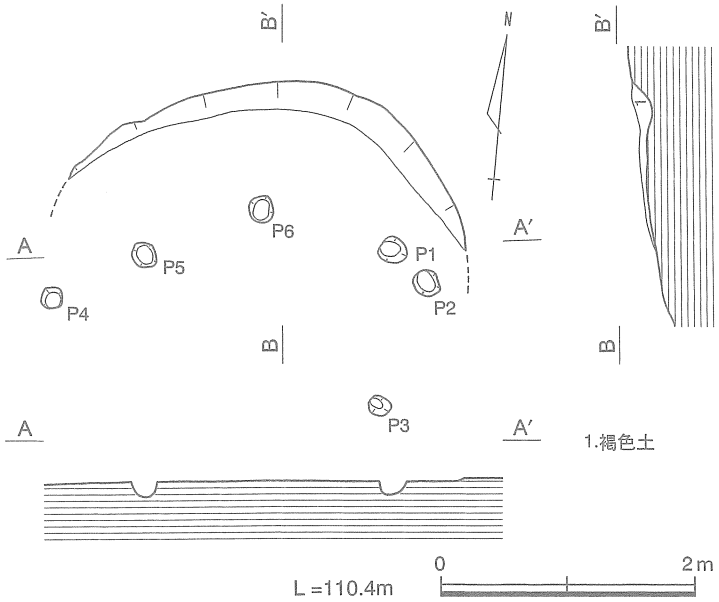
(1) 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡、土坑、小穴などが検出されている。これらのうち、遺物を伴うものは深鉢を埋納する土坑ＳＦ９のみであるが、これに近接する位置にある近似した覆土で、他の住居と異質の円形のプランをもつ竪穴住居跡と小穴を同時期の所産と考えた。

①　竪穴住居跡

ＳＢ14（第10図）

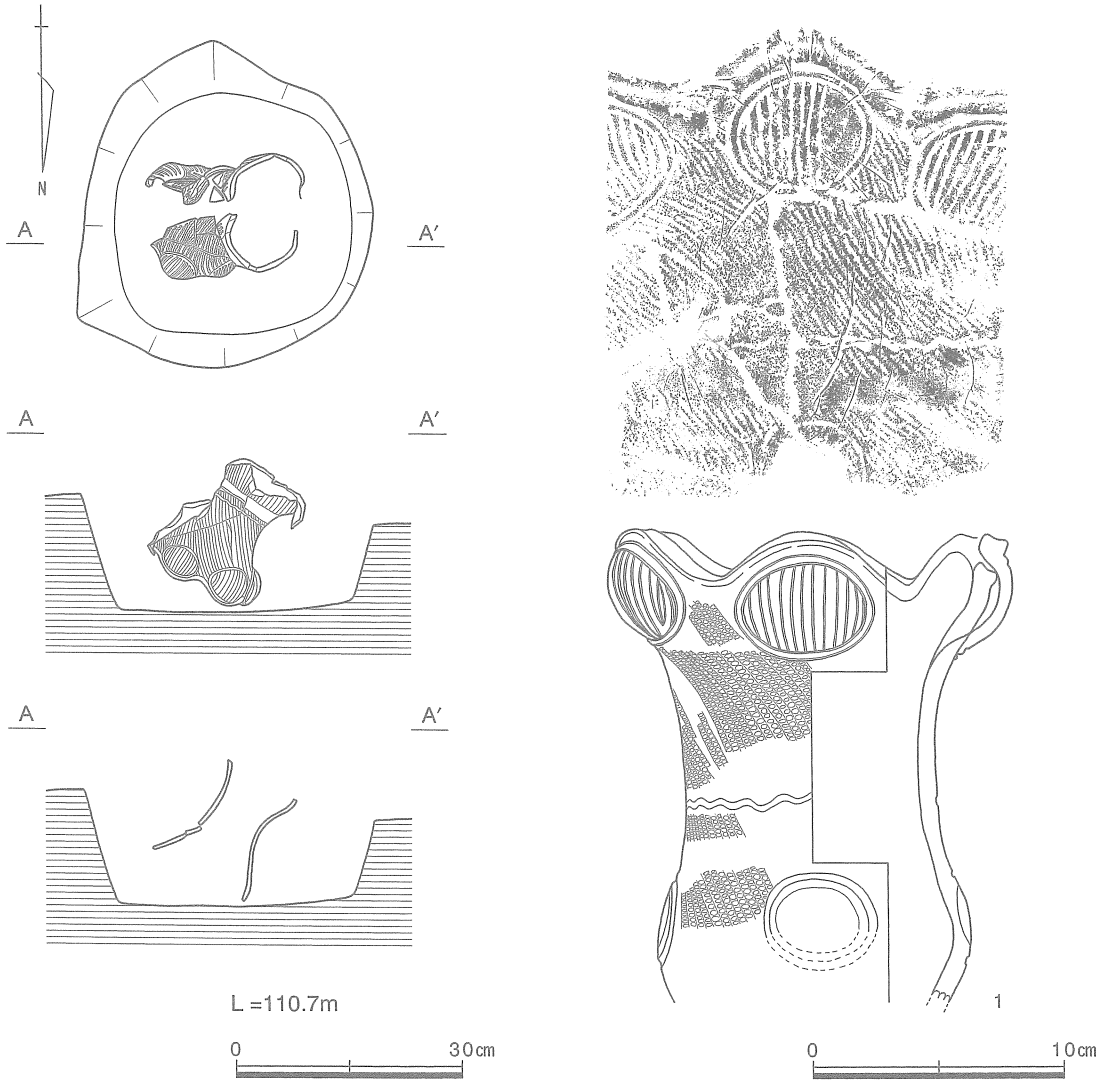
Ｃ３、Ｄ３グリッドで検出された、ＳＦ９と類似した褐色土を覆土とする竪穴住居跡である。柱穴を構成するＰ１・６・５の釣合いから、ほぼ南北のＮ-６°-Ｗの方向が主軸になると考えられる。南側が耕作によって削られているため平面形態は全域にわたって把握できなかったが、残存する掘方の形状から直径3.5m前後の円形であったと推測される。住居に伴う柱穴は６基確認され、Ｐ１・３・５が主柱穴と判断される。炉跡は検出されなかった。なお、遺物は出土していない。



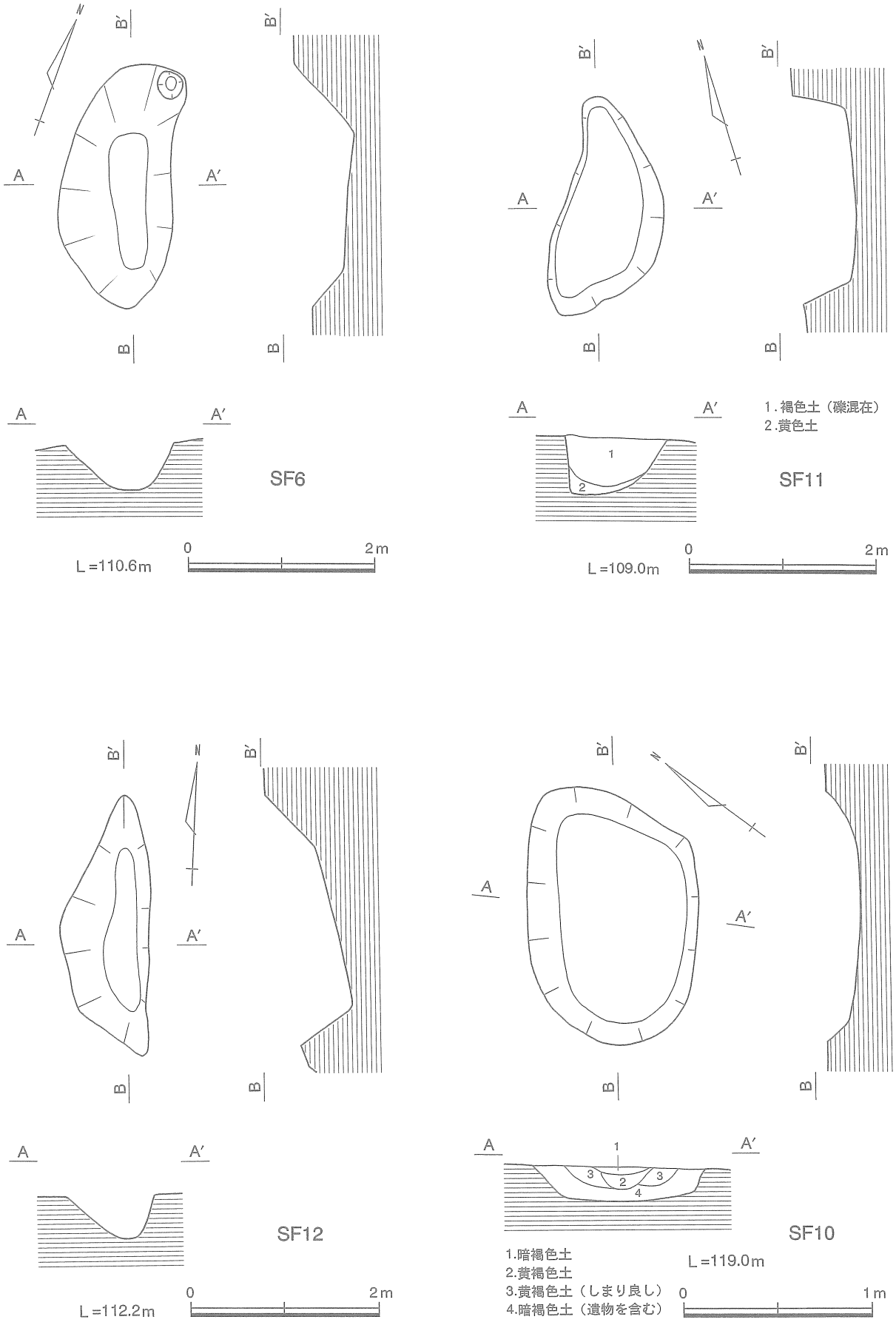
第10図　竪穴住居跡ＳＢ14

ＳＢ17（第28図）

Ｄ３グリッドで検出された褐色土を覆土とする竪穴住居跡である。ＳＢ15により大半が破壊されるが、残存する東側の掘方の状況から直径４m前後の円形のプランで、ほぼ南北のN-７°-Eの方向が主軸になると考えられる。住居に伴う小穴Ｐ５はＳＢ15内のＰ６・７とともに主柱穴となる可能性がある。Ｐ５・６の間隔は206cm、Ｐ６・７間は260cmを測る。炉跡は確認できなかった。なお、遺物は出土していない。



第11図　土坑ＳＦ９遺物出土状況及び出土遺物



第12図　土坑ＳＦ６・10・11・12

② 土坑

ＳＦ９（第11図）

Ｃ４グリッドで検出された褐色土を覆土とする土坑である。規模は直径40cmの円形で、深さは17cmを測る。底面は平坦で、縄文中期後半の波状口縁をもつ深鉢が、逆位のやや傾いた状態で埋め込まれていた。

この深鉢（第11図－１）はほぼ完形である。底部は欠損しているが周囲から破片が出土しなかったことからも、埋め込まれる時点で意図的に欠かれていたもの思われる。口径は15.5cm、残存高18.6cmを測り、胎土に長石、石英、砂粒、橙色粒子を含むが灰褐色に硬く焼きあがっている。外面全体にＲＬ縄文が施される。口縁は六単位の波頂部を持ち、その下に竹管を用いた縦位の沈線を入れた３対の楕円区画文が施される。区画文のうち、一対のみ2/3ほどしか沈線が施されていない。区画文の内面は内湾している。胴部は緩やかにくびれ、竹管による波状文が一周している。その下には二重円状の文様が４ヵ所に施されている。内面は摩滅していて明確ではないが、磨き調整で仕上げられていると思われる。

ＳＦ６・11・12（第12図）

検出された場所はやや離れているが、いずれも覆土や形状等に類似点がある。覆土は褐色土で、２～３mmほどの黄褐色の風化礫が混ざる。平面形は半月状をしており、底面が直線状の辺に寄っているため、この部分の立ち上がりが垂直に近くなる。規模はＳＦ６が長さ260cm、幅125cm、深さ51cm、ＳＦ11が長さ215cm、幅125cm、深さ61cm、ＳＦ12が長さ277cm、幅95cm、深さ50cmを測る。ＳＦ11から石器細片が出土しているほかは、遺物は出土していない。これらの遺構は、風倒木痕の可能性がある。

(2) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、埋没谷を避けるように調査区全域に広がっている。特に尾根の頂部を中心に竪穴住居跡が配置されている状況が特徴的である。遺物の中には中期後半にさかのぼるものがみられ、駿河山遺跡等、周辺の弥生時代遺跡のなかでも比較的古手にあたる遺構群に位置づけられる。なお、各遺構から出土した遺物は、当該期の土器と主要な石器はなるべく遺構図とともに掲載し、大型の石器（砥石、台石等）はまとめて掲載した。混入品と思われる遺物については包含層出土の遺物とともに掲載している。

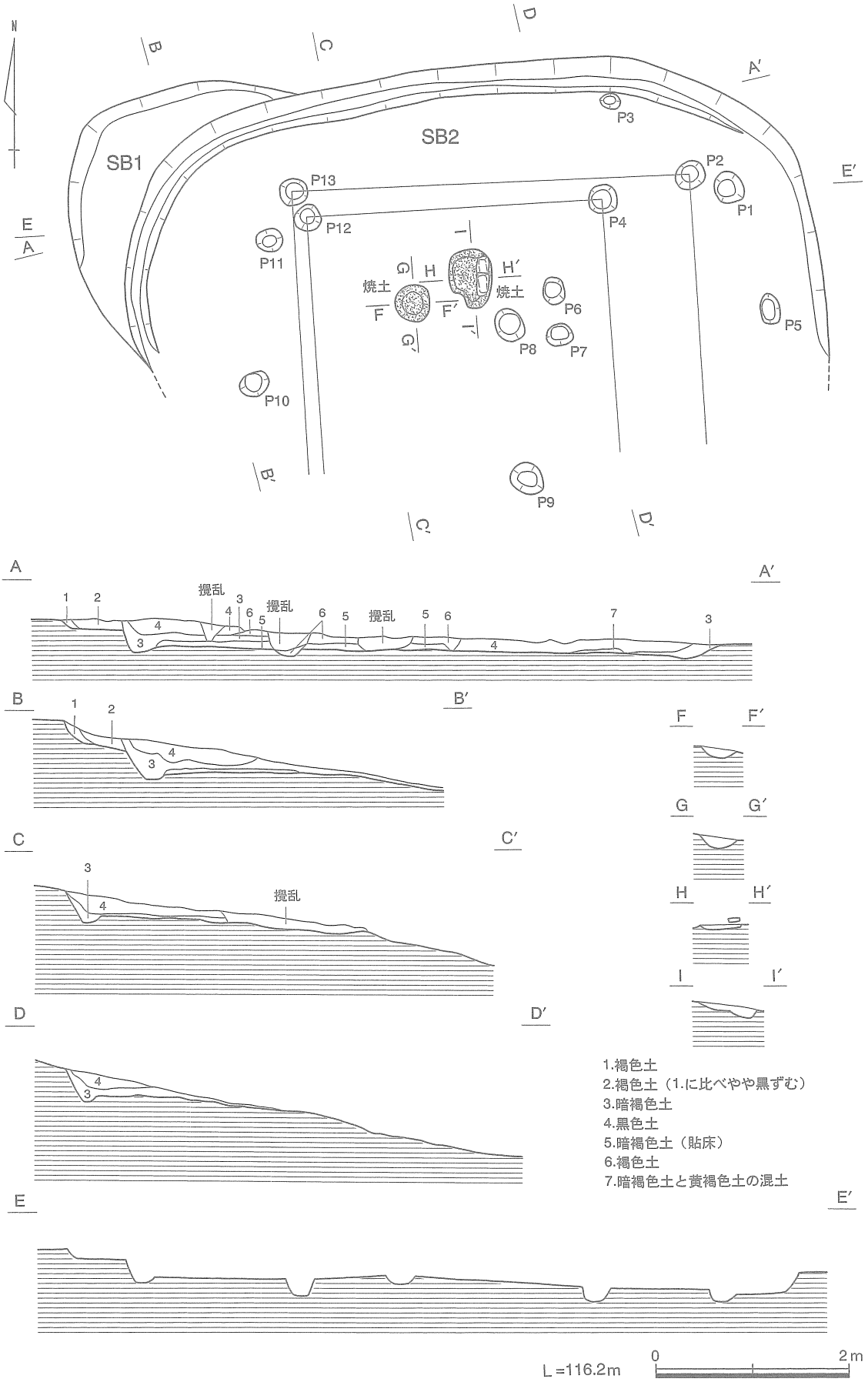
① 竪穴住居跡

ＳＢ１（第13・14図）

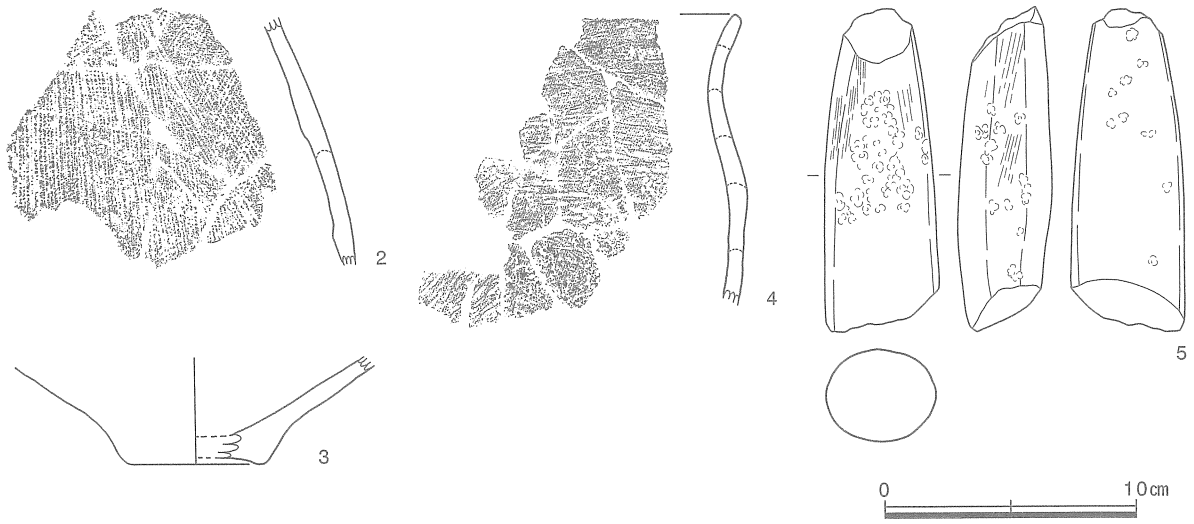
調査区北西隅であるＺ７・８グリッドで検出された中期後半にあたる小型の竪穴住居跡である。東側から南側にかけてＳＢ２が重複する。ＳＢ２の掘方がＳＢ１より深いために、掘方のおよそ半分しか残存していない。北側から西側にかけての掘方の状況から、直径３ｍ前後の四隅がやや張る円形のプランで、ほぼ南北のN-11°-Wの方向が主軸になると考えられる。床面、炉などの住居内の施設は検出されていない。

遺物は掘方覆土である褐色土から土器が出土している。

２は中期後半に当たる壺の肩部片である。胎土は緻密で径１mm程度の砂粒・小豆色粒子を含み、にぶい黄色を呈しよく焼きあがっている。体部外面は縦方向にハケ調整されているが、ハケメが格子状に残る部分からも、複数方向から調整が施されていることがわかる。内面は摩擦が激しく調整は不明である。



第13図　竪穴住居跡ＳＢ１・２



第14図　竪穴住居跡ＳＢ１・２出土遺物

ＳＢ２（第13・14・47・53図）

調査区北西のＺ７・８、Ａ７・８グリッドで検出された、中期後半にあたる大型の竪穴住居跡である。南側半分が耕作等の削平により失われている上、近年の農道建設に伴う平行する溝に切られている。覆土は下位が暗褐色土、上位が黒色土である。平面形は隅丸長方形で、縦が現存で3.12m、横7.14mの規模を測る。主軸方向はN-５°-Wを指向する。

住居内の施設は壁溝、貼床、炉が確認された。壁溝は西側から北東隅にかけて検出され、幅、深さともに30cm程度を測る。貼床は北西の一部に厚さ５cm程度が残存していた。炉は中央やや北よりの位置に、２ヵ所検出されている。そのうち北東側の焼土の上には、面が平らな長方形の石が乗せられていた。この石は横方向に溝状のくぼみが切られ、二つに割れている。焼土の上にあるにもかかわらず被熱の痕跡がないことから、火を消した後に、炉の機能とは直接関連がない目的で置かれた配石と判断した。住居のプラン内からは13基に及ぶ小穴が検出された。主柱穴の組み合わせにはＰ４とＰ11、Ｐ２とＰ13が想定される。西よりの炉に伴う主柱穴Ｐ４とＰ11が当初建築された住居のものであり、後に西側と北側のプランの一部を利用しながら東側に拡張した住居に、配石を伴う炉と主柱穴Ｐ２とＰ13が伴うものと考えられる。

遺物は床面上の覆土から出土している。

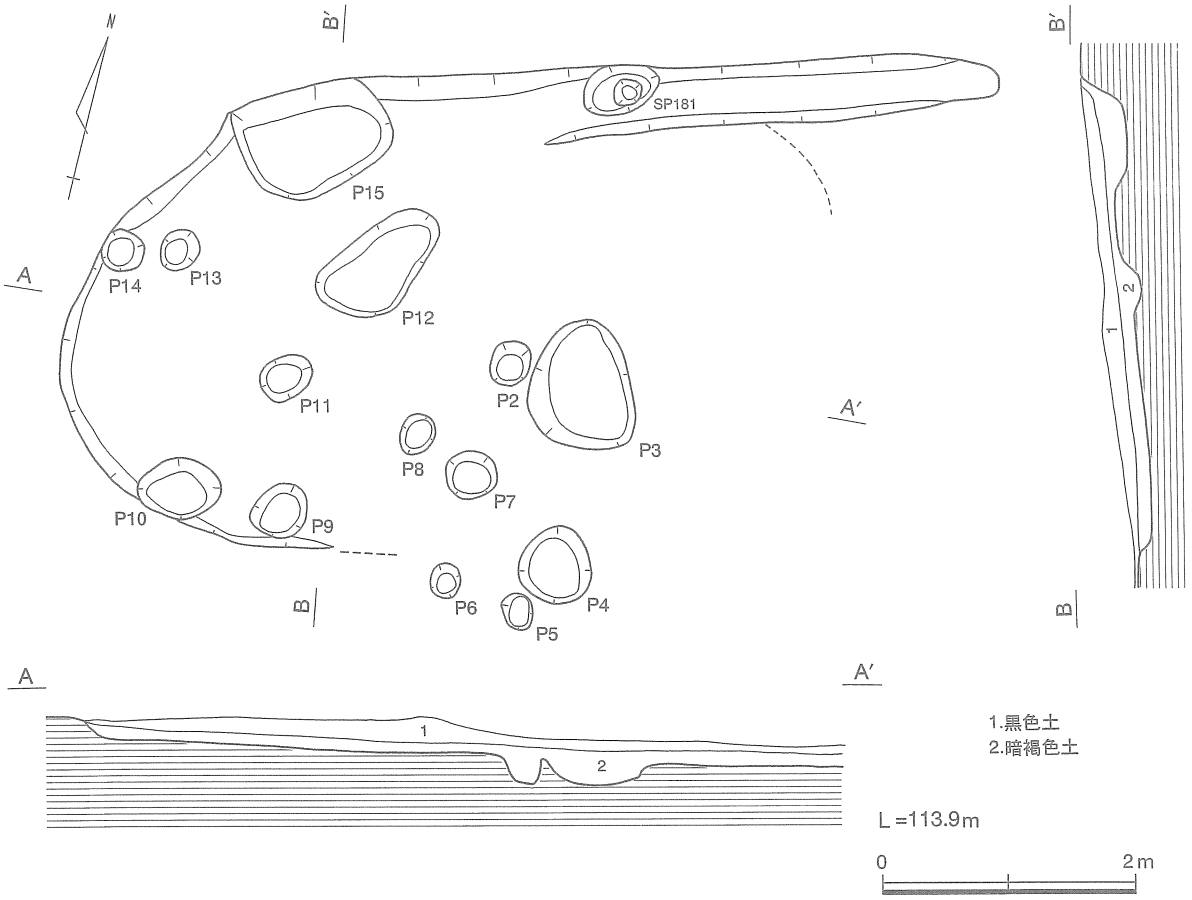
３は黒色土から出土した中期後半の壺底部片である。底径5.4cm、残存高4.2cmを測る。胎土には径0.5～１mmの橙色粒子、径１～２mmの砂粒を多く含み、灰色を呈しよく焼きあがっている。表面が剥離しているため、調整技法は判然としない。

４は床面直上の覆土である暗褐色土から出土した中期後半の甕である。口径13.7cm、残存高11.5cm、胴部最大径14.2cmを測る。胎土は緻密で橙色粒子を多く含み、灰黄褐色を呈しよく焼きあがっている。くの字状の口縁をもち、体部内外面はミガキ状のナデ調整で仕上げられている。

５は断面が楕円形状を呈する砂岩製の乳棒状石斧で、被熱している。基部、刃部ともに欠損しており、残存部分は長さ12.78cm、幅4.59cm、厚さ3.62cmを測る。

131は泥岩製の打製石鏃である。ほぼ完形であるが、縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

194は細粒砂岩製の打製石斧である。基部が折れて欠損している。先端部は原礫面を多く残し使用痕とみられる無数の擦痕が付く。131とともに縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。



第15図　竪穴住居跡ＳＢ３

ＳＢ３（第15・52図）

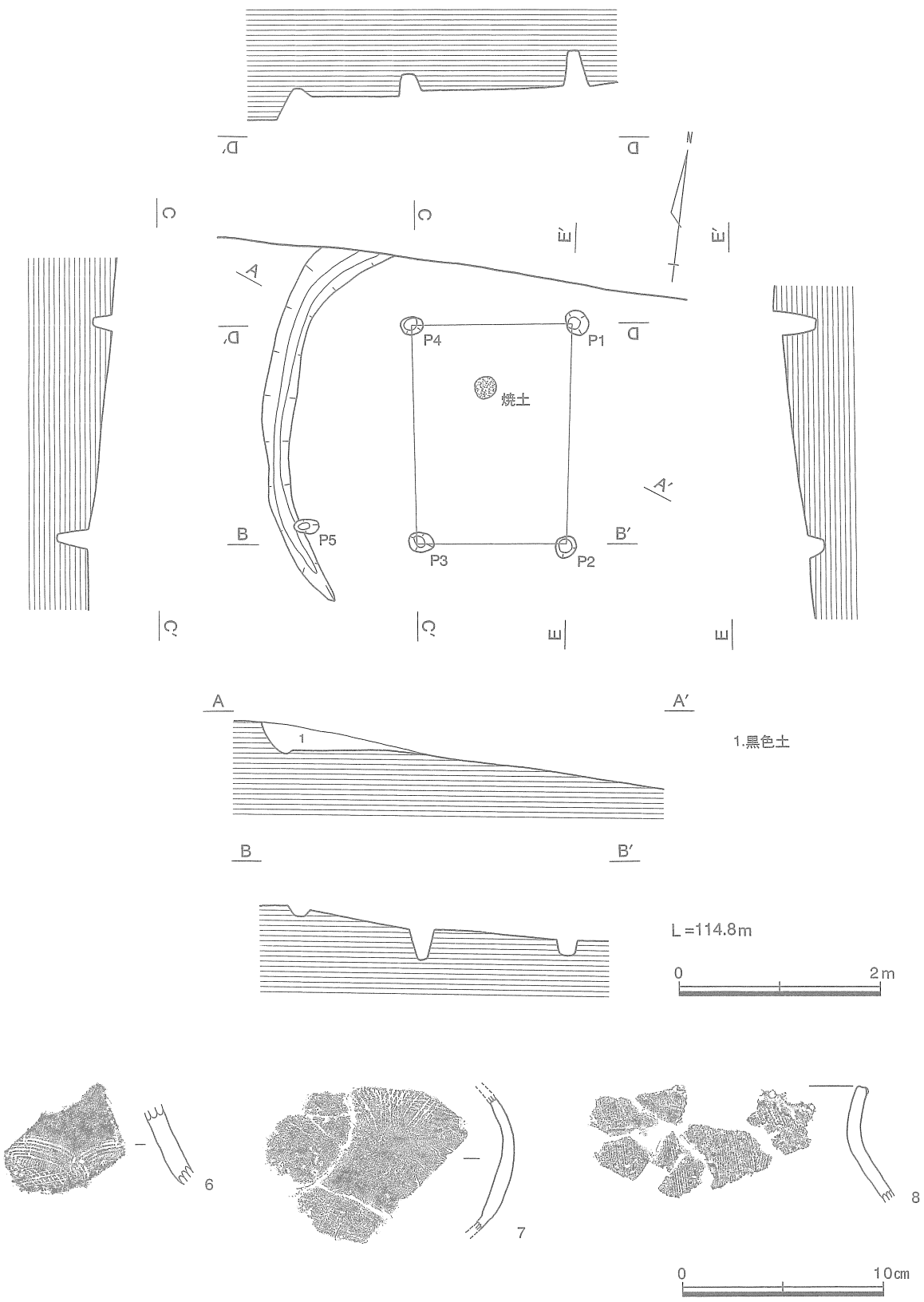
Ａ６・７グリッドで検出された竪穴住居である。後世の耕作等によって南東側から東側の掘方が失われているが、平面形はN-26°-Wに主軸方向をもつ楕円形を呈していたものと思われる。規模は南北方向に3.75m、東西方向に現存で2.96mを測る。覆土は上位が黒色土、下位が暗褐色土となり、内部から床面・炉等の施設は検出されなかった。したがって、残存していた部分は、床面下の掘方埋土であると判断される。北東側の壁沿いには、住居外のN-72°-E方向に延びるＳＤ１が取り付いている。住居の掘方内に存在したと思われる小穴が８基検出されたが、主柱穴は判然としない。

遺物は覆土から弥生土器片、打製石斧、黒耀石剥片等が出土しているが、弥生土器片、黒耀石剥片はいずれも細片で図化できない。

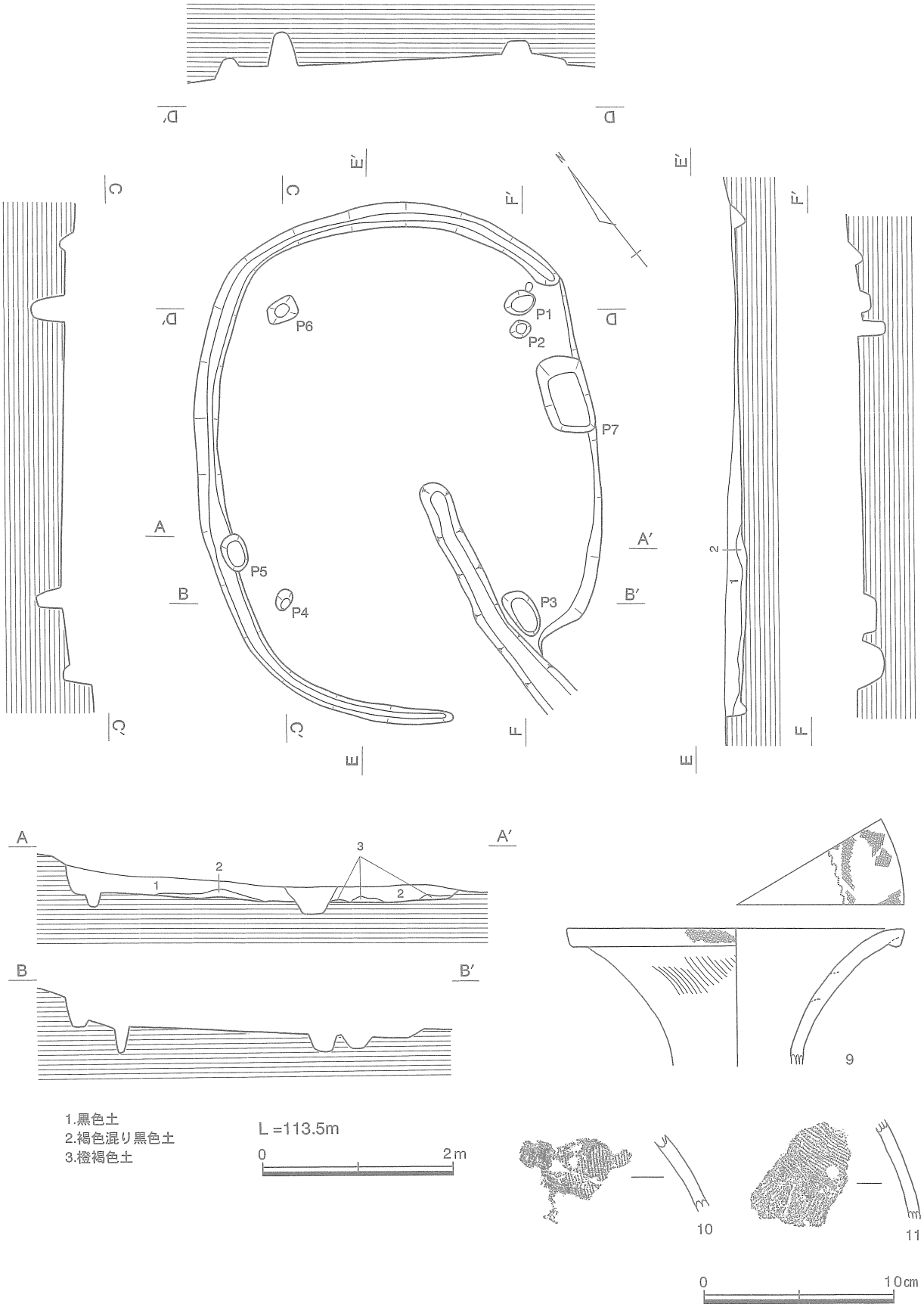
188は頁岩製の打製石斧である。完形で先端部は原礫面を多く残し使用痕とみられる無数の擦痕が付く。また、基部にも使用痕とみられる擦痕が観察できる。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

ＳＢ４（第16・33図）

Ｃ８グリッドで検出された、後期の隅丸方形を呈する竪穴住居である。覆土は黒色土である。調査区外に当たる北側は未検出であり、他の部分も耕作等で掘方肩部がまったく失われているが、西側の壁溝が残存していたため形状を把握することができた。柱穴の位置から、主軸はN-５°-Wを指向するものと思われる。住居内の施設は壁溝、炉が検出されている。壁溝は幅20～40cm、深さ30cm前後を測る。炉は、中軸線上の北側よりに造られている。主柱穴はＰ１～４であり、柱穴の間隔はＰ１・２間が220cm、Ｐ３・



第16図　竪穴住居跡ＳＢ４及び出土遺物



第17図　竪穴住居跡ＳＢ５及び出土遺物

４間が208㎝、Ｐ１・４間は162㎝、Ｐ２・３間は144㎝と、南面の間隔がやや狭まっている。明確な貼床は検出されなかったが、住居内側方向に壁溝が立ち上がらないことからも、掘方底面を直接床面としていた可能性が高い。

遺物は覆土である黒色土から、中期後半の土器、石製品が出土している。

６は中期後半の壺肩部である。胎土は緻密で径１㎜以下の黒色粒子・長石・黒雲母を多く含んでいる。にぶい黄褐色を呈し、よく焼きあがっている。体部外面は上位をナデ調整、下位をハケ調整し、その接点に７条一対の櫛状工具を用いた波状文が施される。文様の交点には円形浮文が貼付された痕跡があるが、剥離している。内面には指頭痕が認められる。

７は中期後半の壺体部である。残存高6.9㎝、胴部最大径17.2㎝を測る。胎土は密で径0.2㎜以下の小礫、0.1㎜以下の長石を多く含んでいる。灰黄色を呈し、よく焼きあがっている。外面には炭化物が付着している。外面は上位に上から下に向けて縦位にハケメが認められ、下位は摩滅のため明確ではないが、無文でミガキを施していると思われる。内面も摩滅のため調整は判然としないが、指頭痕が認められる。

８は中期後半の甕口縁部である。残存高は5.7㎝、胎土は緻密で0.1㎜以下の長石、１㎜以下の橙色粒子を多く含んでいる。にぶい黄褐色を呈し、よく焼きあがっている。口唇部は面取りされたうえ、ヘラ状工具による刻みが施される。外面は下から上に向けて縦位のハケメが認められ、内面にも横位のハケメが施されている。

53は大型で扁平な砂岩の自然礫を素材とした台石である。被熱し、主面部に摩耗痕が認められる。

ＳＢ５（第17・32図）

Ｃ７グリッドで検出された、後期の楕円形を呈する竪穴住居である。覆土は黒色土である。ほぼ全体が残存し、縦5.44m、横4.2m、床面積は22.848㎡を測り、主軸はN-39°-Ｅを指向する。西側から南側部分以外は、幅15～30㎝、深さ20㎝の壁溝が巡っている。住居の掘方内からは、小穴が７基検出されたが、このうちのＰ１・３・４・６が主柱穴に当たると考えられる。柱穴間の間隔は、Ｐ１・３間が324㎝、Ｐ６・４間が304㎝、Ｐ１・６間が246㎝、Ｐ３・４間が244㎝を測り、東辺がやや広く取られている。また、明確な炉跡、貼床は検出されなかった。住居内側方向に壁溝が立ち上がらないことからも、掘方底面を直接床面としていた可能性が高い。なお、中央部から南側にかけて掘られる溝ＳＤ８は中世の所産である。

遺物は覆土である黒色土から土器、石製品が出土している。

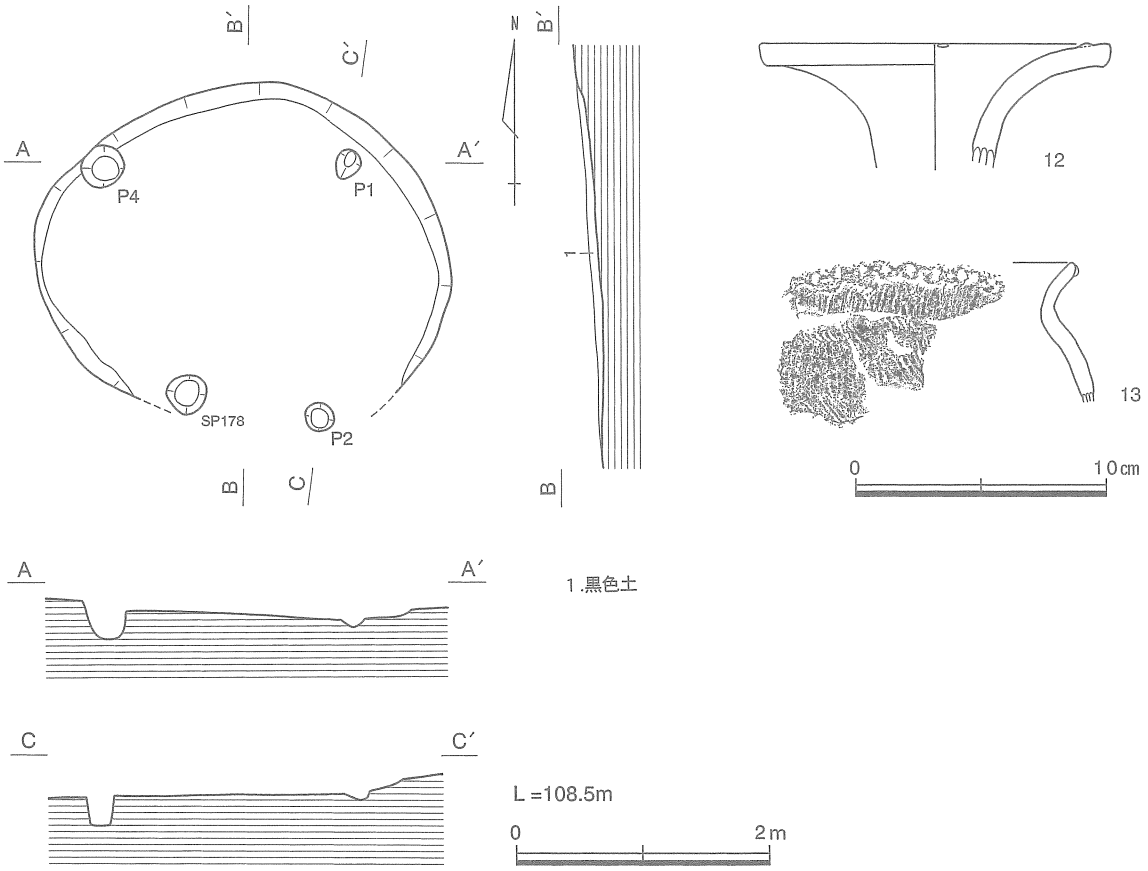
９は後期の壺肩部～口縁部である。口径17.8㎝、残存高7.1㎝を測る。胎土は緻密で径１㎜以下の砂粒、径0.1㎜以下の橙色粒子を多く含んでいる。明黄橙色を呈し、よく焼きあがっている。外面は縦のハケ調整を施し、折り返し口縁の面取りされた口唇部にはＲＬ縄文が施される。口縁部内面も端部に近いほうから、ＲＬの羽状縄文、ＬＲの羽状縄文、結節縄文が認められる。内面は摩滅が激しいが、ナデが施されていたと思われる。10、11と同一個体の可能性が高い。

10、11は後期の壺肩部である。胎土、焼成ともに９に類似する。外面はＲＬの羽状縄文、ＬＲの羽状縄文が施され、円形浮文の剥離の跡かと思われる円形の痕跡が認められる。内面は摩滅が激しく調整は不明である。

50は砂岩製の砥石である。主面部に砥面が認められる。

ＳＢ６（第18図）

Ｃ６グリッドで検出された、後期の円形で小型の竪穴住居である。覆土は黒色土である。南側の一部が耕作等によって削られ、不明確になっている。規模は縦3.3m、横は現存2.47mを測り、主軸はほぼ南



第18図　竪穴住居跡ＳＢ６及び出土遺物

北のN-６°-Eを指向する。住居の掘方内からは、小穴が４基検出されている。このうち南西側の小穴ＳＰ178は古代～中世の掘立柱建物ＳＢ６に伴うものなので、他のＰ１・２・４が柱穴と判断される。Ｐ１・２間は204cm、Ｐ１・４間は198cmである。炉跡、貼床等、住居内の施設は確認されなかった。

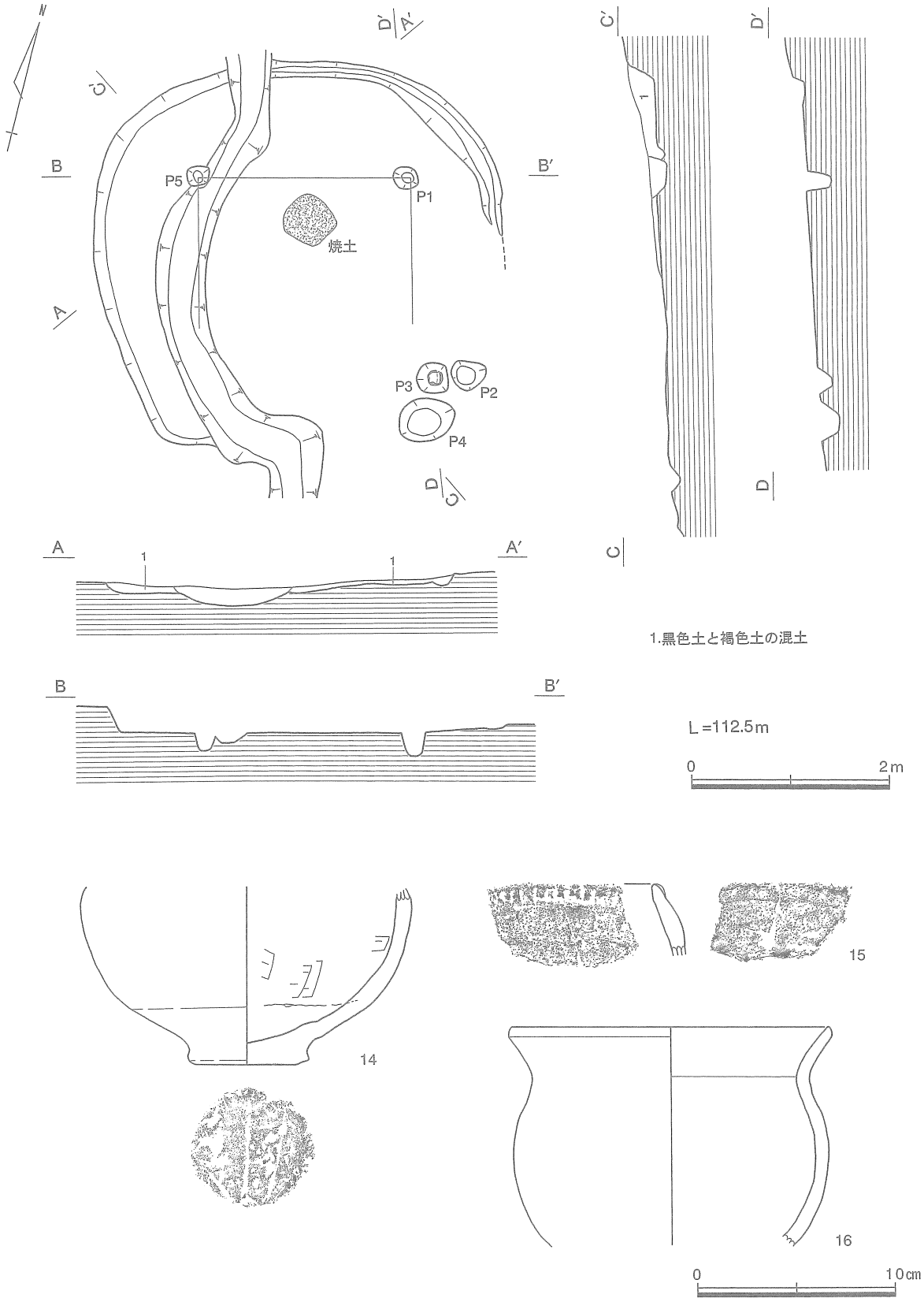
遺物は覆土である黒色土から土器が出土している。

12は後期の壺口縁部である。口径14.0cm、残存高4.9cmを測る。胎土は緻密で径５mm以下の長石、橙色粒子を多く含み、黄橙色によく焼きあがっている。調整方法は内外面とも摩滅が激しいため判然としないが、口縁部内面に貼り付けによる円形浮文が４ヵ所中２ヵ所に残存している。

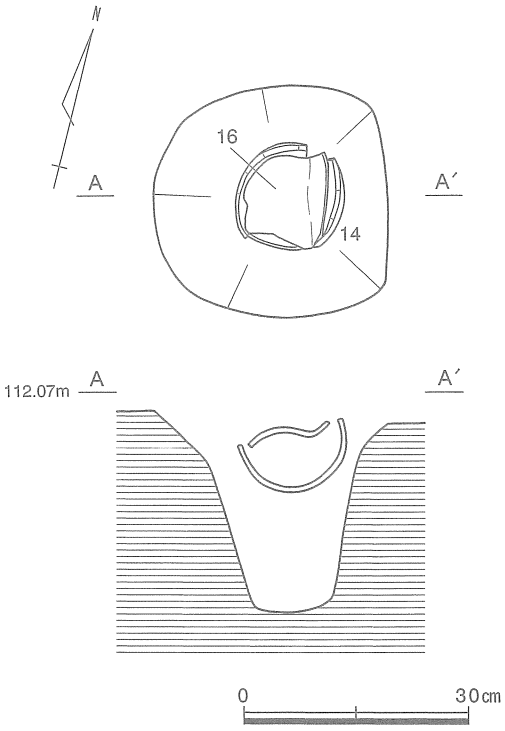
13は後期の甕口縁部である。残存高5.4cmを測る。胎土は緻密で径１mm以下の砂粒を多く含み、橙色によく焼きあがっている。外面を縦位方向のハケで調整したうえ、口唇部に刻目を施す。内面の調整は、摩滅が激しいため明らかでない。

ＳＢ７（第19・20・32・47図）

Ｃ６グリッドで検出された、中期後半の隅丸方形を呈する竪穴住居である。覆土は褐色土と黒色土が混じった土である。覆土中から床面にかけて大量の炭化物が混入していたことから、火災によって失われたものと考えられる。西側から南側のプランは、耕作等によって削られ不明確になっている。現存する規模は、縦3.68m、横4.14mを測り、主軸はN-15°-Wを指向する。北東側には幅15～30cm、深さ10cm程度の壁溝が確認された。炉は住居中央よりやや北によって造られている。住居の掘方内からは、小穴が５基検出されている。このうちＰ１・５は主柱穴と判断され、その間隔は206cmを測る。住居内の南東隅にあるＰ３は、Ｐ１・５に対して主柱穴となりうる頃合の位置に掘られているが、内部には14の壺に16の甕が重ねられるかたちで埋め込まれていた。柱穴であれば、柱を引き抜いた後に入れたことになる。



第19図　竪穴住居ＳＢ７及び出土遺物



第20図　竪穴住居跡ＳＢ７内Ｐ３遺物出土状況

したがって、住居が廃棄されたのち一部の部材が撤去された状態で焼失した可能性も考慮しなければならないだろう。

遺物は、覆土と小穴Ｐ３から土器が出土している。

14はＰ３に埋められた状態で出土した、後期の壺体部～底部である。底径6.1cm、胴部最大径16.7cm、残存高8.9cmを測る。胎土は緻密で径１㎜以下の砂粒を多く含み、黄灰色を呈してよく焼きあがっている。外面の調整は摩滅が激しいため明らかでないが、内面は板ナデが施される。底部には木葉痕が認められる。

15は覆土から出土した、中期後半の甕口縁部である。胎土は密で径５㎜以下の砂粒を含んでおり、黄橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面を板ケズリで、口縁端部をナデ仕上げた後、口唇部に５～７㎜間隔で刻みを施している。なお、底部外面には木葉痕が認められる。

16はＰ３内に、14の上に重なった状態で出土した後期の甕である。口径16.4cm、胴部最大径15.9cm、残存高10.9cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含み、黄橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面の調整は、摩滅が激しく明らかでない。外面の所々に炭化物が付着している。

46は砂岩製の砥石・敲石である。完形であり主面部に砥面を持ち、端部に敲打痕が認められる。

133は泥岩製の打製石鏃で、基部が一部欠損する。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

ＳＢ９（第21図）

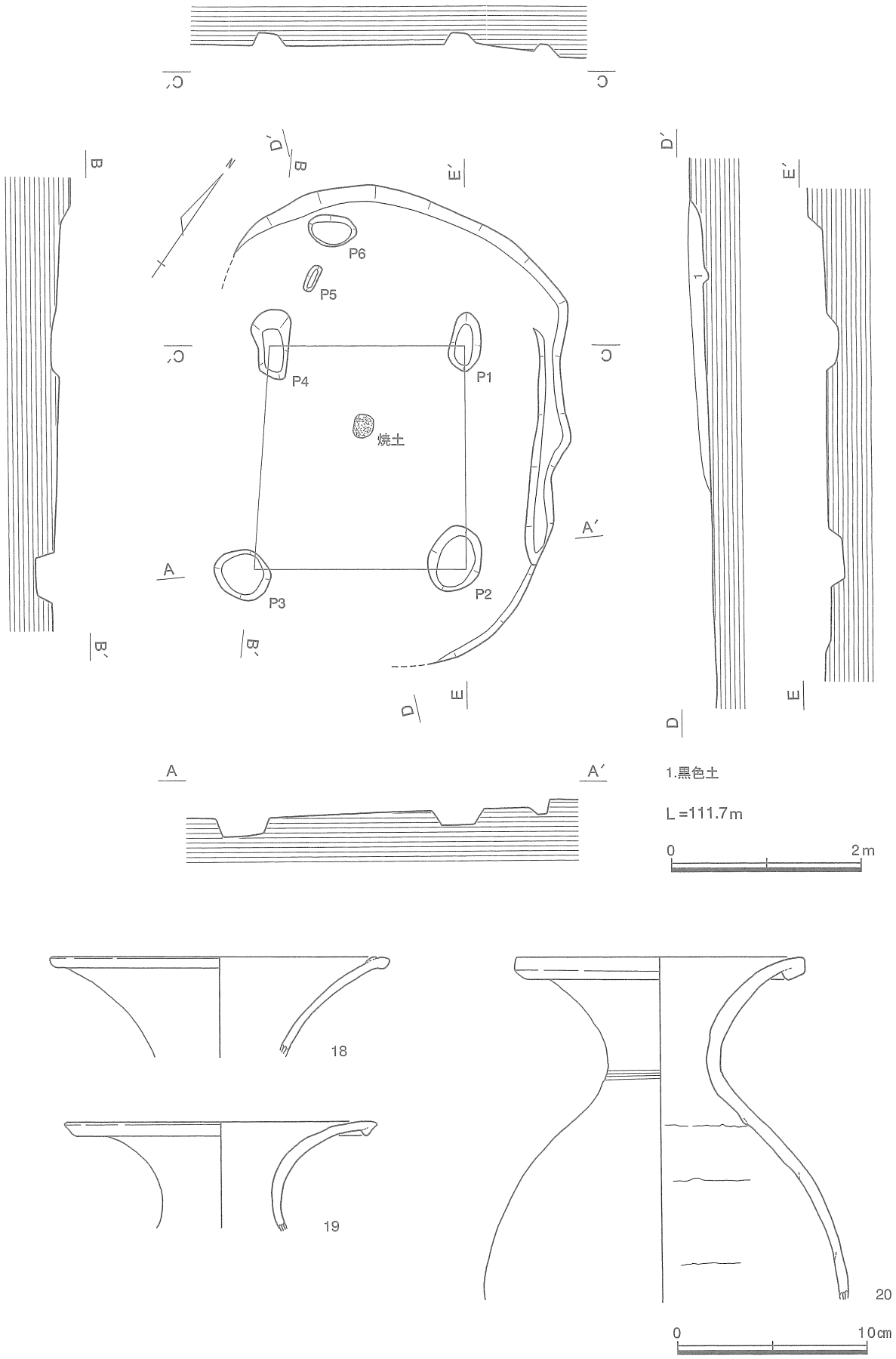
Ｂ５・Ｃ５グリッドで検出された、後期の楕円形を呈する竪穴住居である。覆土は黒色土である。西側から南側にかけての肩部が失われている。規模は推定で縦4.96m、横3.77mを測り、主軸は柱穴の間隔からN-35°-Wを指向するものと思われる。東側の一部には幅22～40cm、深さ15cm程度の壁溝が認められた。住居の掘方内からは小穴が６基検出された。このうちのＰ１～４が主柱穴と判断される。柱穴の間隔はＰ１・２間が226cm、Ｐ４・３間が241cm、Ｐ１・４間が200cm、Ｐ２・３間が222cmを測る。柱穴で囲まれた矩形の空間の、やや北に寄った位置に炉が設けられている。

遺物は、覆土から土器が出土している。

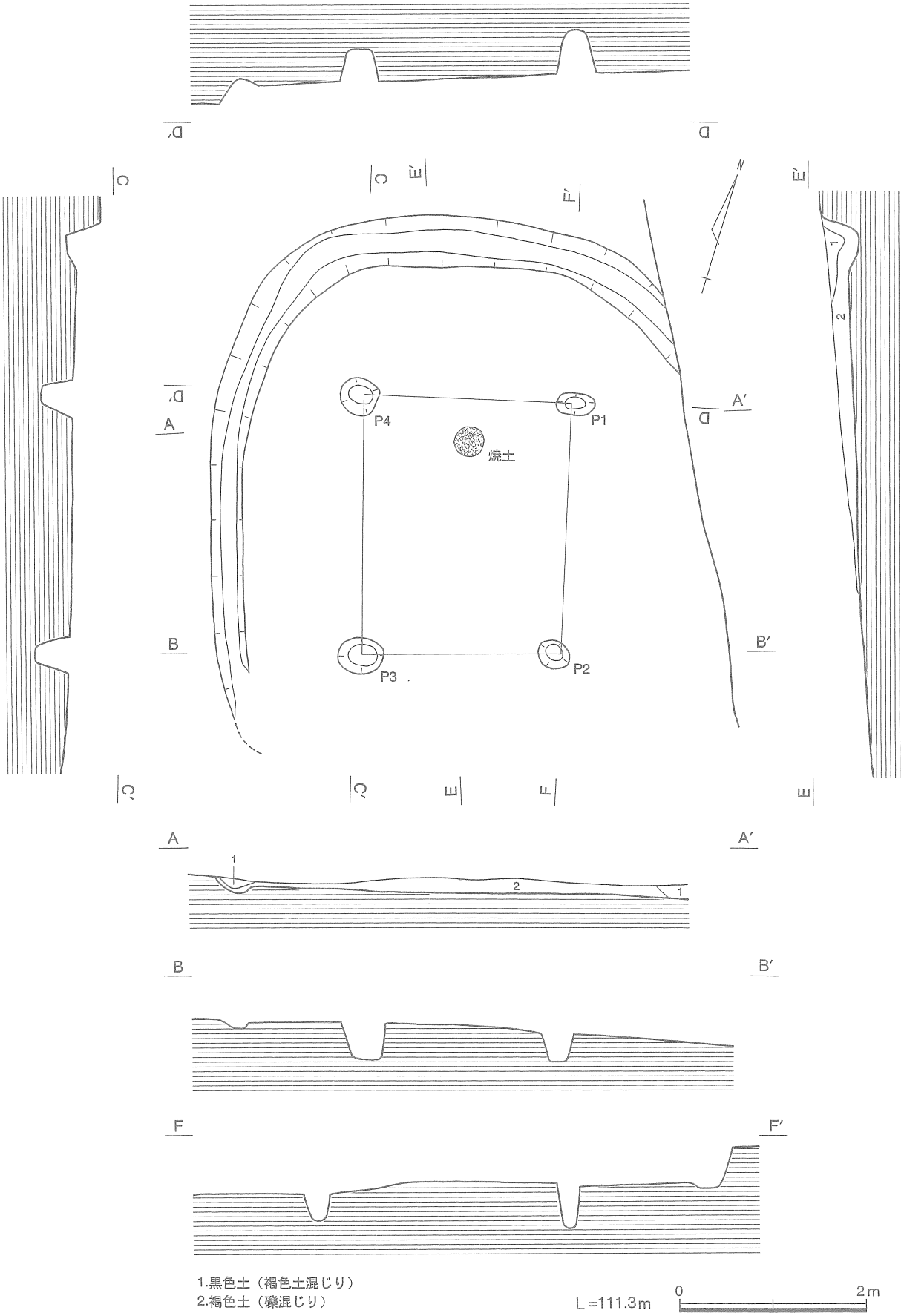
18は後期の壺口縁部である。口径18.8cm、残存高5.3cmを測り、薄手で繊細なつくりをしている。胎土は緻密で径２cm以下の長石を多く含み、黄橙色を呈してよく焼きあがっている。軽く折り返された口唇部の内面には円形浮文が認められる。体部内外面とも摩滅のため調整は明らかでない。

19は後期の壺口縁部である。口径16.4cm、残存高5.5cmを測る。胎土は緻密で径５㎜以下の長石、径１㎜以下の橙色粒子を多く含み、橙色を呈しよく焼きあがっている。内外面とも摩滅のため調整は明らかでない。

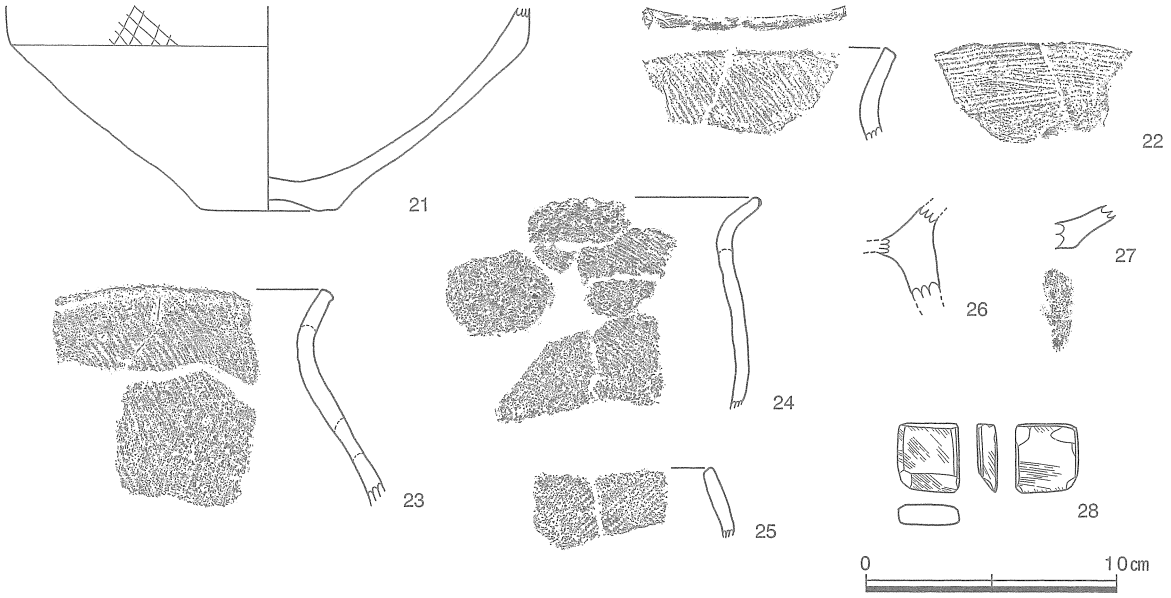
20は後期の壺である。口径は15.3cm、胴部最大径19.3cm、残存高17.9cmを測る。胎土は１cm以下の長石・礫を多く含み、浅黄橙色を呈してよく焼きあがっている。頸部に２本の平行沈線が認められる。体部内外面とも摩滅のため調整は明らかでない。



第21図　竪穴住居跡ＳＢ９及び出土遺物



第22図　竪穴住居跡ＳＢ10



第23図　竪穴住居跡ＳＢ10出土遺物

ＳＢ10（第22・23・52図）

Ｄ５グリッドで検出された、中期後半の楕円形を呈する竪穴住居である。覆土のほとんどは褐色土であるが、壁溝部分にだけ上位に黒色土が、下位に褐色土が入る。東側の調査区際にあたるため、プランの東側一部は検出されていない。規模は縦が現存5.34m、横が現存5.23mを測り、主軸はN-15°-Wを指向する。壁溝は幅30～50cm、深さ40cmの規模があり、検出されたプランにほぼ全周して認められた。住居に伴う小穴は４基で、すべて主柱穴と判断される。柱穴の間隔は、Ｐ１・２間が264cm、Ｐ４・３間が280cm、Ｐ１・４間が226cm、Ｐ２・３間が204cmを測る。掘方の中央からやや北寄りに炉が設けられている。貼床は検出されなかったが、住居内側方向に壁溝が立ち上がらないことからも、掘方底面を直接床面としていた可能性が高い。

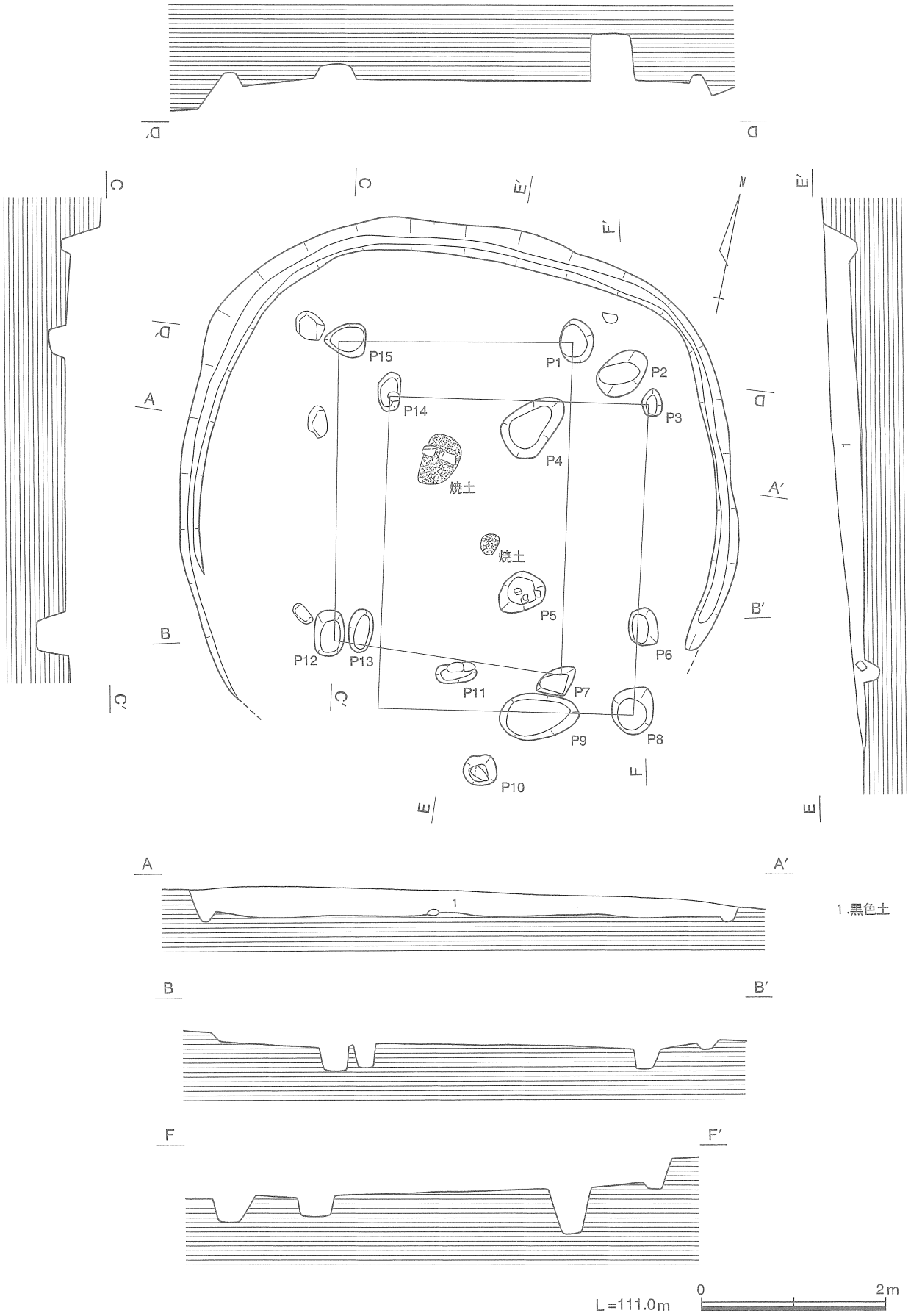
遺物は土器であり、27が覆土の下位にあたる褐色土から、他は壁溝上位に堆積する黒色土から出土している。

21は中期後半の壺体部～底部である。底径は5.5cm、残存高8.0cmを測る。胎土は緻密で径１mm以下の砂粒・長石・橙色粒子を含み、にぶい黄橙色を呈してよく焼きあがっている。底部は中央が若干盛り上がる上げ底状で、体部は底部から急に立ち上がる。体部下半に稜をもち屈折するが、ここに細いヘラ状工具による斜格子文が施される。調整方法は内外面ともには摩滅のため明らかでないが、おそらくミガキで仕上げられていると思われる。

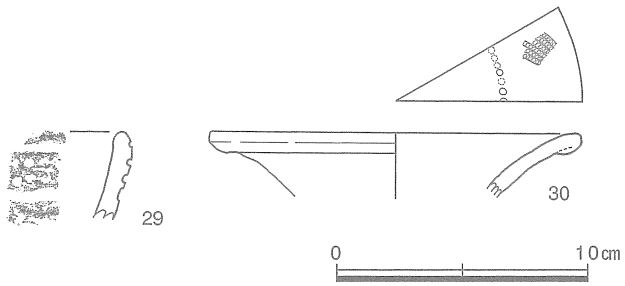
22は中期後半の甕口縁部である。胎土は緻密で１mm以下の長石を少量含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面ともにハケ調整され、口唇部は面取りされる。全体にすすけて炭化物が付着している。

23は中期後半の甕口縁部である。残存高8.5cmを測る。胎土は緻密で径１mm以下の橙色粒子、２mm以下の砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面はハケ調整されるが、他の部分は摩滅のため明らかでない。口唇部は面取りされる。口縁部外面には炭化物が付着している。

24は中期後半の甕口縁部である。残存高8.4cmを測る。胎土は緻密で径２mm以下の砂粒を多数含み、浅黄橙色を呈してよく焼きあがっている。体部内外面はハケ調整が認められるが、他の部分は摩滅のため明らかでない。口縁端部は面取りされ、８mm前後の間隔で刻みが施される。外面は部分的に黒くすすけている。



第24図　竪穴住居跡ＳＢ11



第25図　竪穴住居跡ＳＢ11出土遺物

25は鉢口縁部片である。胎土は緻密で径１㎜以下の黒雲母・砂粒を多く含み、黄橙色を呈してよく焼きあがっている。外面はナデの後ＬＲ縄文が施される。内面は摩滅のため調整は明らかでない。口縁端部は面取りがされていると思われる。

26は高坏である。胎土は緻密で径１㎜以下の砂粒を多く、径１㎜以下の長石・橙色粒子を少量含み、浅黄橙色を呈してよく焼きあがっている。

27は縄文土器の底部である。底径は15.8㎝、残存高1.7㎝を測る。胎土は２㎜大の小礫を含み、黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

28は緑色凝灰岩製の扁平片刃石斧である。完形品であるがよく使い込まれており、刃部が使い減りしてかなり短くなっている。大きさは長さ2.71㎝、幅2.52㎝、厚さ0.82㎝を測る。

187は中粒砂岩製の打製石斧である。先端部にゆくほど丁寧に調整される。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

ＳＢ11（第24・25・33・47・50・53図）

Ｃ・Ｄ４グリッドで検出された、後期の四隅がやや張った円形を呈する竪穴住居である。炉跡が２基検出されているため、２時期にわたり拡張されていると思われる。覆土は黒色土で、切り合いがみられないことから、検出された状態が最終形態と判断される。規模は縦が現存4.9m、横5.93mを測り、主軸はN-19°-Wを指向する。耕作等によって失われている南側以外には、幅15～40㎝、深さ15～35㎝を測る壁溝がめぐっている。南東側には壁溝に連結する位置にN-67°-Wへ伸びるＳＤ４がある。住居に接する状況は明らかではないが、住居からの排水機能を持つ溝であると思われる。住居の掘方内からは、小穴が15基検出されており、このうちのＰ１・７・12・15が最終形態の主柱穴と判断される。柱穴の間隔はＰ１・７間で365㎝、Ｐ15・12間で310㎝、Ｐ１・15間で250㎝、Ｐ６・７間で245㎝を測り、東西方向がほぼ同一であることがわかる。また、南側のＰ９は貯蔵穴の可能性がある。炉跡は中央やや北西よりに検出され、焼土の上にはＳＢ２と同様、二つに割れた上面が平らな長方形の石を配石としている。

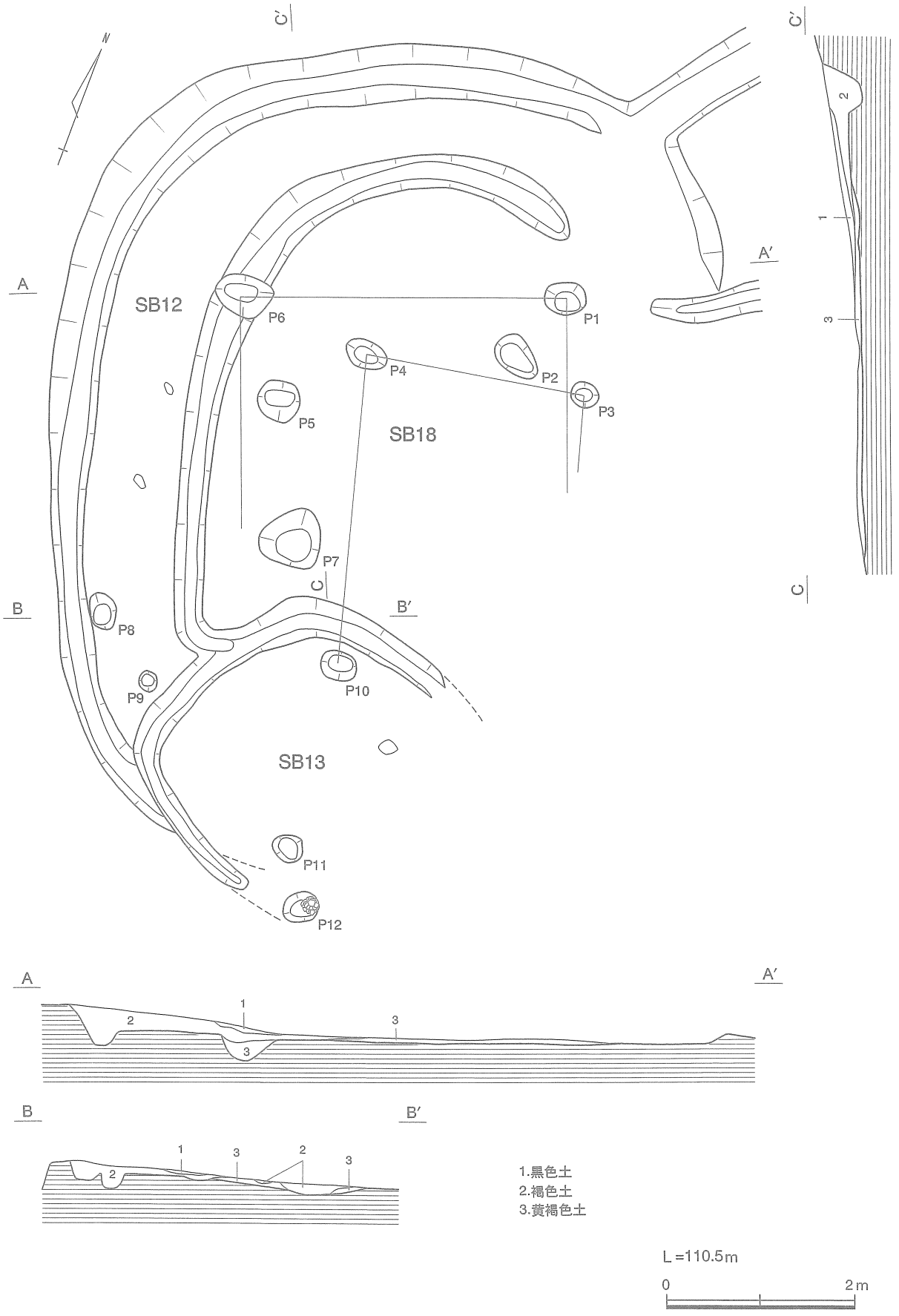
これに先行する住居は、プランの南東側に検出された炉を中心とするＰ３・８・14を柱穴に用いたものである。これにより、従来の住居を北西側に拡張した上、主柱穴と炉を中央よりに造り替ていることが分かる。柱穴の間隔は、Ｐ３・14間で285㎝、Ｐ３・８間で335㎝を測る。なお、この住居の覆土からは他の住居跡に比べ土器片や石器が多く出土している。それに比べ復元できる個体が著しく少ないことは、廃棄後のくぼみが廃棄土坑として利用されたことを示唆しているのだろう。

遺物は、覆土から土器、石器、石製品が出土している。

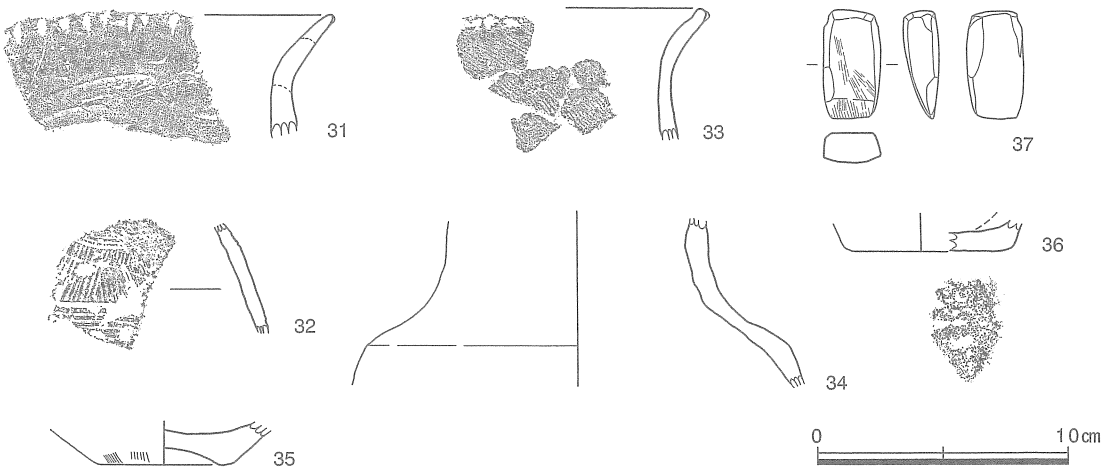
29は縄文晩期に当たる大洞ＢＣ式に併行する深鉢の口縁部である。残存高は3.4㎝を測る。胎土は石英、長石を含み、外面がにぶい褐色、内面が明赤褐色を呈しよく焼きあがっている。内外面に条痕による調整の後、口縁に沿う沈線区画の中に竹管による刺突を施す。83と同一個体である。

30は壁溝の黒色土から出土した、後期の壺口縁部である。口径14.8㎝、残存高2.5㎝を測る。胎土は緻密で１～２㎜の長石を含み、にぶい黄橙色を呈してよく焼きあがっている。折り返し口縁をもち、口縁内側にＬＲ縄文、円形押圧文が施される。外面の調整は摩滅のため明らかでない。

49は、Ｐ11から出土した砂岩製の砥石である。被熱による破損が顕著で、本来は倍以上の大きさであったと思われる。



第26図　竪穴住居跡ＳＢ12・13・18



第27図　竪穴住居跡ＳＢ12・13、溝ＳＤ５出土遺物

52は被熱する砂岩製の砥石である。Ｐ12脇の床面に据え置いたかたちで出土した。表裏、両側辺に砥面が認められるが、とくに正面が使い込まれている。磨製石斧の砥石であろうか。

55は大型で扁平な砂岩の自然礫を素材とした台石である。主面部に摩耗痕が認められる。西よりの床面に据え置かれるかたちで出土している。

137はチャート製の石匙である。主に片面からの調整で仕上げられる。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

199は細粒砂岩製の打製石斧である。基部は折れて失われている。表面には原礫面を残し、比較的広い剥離面が目立つ。裏面は側縁からの丁寧な調整が加えられる。なお、一部に被熱した痕跡がある。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

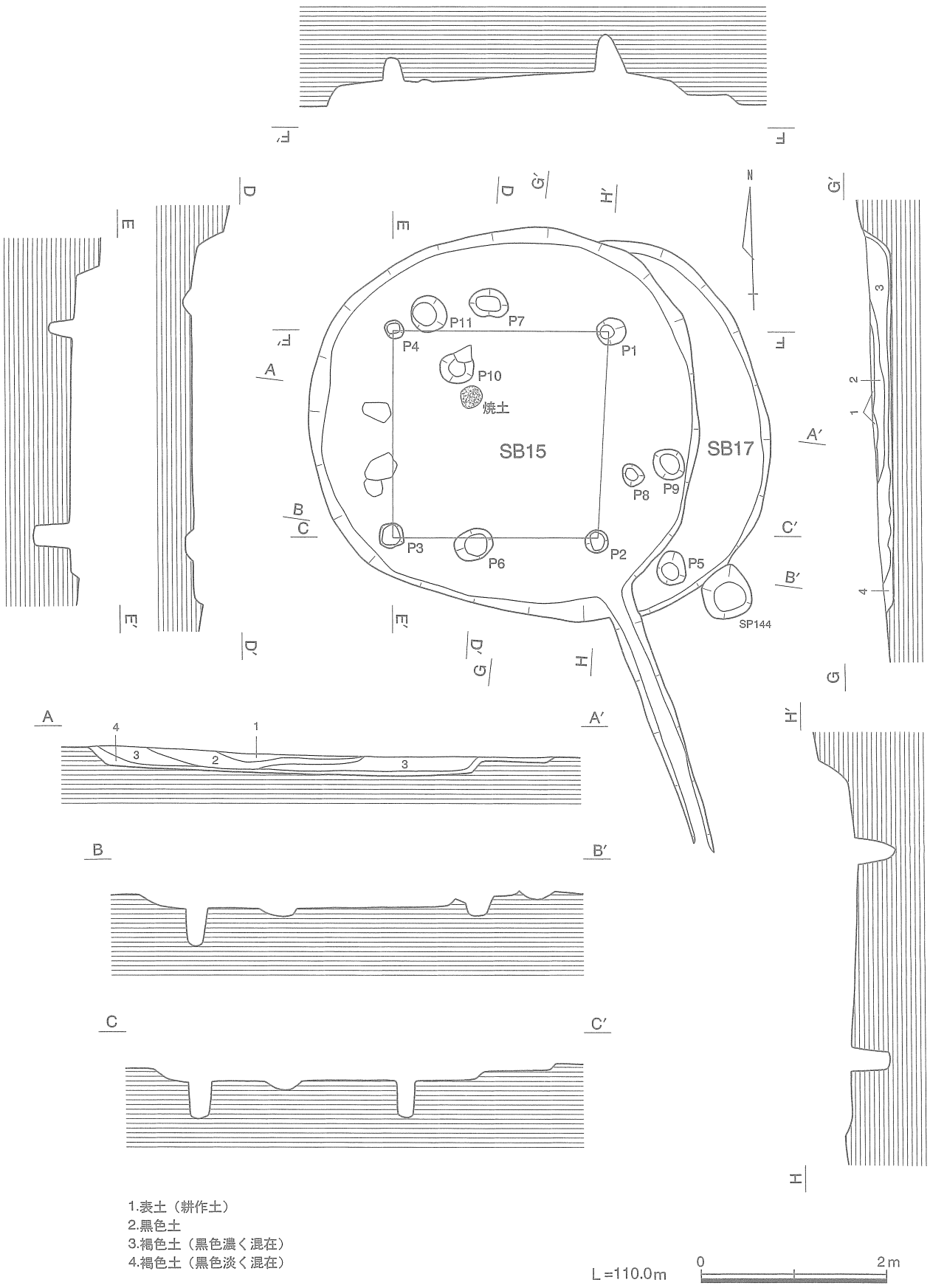
なお、これらのほかに扁平片刃石斧が出土しているが、細片のため図示できなかった。

ＳＢ12・13・18（第26・27・32・33・50図）

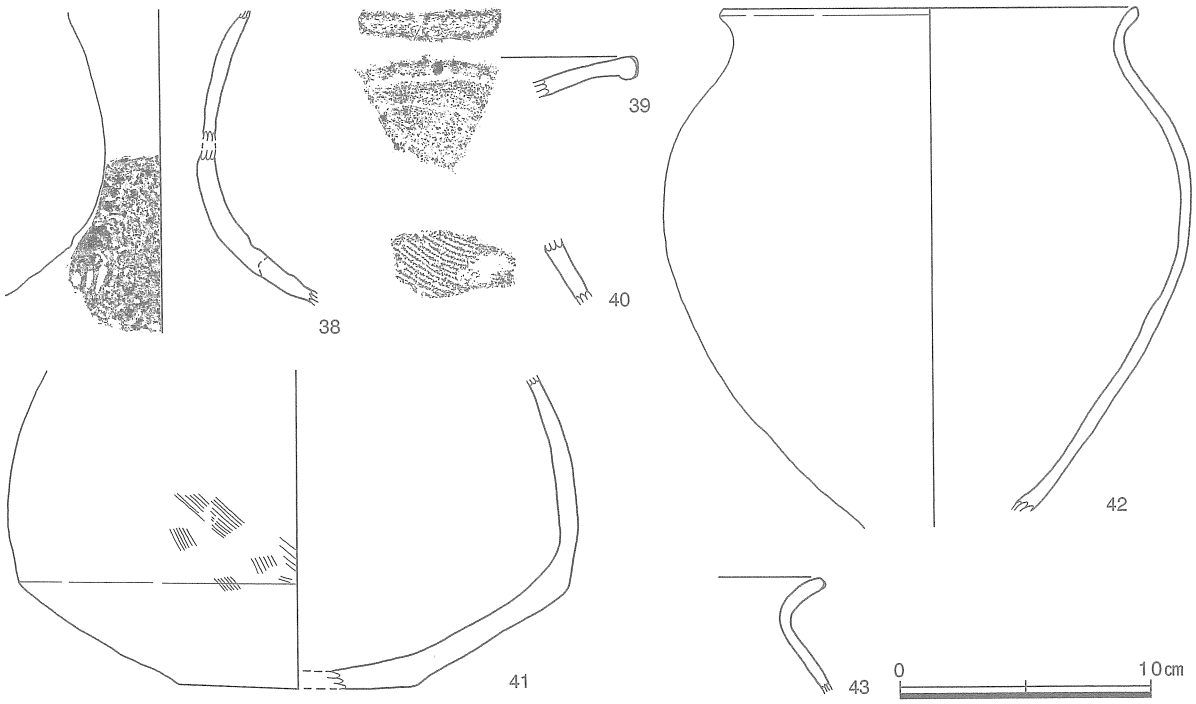
Ｄ・Ｅ３、Ｄ・Ｅ４グリッドで検出された、ＳＢ12・18は中期後半の楕円形、ＳＢ13は中期後半～末の隅丸方形を呈する竪穴住居である。ＳＢ12はＳＢ18からの拡張、ＳＢ13はＳＢ12とＳＢ18が廃絶した後にこれらの一部に重複するかたちで建てられたものとみられる。覆土はＳＢ12が褐色土、ＳＢ13が褐色土と黒色土が混ざった土、ＳＢ18は黄褐色土となる。

ＳＢ18は西から南西側が耕作等によって削られて残存していない。覆土は黄褐色土である。平面形は楕円形で、規模は残存部分で縦5.6m、横5.4mを測り、柱穴の位置から主軸はN-17°-Wを指向すると思われる。壁溝は幅30～50cm、深さ28cmの規模で、北側から南西側にかけて検出された。壁溝の覆土は、床面と考えられる掘方底面直上にある黄褐色土と同質であることから、ＳＢ12へ拡張する際に新たな床面を造成するため一律に埋められたものと考えられる。この住居に伴う柱穴はＰ３・４・10が想定される。柱穴の間隔はＰ３・４間で240cm、Ｐ４・10間で332cmを測る。炉跡は検出されなかった。

ＳＢ12も西から南西側が耕作等によって削られて残存していない。覆土は褐色土を主体とするが、上位に部分的に黒色土を含んでいる。平面形は楕円形で、規模は残存部分で縦8.48m、横6.75mを測り、柱穴の位置から、主軸はN-20°-Wを指向すると思われる。壁溝は幅29～68cm、深さ45cm前後を測り、北東側から南西側にかけて検出された。壁溝付近からＳＢ18の範囲にかけて褐色土が堆積しているが、壁溝の立ち上がりが内側に観察できなかったため、掘方の底面とＳＢ18に入れられた黄褐色土の上面が床面になっていたものと考えられる。この住居に伴う柱穴はＰ１・６が想定される。南側には該当する柱穴はみられない。柱穴の間隔はＰ１・６間で352cmを測る。炉跡は検出されなかった。



第28図　竪穴住居跡ＳＢ15・17



第29図　竪穴住居跡ＳＢ15出土遺物

なお、北東側には住居外へN-46°-Eの方向にＳＤ５が掘られている。概要と出土遺物は溝の項で述べる。

遺物は、覆土から土器、石器が出土している。

31は中期後半の甕口縁部である。残存高は4.8cmを測る。胎土は緻密で径0.1mm以下の石英、径１mmの橙色粒子・小豆色粒子を含み、浅橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面は摩滅のため明確ではないが、ハケ調整が施されているものと思われる。口唇部には７～11mm間隔で刻みが施される。

32は中期後半の壺肩部である。胎土は緻密で径１mm以下の砂粒・橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈してよく焼きあがっている。外面はハケ調整後に横位の櫛描文が施される。内面は摩滅のため明らかでない。

37は壁溝内から出土した、小型の緑色凝灰岩製柱状片刃石斧である。完形品であるが、使用頻度が顕著であり、刃部に擦痕が認められる。大きさは長さ4.36cm、幅2.35cm、厚さ1.42cmを測る。

47は凝灰岩製の砥石である。端部が欠損しているものの使い込まれており、中央部がわずかに湾曲する。

57は凝灰岩製の砂岩製の礫断片である。47と同じ石材であるため、砥石の素材である可能性がある。

58は頁岩の扁平な礫である。長さ7.47cm、幅6.79cm、厚さ1.24cmで側辺の稜線部に摩耗痕が顕著である。用途は判然としない。

ＳＢ13は西側が耕作等によって削られて残存していない。覆土は黒色土である。平面形は隅丸方形と想定され、規模は残存部分で縦3.15m、横2.09mを測り、壁溝の方向から、主軸はN-32°-Eを指向すると考えられる。ＳＢ18よりも掘方が深く、幅19～48cm、深さ12cm程度の壁溝が残っている。住居の掘方内からは３基の小穴が検出されたが、Ｐ10はＳＢ18の柱穴、Ｐ12は壁溝の延長上にあたるため、主柱穴は特定できない。炉跡は検出されなかった。

遺物は、覆土から土器、石器が出土している。

33は中期後半の甕口縁部である。胎土は緻密で径１mm以下の橙色粒子・砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面は縦位に、内面は横位にハケ調整が施される。口唇部には５～10mm間隔で刻みが施される。

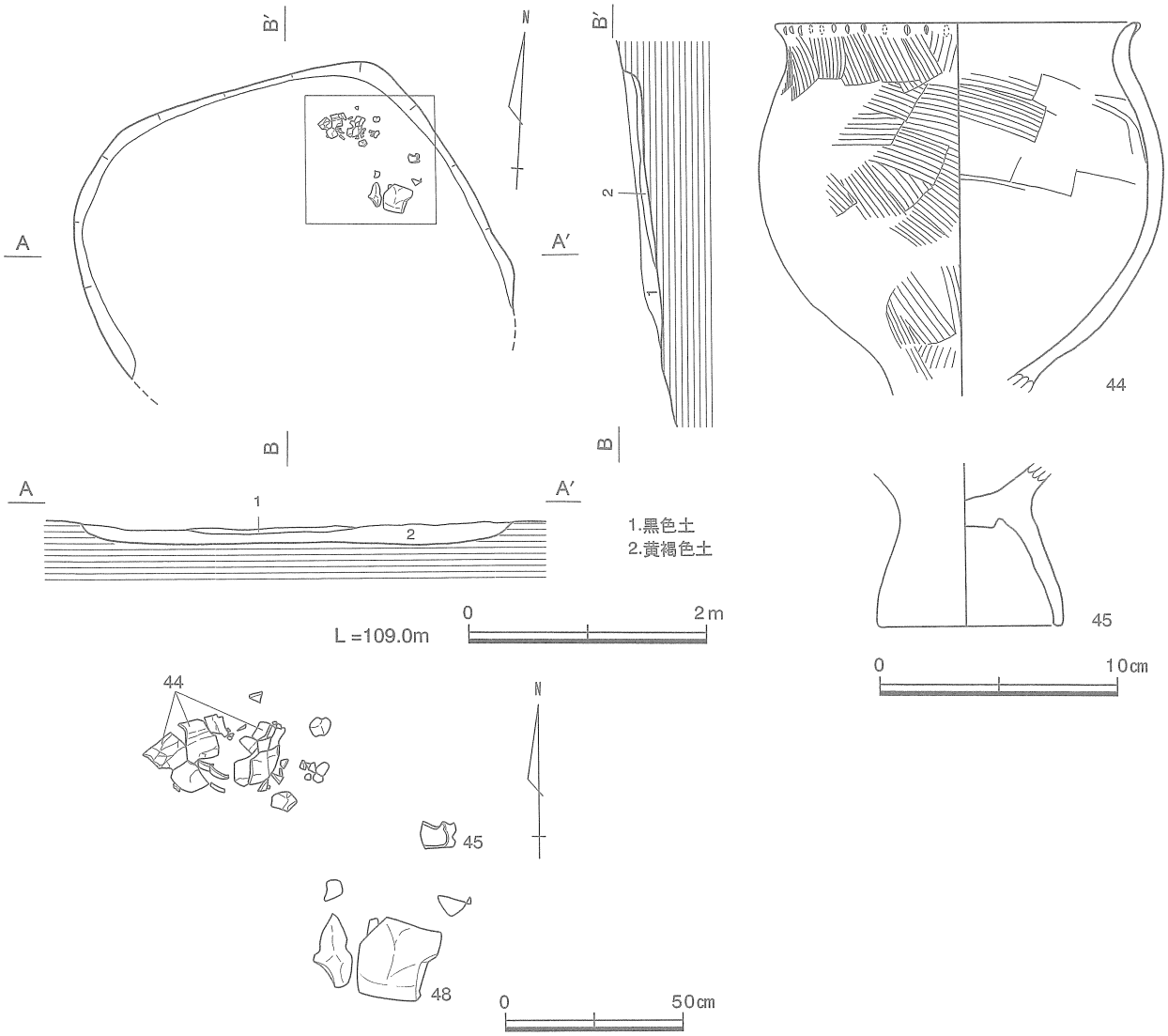
34は中期後半の壺肩部である。胎土は緻密で径４㎜以下の長石、径１㎜以下の砂粒を含み、橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面とも摩滅のため調整は明らかでない。

35は中期後半の壺底部である。底径は5.6㎝、残存高1.7㎝を測る。胎土は緻密で径１㎜以下の長石・砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈しよく焼きあがっている。底部外面が持ち上がって上げ底風となっている。外面にはナデの後ハケ調整が施される。内面は摩滅のため明確ではない。

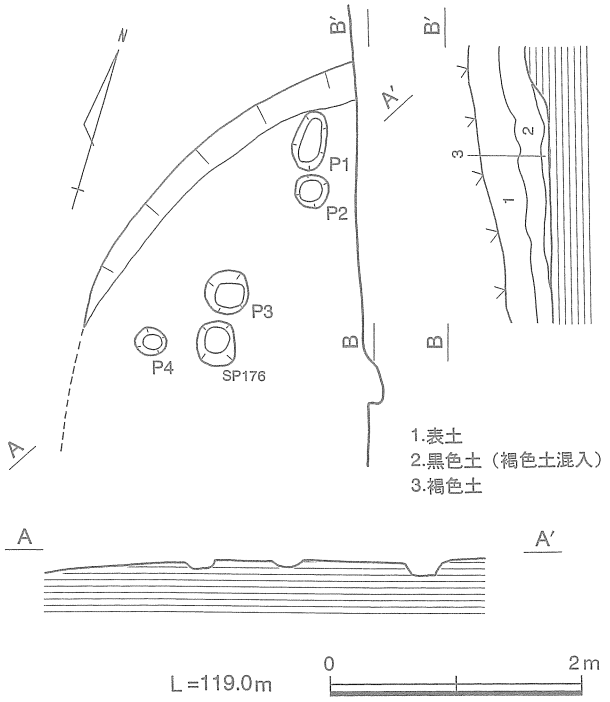
171は細粒砂岩製の打製石斧である。表面に広く原礫面を残す。先端部には使用痕と思われる無数の擦痕が付く。刃部と頭部は丸ノミ状となる。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

ＳＢ15（第28・29・32・33・48図）

Ｃ・Ｄ３グリッドで検出された、後期の円形を呈する竪穴住居である。覆土は下位が褐色土、上位が黒色土である。規模は縦4.03m、横4.21m、床面積は16.9㎡であり、主軸はN-３°-Eを指向する。掘方内からは10基の小穴が検出され、Ｐ１～４が主柱穴と判断される。柱穴の間隔はＰ１・２間、Ｐ４・３間がともに222㎝、Ｐ１・４間が226㎝、Ｐ２・３間が224㎝とほぼ等間隔である。中央やや北西寄りに炉跡が確認された。南側には住居外のN-19°-Wの方向へ、排水のための溝と考えられるＳＤ７が取り付いている。



第30図　竪穴住居跡ＳＢ16及び出土遺物



第31図　竪穴住居跡ＳＢ19

遺物は、覆土のうち下位の褐色土（第28図中４層）から土器が、上位の褐色土（同３層）と黒色土（同２層）から石器が出土している。

38は中期後半の壺頸部から肩部である。胎土は緻密で径５㎜以下の長石を含み、明黄橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面には幅６㎜程度の隆帯が横位に貼り付けられ、その下に櫛状工具による刺突文が施される。さらに、この部分から肩部にかけてＲＬ縄文が認められる。内面の調整は摩滅のため明らかでない。

39は後期の壺口縁部である。胎土は緻密で径５㎜以下の長石を多く含み、浅黄橙色を呈してよく焼きあがっている。体部内外面ともに調整は摩滅のため明らかでないが、口縁端部に棒状浮文が１ヵ所認められる。

40は後期の壺肩部である。胎土は緻密で径１㎜以下の砂粒を多く含み、橙色を呈しよく焼きあがっている。体部外面にはＲＬ縄文が施される。内面の調整は摩滅のため明らかでない。

41は後期の壺である。底径9.5cm、胴部最大径22.6cm、残存高12.4cmを測る。胎土は緻密で径５㎜以下の小礫を含み、黄橙色を呈してよく焼きあがっている。体部内外面とも摩滅が激しいが、外面の一部にハケ調整後に軽いナデが施されている。また、底部外面には木葉痕が、外面には焼成時の黒斑が認められる。

42は後期の台付甕である。口径16.8cm、胴部最大径21.0cmを測る。胎土は緻密で径１㎜以下の砂粒・橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈してよく焼きあがっている。調整は体部内外面とも摩滅のため明らかでない。

43は後期の甕口縁部である。胎土は緻密で径３㎜以下の砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面の調整は摩滅のため明らかでないが、内面は口縁端部付近がハケ、頸部に近いあたりがヘラナデで仕上げられている。口唇部は面取りされ、刻みが付けられる。

51・54は大型で扁平な砂岩の自然礫を素材とした台石である。主面部に摩耗痕が認められる。いずれも西よりの床面に据え置かれるかたちで出土している。

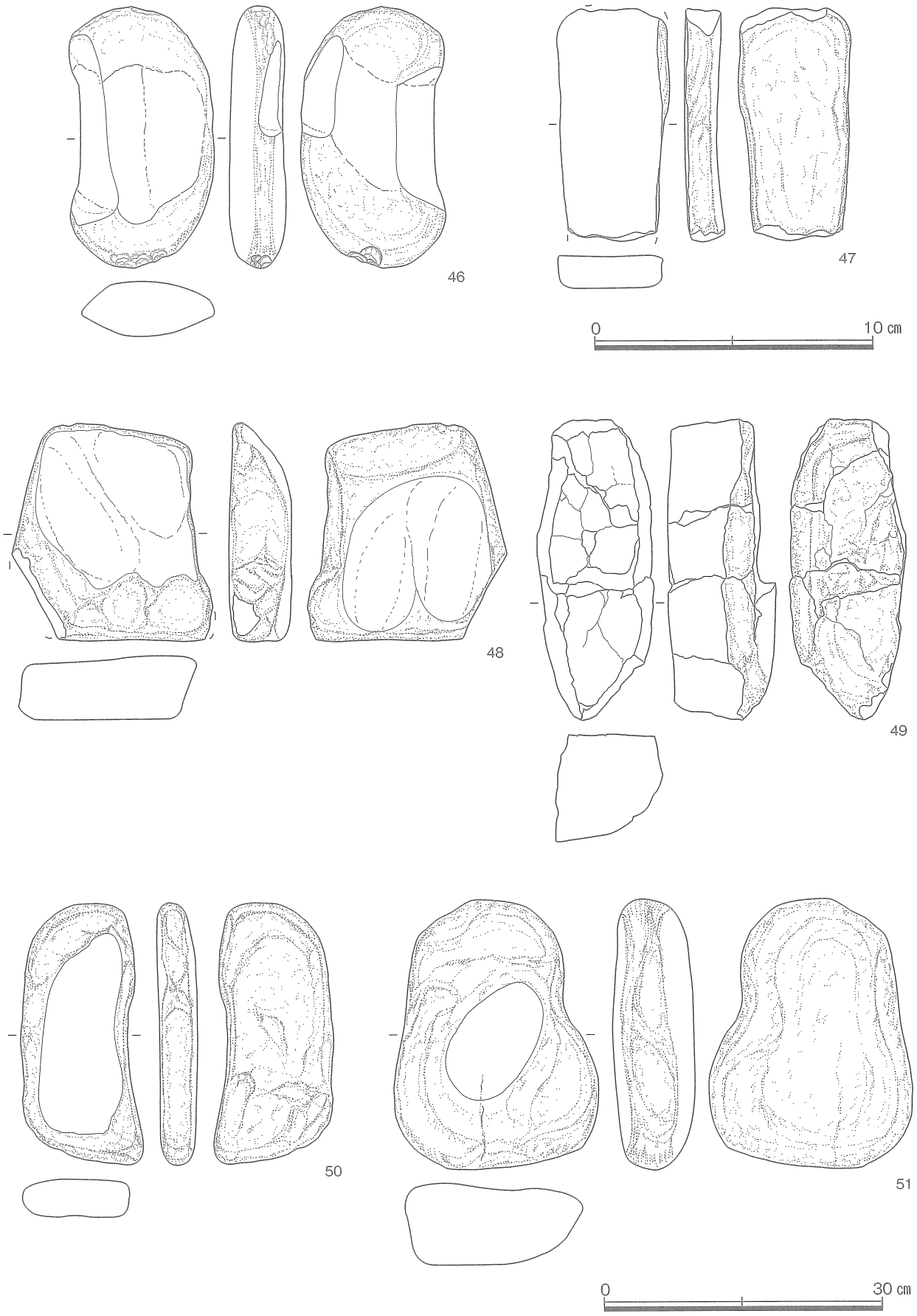
148は上位の褐色土から出土した台形状を呈する泥岩製のスクレイパー、189は細粒砂岩製の打製石斧である。表面側縁部に原礫面を残す。ともに縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

ＳＢ16（第30・32図）

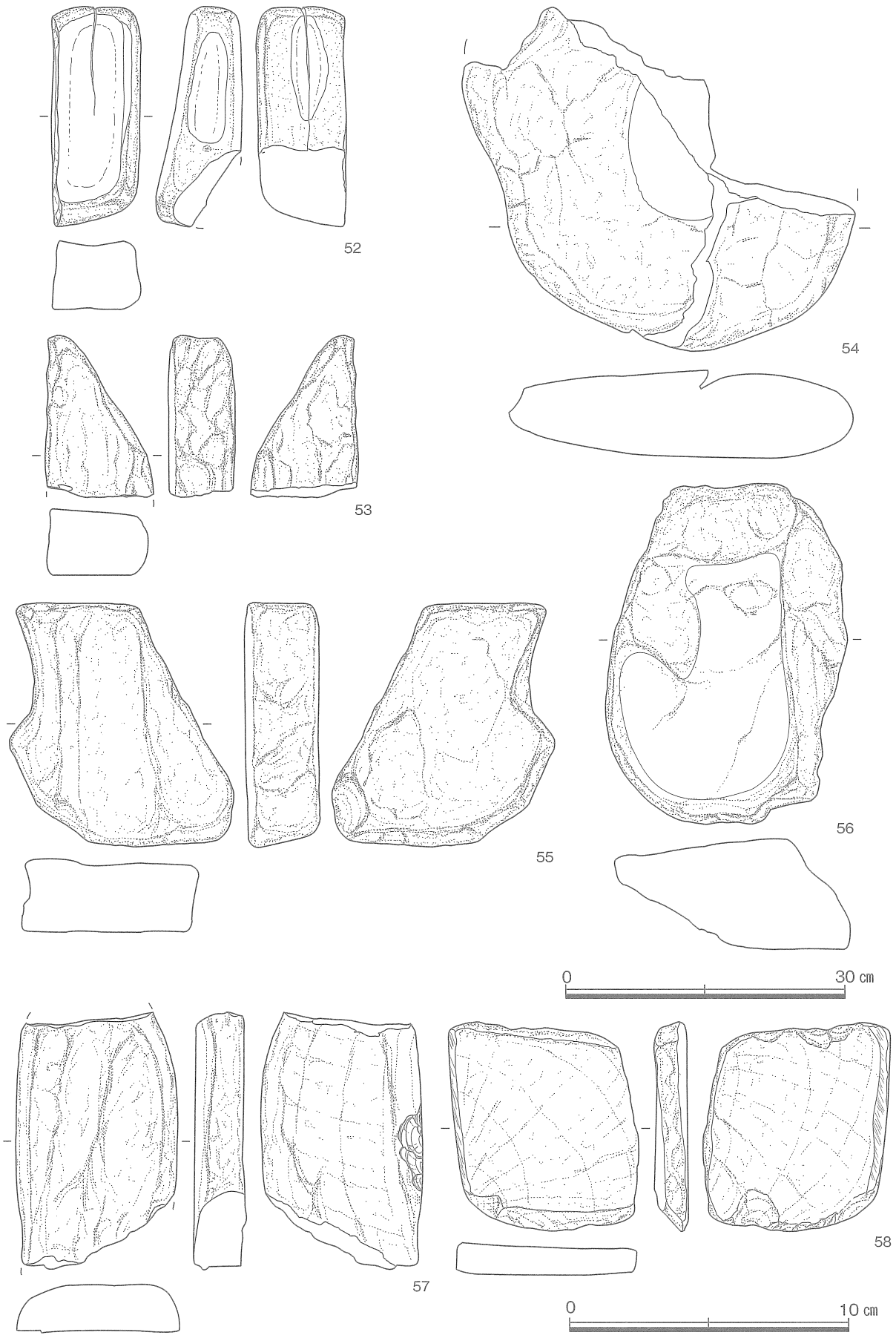
Ｄ２グリッドで検出された後期の方形を呈する土坑である。柱穴、炉跡は確認できなかったが、小型住居のため無主柱の可能性もあると考え、竪穴住居と理解した。南側が耕作等によって失われている。覆土は上位が黒色土、下位が黄褐色土となる。特に下位の黄褐色土は褐色土が白色化したように見え、ＳＢ18の覆土に近い雰囲気を持つ。規模は残存部分で縦3.3m、横2.25mを測り、主軸はN-57°-Eを指向すると思われる。住居内の北隅の床面上からは、台付甕１個体がつぶれて出土し、これから南東側に1.4m離れた位置に台石が据え置かれていたほか、覆土中に握り拳大～人頭大の礫が多量に含まれていた。

第５表　竪穴住居跡小穴計測表

遺構名	番号	グリッド	直径(cm)	深さ(cm)
ＳＢ２	Ｐ１	Ａ８	30	16
	Ｐ２	Ａ８	30	12
	Ｐ３	Ａ８	22×15	7
	Ｐ４	Ａ８	30	14
	Ｐ５	Ａ７	30×20	11
	Ｐ６	Ａ７	27×22	27
	Ｐ７	Ａ７	28×23	17
	Ｐ８	Ａ７	35×30	20
	Ｐ９	Ａ７	35×30	39
	Ｐ10	Ｚ７	30×25	16
	Ｐ11	Ｚ８	28×23	5
	Ｐ12	Ｚ８	30×25	17
	Ｐ13	Ｚ８	30	6
ＳＢ３	Ｐ２	Ａ７	38×30	20
	Ｐ３	Ａ７	103×85	11
	Ｐ４	Ａ６	63×57	16
	Ｐ５	Ａ６	30×25	24
	Ｐ６	Ａ６	25	16
	Ｐ７	Ａ６	40	15
	Ｐ８	Ａ７	35×25	11
	Ｐ９	Ａ６	45	12
	Ｐ10	Ａ６	50	12
	Ｐ11	Ａ７	42×32	9
	Ｐ12	Ａ７	105×55	16
	Ｐ13	Ａ７	35	12
	Ｐ14	Ａ７	30	13
	Ｐ15	Ａ７	120×90	12
ＳＢ４	Ｐ１	Ｃ８	25	42
	Ｐ２	Ｃ８	20	15
	Ｐ３	Ｃ８	25×20	31
	Ｐ４	Ｃ８	22×17	18
	Ｐ５	Ｃ８	25×15	25
ＳＢ５	Ｐ１	Ｃ７	35×25	13
	Ｐ２	Ｃ７	22×17	27
	Ｐ３	Ｃ７	50×30	13
	Ｐ４	Ｃ７	25×15	25
	Ｐ５	Ｃ７	35×25	25
	Ｐ６	Ｃ７	32×25	36
	Ｐ７	Ｃ７	80×48	38
ＳＢ６	Ｐ１	Ｃ６	25×20	6
	Ｐ２	Ｃ６	22	23
	Ｐ４	Ｃ６	35×30	23
ＳＢ７	Ｐ１	Ｃ６	25	24
	Ｐ２	Ｃ６	35×30	11
	Ｐ３	Ｃ６	32×27	25
	Ｐ４	Ｃ６	57×42	18
	Ｐ５	Ｃ６	20	18
ＳＢ９	Ｐ１	Ｃ５	60×35	13
	Ｐ２	Ｃ５	72×55	14
	Ｐ３	Ｃ５	57×50	19
	Ｐ４	Ｃ５	72×42	14
	Ｐ５	Ｃ５	30×12	6
	Ｐ６	Ｃ５	50	10
ＳＢ10	Ｐ１	Ｄ５	42×25	48
	Ｐ２	Ｄ５	37×30	29
	Ｐ３	Ｄ５	45×40	38
	Ｐ４	Ｄ５	40	35
ＳＢ11	Ｐ１	Ｄ４	45×37	13
	Ｐ２	Ｄ４	60×42	50
	Ｐ３	Ｄ４	30×20	32
	Ｐ４	Ｄ４	75×52	12
	Ｐ５	Ｄ４	52×45	13
	Ｐ６	Ｄ４	40×30	25
	Ｐ７	Ｄ４	35	16
	Ｐ８	Ｄ４	50×45	28
	Ｐ９	Ｄ４	62×50	9
	Ｐ10	Ｄ４	35	16
	Ｐ11	Ｃ４・Ｄ４	45×20	19
	Ｐ12	Ｃ４	50×30	24
	Ｐ13	Ｃ４	47×25	25
	Ｐ14	Ｃ４	42×25	11
	Ｐ15	Ｃ４	45×35	15
ＳＢ12	Ｐ８	Ｄ４	40×27	16
	Ｐ９	Ｄ４	20	11
ＳＢ13	Ｐ10	Ｄ４	40×30	12
	Ｐ11	Ｄ３	30	15
	Ｐ12	Ｄ３	40×32	8
ＳＢ14	Ｐ１	Ｄ３	25×20	13
	Ｐ２	Ｄ３	25×20	13
	Ｐ３	Ｄ３	15	22
	Ｐ４	Ｃ３	15	18
	Ｐ５	Ｃ３	20	12
	Ｐ６	Ｄ３	20	15
ＳＢ15	Ｐ１	Ｄ３	30	40
	Ｐ２	Ｄ３	25	41
	Ｐ３	Ｃ３	25	40
	Ｐ４	Ｃ３	20	25
	Ｐ６	Ｃ３	42×32	9
	Ｐ７	Ｃ３	42×27	11
	Ｐ８	Ｄ３	25×20	7
	Ｐ９	Ｄ３	35	11
	Ｐ10	Ｃ３	37×30	10
	Ｐ11	Ｃ３	40	6
ＳＢ17	Ｐ５	Ｄ３	37×30	22
ＳＢ18	Ｐ１	Ｅ４	45×35	24
	Ｐ２	Ｅ４	55×35	10
	Ｐ３	Ｅ４	30	27
	Ｐ４	Ｄ４	45×30	15
	Ｐ５	Ｄ４	45	17
	Ｐ６	Ｄ４	60×40	22
	Ｐ７	Ｄ４	65×60	10
ＳＢ19	Ｐ１	Ｄ７	50×25	16
	Ｐ２	Ｄ６・Ｄ７	27	9
	Ｐ３	Ｄ６	35	41
	Ｐ４	Ｄ６	25	9



第32図　遺構出土の石器・石製品１



第33図　遺構出土の石器・石製品２

遺物は、下位の包含層である黄褐色土から土器・石製品が出土している。

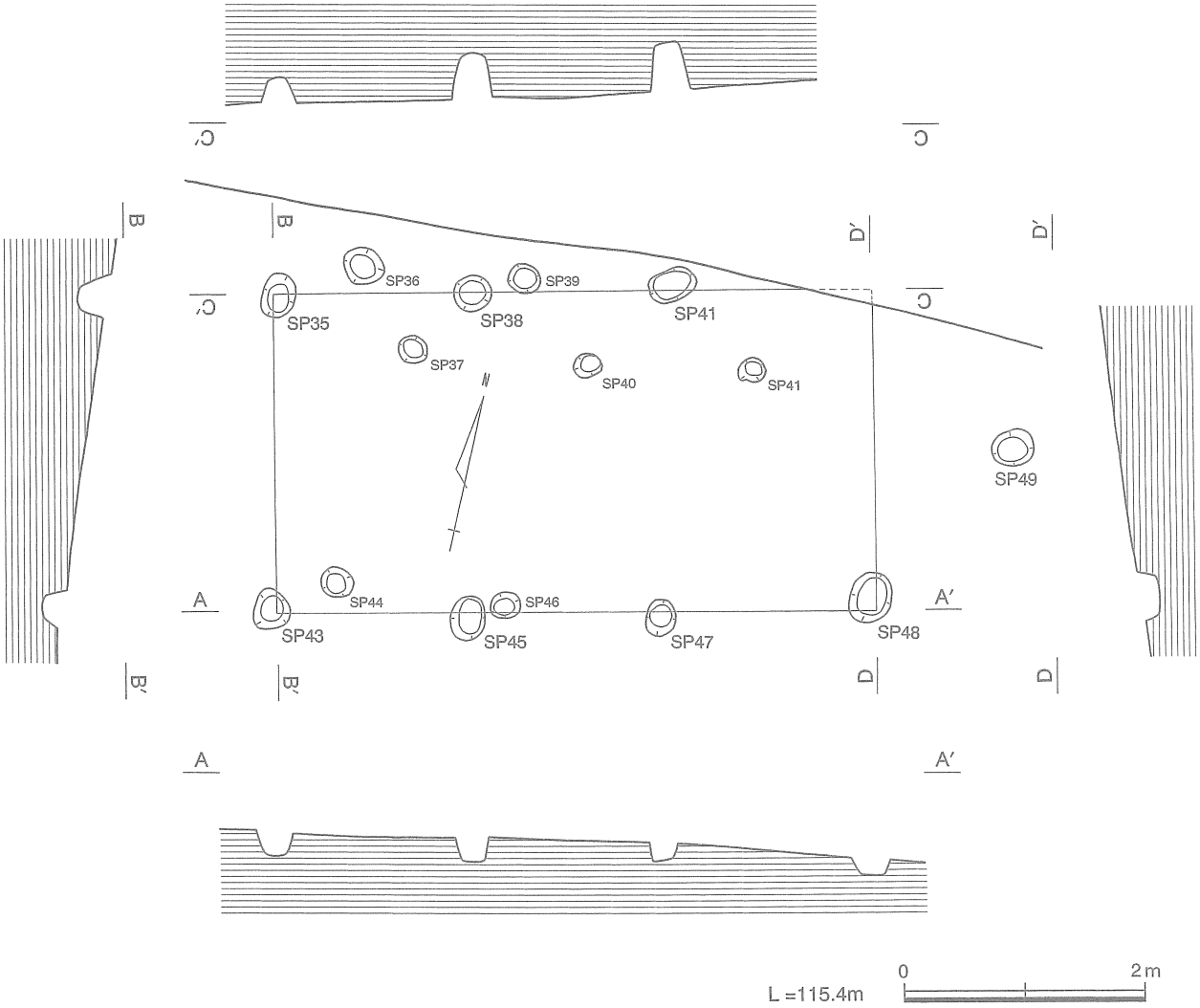
44は後期の甕である。口径15.5cm、胴部最大径17.1cm、残存高15.6cmを測る。胎土は緻密で径１mm以下の砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面はハケ調整が施され、内面も横位のハケ調整が施される。口唇部には８～10mm間隔で刻みが付けられる。また、外面はすすけて、内面の下位には炭化物が付着している。

45は後期の台付甕脚部である。底径7.6cm、脚の高さは５cmを測る。胎土は緻密で径１mm以下の砂粒を多く含み、橙色を呈してよく焼きあがっている。調整は、内外面ともに摩滅のため明らかでないが、脚部と体部の接合部にはわずかな指頭痕が複数残されている。

48は床面から出土した砂岩製の砥石である。床面に据え置いて使用されたものであり、主面部に砥面が認められる。

ＳＢ19（第31図）

Ｃ６・７グリッドで検出された楕円形を呈すると思われる竪穴住居である。覆土は黒色土と褐色土が混ざった土である。調査区の東側の隅で半分以上は調査区外であり、南側も削られてしまっているため、検出できたのは、住居跡の北西の一部であると思われる。住居の掘方内からは４基の小穴が検出された。相互の位置関係が判然としないが、Ｐ３が柱穴である可能性がある。



第34図　掘立柱建物ＳＨ１

② 溝

溝はいずれも竪穴住居に伴うものである。掘削されている位置からすれば、ＳＤ４や７のように住居から低い方向へ伸びるものは、排水などの用途が想定される。これとは別にほぼ同レベル、あるいは高い方からつながるＳＤ１・５・６などは、排水には利用できないので、それぞれの住居をつなぐ何らかの用件による区画溝と考えておきたい。

ＳＤ１

Ａ・Ｂ７グリッドで検出された、竪穴住居跡ＳＢ３に伴う溝である。住居のプランの北縁から東側へ延びる。規模は長さ3.15m、幅50cm前後、深さ２～３cmを測り、暗褐色土を覆土とする。遺物は出土していない。

ＳＤ４

Ｄ４グリッドで検出された、竪穴住居跡ＳＢ11に伴う溝である。住居のプランの南東縁より南東側へ延びる。規模は長さ2.85m、幅40cm前後、深さ10cm前後を測る。黒色土を覆土とする。遺物は出土していない。

ＳＤ５（第27図）

Ｅ４・５グリッドで検出された、竪穴住居跡ＳＢ12に伴う溝である。住居のプランの北東縁より北東側へ延びる。規模は長さ4.6m、幅60cm前後、深さ12cm前後を測る。褐色土を覆土とする。

36は縄文土器の深鉢底部である。底径は6.7cm、残存高1.2cmを測る。胎土は石英、雲母、長石を含み、明赤褐色を呈してよく焼きあがっている。このほか弥生中期後半のものと思われる土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

ＳＤ６

Ｅ４グリッドで検出された、竪穴住居跡ＳＢ18に伴う溝である。住居のプランの北東縁より北東側へ延びる。規模は長さ4.5m、幅25～40cm、深さ５cm前後を測る。黄褐色土を覆土とする。遺物は出土していない。

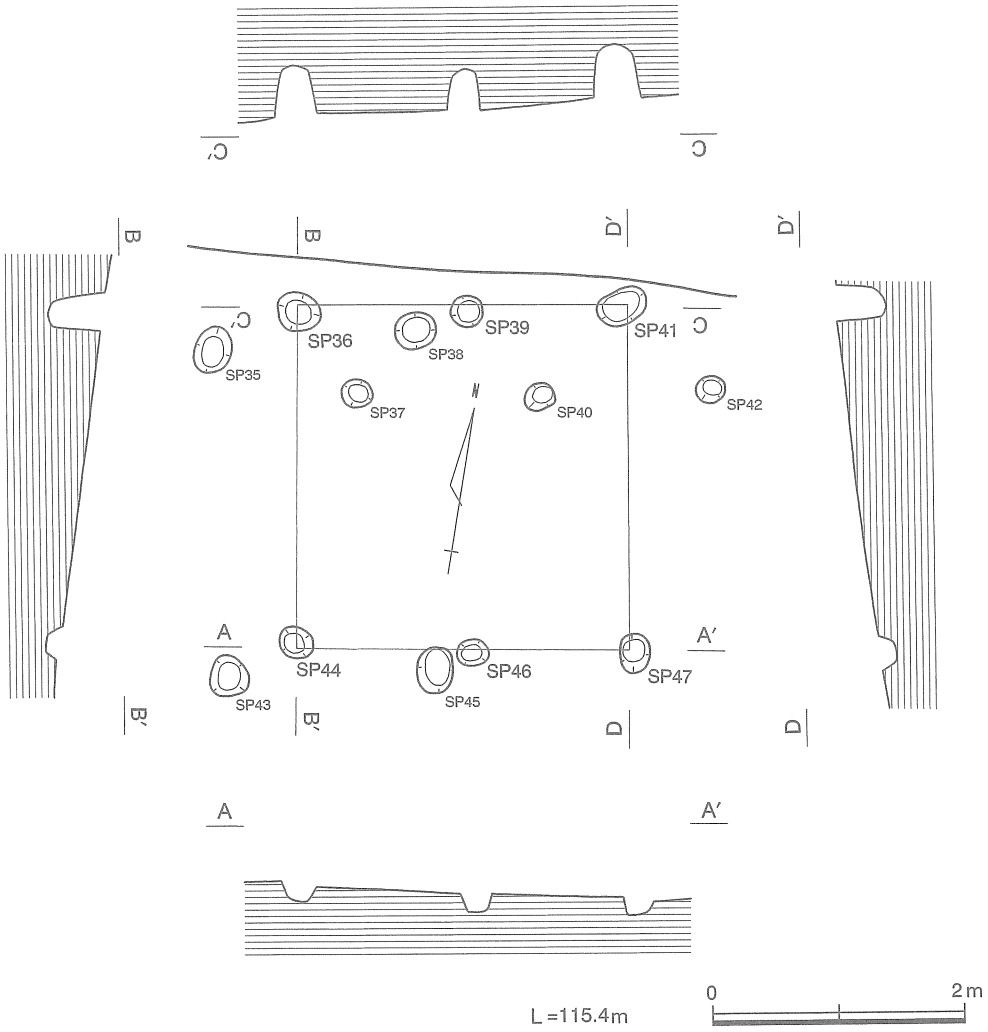
ＳＤ７

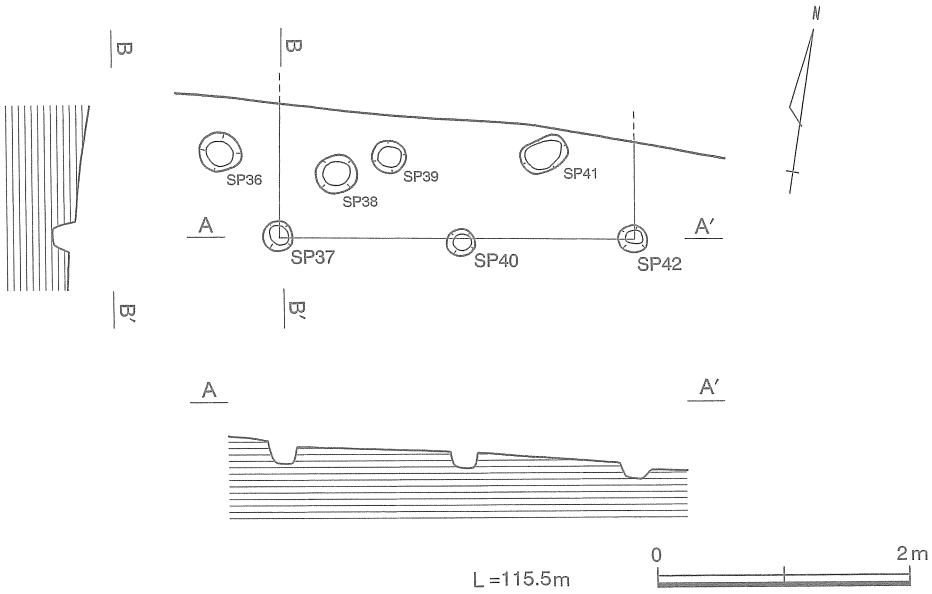
Ｄ３グリッドで検出された、竪穴住居跡ＳＢ15に伴う溝である。住居の南縁より南側へ延び、規模は長さ2.6m、幅28cm前後、深さ５～８cm前後を測る。黒色土と褐色土の混土を覆土とし、遺物は出土していない。

③ 土坑

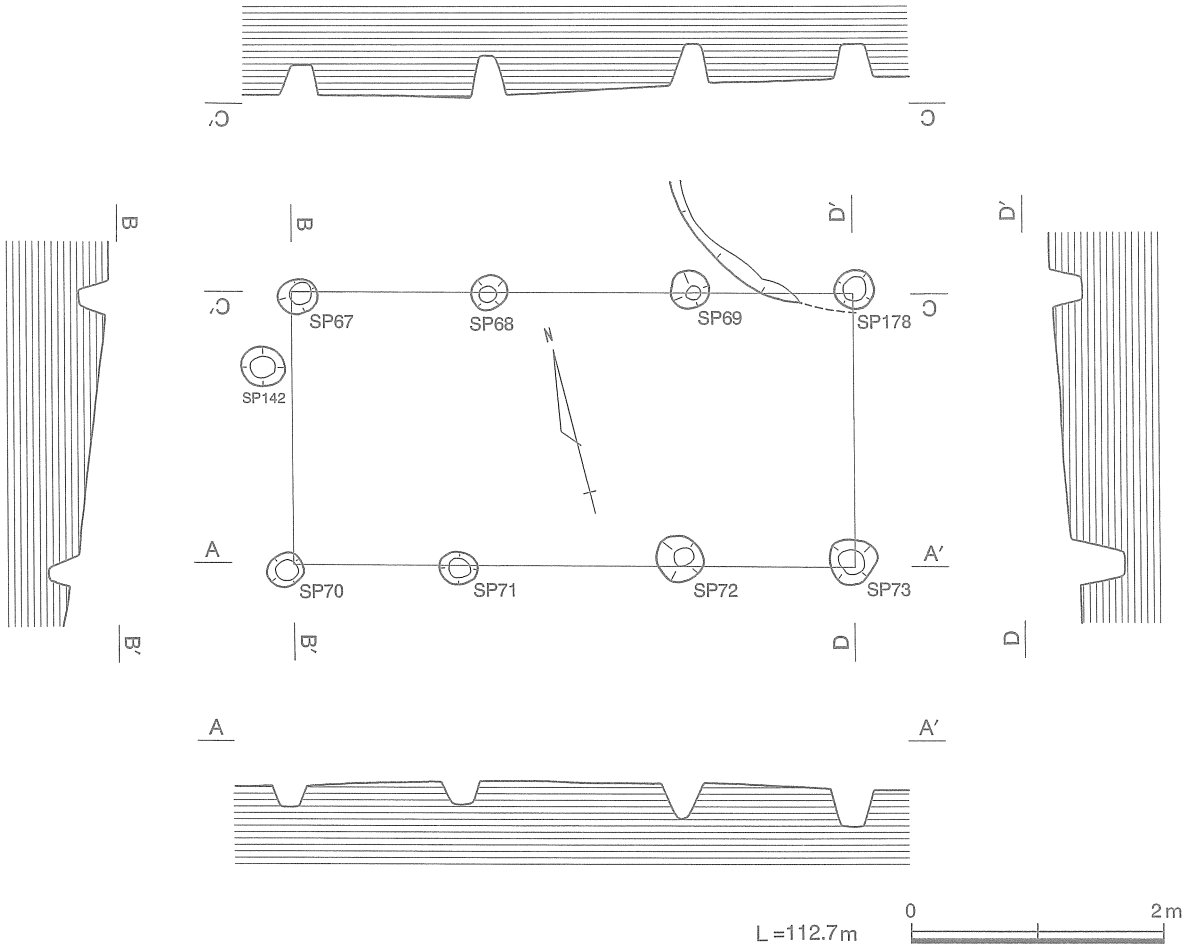
ＳＦ10

Ｄ６グリッドで検出された、平面形は楕円形状の土坑である。規模は長さ130cm、幅95cm、深さ20cmを測り、皿状の断面形を呈する。覆土は主に上層が黄褐色土、下層が少量の炭化物を含む暗褐色土である。西側半分を中心に、四角に割り取られた大小さまざまな礫が埋め込まれていた。暗褐色土からは後期の土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

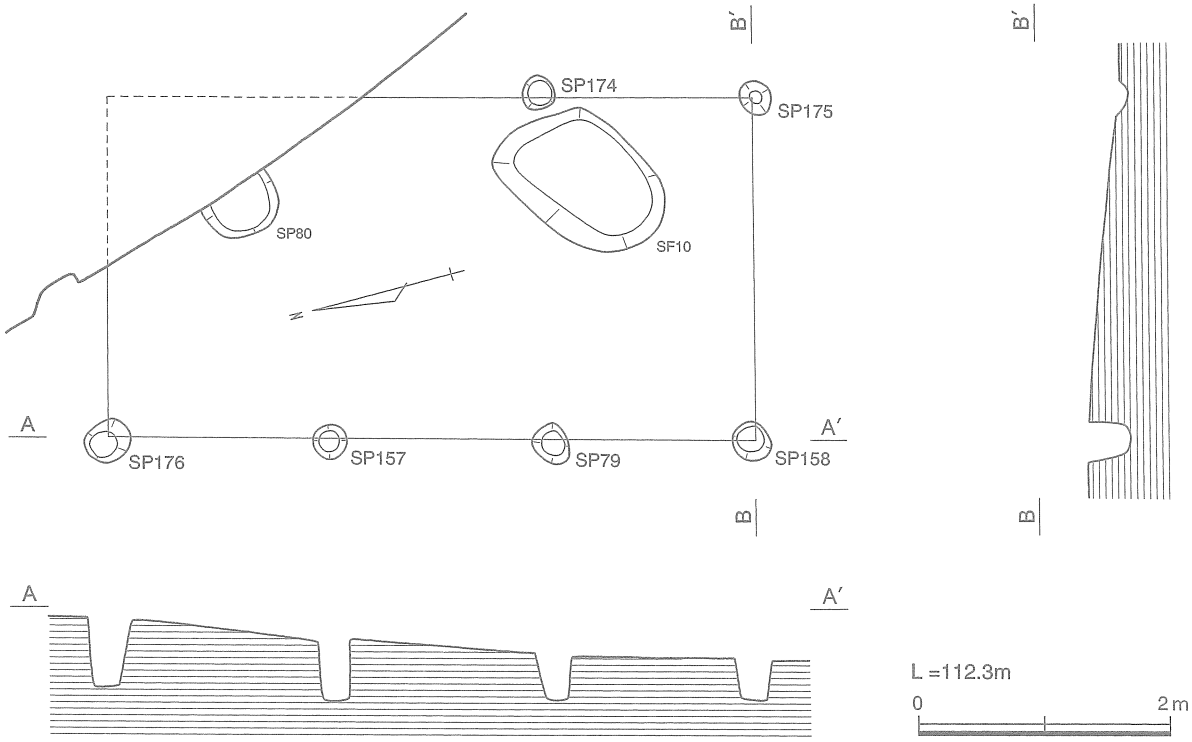




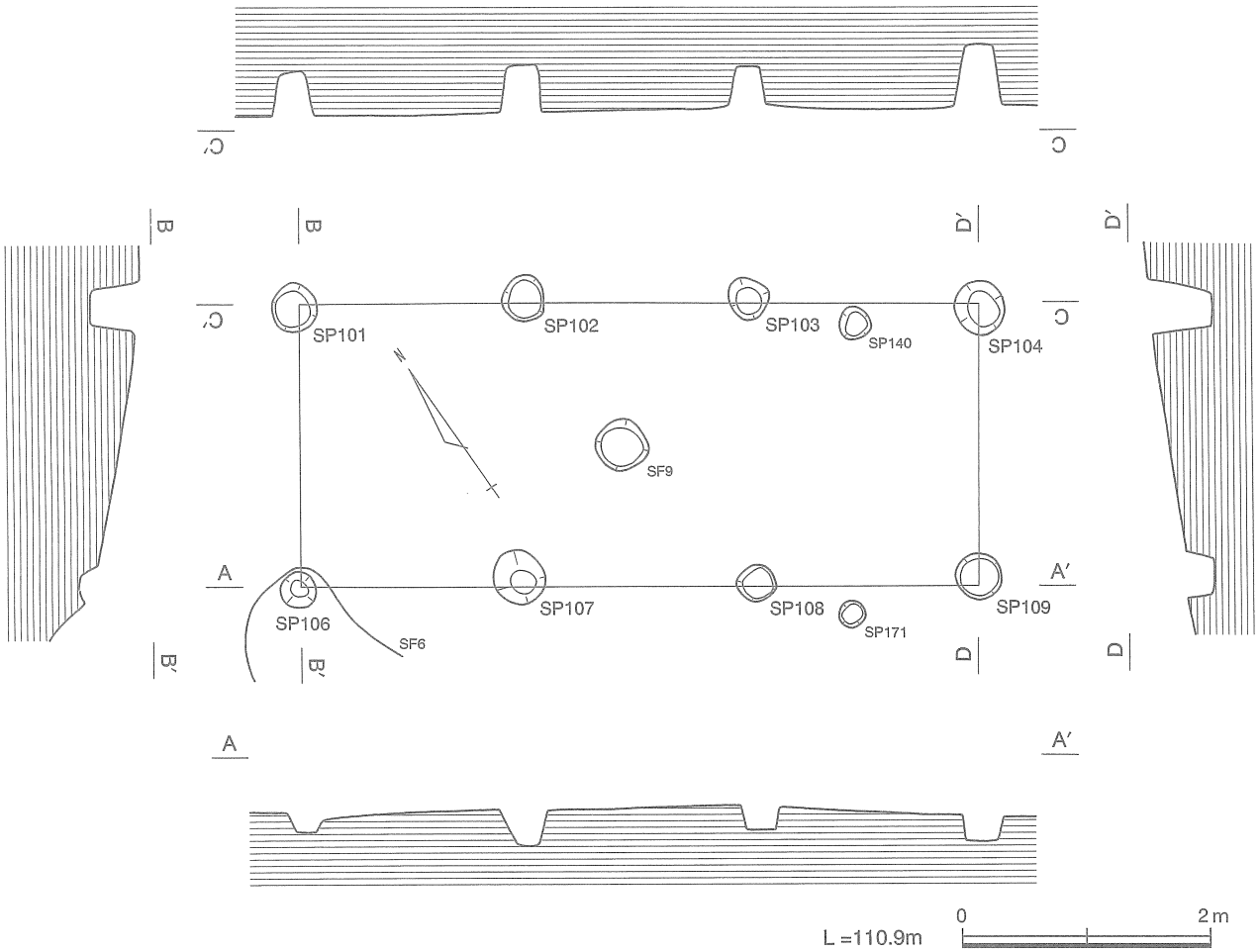
第35図　掘立柱建物ＳＨ２・３



第36図　掘立柱建物ＳＨ４



第37図　掘立柱建物ＳＨ５



第38図　掘立柱建物ＳＨ６

(3)　歴史時代の遺構と遺物

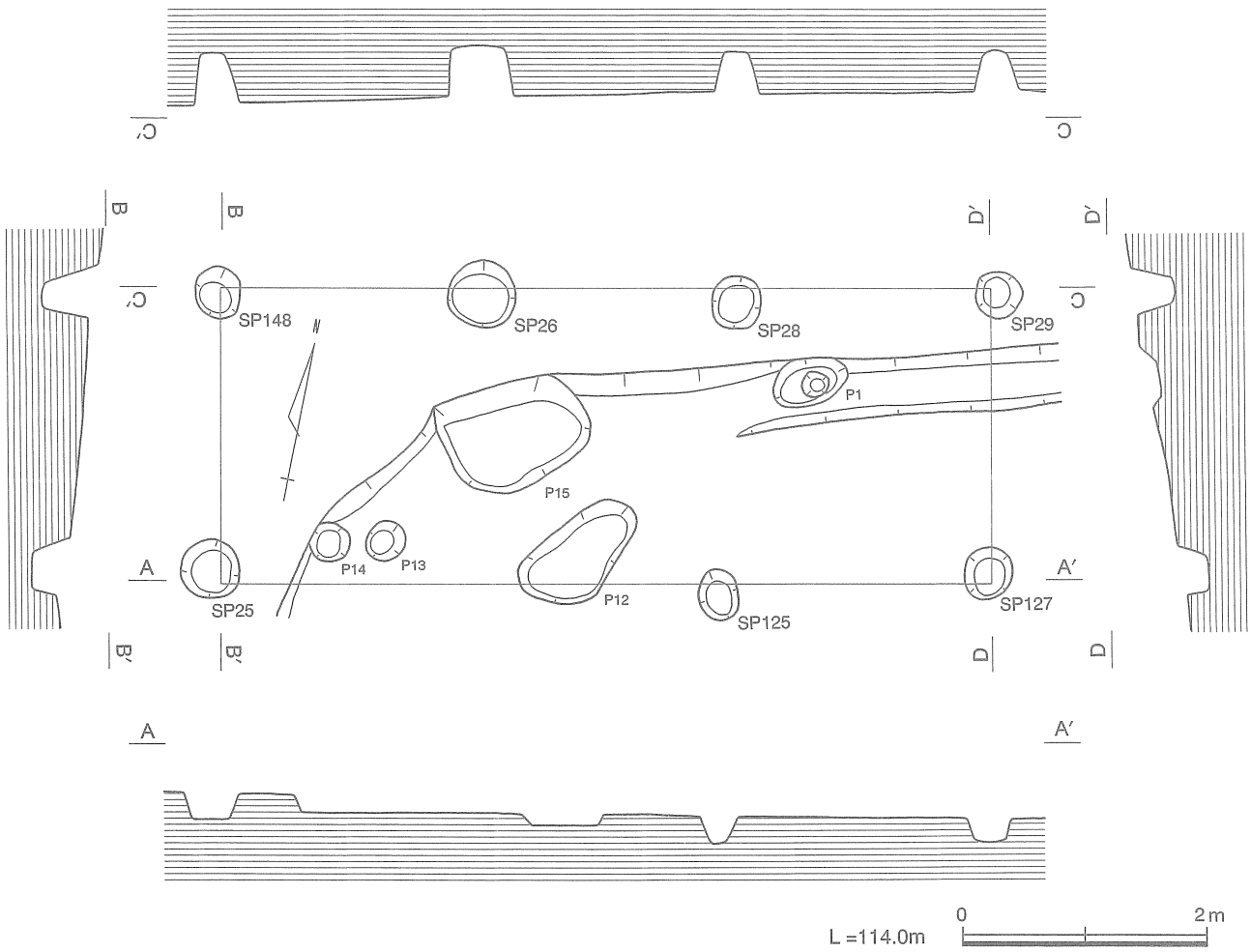
歴史時代の遺構は、掘立柱建物、竪穴住居跡、小土坑、溝が検出された。このうち、掘立柱建物は柱穴埋土から建設された時期を把握できる遺物が出土していないため、明確な時期は明らかでない。ただし、調査区内の包含層からは古代の遺物が出土し、中世前期の山茶椀も第44図のように分布することから、この時期の遺構と考えた。柱穴覆土は、大きく分けて暗褐色土を主体とするものと、黒色土のものに大別される。暗褐色土の組成が、より下位に堆積する層位によるものであることを考慮すれば、前者の埋土のものが古代、後者が中世前期の建物と考えられる。いずれも概ね等高線に平行・直交するように築かれており、地形の制約を受けた配置がなされていると見受けられる。

①　掘立柱建物跡

ＳＨ１～３（第34・35図）

Ｂ８グリッドで検出された、掘立柱建物である。ＳＨ１～３は互いに重複する位置関係にある。ＳＨ２・３の柱穴埋土が暗褐色土、ＳＨ１の柱穴埋土が黒色土であることから、前者が後者に先行するものと考えられる。

ＳＨ１は、南に面する３間×１間の側柱建物で、棟方向はN-78°-Eを指向する。規模は桁行4.95m、梁行2.6mで、桁行の柱穴間隔の平均は1.65mを測る。北東隅にあたる柱穴は、調査区外のため検出できなかった。柱穴の形状はＳＰ38が円形、他は楕円形である。



第39図　掘立柱建物ＳＨ７

ＳＨ２は、桁行２間、梁行１間の側柱建物で、棟方向はN-82°-Eを指向する。規模は桁行2.6m、梁行2.7mで、桁行の柱間間隔の平均は1.3mを測る。柱穴の形状はＳＰ36・46が円形、他は楕円形である。なお、ＳＰ41・47はＳＨ１の桁行の柱穴と重複する位置にあり、埋土も黒色土である。現地では双方の建物の柱穴が重複していると考えたが、ＳＨ２が南北に長い１間四方の建物であった可能性もある。

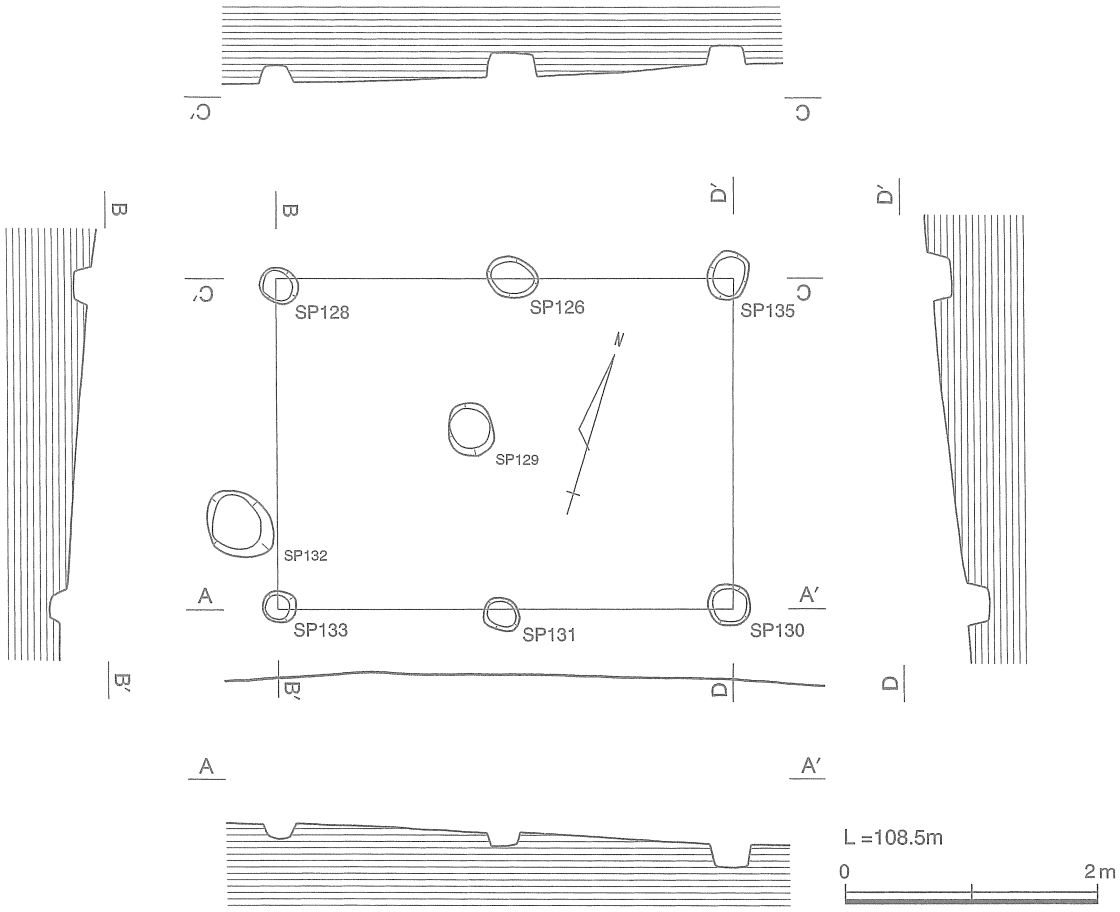
ＳＨ３は、南に面する桁行が２間の建物であり、棟方向はN-80°-Eを指向すると思われる。規模は桁行2.8mで、柱間間隔の平均は1.4mを測る。柱穴の形状はいずれも円形である。北面の柱穴が調査区外にあたり検出できなかったため梁行の規模は把握できないが、柱穴の大きさや深さなどから、おそらくＳＨ２と近似した規模の建物と考えられる。

ＳＨ４（第36図）

Ｂ・Ｃ６グリッドで検出された南に面する３間×１間の側柱建物で、棟方向はN-77°-Wを指向する。規模は桁行4.5m、梁行2.15mで、桁行の柱間間隔の平均は1.47mを測る。柱穴の覆土は黒色土で、平面形状はすべてほぼ円形である。

ＳＨ５（第37図）

Ｄ６グリッドで検出された東に面する３間×１間の側柱建物で、棟方向はN-14°-Eを指向する。この建物だけが唯一南面しない。東面の北よりは調査区外のため、２本分の柱穴が確認されていない。規模は桁行5.1m、梁行2.7mで、柱間間隔の平均は1.7mを測る。柱穴の覆土は黒色土で、平面形状は円形である。



第40図　掘立柱建物ＳＨ８

ＳＨ６（第38図）

Ｂ・Ｃ４グリッドで検出された南に面する３間×１間の側柱建物で、棟方向はN-55°-Wを指向する。規模は桁行5.4m、梁行2.25mで、桁行の柱間間隔の平均は1.8mを測る。柱穴の覆土は黒色土で、平面形はＳＰ104・108・109が円形、他は楕円形である。

ＳＨ７（第39図）

Ａ・Ｂ７グリッドで検出された南に面する３間×１間の側柱建物であり、棟方向はN-77°-Ｅを指向する。規模は桁行6.3m、梁行2.4mで、桁行の柱間間隔の平均は2.1mを測る。桁行南面の西から２つめの柱穴は確認できなかった。柱穴の覆土は黒色土であり、平面形はＳＰ125が楕円形、その他は円形である。

ＳＨ８（第40図）

Ｅ・Ｆ２グリッドで検出された南に面する２間×１間の側柱建物で、棟方向はN-72°-Ｅを指向する。規模は桁行3.6m、梁行2.6mで、桁行の柱間間隔の平均は1.8mを測る。柱穴の覆土は暗褐色土で、平面形はＳＰ126・135が楕円形、他は円形である。

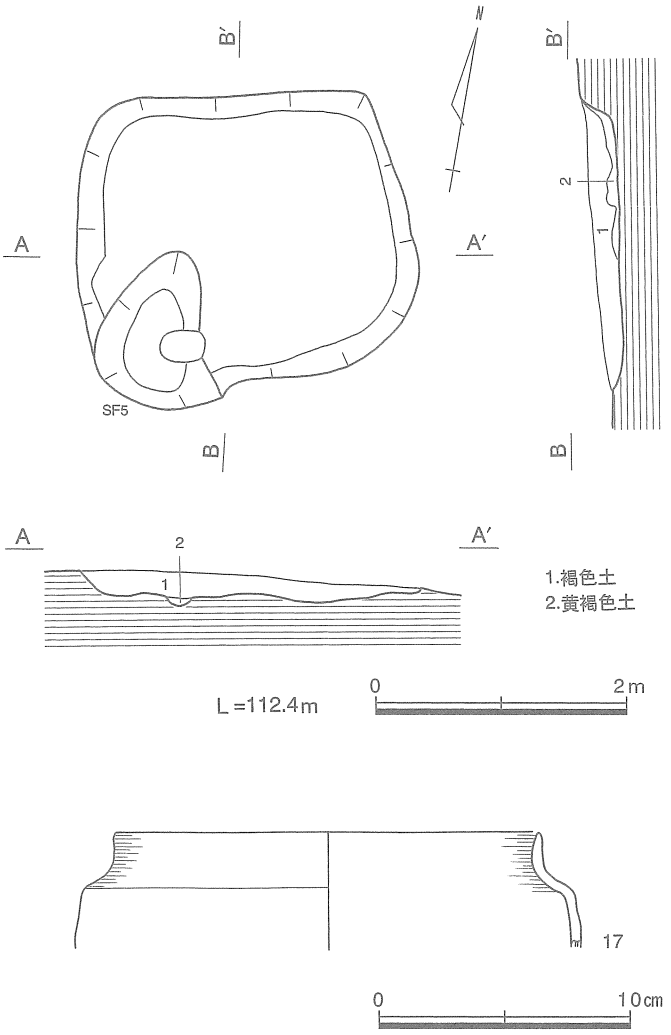
②　竪穴住居跡

ＳＢ８（第33・41図）

Ｃ６グリッドで検出された方形の土坑である。柱穴、炉跡は確認できなかったが、小型住居のため無

第６表　掘立柱建物跡柱穴計測表

遺　構　名	ＳＰ番号	グリッド	直径(cm)	深さ(cm)	覆　　土		備　考
ＳＨ１	ＳＰ35	Ｂ８	36×22	24	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ38	Ｂ８	23	38	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ43	Ｂ８	33×26	16	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ45	Ｂ８	35×28	21	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ48	Ｂ８	40×33	20	2.5Y2/1	黒色土	
ＳＨ１・ＳＨ２	ＳＰ41	Ｂ８	37×25	32	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ47	Ｂ８	31×24	10	2.5Y2/1	黒色土	
ＳＨ２	ＳＰ36	Ｂ８	24	37	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ39	Ｂ８	24×20	30	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ44	Ｂ８	24×20	10	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ46	Ｂ８	23	15	10YR3/3	暗褐色土	
ＳＨ３	ＳＰ37	Ｂ８	21	19	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ40	Ｂ８	18	13	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ42	Ｂ８	20	10	10YR3/3	暗褐色土	
ＳＨ４	ＳＰ67	Ｂ６	27	25	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ68	Ｃ６	26	29	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ69	Ｃ６	26	28	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ70	Ｂ６	25	22	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ71	Ｂ６	25	16	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ72	Ｃ６	36	30	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ73	Ｃ６	30	30	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ178	Ｃ６	29	20	2.5Y2/1	黒色土	ＳＢ６内
ＳＨ５	ＳＰ77	Ｃ６	34	14	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ157	Ｄ６	28	48	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ158	Ｄ６	30	31	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ174	Ｄ６	27	30	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ175	Ｄ６	26	13	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ176	Ｄ６	34	53	2.5Y2/1	黒色土	ＳＢ19内
ＳＨ６	ＳＰ101	Ｃ４	38×34	38	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ102	Ｃ４	39×33	35	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ103	Ｃ４	30×26	33	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ104	Ｃ４	32	51	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ106	Ｂ４	37×32	16	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ107	Ｃ４	38×33	28	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ108	Ｃ４	30	19	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ109	Ｃ４	34	24	2.5Y2/1	黒色土	
ＳＨ７	ＳＰ25	Ａ７	46	21	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ26	Ａ７	46	40	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ28	Ａ７	38	36	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ29	Ｂ７	32	32	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ125	Ａ７	42×34	21	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ127	Ｂ７	40	19	2.5Y2/1	黒色土	
	ＳＰ148	Ａ７	40	37	2.5Y2/1	黒色土	
ＳＨ８	ＳＰ126	Ｅ２	37	18	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ128	Ｅ２	29	13	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ130	Ｅ２	34	17	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ131	Ｅ２	30×25	12	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ133	Ｅ２	28	8	10YR3/3	暗褐色土	
	ＳＰ135	Ｅ２	30	17	10YR3/3	暗褐色土	



第41図　竪穴住居跡ＳＢ８及び出土遺物

主柱の可能性もあると考え、竪穴住居と理解した。覆土は褐色土である。規模は、縦2.25m、横2.66m、床面積は5.985㎡を測り、南北を主軸と考えると、N-22°-Wを指向する。南西隅の外側に張り出した位置に、長さ1.15m、幅1.35mを測る楕円形の土坑ＳＦ５が掘られている。東側の肩には上面が平らな石が置かれていた。

遺物は、覆土から土器が出土しているがきわめて少ない。

17は土師器の甕口縁部である。口径16.8㎝、残存高4.6㎝を測り、胎土は緻密で橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈してよく焼きあがっている。調整は内外面ともにナデが施される。外面に炭化物が付着している。

56は大型で扁平な砂岩の自然礫を素材とした台石である。主面部に摩耗痕が認められる。南西隅で検出された土坑の上部から出土しているため、別時期の可能性がある。

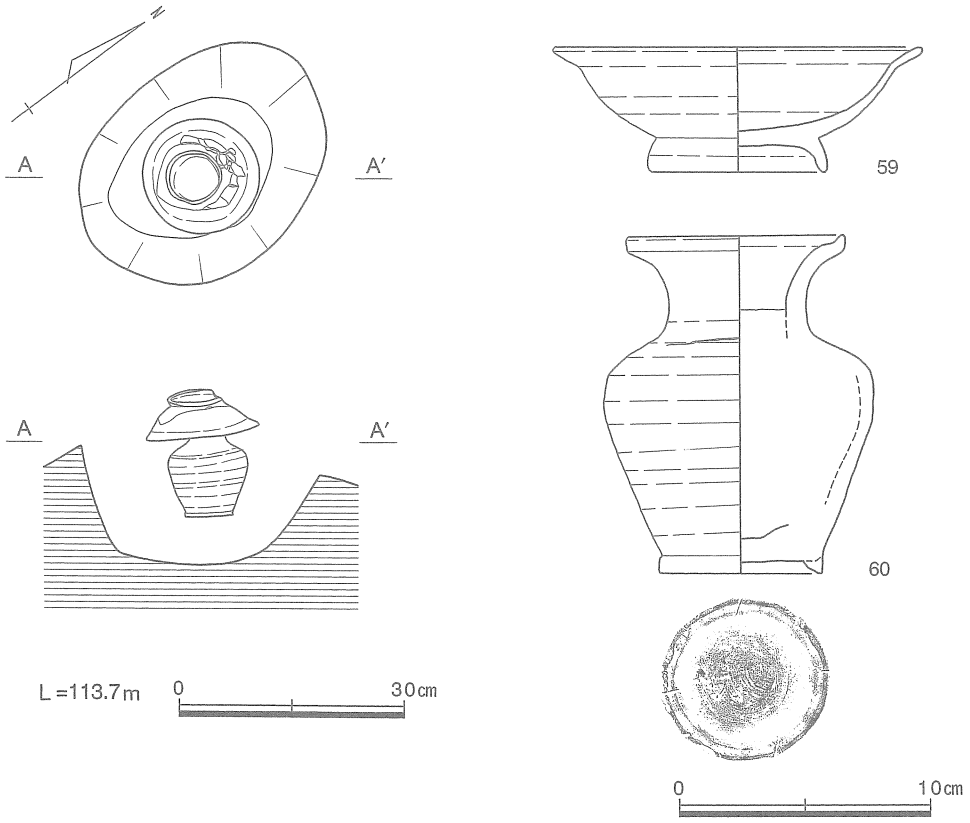
③　土坑

ＳＰ181（第42図）

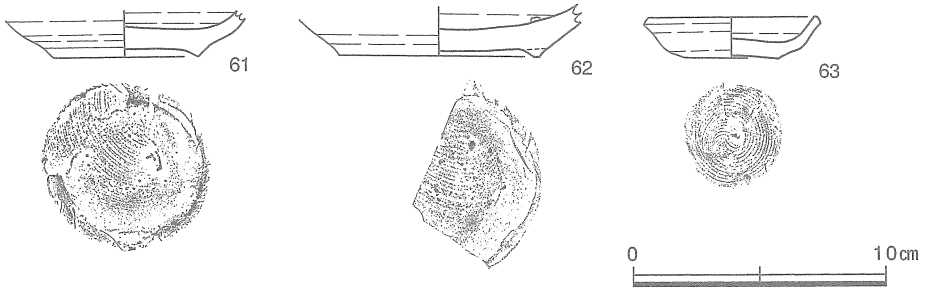
Ａ７グリッドで検出された、長径37㎝、短径27㎝と楕円形の間口を持つ深さ15㎝ほどの小土坑である。覆土は黒褐色土であったことから、元来は現地表に近い位置から掘り込まれたものと思われる。内部には灰釉陶器の椀と壺が据え付けられる形で出土した。壺の底部は、小土坑の底面からおよそ６㎝浮いた位置にある。おそらく、小土坑を掘り込んだ際の残土に、壺の底部を強く差し込んで据え付けたのであろう。壺は内面に骨粉と思われる白い粉が若干量付着していたため、蔵骨器に使用されたものと考えられる。椀は逆位で壺の蓋として、しっかりとかぶせられていた。また、壺の内部には蓋である灰釉椀を染み透った少量の水が溜まっていた。

59は蓋として利用されていた灰釉陶器の椀である。丁寧に作られているが、やや軟質の焼き上がりであるため、出土した時点で全体にひび割れを生じていた。口径14.6㎝、底径6.8㎝、器高5.0㎝を測り、底部から口縁にかけてやや内湾気味に立ち上がり、口縁部を外側に挽いて、端部を丸く収める。高台は比較的高く、残面が舌状になるものである。胎土は３㎜大の礫を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。体部内外面はナデ調整で仕上げられている。高台内側は貼り付け時のナデが認められるが、摩滅しているため切り離し痕は不明である。

60は蔵骨器に利用されていた灰釉陶器の壺である。口径8.7㎝、底径6.4㎝、器高13.4㎝、胴部最大径10.7㎝の完形である。胎土は密であるが、１㎝大の小礫を頻繁に含んでいる。紐輪積みで整形され、全体をナデで調整している。硬くきれいに焼きあがっており、体部右側の口縁から肩部にかけて自然釉がかかっている。口縁はラッパ状に開き、頸部内面の中程に明瞭な接合痕が、頸部末端の外面に接合部の



第42図　土坑ＳＰ181及び出土遺物



第43図　溝ＳＤ８出土遺物

はがれに起因するひび割れがみられる。高台はやや丸みを帯びた三角形の付け高台で、貼り付け時にナデが施される。高台内側底部には回転糸切り痕が認められる。

これらの灰釉陶器はいずれも、旗指古窯跡群で焼成されたものと思われる。高台を高くしつらえる浅めの椀は、旗指22号窯以降に現れる。口唇部を上方に垂直に挽き上げる壷は、旗指20号窯陶器溜出土遺物の中にみられる。したがって、ＳＰ181に埋納されていた灰釉陶器は、いずれも灰釉陶器最終末の、11世紀末ごろのものと考えられる。

④　溝

ＳＤ２・３・８・９（第９・43図）

溝ＳＤ８は尾根の頂部付近をＣ～Ｅ列にかけて南北に掘られた基幹となる溝であり、Ｂ・Ｃ５グリッドでこれに直交するＳＤ２・３とともに何らかの区画を形成するものと思われる。ＳＤ８からはⅢ期－１～２の山茶椀が、ＳＤ２からもほぼ同時期の山茶椀片が出土しているため、12世紀の遺構と考えられる。

ＳＤ８は、Ｃ７グリッドからＥ２グリッドにかけてN-24°-W方向にほぼ直線状に掘られている。規模は幅50～90㎝、深さ20～30㎝を測り、Ｃ５・６グリッドの境以南では場所によって70㎝前後の深さとなる。Ｃ５・６グリッドの境に当たるＳＤ３と交差する付近から、覆土の色調が異なっている。このことは、元来Ｔ字形を呈する区画溝が、中世以降のいずれかの時期にＳＤ３を含むＬ字形の区画溝として改修されたことを示唆している。

断面形状は、上位に当たるＣ７グリッドからＣ６グリッド南端では、底が平らなU字型の断面形を呈し、黒褐色土を覆土とする。Ｃ５グリッド北端にあたるＳＤ３との合流点から南にかけて一段深くなり、底の丸いＶ字型の断面形となる。覆土は下位に礫が混ざった暗褐色土、上位に耕作土に近似した黒ボクに有機質が混入した黒褐色土である。

遺物は上位の部分の覆土上半から東遠系の山茶椀類が出土している。

61、62はⅢ期－１～２にあたる山茶椀の底部片である。底部外面は糸切り未調整で、断面が三角形状～台形状の低い高台を貼り付ける。

63は小皿である。Ⅲ期－１にあたるものである。

ＳＤ２とＳＤ３は、ともにN-85°-Ｅ方向を指向するため同一の意図で掘られたものと考えたが、ＳＤ２部分がＳＤ３部分に比べ深いため、便宜上別遺構とした。

ＳＤ２は、長さ５m、幅70㎝前後、深さ30～50㎝を測り、東に行くに従って深くなる傾向がある。断面形状は底が平らなU字型で、覆土は下位に礫が混ざる黒褐色土、上位に耕作土に近似した黒ボクに有機質が混入した黒褐色土が乗る。覆土から、山茶椀の細片が出土している。

ＳＤ３は、長さ3.9m、幅80㎝前後、深さ20㎝を測る、底が平らな浅い溝状遺構で、覆土は黒褐色土である。東端でＳＤ８に連結する。遺物は出土していない。

ＳＤ９は、Ｃ４・５グリッドで検出され、N-５°-Ｅを指向する。規模は長さ5.5m、幅50㎝前後、深さ10㎝前後を測る。断面形状はやや緩いＶ字状で、覆土は下位に礫が混ざる黒褐色土、上位に耕作土に近似した黒ボクに有機質が混入した黒褐色土とＳＤ２に類似する。遺物は出土していない。なお、北西側に派生する矩形の部分は別遺構の可能性もあるが、切り合い等による判別はできなかった。

(4)　遺構外出土の遺物

遺構外からは、縄文時代から近世にいたる遺物が13箱分出土している。縄文時代の遺物には土器、石器、石製品があり、縄文時代の遺構が検出されたＤ・Ｃ３～４グリッド付近のほか、埋没谷中の暗褐色土から出土している。特に打製石斧の出土量が多く、目立つ存在である。弥生時代の遺物は中期後半～後期の土器、石器である。土器はいずれも細片のため図化できたものはないが、石器の中には磨製石鏃がみられる。古代の遺物は、須恵器と土師器である。須恵器の中には遺跡周辺であまり出土例の見られない双耳坏や甕があり、一定の機能を有する集落の存在を感じさせる。中世の遺物は、13世紀の山茶椀類が主体で、常滑製品も若干見られる。また、１点のみであるが非ロクロ系のかわらけが存在することも興味深い。これら古代～中世の遺物は、尾根部を中心とした耕作土層直下の黒色土から出土している。近世の遺物は、志戸呂焼とかわらけである。なお、確認調査の際に出土した遺物については、帰属する遺構が確定できないので、遺構外出土遺物と同等に取り扱う。

①　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は土器と石器、石製品である。土器は中期にあたるものが多く、後期、晩期が少量出土している。石器は第44図に示したように、打製石斧が埋没谷を中心に多量に出土していることが特徴的である。

土器（第45図64～84）

64は、Ｂ５グリッドの黒色土下層から出土した中期にあたると思われる深鉢体部片である。風化して表面が剥落しているため、調整方法や文様は明らかでない。胎土は雲母、細砂、長石を含み、赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

65は、Ａ６グリッドの黒色土から出土した中期の五領ヶ台式併行期の北裏Ｃ式にあたる深鉢口縁部である。口縁部の下位を肥厚させ、連続の爪形文を施している。胎土は長石、細砂を含み、にぶい黄橙色を呈してよく焼きあがっている。

66は、Ｂ２グリッドの黒色土上層から出土した中期の五領ヶ台式併行期にあたる深鉢口縁部である。波状口縁を構成する。胎土は細砂、長石を含み、赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

67は、Ｂ３グリッドの暗褐色土から出土した中期の五領ヶ台式併行期にあたる深鉢口縁部である。緩やかな波状口縁を構成するもので、内側に肥厚させた口唇部直下の口縁部外面にＲＬ縄文を施し、ヘラ状工具や竹管状工具で沈線を施している。また、内面にもＲＬ縄文をつける。胎土は石英、長石を含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。

68は、Ｂ４グリッドの黒色土下層から出土した中期の深鉢口縁部である。風化して、表面の剥落が著しいが、内側に肥厚させた口唇部外側には竹管状工具で口縁に平行する沈線を施し、以下に何らかの文様で充填された沈線による区画が施される。胎土は雲母、石英、長石を含み、暗褐色を呈してよく焼きあがっている。

69は、Ｂ４グリッドの黒色土下層から出土した中期の深鉢口縁部である。口唇部の直下には、竹管状工具による２条の平行する沈線を施す。風化のため、体部の調整、文様は不明瞭である。胎土は細砂、長石を含み、褐色～暗褐色を呈してよく焼きあがっている。

70は、Ａ５グリッドの黒色土から出土した中期以降の深鉢口縁部である。口縁部にそって横位の整形痕が観察される。胎土は長石を含み、にぶい赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

71は、Ｂ５グリッドの暗褐色土から出土した中期末と思われる深鉢口縁部である。風化のため、体部の調整、文様は不明瞭である。胎土は長石を含み、褐色を呈してよく焼きあがっている。

72は、Ｂ５グリッドの暗褐色土から出土した中期初頭の深鉢口縁部である。先端が三角となるヘラ状工具を用いて横位に連続する刺突を施す。胎土は石英、長石、雲母を含み、にぶい赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

73は、確認調査で出土した中期初頭の五領ヶ台式併行期の深鉢口縁部である。口唇部外面に隆起帯を施し、その下位に、竹管を用いて縦位の刻みを交互に入れて矢羽根状の沈線を構成する。胎土は２㎜以下の長石を含み、明赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

74は、Ｂ３グリッドの暗褐色土から出土した中期と思われる深鉢体部片である。半截竹管状工具による細く平行する沈線で横位の区画を描き、内部に同様な工具の先端曲面を斜めに押し付けてできる三角形状の文様を連続して配置する。胎土は石英、雲母、長石を含み、にぶい褐色を呈しよく焼きあがっている。

75は、Ｂ４グリッドの暗褐色土から出土した中期の五領ヶ台式併行期の深鉢体部片である。半截竹管状工具による区画の中に、ＲＬ縄文を施し、さらにヘラ状工具で刻みをつける。胎土は石英、長石、雲母を含み、灰褐色を呈してよく焼きあがっている。

76は、Ｂ５グリッドの黒色土から出土した後期～晩期の深鉢体部片である。外面には斜位に擦痕を施している。胎土は細砂を含み、にぶい黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

77は、Ｂ４グリッドの黒色土下層から出土した中期の深鉢体部である。風化により調整、文様は不明瞭であるが、横位に粘土紐を貼り付け、幅11㎜前後の突帯を形作る。その下には、突帯に平行して竹管による沈線を施している。胎土は長石、細砂を含み、赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

78は、Ｂ４グリッドの黒色土下層から出土した中期と思われる深鉢胴部である。風化して表面が剥落し、調整、文様は明らかでない。胎土は雲母、細砂、長石を含み、暗赤色を呈しよく焼きあがっている。

79は、Ａ４グリッドの黒色土層から出土した中期初頭と思われる深鉢口縁部である。外面には連続する爪形文を少なくとも２段にわたって付けている。胎土は長石、石英、雲母を含み、明褐色を呈しよく焼きあがる。

80は、Ａ７グリッドの褐色土から出土した中期の深鉢体部である。ヘラ状工具の刺突による縦位の細かな刻みを連続してつけた下位に、葉線状の沈線を施す。胎土は直径1.5㎜前後の砂粒と石英を含み、灰黄褐色～褐色を呈しよく焼きあがっている。

81は、Ｃ５グリッドの橙黄色層の直上から出土した後期の深鉢体部である。無文であり、斜位の擦痕が施される。胎土は細砂を多量に含み、黒褐色～黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

82は、Ｃ７グリッドの褐色土から出土した晩期と思われる深鉢体部である。幅５㎜程度の沈線区画中を縄文で埋める。胎土は石英。長石を含み、黒褐色～にぶい黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

83はＢ３グリッドの黒色土から出土した晩期の大洞ＢＣ式併行期の深鉢口縁部である。口縁に沿う２条の沈線区画の間を竹管による２列の連続した刺突で埋め、口縁部以下の内外面に横位と斜位の条痕を施す。胎土は長石、細砂を含み、にぶい赤褐色を呈しよく焼きあがる。ＳＢ11出土の26（第25図）と同一個体である。

84は、Ｃ６グリッドの褐色土から出土した晩期の大洞ＢＣ式併行期の深鉢口縁部である。口唇部に平行する沈線を施した下位に、さらに長方形状の沈線区画を設け、内側に縄文を施す。胎土は長石、雲母、細砂を含み、にぶい黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

石器・石製品（第47～58図125～130、132、134～136、138～144、158～170、172～186、190～193、195～198、200～207）

打製石斧（158～170、172～186、190～193、195～198、200～207）

ほとんどがＢグリッド列の埋没谷の暗褐色土層から出土した。後・晩期を主体とするものと思われる。完形品は10点で、他は基部の欠損、基部や刃部の断片である。泥岩、凝灰岩、頁岩、砂岩が用いられ、泥岩の比率が他よりも多い。原礫面を残す例が多いことから、周囲で採集できる自然礫の表面を打ち欠いて得た剥片を素材として用いていることがわかる。

これらは形態と調整方法から、①短冊形を呈し、両面の側縁から細かな調整を加え片面に原礫面を残すもの（158～170、172～174、179、180）、②撥形を呈し、両面の側縁から細かな調整を加え片面に原礫面を残すもの（175～178）、③短冊形～円形を呈し、片面の側縁から細かい調整を加え片面に原礫面のすべてを残すもの（181～185）、④短冊形を呈し、側縁からの広い剥離により原礫面をほとんどあるいはすべて取り去った後、側縁に細かい調整を加えるもの（186、190～198、200、201）、⑤撥形を呈し、側縁からの広い剥離により原礫面をほとんどあるいはすべて取り去った後側縁に細かい調整を加えるもの（202～205、207）、⑥分銅形を呈し側縁からの広い剥離により原礫面をほとんどあるいはすべて取り去った後側縁に細かい調整を加えるもの（206）がある。形態的には短冊形を呈するものがもっとも普遍的に用いられている。

もっとも大きなものは180であり、もっとも小さなものは158、179、198などである。大きなものは使用に応じて刃部を再調整しながら次第に小さくなってゆくものと思われる。

石錐（143、144）

いずれもＢ３グリッドの黒色土層から出土した打製石錐である。石材は143が凝灰岩、144がチャートである。143はほぼ完形で、刃部に微細剥離痕が見られ、先端が摩耗している。144は刃部が折れて失われている。

石匙（136、138～142）

すべてＢグリッド列の埋没谷の土層から出土している。石材はすべて凝灰岩である。縦形が２点、横形が４点であり、うち３点が完形品である。141は被熱しており表面に原礫面を広く残す。刃部に使用痕と思われる擦痕が無数に付く。

打製石鏃（125～130、132、134、135）

ほとんどがＢグリッド列の埋没谷の土層から出土している。石材は凝灰岩を用いる例が多いが、泥岩、チャート、黒曜石も少量用いられる。形態のわかるものはすべて凹基式で、５点が完形品である。129は両面の中央部に島状の瘤がある。127のみが長さ3.71㎝、重量2.90ｇと細身で長く大型である。128は薄い剥片の両側縁に細かな剥離を加えることによって形作られる。

スクレイパー（145～147、149～154）

ほとんどがＢグリッド列の埋没谷の土層から出土している。石材は泥岩、チャート、頁岩が用いられる。縦長剥片の側縁に細かな調整を施して刃部を形作るものが主体である。

石錘（208～230）

出土した石器の中で最も数が多く、23点を図化して掲載した。ほとんどがＢグリッド列の埋没谷を中心とする位置の黒色土あるいは暗褐色土から出土した。石材は泥岩もしくは砂岩の扁平な楕円形の礫を素材とし、その両端を打ち欠いて形作る。ほとんどが50ｇ以下の軽いものであり、最大は217の77.5ｇとなる。

②　弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は、石器が主体である。住居と同時期の中期後半～後期のものと考えられる

磨製石鏃（第48図155、156）

155はＺ７グリッドの黒色土から出土した。石材は緑色凝灰岩である。凹基式で、ほぼ完形である。基部には未貫通であるが、穿孔の痕が両面ともに２ヶ所ずつあり、有孔磨製石鏃といえる。長さは5.17㎝、幅2.32㎝、厚さ0.35㎝、重さ4.58ｇである。

156はＢ７グリッドの暗褐色土から出土した。石材は泥岩で、抉りを入れることにより基部を作り出す。

磨製石斧（第48図157）

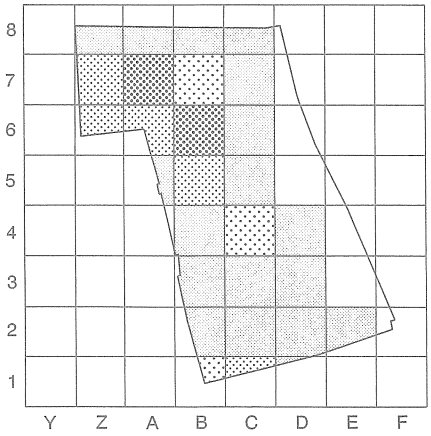
157はＢ２グリッドの暗褐色土層から出土した泥岩製の短冊形の磨製石斧である。基部が欠損している。長さ6.71㎝、幅4.94㎝、厚さ0.99㎝である。

敲石（第57・58図231～238）

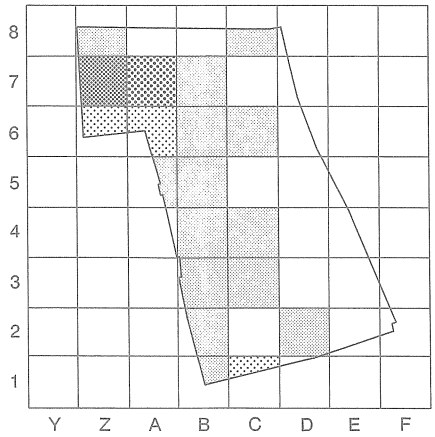
Ｂ４・５グリッドの暗褐色土から出土した。石材はすべて砂岩であり、楕円状、扁平楕円状、円状の礫素材に分類できる。231は主面部に敲打痕の集中が見られ、側面にも敲打痕が認められる。232は端部及び周縁部に敲打痕が認められた。233、234は主面部に敲打痕の集中が見られる。235は上下端に敲打痕が認められる。236～238は敲打痕が観察されないが、形状や大きさから敲石の素材とし、ここで取り扱うこととした。

③　古墳時代～古代の遺物

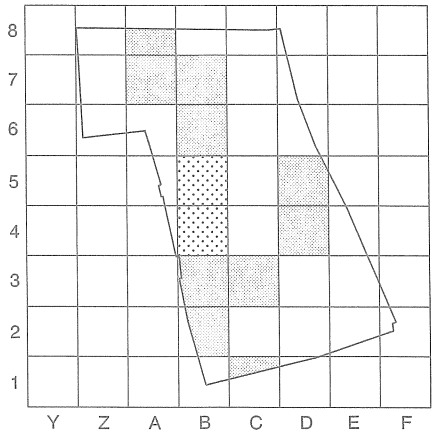
古墳時代の遺物は須恵器である。７世紀後半のものと思われる坏蓋（85）やフラスコ型瓶（91）が該当する。古代の遺物は、須恵器と灰釉陶器、土師器（86～89、92～96）である。須恵器は湖西産と思われるもので８世紀代が主体となり、坏蓋、坏身、双耳坏、甕、長頸瓶、甕などがある。土師器は坏であり、須恵器と同様に８世紀代にあたる。灰釉陶器は長頸瓶（90）がこれにあたり、９世紀後半のものと思われる。



山茶椀



山茶椀（生焼け）



打製石斧

第44図　主要遺物の分布状況

85は、Ｂ６・７グリッドの黒色土層から出土した湖西産と思われる須恵器の坏蓋である。全体的に回転台によるナデで整形され、鈕と受部は貼り付けられる。上面に自然釉がかかるため、鈕の周りのヘラ削りは観察できない。胎土は緻密で、微細な長石粒と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で灰褐色に焼きあがる。

86は、Ｂ７グリッドの黒色土層から出土した湖西産と思われる須恵器の坏蓋である。全体的に回転台によるナデで整形される。口唇部のかえりは顕著ではない。頂部と鈕は失われている。胎土は緻密で、微細な長石粒と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で灰褐色に焼きあがる。

87はＺ６グリッド、88はＺ８グリッドの黒色土層から出土した土師器の坏である。両者ともに近似した形状で、全体的にナデで整形される。胎土はきわめて目が細かく、赤色粒子を含むほかは含有物がない。硬質で淡い褐色に焼きあがる。

89は、Ｂ８グリッドの黒色土から出土した湖西産と思われる須恵器の長頸瓶である。全体的に回転台によるナデで整形される。

90は、Ｃ７グリッドの褐色土から出土した灰釉陶器の長頸瓶の脚部である。外面には自然釉がかかり、下位にヘラ状工具を用いて段を付ける。内面には輪積み痕が残り、端部には浅い沈線状のくぼみが廻る。胎土は緻密で微細な長石粒と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で灰色に焼きあがる。

91は、Ｂ７グリッドの黒色土・褐色土から出土した湖西産と思われる須恵器のフラスコ型瓶である。ナデで整形された後、端部のみを回転ヘラ削りで調整する。胎土は緻密で、微細な長石粒と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で灰褐色に焼きあがる。

92は、Ｂ５グリッドの黒色土から出土した須恵器双耳坏の耳である。坏の体部に、ヘラ状工具で面取りされた板状の突起を貼り付ける。胎土は緻密で微細な長石粒が多く含まれる。硬質で暗灰色に焼きあがる。

93は、Ｂ８グリッドの褐色土から出土した、瑤の体部である。体部の過半を回転ヘラ削りで調整した後、注口部をナデで貼り付ける。注口は、外面から棒状の工具を用いて穿孔しているため、内部に若干の粘土がはみ出している。胎土は緻密で、微細な長石粒が多く含まれる。硬質で暗灰色に焼きあがる。

94は、Ａ７グリッドの黒色土から出土した、湖西産と思われる須恵器の甕口縁部である。全体的にナデで整形される。口唇部には縁帯が貼り付けられる。また、内面には薄く自然釉がかかる。胎土は緻密で、長石と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で暗灰色に焼きあがる。

95は、Ｃ８グリッドの褐色土から出土した、湖西産と思われる須恵器の甕口縁部である。全体的にナデで整形された後、上位に２条の平行する沈線を、下位に２種の敲き具を軽くあてがうことによる羽状の圧痕を付ける。胎土は緻密で、長石と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で暗灰色に焼きあがる。

96は、Ｂ７グリッドの黒色土・褐色土から出土した湖西産と思われる須恵器の甕口縁部である。全体的にナデで整形された後、半ばと思われる位置に１条の沈線を付ける。口唇部は斜め内側に挽き出され、外面に縁帯を貼り付ける。胎土は緻密で、長石と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが現れる。硬質で灰色に焼きあがる。なお、外面には黒色に発色する鬼板が掛けられる。

97は、確認調査で出土した湖西産と思われる須恵器の坏身である。高台径は11.0㎝を測る。底部を回転ヘラ削で平滑に整えた後、丁寧なナデにより高台を貼り付ける。体部内面は回転ナデ調整で仕上げられている。胎土は１㎜以下の長石を微量に含み、硬質で灰黄色に焼きあがる。

④　中世の遺物

中世の遺物は前期の山茶椀類を主体とするものであり、Ｃ４～Ｚ７グリッドにかけて濃密に分布する。これらは近在する横岡窯で焼成されたものと思われ、Ⅲ期－１・２(13世紀半ば前後)を中心とする。灰色～青灰色を呈し硬質に焼きあがるものと、浅黄橙色を呈してやや軟質に焼きあがるものの２種がある。特に後者はこれまで「生焼け」と称されてきた一群であるが、今回のように集落遺跡から小皿を主体に一定量が出土していることは、生産段階で土師質を指向した焼成状態であったことを示唆している。両者の出土位置は第44図に示したようにほぼ重複しており、各々が特に別の位置で使用された形跡はない。

98はＡ６グリッドの黒色土から出土した小皿である。口径7.9㎝、底径4.5㎝、器高1.6㎝を測る。内外面をナデ調整により、直線的に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

99はＢ２グリッドの黒色土から出土した小皿である。口径7.7㎝、底径3.2㎝、器高1.6㎝を測る。体部内外面をナデ調整により、やや内湾気味に立ち上げる。内面底部は意図的に丸く膨らめられている。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

100は、確認調査で出土した小皿である。底径は4.5㎝を測る。外面は過半から口縁にかけて強いナデが施されるため、体部外面中位に明瞭な稜が生じている。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で、微細な長石粒と鉄分を含み、灰色を呈し硬質に焼きあがる。

101は、Ｚ７グリッドの黒色土から出土した小皿である。口径6.4㎝、底径3.1㎝、器高2.0㎝を測る。体部内外面をナデ調整により、やや内湾気味に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で少量の橙色粒子、長石を含み、浅黄橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

102は、Ａ６グリッドの黒色土から出土した小皿である。口径8.5㎝、底径4.9㎝、器高2.0㎝を測る。体部内外面をナデ調整により、体部をいったん横方向に挽き出した後、口唇部にかけて直線状に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整であり、糸によって巻き込まれた紐状の粘土が付着する。胎土は橙色粒子を含み、橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

103は、確認調査で出土した小皿である。口径7.8㎝、底径5.1㎝、器高1.5㎝を測る。体部の内外面を回転ナデ調整により、やや内湾気味に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は１㎜以下の

長石、赤色粒子を微量に含み、橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

104は、確認調査で出土した小皿である。径7.5cm、底径4.0cm、器高1.3cmを測る。きわめて扁平で、体部の内外面を回転ナデ調整により直線的に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は２mm以下の赤色粒子、微砂粒を含み、にぶい橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

105は、確認調査で出土した小皿である。口径8.3cm、底径4.3cm、器高2.1cmを測る。体部の内外面を回転ナデ調整により直線的に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で１mm以下の鉄分を少量含み、吹き出しが多く認められる。灰色を呈し、硬質に焼きあがる。口縁部を中心に自然釉がかかる。

106は、確認調査で出土した山茶椀である。高台径は5.3cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面が丸みを帯びた逆三角形状で、端部には籾殻痕が認められる。胎土は緻密で、やや青みを帯びた灰色を呈し硬質に焼きあがる。なお、内面は見込みの一部を除いてほとんど磨り減らない。

107は、確認調査で出土した山茶椀である。高台径は5.8cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面が丸みを帯びた逆三角形状で、端部にはスノコ状圧痕が認められる。胎土は緻密で、黄灰色を呈し硬質に焼きあがる。なお、内面は磨り減らない。

108は、確認調査で出土した山茶椀である。高台径は7.2cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面逆三角形状で、端部を砥石で面取りする。胎土は緻密で、４mm大の小礫が微量混ざり、にぶい褐色を呈し硬質に焼きあがる。内面は見込み部分が摩滅する上、煤状の黒い付着物が認められる。

109は、確認調査で出土した山茶椀である。高台径は7.2cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかも軽くナデられる。高台は低くつぶれた幅広の付高台で、端部にはスノコ状圧痕が認められる。胎土は緻密で、３mm大の礫を含み、灰色を呈し硬質に焼きあがる。内面は見込み中央部が摩滅する。

110は、確認調査で出土した山茶椀である。高台径は7.2cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整される。断面逆三角形状の付高台の端部には、圧痕はみられない。胎土は緻密で、２mm大の小礫が微量混じり、灰黄褐色を呈して硬質に焼きあがる。

111は、確認調査で出土した山茶椀である。高台径は7.2cmを測る。体部の内外面は回転ナデ調整により整形される。高台は断面逆三角形の付高台であり、端部にはスノコ状圧痕が認められる。胎土は緻密で、１mm以下の長石を含み、黄灰色を呈し硬質に焼きあがる。

112は、Ｅ２グリッドの褐色土から出土した山茶椀である。高台径は6.4cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面逆三角形状で、端部にはスノコ状圧痕が認められる。胎土は緻密で、微細な長石粒を多く含み、灰色を呈し硬質に焼きあがる。内面は直径１cm程度の瘤状の粘土塊が付着するが、見込の一部が摩滅する。

113は、Ｚ７グリッドの黒色土から出土した山茶椀である。高台径は7.4cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面逆三角形状である。胎土は緻密で、直径５mm程度の小礫を含み、灰色を呈し硬質に焼きあがる。内面は見込の一部が摩滅する。なお、割れ口の底部付近には、器厚のほぼ半ばに接合痕が観察される。このことは、体部がひとつの粘土塊から挽き出されたのではなく、回転台上に据え置かれた粘土に異なる粘土を継いだ上で整形されたことを示している。また、底部外面には墨書が施されるが、

部分のため判読はできない。

114はＺ６・７グリッドの黒色土から出土した山茶椀である。底径7.4㎝を測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台はつぶれた断面矩形を呈し、端部にスノコ状圧痕が認められる。胎土は緻密で砂粒、長石、橙色粒子を含み、橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

115はＺ７グリッドの黒色土から出土した無高台の山茶椀である。口径11.4㎝、底径6.5㎝、器高2.5㎝を測る。口縁部外面をやや強くナデることでわずかに外反させている。底部外面は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

116は、Ｚ６・７グリッドの黒色土・褐色土から出土した山茶椀である。口径16.9㎝、底径７㎝、器高4.9㎝を測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整される。口唇部は内側を小さな突帯状に肥厚させる。高台は断面逆三角形状である。胎土は緻密で長石を含み、灰褐色を呈し硬質に焼きあがる。内面は見込の一部が摩滅する。

117はＡ７グリッドの黒色土から出土した無高台の山茶椀である。底径7.6㎝を測る。底部外面には回転糸切り痕が認められる。胎土は緻密で、浅黄橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

118は、Ｃ１グリッドの褐色土から出土した無高台の山茶椀である。底径6.4㎝を測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部外面は回転糸切り未調整でスノコ状圧痕が認められる。内面は底部の外縁に沿って強いナデによる段が付く。胎土は緻密で長石、鉄分を含み、灰褐色を呈し硬質に焼きあがる。内面の見込は摩滅しない。

119は、排土中から採集された10型式にあたる常滑の壷口縁である。口唇部外面には折り返された扁平な縁帯が付く。内外面には自然釉が付着する。

121はＡ７グリッドの黒色土から出土した12〜13世紀前葉のものと思われる非ロクロ系のかわらけである。ほぼ完形であるが、全体的に脆く、摩滅が激しい。口径8.3㎝、底径6.6㎝、器高1.6㎝を測る。底部から口縁にかけてやや内湾気味に立ち上がる。口唇部に強い横ナデを施すため、体部過半に括れを生じている。胎土は緻密で少量の橙色粒子を含み、橙色を呈し軟質に焼きあがる。

⑤　近世の遺物

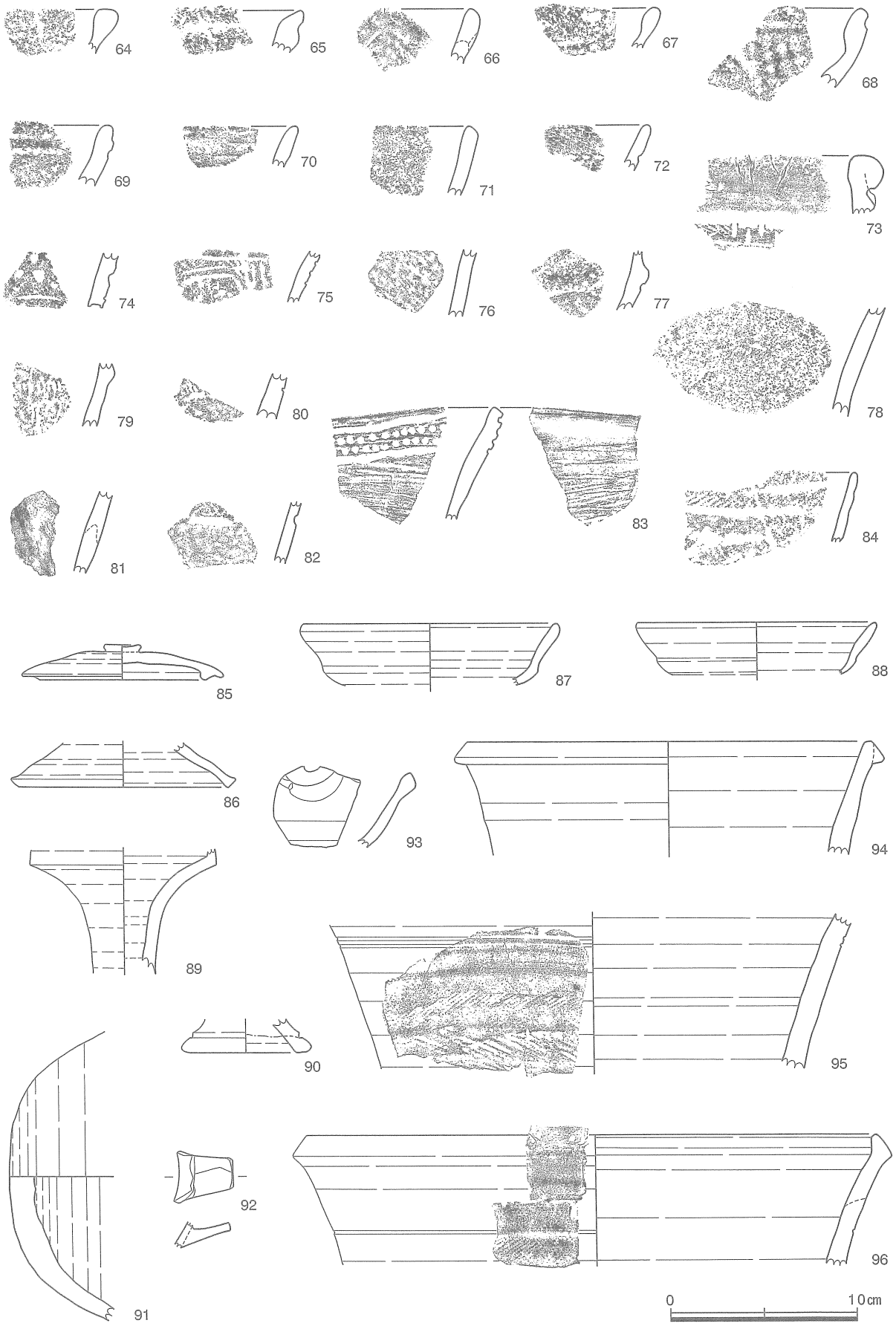
近世の遺物は、志戸呂焼とかわらけが出土している。

120は確認調査で出土した17世紀前葉にあたる志戸呂焼の香炉である。底径は13.4㎝を測る。黒褐色の鉄釉が体部外面胴部に施されている。全体的にロクロナデで整形した後、外面のみに回転ヘラ削りを施す。内面は露胎であるが、底部外縁に鉄釉が散っている。胎土は１〜５㎜の長石、１㎜以下の赤色粒子を含み、露胎部分が褐色を呈して硬質に焼きあがる。

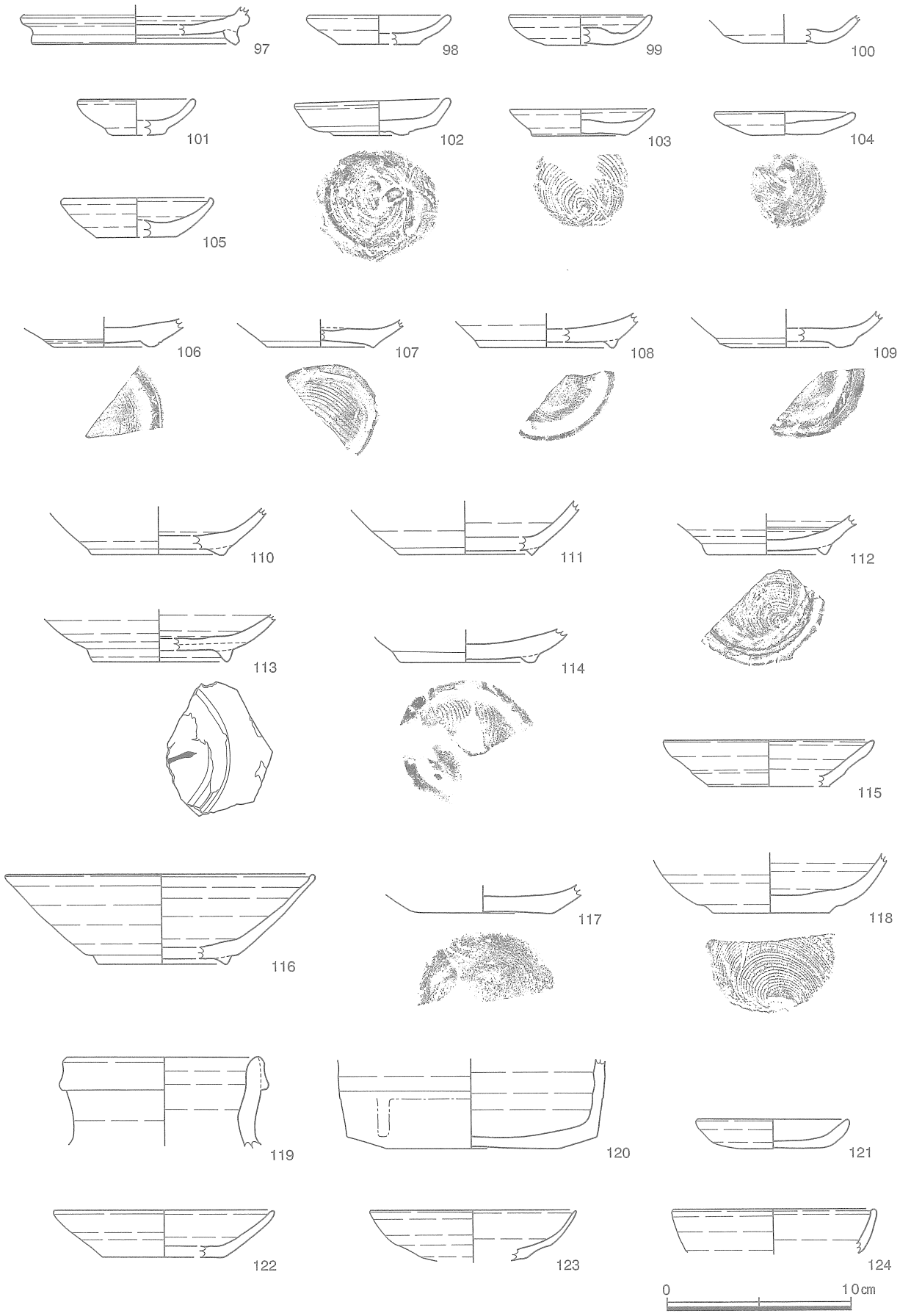
122はＡ７グリッドの黒色土から出土したかわらけである。口径は11.8㎝、底径6.6㎝、器高2.6㎝を測る。底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。体部内外面にナデ調整が施され、底部は回転糸切り痕がわずかに認められる。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、淡橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

123はＢ４グリッドの暗褐色土から出土したかわらけである。口径11.2㎝、器高2.4㎝を測る。底部から口縁にかけて内湾気味に立ち上がる。体部内外面はナデ調整が施され、底部の切り離し痕は摩滅のため明確ではない。体部内面には煤が付着する。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

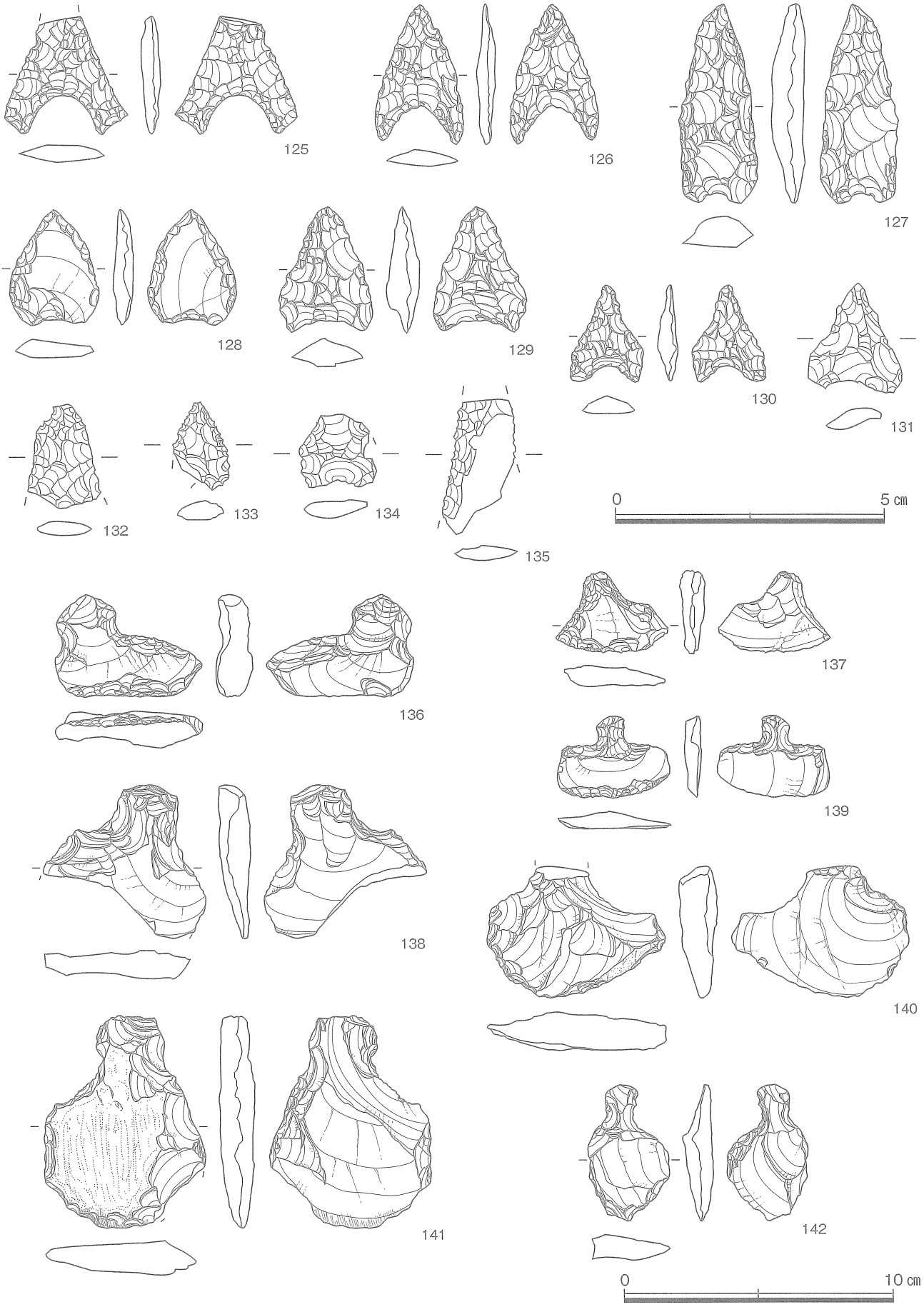
124はＡ６グリッドの黒色土から出土したかわらけである。口縁部から胴部が残存しており、口径11.1㎝を測る。胴部から口縁にかけてやや内湾気味で、口縁外面端部はヨコナデされる。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、橙色を呈してやや硬質に焼きあがる。



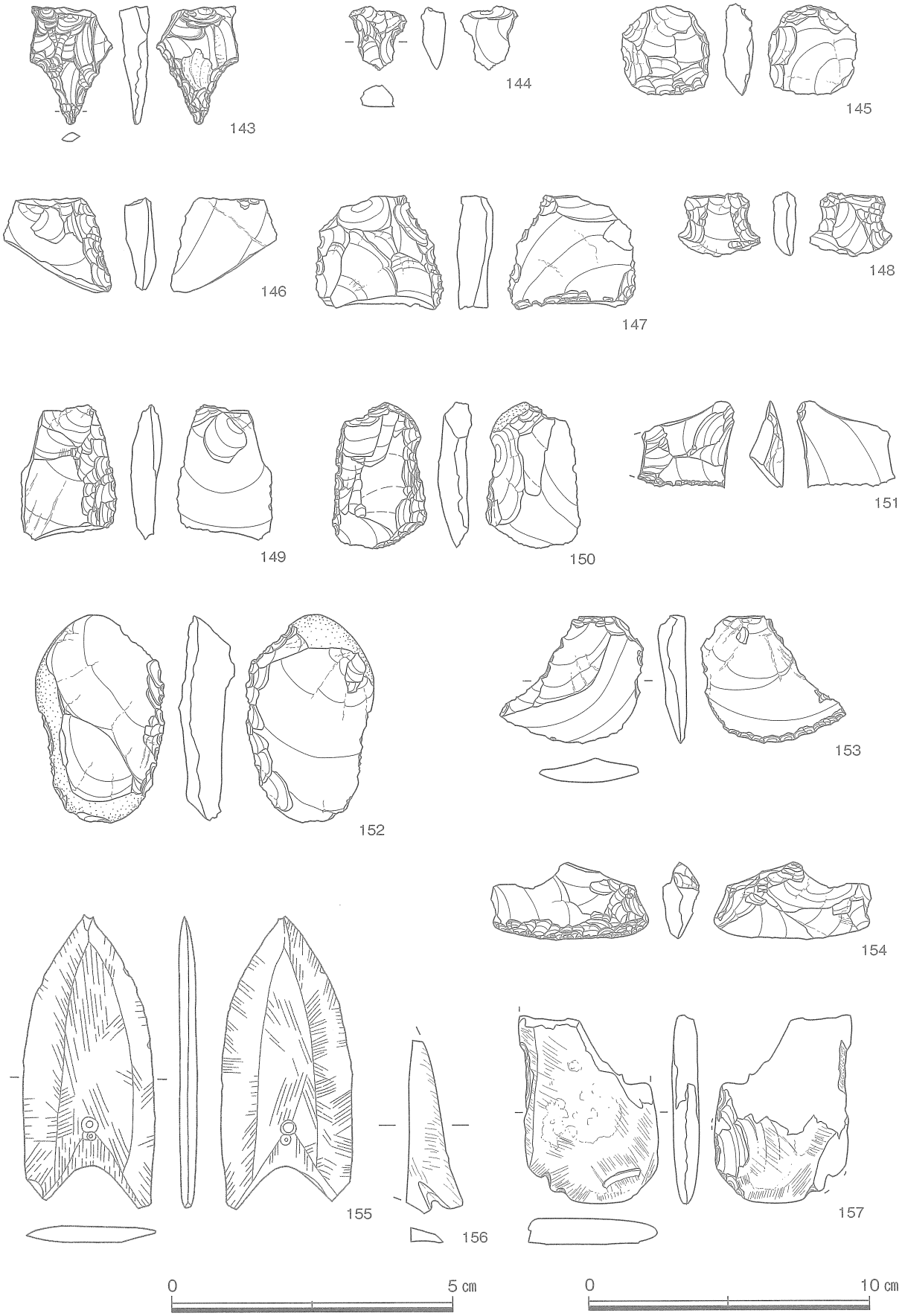
第45図　遺構外出土遺物１



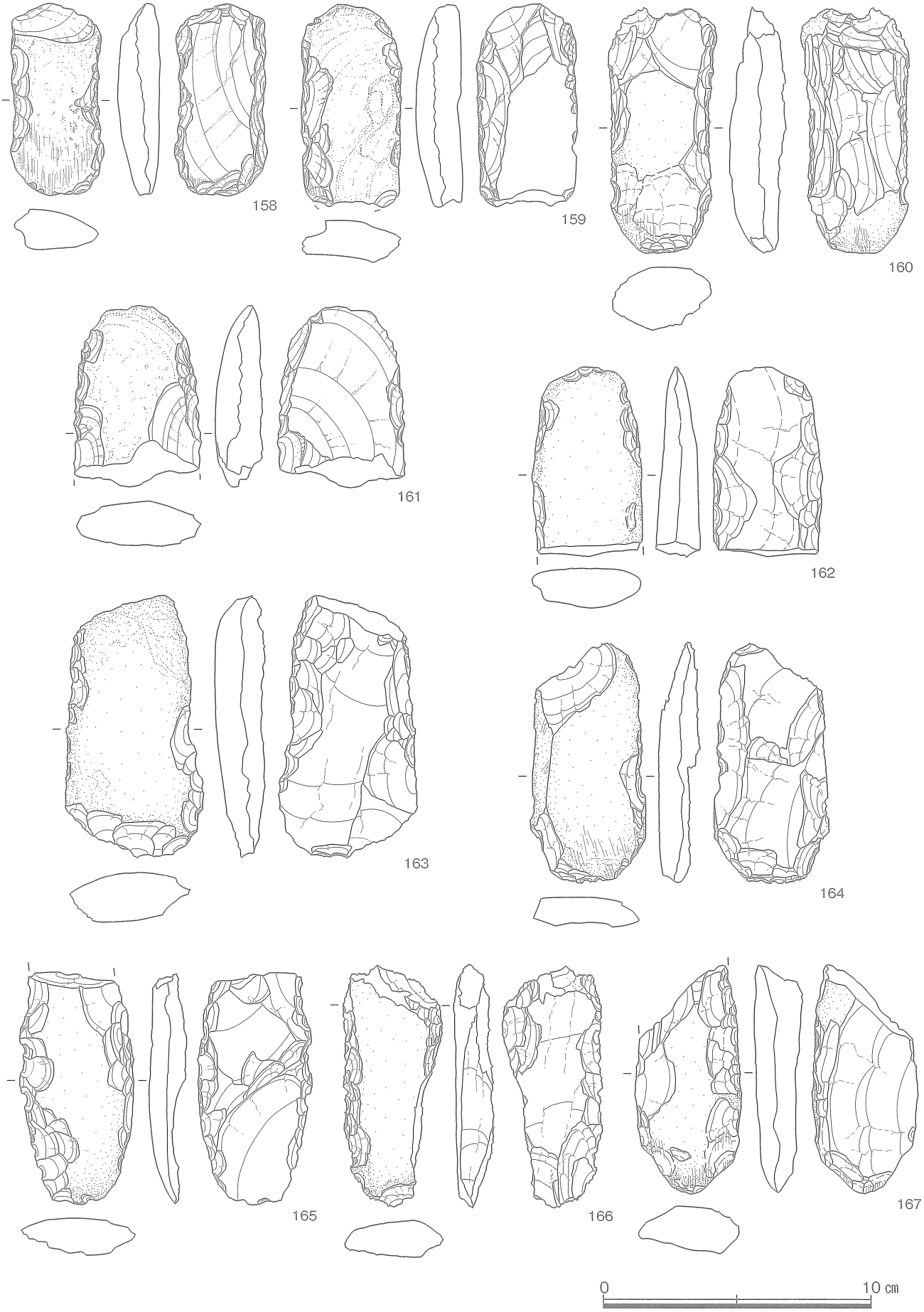
第46図　遺構外出土遺物２



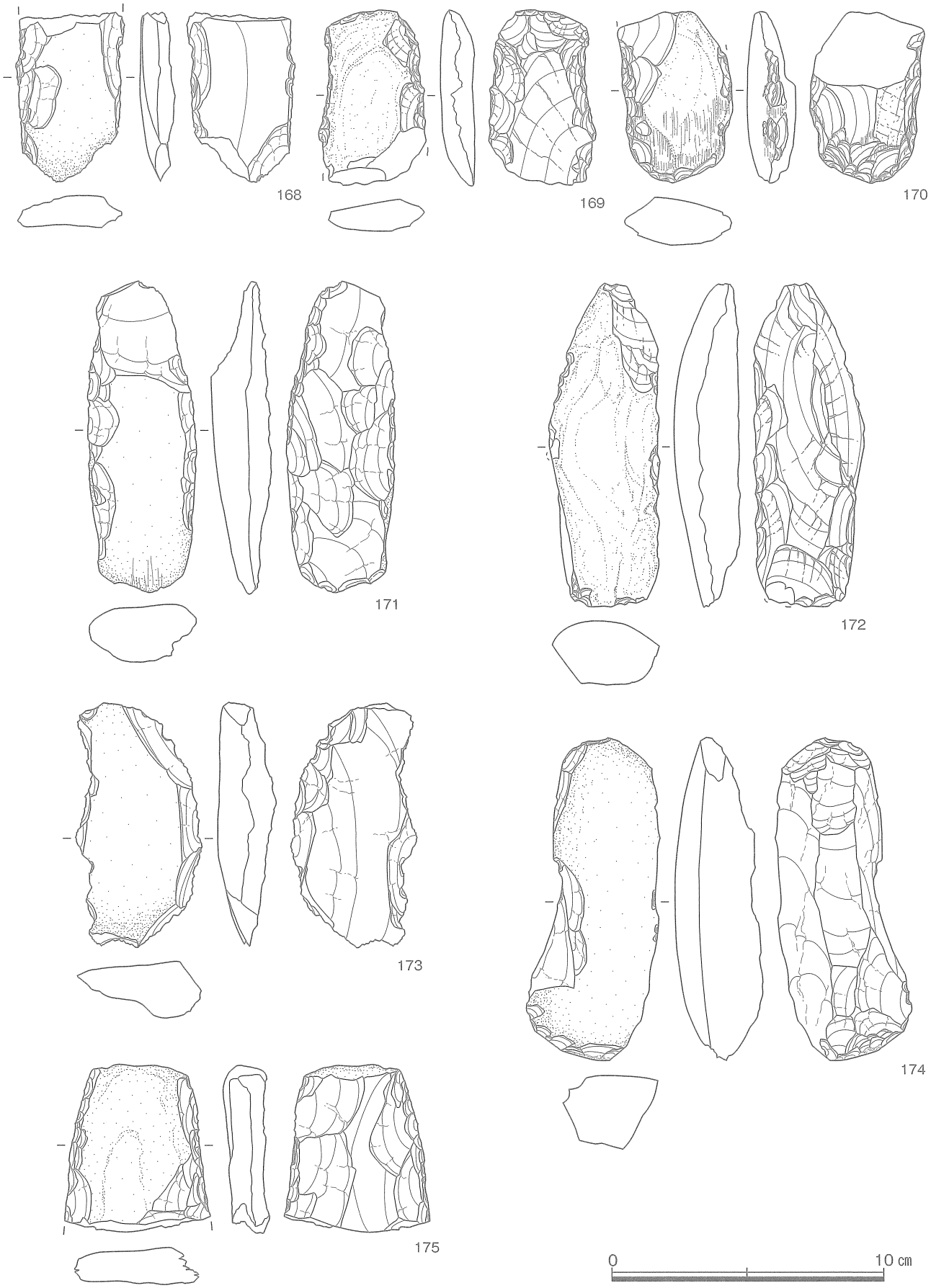
第47図　遺構外出土遺物３



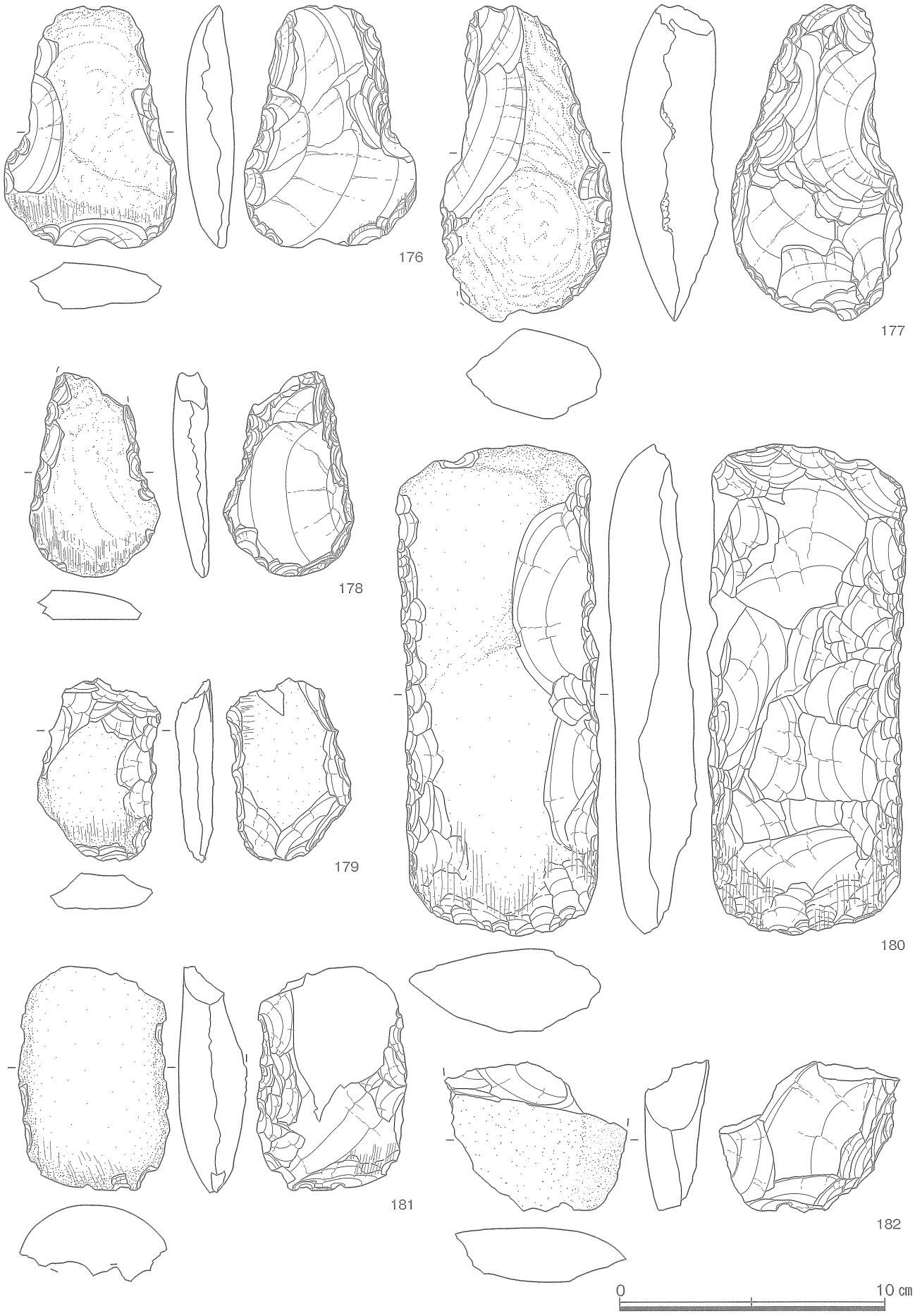
第48図　遺構外出土遺物４



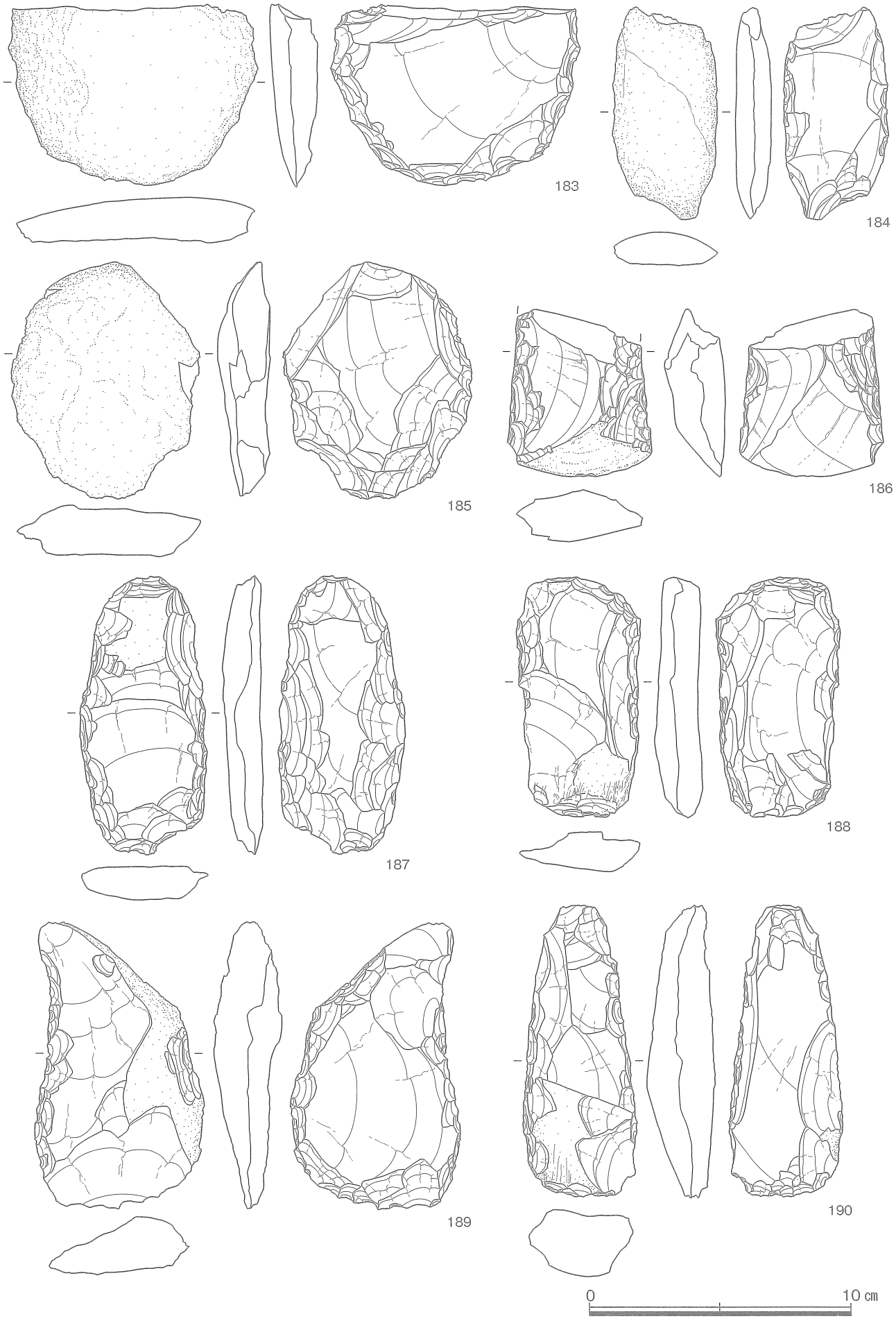
第49図　遺構外出土遺物５



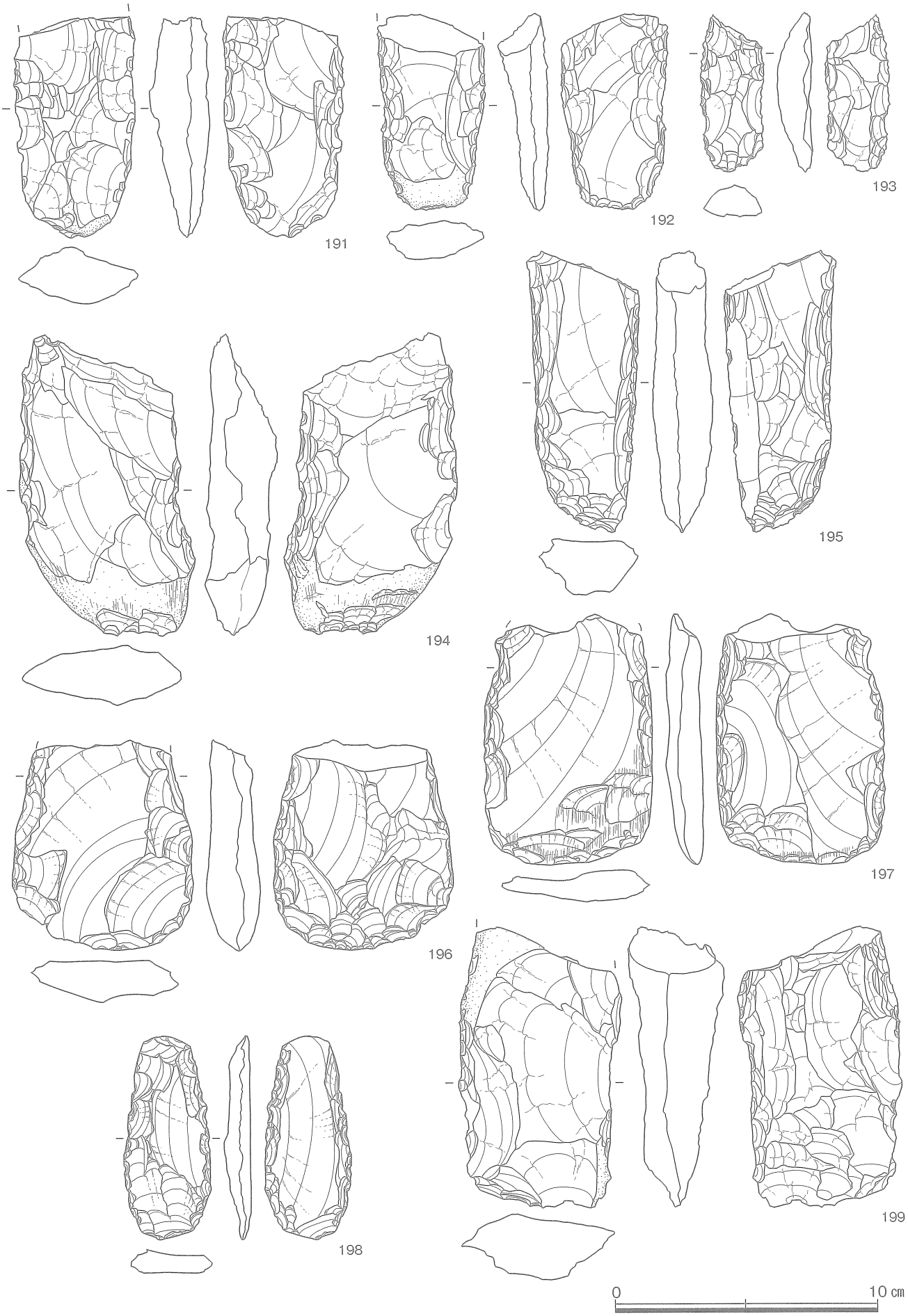
第50図　遺構外出土遺物６



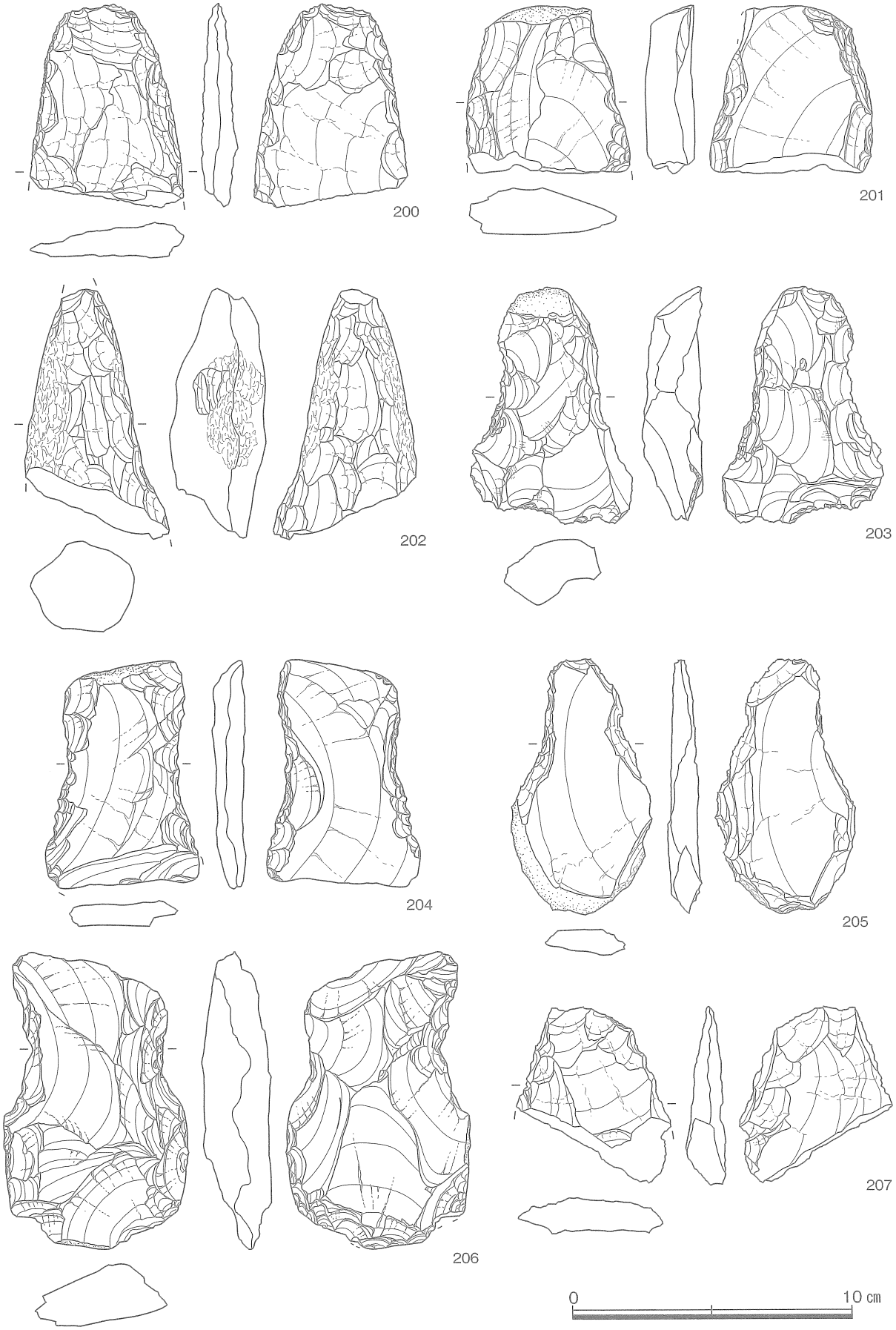
第51図　遺構外出土遺物７



第52図　遺構外出土遺物８

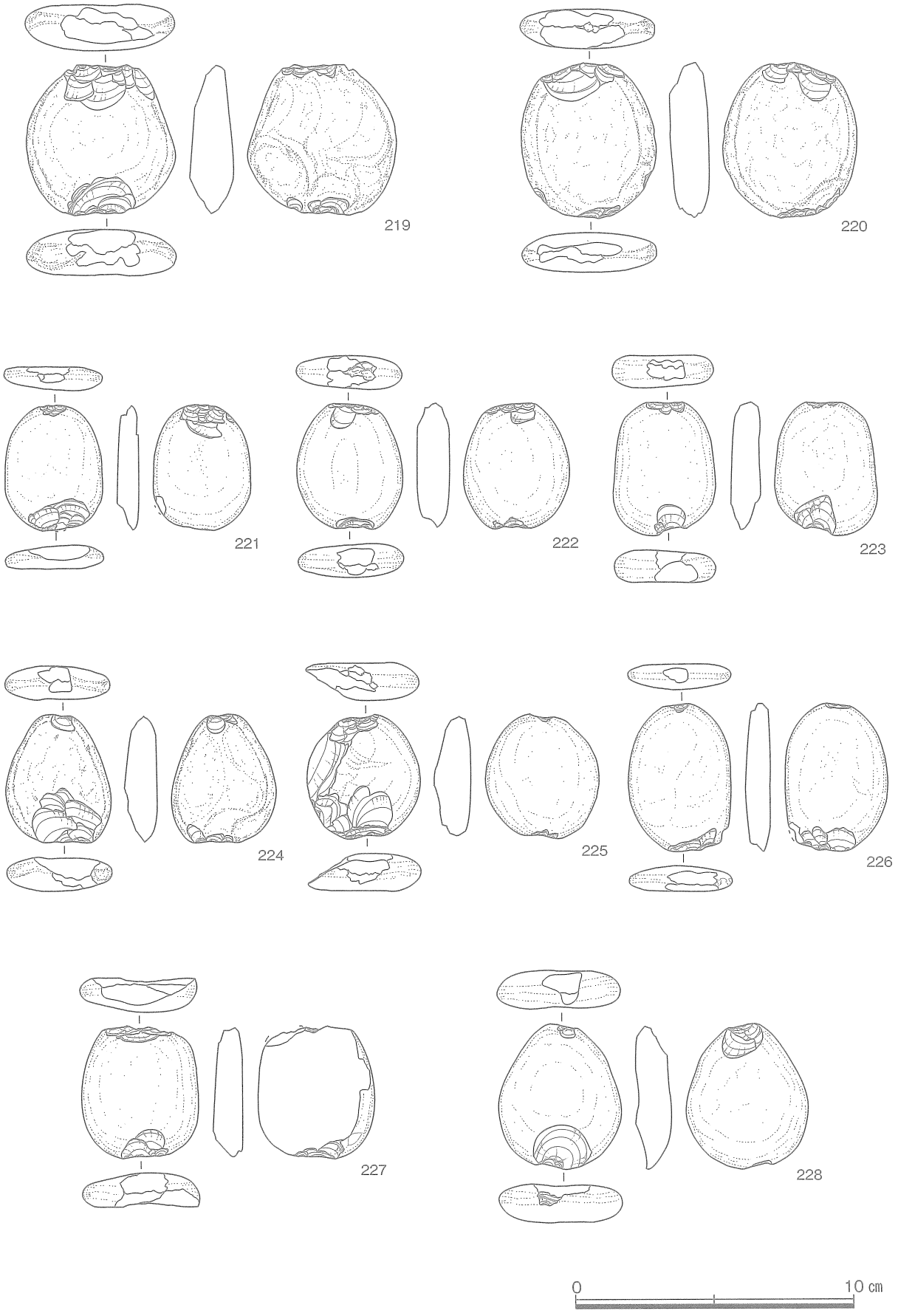


第53図　遺構外出土遺物９

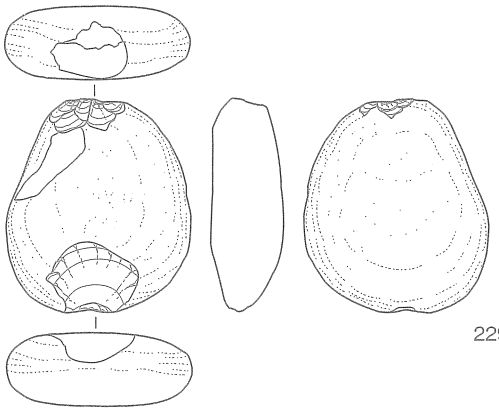


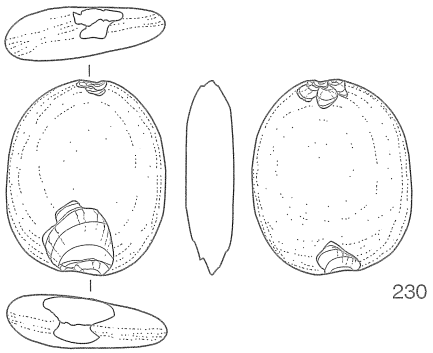
第54図　遺構外出土遺物10

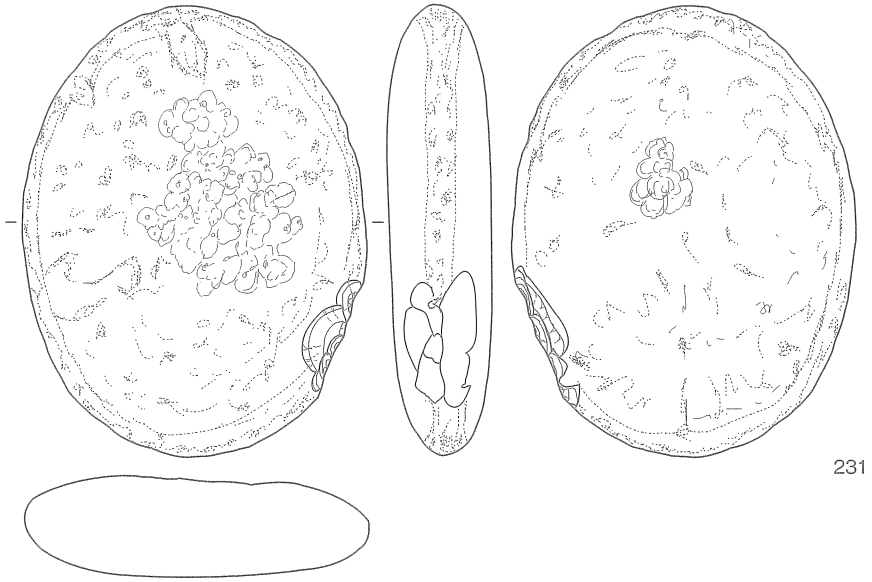
第55図　遺構外出土遺物11

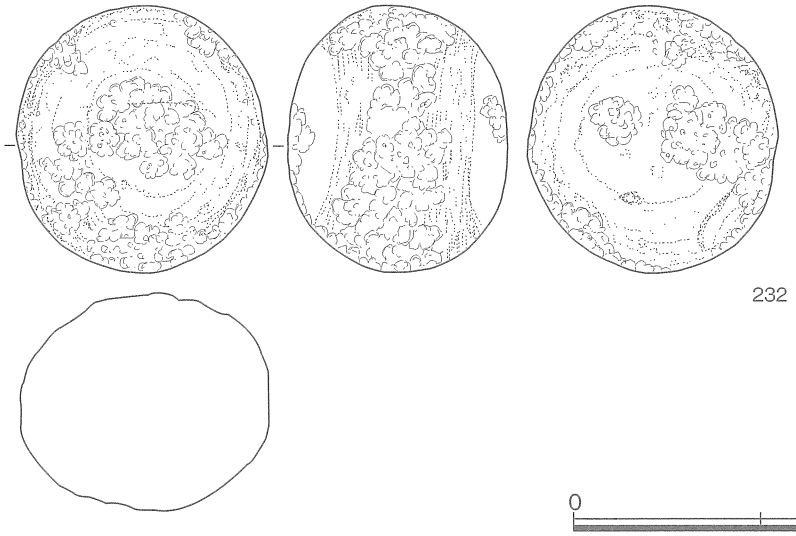


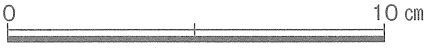
第56図　遺構外出土遺物12



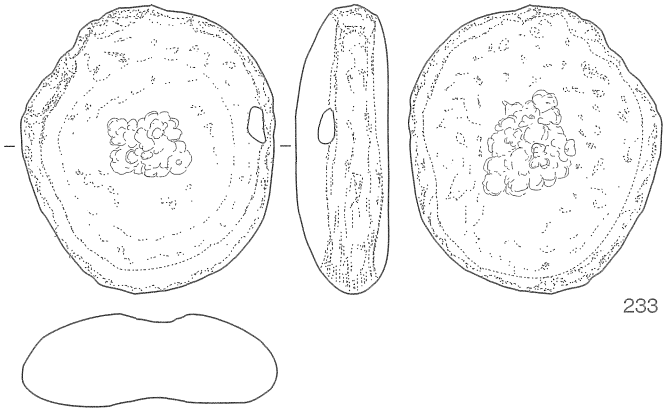


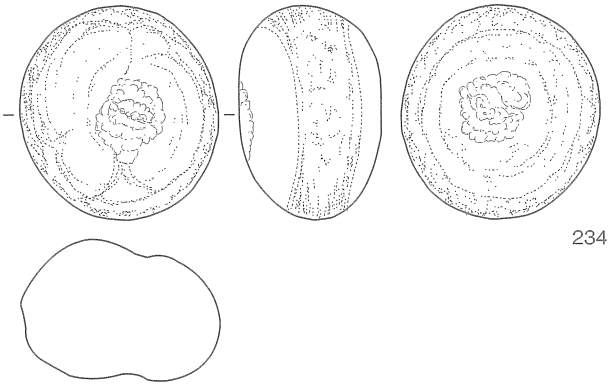


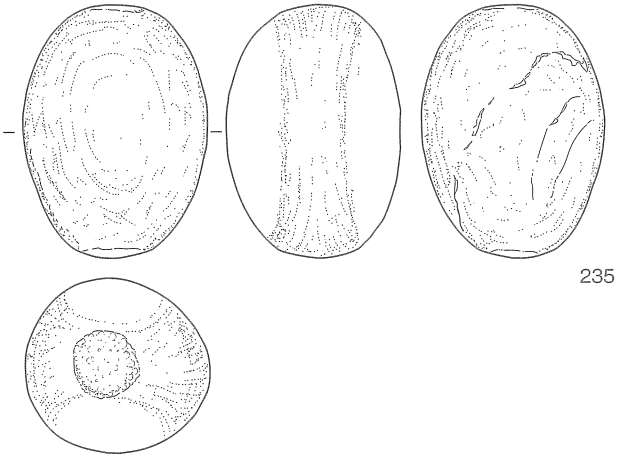


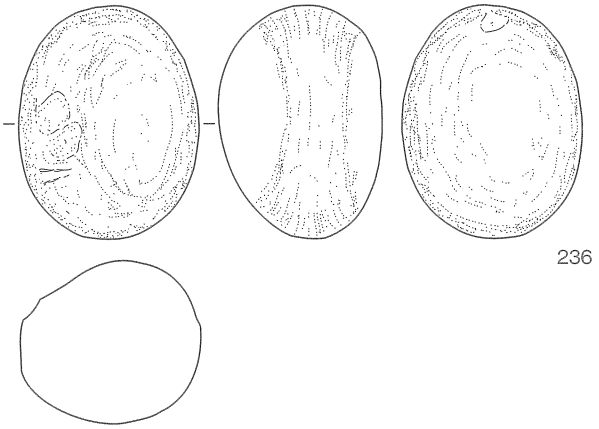


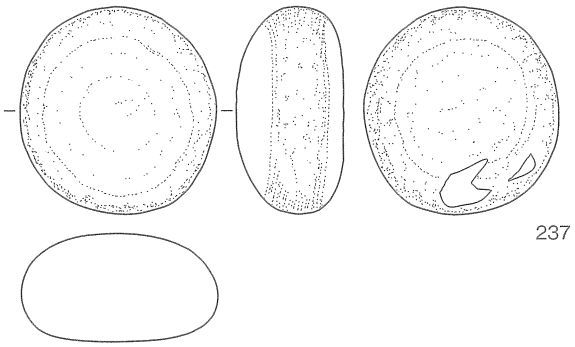
第57図　遺構外出土遺物13

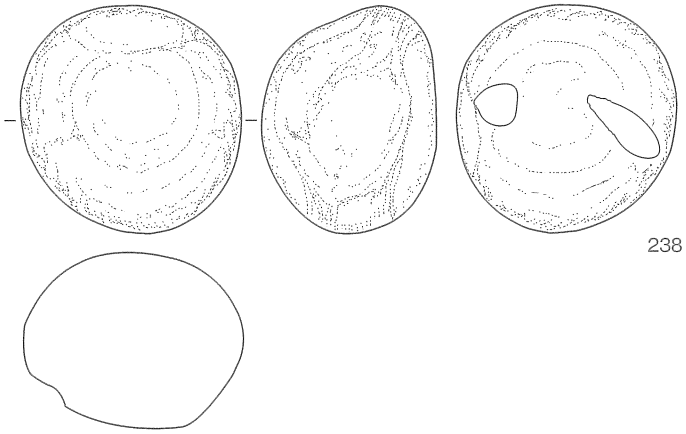












第58図　遺構外出土遺物14

第７表　出土遺物観察表（土器・陶器１）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	区画	種別	器種	時期	色　調	胎　土	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　考
1	11		ＳＦ９ 褐色土	Ｃ４	縄文土器	深鉢	中期後半	7.5YR4/2灰褐色	長石、石英、砂粒、橙色粒子含む	底部欠損	15.5			竹管文　ＲＬ縄文
2	14		ＳＢ１ 褐色土	Ｚ８	弥生土器	壺	中期後半	2.5Y6/4にぶい黄色	砂粒、小豆色粒子含む	肩部わずかに残存				
3	14		ＳＢ２ 黒色土	Ａ８	弥生土器	壺	中期後半	5Y4/1灰色	橙色粒子、砂粒含む	底部約1/3残存		(5.4)		
4	14		ＳＢ２ 暗褐色土	Ｚ７	弥生土器	甕	中期後半	10YR4/2灰黄褐色	橙色粒子多数含む	口縁～体中位1/8残存	(13.7)			くの字　小型
6	16		ＳＢ４ 黒色土	Ｃ８	弥生土器	壺	中期後半	10YR5/3にぶい黄褐色	黒色粒子・長石・黒雲母多数含む	肩部わずかに残存				櫛描円孤文　円形浮文
7	16		ＳＢ４ 黒色土	Ｃ８	弥生土器	壺	中期後半	2.5Y7/2灰黄色	小礫、長石多数含む	体部約1/8残存				
8	16		ＳＢ４ 黒色土	Ｃ８	弥生土器	甕	中期後半	10YR5/3にぶい黄褐色	長石、橙色粒子多数含む	口縁～体上半1/7残存				くの字　刻目
9	17		ＳＢ５ 黒色土	Ｃ７	弥生土器	壺	後期	7.5YR8/8黄橙色	長石、砂粒、橙色粒子含む	約1/4残存	(17.8)			羽状縄文　結節縄文
10	17		ＳＢ５ 黒色土	Ｃ７	弥生土器	壺	後期	10YR7/6明黄褐色	砂粒、橙色粒子多数含む	肩部わずかに残存				
11	17		ＳＢ５ 黒色土	Ｃ７	弥生土器	壺	後期	10YR7/4にぶい黄橙色	密　径１㎜以下の砂粒径0.1㎜以下の橙色粒子多数含む	肩部わずかに残存				羽状縄文　円形浮文跡？
12	18		ＳＢ６ 黒色土	Ｃ６	弥生土器	壺	後期	7.5YR8/8黄橙色	密　径５㎜以下の長石・橙色粒子多数含む	口縁部1/4残存	(14.0)			円形浮文
13	18		ＳＢ６ 黒色土	Ｃ６	弥生土器	甕	後期	7.5YR7/6橙色	密　径１㎜以下の砂粒多数含む	口縁部わずかに残存				くの字　刻目
14	19		ＳＢ７　Ｐ３ 黒色土 褐色土	Ｃ６	弥生土器	壺	後期	2.5Y5/1黄灰色	密　径１㎜以下の砂粒多数含む	胴下半～底部約3/4残存	6.1			胴部最大径(16.7) 木葉痕
15	19		ＳＢ７ 黒色土 褐色土	Ｃ６	弥生土器	甕	中期後半	10YR6/3にぶい黄橙色	密　径５㎜以下の砂粒含む	口縁部わずかに残存				刻目
16	19		ＳＢ７　Ｐ３ 黒色土 褐色土	Ｃ６	弥生土器	甕	後期	10YR6/4にぶい黄橙色	密　砂粒多数含む	口縁わずか、胴上半約1/4残存	(16.4)			胴部最大径(15.9)
17	41		ＳＢ８ 暗褐色土	Ｃ６	土師器	甕		7.5YR8/6浅黄橙色	密　橙色粒子含む	口縁部わずかに残存	(16.8)			
18	18		ＳＢ９ 黒色土	Ｃ５	弥生土器	壺	後期	7.5YR7/8黄橙色	密　径２cm以下の長石多数含む	口縁部約1/4残存	(18.8)			円形浮文　薄手
19	18		ＳＢ９ 黒色土	Ｃ５	弥生土器	壺	後期	7.5YR7/6橙色	密　径５㎜以下の長石多数 径１㎜以下の橙色粒子含む	口縁～頸部約1/4残存	(16.4)			薄手
20	18		ＳＢ９ 黒色土	Ｃ５	弥生土器	壺	後期	7.5YR8/6浅黄橙色	密　径１cm以下の長石多数 径１cm以下の礫含む	口縁～頸部約1/2　体中位3/4残存	15.3			頸部に沈線２本有り？
21	23		ＳＢ10 黒色土	Ｄ５	弥生土器	壺	中期後半	10YR7/4にぶい黄橙色	密　径１㎜以下の砂粒・長石・橙色粒子含む	体中位～底部約1/8残存		(5.5)		斜格子　あげ底
22	23		ＳＢ10 黒色土	Ｄ５	弥生土器	甕	中期後半	7.5YR7/4にぶい橙色	密　径１㎜以下の長石少量含む	口縁部わずかに残存				炭化物付着
23	23		ＳＢ10 黒色土	Ｄ４ Ｄ５	弥生土器	甕	中期後半	7.5YR7/4にぶい橙色	密　径１㎜以下の橙色粒子 径２㎜以下の砂粒多数含む	口縁部わずかに残存				炭化物付着
24	23		ＳＢ10 黒色土	Ｄ５	弥生土器	甕	中期後半	7.5YR8/4浅黄橙色	密　径２㎜以下の砂粒多数含む	口縁部わずかに残存				刻目　炭化物付着
25	23		ＳＢ10 黒色土	Ｄ５	弥生土器	鉢	中期後半	10YR8/6黄橙色	密　径１㎜以下の黒雲母・砂粒多数含む	口縁部わずかに残存				ＬＲ縄文
26	23		ＳＢ10 黒色土	Ｄ５	弥生土器	高坏	中期後半	7.5YR8/6浅黄橙色	密　径１㎜以下の砂粒多数 径１㎜以下の長石・橙色粒子少数含む	接合部わずかに残存				
27	23		ＳＢ10 褐色土	Ｄ５	縄文土器	不明	不明	10YR5/3にぶい黄褐色	２㎜大の礫含む	底部～胴部底部約1/10残存		(15.8)		
29	25		ＳＢ11 黒色土	Ｄ４	縄文土器	深鉢	晩期	内面2.5YR5/6明赤褐色 外面7.5YR5/4にぶい褐色	石英・長石含む	口縁部				83と同一個体
30	25		ＳＢ11壁溝内 黒色土	Ｄ４	弥生土器	壺	後期	10YR7/4にぶい黄橙色	密　径１㎜以下の橙色粒子 わずか　径１～２㎜の長石含む	口縁部約1/3残存	(14.8)			ＬＲ縄文　円形押圧文？
31	27		ＳＢ12 黒色土	Ｄ４	弥生土器	甕	中期後半	5YR8/4浅橙色	密　径0.1㎜以下の石英径１㎜以下の橙色粒子・小豆色粒子を含む	口縁部わずかに残存				刻目
32	27		ＳＢ12 黒色土	Ｄ４	弥生土器	壺	中期後半	7.5YR8/6浅黄橙色	密　径１㎜以下の砂粒・橙色粒子含む	肩部わずかに残存				
33	27		ＳＢ13 黒色土	Ｄ４	弥生土器	甕	中期後半	10YR6/3にぶい黄橙色	密　径１㎜以下の橙色粒子・砂粒含む	口縁部わずかに残存				刻目
34	27		ＳＢ13 黒色土	Ｄ３	弥生土器	壺	中期後半	5YR7/8橙色	密　径４㎜以下の長石 径１㎜以下の砂粒含む	肩部わずかに残存				
35	27		ＳＢ13 黒色土	Ｄ４	弥生土器	壺	中期後半	10YR5/3にぶい黄褐色	密　径１㎜以下の長石・砂粒含む	底部のみ完形		5.6		あげ底
36	27		ＳＤ05	Ｅ４ ・５	縄文土器	深鉢	不明	2.5YR5/6明赤褐色	石英　雲母　長石含む	底部		(6.7)		
38	29		ＳＢ15 黒色土 褐色土	Ｄ３	弥生土器	壺	中期後半	10YR7/6明黄褐色	密　径５㎜以下の長石含む	頸部1/2残存				隆帯？有り　櫛刺突文

第８表　出土遺物観察表（土器・陶器２）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	区画	種別	器種	時期	色　調	胎　土	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　考
39	29		ＳＢ15 黒色土 褐色土	Ｃ３	弥生土器	壺	後期	7.5YR8/6浅黄橙色	密　径５㎜以下の長石多数含む	口縁部わずかに残存				棒状浮文
40	29		ＳＢ15 黒色土 褐色土	Ｄ３	弥生土器	壺	後期	7.5YR7/6橙色	密　径１㎜以下の砂粒多数	肩部わずかに残存				ＲＬ縄文
41	29		ＳＢ15 黒色土 褐色土	Ｃ３ Ｄ３	弥生土器	壺	後期	10YR7/4にぶい黄橙色	密　径５㎜以下の小礫含む	体部下半～底部約2/3残存		9.5		胴部最大径(22.6)
42	29		ＳＢ15 黒色土 褐色土	Ｄ３	弥生土器	甕	後期	7.5YR8/6浅黄橙色	密　径１㎜以下の砂粒多数 径１㎜以下の橙色粒子含む	口縁わずか 体部1/2残存	(16.8)			胴部最大径(21.0)
43	29		ＳＢ15 黒色土 褐色土	Ｄ３	弥生土器	甕	後期	7.5YR7/4にぶい橙色	密　径３㎜以下の砂粒多数含む	口縁部わずかに残存				刻目
44	30		ＳＢ16 黄褐色土	Ｃ４ Ｄ４	弥生土器	甕	後期	7.5YR7/4にぶい橙色	密　径１㎜以下の砂粒多く含む	口縁～体上半1/4　体下半ほぼ完形	(15.5)			刻目　外面体上半と内面体下半の一部に炭化物付着か 胴部最大径(17.1)
45	30		ＳＢ16 黄褐色土	Ｃ４ Ｄ４	弥生土器	甕	後期	7.5YR7/6橙色	密　径１㎜以下の砂粒多数	台部約1/2残存		(7.6)		
59	42		ＳＰ181 黄褐色土	Ａ７	灰釉陶器	椀		10YR6/3にぶい黄橙色	径３㎜大の礫含む	約3/4残存	14.6	(6.8)	5.0	蔵骨器60の蓋
60	42		ＳＰ181 黄褐色土	Ａ７	灰釉陶器	壺		5Y7/1灰白色	密　径１cmの小礫含む	完形	8.7	6.4	13.4	蔵骨器　胴部最大径10.7　糸切り痕
61	43		暗褐色土	Ｄ４	山茶椀類	山茶椀		5Y6/1灰色	黒色粒子含む　緻密	口縁部～体下部1/2残存 底部完形		(6.0)		底部糸切り痕残存 高台端部にスノコ状圧痕　籾殻痕
62	43		ＳＤ８ 暗褐色土	Ｄ３	山茶椀類	山茶椀		10Y6/1灰色	長石含む　炭化物付着	体部一部残存 底部1/2弱残存　高台部1/3残存		(4.0)		底部糸切り痕残存
63	43		ＳＤ８ 暗褐色土	Ｄ３	山茶椀類	小皿		5Y6/2灰オリーブ色	長石含む	口縁部1/2弱残存　体部一部残存　底部ほぼ完形	7.05	3.9	1.7	底部糸切り痕残存
64	45		黒色土下層	Ｂ５	縄文土器	深鉢	中期	5YR4/6赤褐色	雲母を多量に含む	口縁部一部残存				風化している
65	45		黒色土	Ａ６	縄文土器	深鉢	中期	10YR7/3にぶい黄橙色	長石　細砂含む	口縁部				五領ヶ台式併行 北裏Ｃ式
66	45		黒色土上層	Ｂ２	縄文土器	深鉢	中期	5YR4/6赤褐色	細砂、長石含む	口縁部一部残存				五領ヶ台式併行
67	45		暗褐色土	Ｂ３	縄文土器	深鉢	中期	7.5YR6/4にぶい橙色	石英　長石含む	口縁部				五領ヶ台式併行
68	45		黒色土下層	Ｂ４	縄文土器	深鉢	中期	7.5YR3/4暗褐色	長石、雲母、石英含む	口縁部一部残存				風化する
69	45		黒色土下層	Ｂ４	縄文土器	深鉢	中期	内面7.5YR4/6褐色 外面5YR4/6赤褐色	長石、細砂含む	口縁部一部残存				風化する
70	45		黒色土	Ａ５	縄文土器	深鉢	中期～	5YR5/4にぶい赤褐色	長石含む	口縁部				
71	45		暗褐色土	Ｂ５	縄文土器	深鉢	中期末	7.5YR4/4褐色	長石含む	口縁部				
72	45		暗褐色土	Ｂ５	縄文土器	深鉢	中期初頭	2.5YR4/3にぶい赤褐色	石英　雲母　長石含む	口縁部				
73	45		Ｔ7-1		縄文土器	深鉢	中期	5YR5/6明赤褐色	径２㎜以下の長石含む	口縁部破片				五領ヶ台式併行
74	45		暗褐色土	Ｂ３	縄文土器	深鉢	中期	7.5YR5/4にぶい褐色	石英　雲母　長石含む	口縁部				
75	45		暗褐色土	Ｂ４	縄文土器	深鉢	中期	7.5YR4/2灰褐色	石英　雲母　長石含む	口縁部				五領ヶ台式併行
76	45		黒色土	Ｂ５	縄文土器	深鉢	後期～晩期	10YR5/2にぶい黄褐色	２㎜大の細砂含む					擦痕を斜位に施す
77	45		黒色土下層	Ｂ４	縄文土器	深鉢	中期	5YR4/6赤褐色	長石、細砂含む					風化する
78	45		黒色土下層	Ｂ４	縄文土器	深鉢	中期	5YR3/4暗赤褐色	雲母、細砂、長石含む					風化により文様不明
79	45		黒色土	Ａ４	縄文土器	深鉢	中期初頭	7.5YR5/6明褐色	長石、石英、雲母含む	口縁部一部残存				連続爪形を付けている
80	45		褐色土	Ａ７	縄文土器	深鉢	中期	内面10YR4/2灰黄褐色 外面7.5YR4/4褐色	1.5㎜大の細砂、石英含む					刺突と沈線を付ける
81	45		橙黄色土直上	Ｃ５	縄文土器	深鉢	後期	内面10YR6/4にぶい黄橙色　外面2.5Y3/1黒褐色	細砂多量に含む　３㎜大の礫含む					無文で擦痕を斜位に施す
82	45		褐色土	Ｃ７	縄文土器	深鉢	晩期	内面10YR5/3にぶい黄褐色　外面10YR3/1黒褐色	石英、長石含む					沈線(幅５㎜)で区画している
83	45		黒色土	Ｂ３	縄文土器	深鉢	晩期	2.5YR4/4にぶい赤褐色	長石　細砂含む	口縁部				大洞ＢＣ式併行 29と同一個体
84	45		褐色土	Ｃ６	縄文土器	深鉢	晩期	10YR5/4にぶい黄褐色	長石、雲母、細砂含む	口縁部一部残存				大洞ＢＣ式併行
85	45		黒色土	Ｂ６ Ｂ７	須恵器	蓋		2.5Y6/1黄灰色　釉 5Y4/2灰オリーブ色	黒斑有り	口縁部1/8残存　体部1/3残存　摘みほぼ完形	(10.8)		1.9	
86	45		黒色土	Ｂ７	須恵器	蓋		外面10YR6/3にぶい黄橙色　内面10YR6/2灰黄褐色	黒色、白色粒子含む　緻密	口縁部～体部1/5残存	(11.2)			
87	45		黒色土	Ｚ６	土師器	坏		7.5YR7/4にぶい橙色	暗褐色の粒子を少量含む 緻密	口縁部～体部1/8弱残存	(17.0)			全体的に摩耗している
88	45		黒色土	Ｚ８	土師器	坏		10YR7/4にぶい黄橙色	暗褐色の粒子を少量含む 緻密	口縁部～体部1/8弱残存	(13.0)			全体的に摩耗している

第９表　出土遺物観察表（土器・陶器３）

番号	挿図番号	図版番号	出土位置	区画	種別	器種	時期	色　調	胎　土	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　考
89	45		黒色土	Ｂ８	須恵器	長頸瓶		2.5Y6/2灰黄色	黒色粒子含む　緻密	口縁部～体上部1/4残存	(10.0)			
90	45		褐色土	Ｃ７	灰釉陶器	長頸瓶		断面2.5Y7/3浅黄色 5Y6/1灰色	長石含む	体部一部残存 高台1/4残存		(7.0)		降灰釉付着
91	45		黒色土 褐色土	Ｂ７	須恵器	ﾌﾗｽｺ瓶		2.5Y8/3淡黄色	１㎜大の細砂含む	体部1/4残存				体部径16.0cm
92	45		黒色土	Ｂ５	須恵器	双耳坏		7.5Y5/1灰色	径２㎜の礫、長石含む 炭化物付着	体部一部残存 耳完形				
93	45		褐色土	Ｂ８	須恵器	甕		2.5Y6/1黄灰色	２㎜大の細砂含む	体部一部残存				
94	45		黒色土	Ａ７	須恵器	甕		5Y6/1灰色	長石含む	口縁部1/16残存　体部一部残存	(21.9)			
95	45		褐色土	Ｃ８	須恵器	甕		5B6/1青灰色	黒色、白色粒子含む　緻密	体部1/8残存				
96	45		黒色土 褐色土	Ｂ７	須恵器	甕		外面2.5Y4/1黄灰色 内面2.5Y6/2灰黄色	黒色、白色粒子含む　緻密	口縁部～体部一部破片	(30.3)			
97	46		Ｔ１		須恵器	坏身		2.5Y7/2灰黄色	径１㎜以下の長石微量含む	底部1/5残存		(11.09)		
98	46		黒色土	Ａ６	山茶椀類	小Ⅲ		7.5YR8/6浅黄橙色	密　橙色粒子微量含む	口縁～底部約1/5残存	(7.9)	(4.5)	1.6	
99	46		黒色土	Ｂ２	山茶椀類	小Ⅲ		7.5YR8/4浅黄橙色	密　橙色粒子微量含む	口縁～底部約1/3残存	(7.7)	(3.2)	1.6	
100	46		Ｔ１		山茶椀類	小Ⅲ		2.5Y6/1黄灰色	密	底部～胴部約1/4残存		(4.5)		
101	46		黒色土	Ｚ７	山茶椀類	小Ⅲ		10YR8/4浅黄橙色	密　橙色粒子　長石少量含む	口縁～底部約1/5残存	(6.4)	(3.1)	2.0	
102	46		黒色土	Ａ６	山茶椀類	小Ⅲ		5YR7/6橙色	密　橙色粒子　径４㎜大の礫含む	口縁～底部約3/4残存	8.5	4.9	2.0	
103	46		Ｔ１		山茶椀類	小Ⅲ		7.5YR7/6橙色	径１㎜以下の長石　赤色粒子微量含む	口縁部～底部3/4残存	(7.8)	(5.1)	1.5	糸切り痕
104	46		Ｔ5-1		山茶椀類	小Ⅲ		7.5YR7/4にぶい橙色	径２㎜以下の赤色粒子微砂粒含む	口縁部～体部1/3残存	(7.5)	(4.0)	1.3	糸切り痕未調整
105	46		Ｔ5-1		山茶椀類	小Ⅲ		N6/灰色	径１㎜以下の黒色粒子少量含む　黒色の吹き出しあり	口縁部～底部1/4残存	(8.3)	(4.3)	2.1	糸切り痕あり
106	46		Ｔ１		山茶椀類	山茶椀		N5/0灰色	密	底部～胴部約1/7残存		(5.3)		
107	46		Ｔ7-2		山茶椀類	山茶椀		2.5Y5/1黄灰色	密	底部～胴部約1/2残存		(5.8)		
108	46		Ｔ８		山茶椀類	山茶椀		7.5YR6/3にぶい褐色	径４㎜大の礫含む	底部～胴部1/3残存		(7.2)		
109	46		Ｔ１		山茶椀類	山茶椀		5Y6/1灰色	径３㎜大の礫含む	底部～胴部約1/3残存		(7.2)		
110	46		Ｔ８		山茶椀類	山茶椀		10YR6/2灰黄褐色	径２㎜大の礫含む	底部～胴部1/7残存		(7.2)		
111	46		Ｔ7-1		山茶椀類	山茶椀		2.5Y6/1黄灰色	径１㎜以下の長石	底部～胴部1/5残存		(7.2)		
112	46		褐色土	Ｅ２	山茶椀類	山茶椀		2.5Y6/1黄灰色	１㎜大の白色粒子、５㎜大の礫含む　緻密	体部一部残存 底部3/8残存		(6.4)		底部糸切り痕残存 高台端部スノコ状圧痕残存　底部粘土塊付着
113	46		暗褐色土	Ｚ７	山茶椀類	山茶椀		5Y6/2灰オリーブ色	５㎜・６㎜の礫、黒色粒子含む　緻密	口縁部～体部1/4弱残存		(7.4)		底部糸切り痕残存 墨書残存
114	46		黒色土	Ｚ６・７	山茶椀類	山茶椀		5YR7/8橙色	密　砂粒　長石　橙色粒子含む	底部3/4残存		(7.4)		
115	46		黒色土	Ｚ７	山茶椀類	山茶椀		5YR7/6橙色	密　橙色粒子微量含む	口縁～底部約1/8残存	(11.4)	(6.5)	2.5	糸切り痕
116	46		黒色土 暗褐色土	Ｚ６・７	山茶椀類	山茶椀		外面5Y6/1灰色　内面5YR6/2灰褐色	１㎜大の細砂含む	口縁部1/23残存　体部一部残存　高台部1/11強残存	(16.6)	(7.0)	4.9	
117	46		黒色土	Ｚ７	山茶椀類	山茶椀		10YR8/4浅黄橙色	密	底部約1/2残存		(7.6)		
118	46		褐色土	Ｃ１	山茶椀類	山茶椀		2.5Y6/2灰黄色	長石　炭化物含む	体部一部残存 底部1/2強残存		(6.4)		底部糸切り痕残存 内面重ね焼き痕
119	46		排土		常滑	甕		釉10YR5/3にぶい黄褐色　断面2.5Y6/1黄灰色	長石含む　炭化物付着	口縁部1/6残存　体部一部残存	(10.6)			
120	46		Ｔ８		志戸呂	香炉		断面露胎7.5YR4/3褐色 釉 7.5YR3/2　黒褐色	径１～５㎜の長石　径１㎜以下の赤色粒子含む	底部1/4残存		(13.4)		
121	46		黒色土	Ａ７	かわらけ			7.5YR7/6橙色	密　橙色粒子少量含む	ほぼ完形	(8.3)	6.6	1.6	非ロクロ
122	46		黒色土	Ａ７	かわらけ			5YR8/4淡橙色	密　橙色粒子微量含む	口縁～底部約1/12残存	(11.8)	(6.6)	2.6	
123	46		暗褐色土	Ｂ４	かわらけ			10YR8/4浅黄橙色	密　橙色粒子微量含む	口縁部約1/4残存	(11.2)			
124	46		黒色土	Ａ６	かわらけ			7.5YR7/6橙色	密　橙色粒子微量含む	口縁～底部約1/5残存	(11.1)			

第10表　出土遺物観察表（石器・石製品１）

番号	挿図番号	図版番号	器種	遺構名	区画	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率	石材	備　考
5	14		乳棒状石斧	ＳＢ２	Ｚ８	暗褐色土	12.78	4.59	3.62	332.00	両端部欠	砂岩	被熱　縄文か？
28	23		扁平片刃石斧	ＳＢ10	Ｄ５	黒色土	2.71	2.52	0.82	11.45	完形	緑色凝灰岩	使用頻度顕著
37	27		柱状片刃石斧	ＳＢ12(壁溝内)	Ｄ３	褐色土	4.36	2.35	1.42	22.54	完形	緑色凝灰岩	使用頻度顕著
46	32		砥石・敲石	ＳＢ７	Ｃ６	褐色土	9.41	5.23	2.05	127.30	完形	砂岩	主面部に砥面をもち、端部に敲打痕
47	32		砥石	ＳＢ12	Ｄ４	黒色土	8.37	4.05	1.45	81.26	端部欠	凝灰岩	砥面は顕著でわずかに湾曲する
48	32		砥石	ＳＢ16	Ｄ２	黒色土	23.74	21.73	6.95	5138.00	左側欠	砂岩	主面部に砥面
49	32		砥石	ＳＢ11(Ｐ11内)	Ｃ・Ｄ４	黒色土	32.57	12.68	11.75	6400.00	断片	砂岩	被熱による破損顕著、主面部に磨耗顕著
50	32		砥石	ＳＢ５	Ｃ７	黒色土	28.46	13.22	4.49	2502.00	完形	砂岩	主面部に砥面
51	32		台石	ＳＢ15	Ｃ・Ｄ３	黒色土	29.40	22.25	8.90	8415.00	完形	砂岩	主面部がわずかに磨耗
52	33		砥石	ＳＢ11	Ｃ・Ｄ４	黒色土	23.82	9.77	9.44	2962.00	完形	砂岩	被熱、表裏、両側辺に砥面形成、正面の砥面が顕著、磨製石斧の砥石と推定
53	33		台石	ＳＢ４	Ｃ８	黒色土	17.48	11.76	7.35	1960.00	断片	砂岩	被熱
54	33		台石	ＳＢ15	Ｃ・Ｄ３	黒色土	36.89	42.20	10.96	14375.00	半欠	砂岩	破損顕著、主面部中央付近に磨耗あり
55	33		台石	ＳＢ11	Ｃ・Ｄ４	黒色土	26.55	24.27	8.16	8085.00	完形	砂岩	主面部がわずかに磨耗
56	33		台石	ＳＢ８	Ｃ６	黒色土	36.81	26.33	13.30	15080.00	完形	砂岩	主面部に磨耗あり
57	33		礫断片	ＳＢ12	Ｄ４	黒色土	9.18	5.77	1.92	150.10	断片	凝灰岩	52の砥石と同じ石材、砥石の素材の可能性
58	33		用途不明品	ＳＢ12	Ｄ４	黒色土	7.47	6.79	1.24	91.44	完形	頁岩	側辺の稜線部に磨耗痕顕著
125	47		打製石鏃		Ｂ５	黒色土	2.20	2.29	0.38	1.09	先端欠	凝灰岩	
126	47		打製石鏃		Ａ７	黒色土	2.61	1.66	0.36	0.84	完形	凝灰岩	
127	47		打製石鏃		Ｂ５	暗褐色土	3.71	1.47	0.65	2.90	先端欠	凝灰岩	
128	47		打製石鏃		Ｂ４	暗褐色土	2.15	1.67	0.39	1.35	完形	凝灰岩	
129	47		打製石鏃		Ｂ４	暗褐色土	2.34	1.75	0.62	1.67	完形	凝灰岩	石鏃中央部に島状の瘤がある
130	47		打製石鏃		Ｂ４	暗褐色土	1.80	1.38	0.40	0.59	完形	凝灰岩	
131	47		打製石鏃	ＳＢ２	Ｚ８	黒色土	2.00	1.70	0.30	0.99	完形	泥岩	摩滅が進行
132	47		打製石鏃		Ｂ３	暗褐色土	1.90	1.30	0.20	0.62	脚と先端が欠損	黒曜石	先端の状態から失敗品か補修品
133	47		打製石鏃	ＳＢ７	Ｃ６	黒色土	(1.60)	1.00	0.40	0.50	脚部欠損	泥岩	摩滅が進行
134	47		打製石鏃		Ｂ４	暗褐色土	1.30	1.40	0.30	0.65	脚部と先端部欠損	チャート	失敗品又は廃棄品、石匙の形態とも取れる
135	47		打製石鏃		Ｂ６	黒色土	(2.50)	(1.40)	(0.30)	0.78	脚部と先端部欠損	頁岩	
136	47		横形石匙		Ｂ３	黒色土	3.79	5.47	1.39	21.37	完形	凝灰岩	
137	47		石匙	ＳＢ11	Ｃ４	黒色土	3.00	4.10	1.40	8.56	完形	チャート	
138	47		横形石匙		Ｂ５	暗褐色土	5.68	6.05	1.18	27.23	刃部欠	凝灰岩	
139	47		横形石匙		Ｂ３	暗褐色土	3.01	4.22	0.66	6.25	完形	凝灰岩	
140	47		横形石匙		Ｂ４	暗褐色土	4.90	6.64	1.44	35.02	上端部欠	凝灰岩	素材末端辺に微細剥離顕著
141	47		縦形石匙		Ｂ２	暗褐色土	7.87	5.97	1.35	55.31	刃部断片	凝灰岩	周辺部欠損が激しい、被熱
142	47		縦形石匙		Ｂ４	暗褐色土	5.06	3.02	1.13	11.70	完形	凝灰岩	
143	48		石錐		Ｂ３	黒色土	4.22	2.94	1.08	8.52	左側欠	凝灰岩	
144	48		石錐		Ｂ３	黒色土	2.30	2.00	1.40	3.09	完形	チャート	
145	48		スクレイパー		Ｂ２	暗褐色土	3.20	3.30	1.00	11.20	完形	チャート	円形
146	48		スクレイパー		Ｂ５	暗褐色土	3.40	3.80	1.10	11.40	完形	泥岩	

第11表　出土遺物観察表（石器・石製品２）

番号	挿図番号	図版番号	器種	遺構名	区画	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率	石材	備　考
147	48		スクレイパー		Ｂ３	黒色土	3.90	4.50	1.30	25.51	完形	泥岩	
148	48		スクレイパー	ＳＢ15	Ｄ３	褐色土	2.30	2.90	0.80	4.09	完形	泥岩	凹刃
149	48		スクレイパー		Ｂ４	黒色土	4.80	3.40	1.10	16.80	完形	泥岩	
150	48		スクレイパー		Ｃ１	褐色土	5.10	3.30	1.30	20.04	完形	チャート	石匙のような突起物有
151	48		スクレイパー		Ｂ３	暗褐色土	3.00	3.40	1.20	10.52	一部欠損	泥岩	
152	48		スクレイパー		Ａ６	黒色土	7.30	4.60	2.00	53.86	完形	泥岩	
153	48		スクレイパー		Ｂ３	暗褐色土	4.50	5.10	1.00	15.83	完形	頁岩	
154	48		スクレイパー		Ｂ３	暗褐色土	2.70	5.60	1.30	15.07	完形	泥岩	
155	48		磨製石鏃		Ｚ７	黒色土	5.17	2.32	0.35	4.58	完形	緑色凝灰岩	基部に穿孔途中の孔がある
156	48		磨製石鏃		Ｂ４	暗褐色土	(3.00)	(1.00)	(0.30)	0.85	縦割れ	泥岩	
157	48		磨製石斧		Ｂ２	暗褐色土	6.71	4.94	0.99	39.58	基部欠	泥岩	
158	49		打製石斧		Ｂ３	黒色土	7.16	3.47	1.62	49.85	完形	泥岩	正面刃部磨耗顕著
159	49		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	7.56	3.77	1.76	60.41	刃部欠	凝灰岩	
160	49		打製石斧		Ｂ４	黒色土	9.20	4.00	2.10	93.52	完形	頁岩	刃部は未加工使用
161	49		打製石斧		Ｂ２	暗褐色土	6.75	4.76	1.79	63.70	基部断片	砂岩	
162	49		打製石斧		Ｃ３	褐色土	(7.00)	4.00	2.10	64.09	頭部	粗粒砂岩	
163	49		打製石斧		Ｂ６	暗褐色土	9.80	5.10	1.90	112.64	完形	細粒砂岩	
164	49		打製石斧		Ｂ５	暗褐色土	8.90	4.30	1.50	64.98	頭部の一部欠損	頁岩	自然面に擦痕有
165	49		打製石斧		Ｂ５	暗褐色土	(8.60)	4.20	1.40	55.42	頭部欠損	細粒砂岩	円ノミ刃　頭部に若干の抉りが入る
166	49		打製石斧		Ａ７	黒色土	9.00	3.70	1.40	57.24	中間～刃部一部欠損	頁岩	
167	49		打製石斧		Ｂ５	黒色土	(8.50)	4.00	1.80	69.53	刃部	頁岩	
168	50		打製石斧		Ｂ３	黒色土	(6.30)	3.90	1.30	37.52	刃部	頁岩	サイドに使用痕あり、頭部の欠損は早く欠損後も使用していたと思われる
169	50		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	6.47	3.95	1.29	35.92	刃部欠	泥岩	
170	50		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	6.31	4.24	1.81	51.92	刃部断片	凝灰岩	刃部磨耗顕著
171	50		打製石斧	ＳＢ13(周溝内)	Ｄ４	黒色土	11.40	4.00	2.20	102.74	完形	細粒砂岩	刃部と頭部は円ノミ形となっている
172	50		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	11.87	4.10	2.43	138.86	完形	凝灰岩	被熱
173	50		打製石斧		Ｂ２	暗褐色土	9.00	4.60	2.30	83.27	完形	中粒砂岩	
174	50		打製石斧		Ｂ５	暗褐色土	11.80	3.90	3.30	179.14	完形	細粒砂岩	頭部の欠損は比較的早い
175	50		打製石斧		Ｂ６	暗褐色土	(6.10)	(5.40)	1.70	61.04	頭部	頁岩	
176	51		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	9.10	6.50	1.84	108.79	完形	砂岩	
177	51		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	11.88	6.45	3.63	267.89	完形	泥岩	被熱
178	51		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	7.68	4.90	1.35	50.01	基部欠	泥岩	刃部磨耗顕著
179	51		打製石斧		Ｂ６	黒色土	6.80	4.50	1.40	53.07	刃部	頁岩	全面に使用したような痕跡がある、頭部欠損後敲石的な使い方をしたと思われる
180	51		打製石斧	ＳＤ８	Ｄ４	暗褐色土	18.30	7.50	3.30	590.75	完形	粗粒砂岩	
181	51		打製石斧		Ｂ６	黒色土	8.40	5.70	2.60	138.15	頭部一部欠損	頁岩	
182	51		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	(5.60)	(6.80)	2.40	81.08	刃部	頁岩	使用中に欠損した可能性有
183	52		礫器or打製石斧		Ｂ３	暗褐色土	7.00	9.50	1.80	130.81	完形	中粒砂岩	頭部欠損か半円か判断が困難

第12表　出土遺物観察表（石器・石製品３）

番号	挿図番号	図版番号	器種	遺構名	区画	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率	石材	備考
184	52		打製石斧		Ｂ３	暗褐色土	(8.10)	3.90	1.40	50.06	完形	細粒砂岩	刃部と頭部は調整痕ではなく使用痕で上下を使用していた可能性有、成形方法からとらえれば図面は上下逆
185	52		打製石斧		Ｂ３	暗褐色土	9.00	7.00	2.10	69.53	完形	頁岩	
186	52		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	6.39	5.54	2.31	75.39	刃部断片	砂岩	
187	52		打製石斧	ＳＢ10	Ｄ５	黒色土と褐色土	10.60	4.90	1.50	83.81	完形	中粒砂岩	欠損の可能性有、中間部を境に上と下は調整を意識的に分けている
188	52		打製石斧	ＳＢ３	Ｂ７	暗褐色土	9.10	4.70	1.90	90.71	完形	頁岩	上下使用した痕跡有
189	52		打製石斧	ＳＢ15	Ｃ３	黒色土	10.90	6.50	2.60	141.93	完形	細粒砂岩	粗製段階の形態を優先させた製作となっている、結果として石匙の大きいサイズのような形をとったためサイドも使用した痕跡がある
190	52		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	11.10	4.40	2.60	141.12	完形	細粒砂岩	
191	53		打製石斧		Ｂ５	暗褐色土	(8.40)	4.60	2.30	86.09	頭部欠損	細粒砂岩	
192	53		打製石斧		Ｂ６	暗褐色土	(7.50)	(4.10)	1.90	59.86	刃～中間部	中粒砂岩	
193	53		打製石斧		Ａ７	黒色土	6.00	2.40	1.40	19.31	完形	頁岩	
194	53		打製石斧	ＳＢ２	Ａ８	黒色土	11.40	6.00	2.80	206.97	完形	細粒砂岩	湾曲している、手で握ると丁度使い勝手が良い
195	53		打製石斧		Ｂ６	黒色土	(10.70)	4.20	2.30	127.05	刃部～中間部	頁岩	
196	53		打製石斧		Ｂ２	暗褐色土	8.02	6.87	2.05	118.66	刃部断片	砂岩	
197	53		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	9.52	6.43	1.41	99.75	基部欠	泥岩	被熱、刃部磨耗顕著
198	53		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	7.76	3.32	1.05	25.27	完形	泥岩	
199	53		打製石斧	ＳＢ11	Ｄ４	褐色土	(10.70)	6.20	3.60	201.73	中部から頭部欠損	細粒砂岩	
200	54		打製石斧		Ｂ２	黒色土	(7.40)	(5.50)	1.30	83.27	頭部	中粒砂岩	風化によるものか石質によるものか剥離面はゴツゴツしている。当初はひとつひとつを剥離面ととらえたが一面に統制しなおす
201	54		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	6.02	5.87	1.81	74.31	基部断片	泥岩	
202	54		打製石斧		Ｃ１	褐色土	(8.90)	(5.10)	3.40	124.68	頭部のみ	細粒砂石	打製石斧の類例なし
203	54		打製石斧or石核		Ｂ２	黒色土	8.40	5.80	2.20	104.40	完形	泥岩	
204	54		打製石斧		Ｂ４	暗褐色土	8.14	5.50	1.20	55.04	刃部欠	泥岩	
205	54		打製石斧		Ｂ５	暗褐色土	9.00	4.90	1.20	52.54	完形	頁岩	
206	54		打製石斧		Ａ８	褐色土	10.61	6.58	2.45	167.36	基部欠	凝灰岩	
207	54		打製石斧		Ｂ２	黒色土	(6.30)	(5.50)	1.50	35.55	頭部のみ	中粒砂岩	
208	55		打欠石錘		Ｚ６	黒色土	3.84	3.57	0.86	11.73	完形	泥岩	
209	55		打欠石錘		Ｚ６	黒色土	3.90	3.39	1.03	18.88	完形	泥岩	
210	55		打欠石錘		Ｚ６	黒色土	4.44	3.77	1.08	26.54	完形	泥岩	
211	55		打欠石錘		Ａ５	黒色土	4.86	3.75	1.52	38.88	完形	泥岩	
212	55		打欠石錘		Ｂ５	黒色土	5.08	3.97	1.25	31.25	完形	泥岩	
213	55		打欠石錘		Ｂ５	黒色土	5.00	4.43	1.22	32.08	完形	砂岩	
214	55		打欠石錘		Ａ５	黒色土	4.19	3.70	1.17	22.85	右側欠	泥岩	
215	55		打欠石錘		Ｂ５	黒色土	4.71	4.16	1.40	40.13	完形	泥岩	
216	55		打欠石錘		Ｂ３	暗褐色土	3.86	3.25	1.00	15.79	完形	泥岩	
217	55		打欠石錘		Ｂ２	黒色土	5.52	5.41	1.73	77.50	完形	泥岩	左側辺にも抉り作出
218	55		打欠石錘		Ｂ３	暗褐色土	5.06	4.37	1.66	47.31	完形	泥岩	
219	56		打欠石錘		Ｂ４	暗褐色土	5.40	5.35	1.68	65.57	完形	泥岩	

第13表　出土遺物観察表（石器・石製品４）

番号	挿図番号	図版番号	器種	遺構名	区画	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率	石材	備　考
220	56		打欠石錘		Ｂ４	暗褐色土	5.58	4.83	1.43	50.59	完形	泥岩	
221	56		打欠石錘		Ｂ４	暗褐色土	4.51	3.52	0.88	17.27	完形	泥岩	
222	56		打欠石錘		Ｂ４	暗褐色土	4.51	3.81	1.23	28.96	完形	泥岩	
223	56		打欠石錘		Ｂ４	暗褐色土	4.80	3.71	1.18	30.50	完形	砂岩	
224	56		打欠石錘		Ｂ４	暗褐色土	4.61	3.75	1.25	28.43	完形	砂岩	
225	56		打欠石錘		Ｂ４	暗褐色土	4.47	4.07	1.36	29.84	完形	泥岩	
226	56		打欠石錘		Ｂ４	暗褐色土	5.30	3.72	0.94	26.08	完形	泥岩	
227	56		打欠石錘		Ｂ４	暗褐色土	4.77	4.20	1.24	31.73	裏面欠	泥岩	
228	56		打欠石錘		Ｂ６	暗褐色土	5.24	4.40	1.40	41.79	完形	砂岩	
229	57		打欠石錘		Ｃ４	褐色土	5.67	4.92	1.99	68.71	完形	砂岩	
230	57		打欠石錘			排土	5.18	4.26	1.44	42.17	完形	砂岩	
231	57		敲石		Ｂ４	暗褐色土	11.92	9.17	2.77	410.00	完形	砂岩	主面部に敲打痕の集中、側面に敲打痕
232	57		敲石		Ｂ５	暗褐色土	7.08	6.70	5.81	324.00	完形	砂岩	端部および周縁部に敲打痕
233	58		敲石		Ｂ５	暗褐色土	7.66	6.72	2.52	163.25	完形	砂岩	主面部に敲打痕の集中
234	58		敲石		Ｂ５	暗褐色土	5.67	5.28	3.81	125.50	完形	砂岩	主面部に敲打痕の集中
235	58		敲石		Ｂ４	暗褐色土	6.72	4.87	4.64	190.60	完形	砂岩	上下端に敲打痕
236	58		敲石素材		Ｂ４	暗褐色土	6.19	4.76	4.38	167.80	完形	砂岩	投弾の可能性あり
237	58		敲石素材		Ｂ４	暗褐色土	5.50	5.20	2.87	108.10	完形	砂岩	投弾の可能性あり
238	58		敲石素材		Ｂ４	暗褐色土	6.05	5.87	4.67	212.60	完形	砂岩	投弾の可能性あり

第４節　まとめ

上ノ山遺跡は金谷地区としては、発掘調査によって内容が明らかになった数少ない遺跡の一つになった。第二東名の建設に伴う発掘調査であったため、明らかになった部分は路線幅に限られるが、周辺にある周知の弥生時代の遺跡よりもさらに古い弥生時代中期後半の集落の状態を知ることができた。また、これまで周辺で把握されていない奈良時代の資料が得られたことは、急峻な丘陵と河川の氾濫原が大半を占めるこの地域における当時の集落立地の一端を示唆するものとして興味深い。

縄文時代の集落

遺跡の草創期にあたる縄文時代では、中期～晩期の資料が得られている。土器をみると、今回の出土点数のほぼすべてにあたる、実測し掲載し得た25点中17点が中期、１点が後期、３点が晩期、１点が後～晩期、時期が判然としないもの３点となり、中期の後は晩期がやや多いことが分かる。彼らの精神世界やその流儀を垣間見ることができる興味深い事例として、埋甕を伴うＳＦ９が竪穴住居跡よりもやや離れた位置に設けられていることも、土器量と相関して遺跡の盛期が中期にあることを示している。近接する駿河山遺跡からも中期の埋甕が複数基検出されているので、両者の比較によりこの事例をより深く理解することができるだろう。また、当該期の竪穴住居跡は２軒を想定したが、いずれも尾根部に近接して建てられたものなので、同時期には存在し得ない。尾根上の他の部分に住居が建てられていないことは、住居１軒の生活空間を暗示しているのであろうか。

さて、大井川流域の縄文時代遺跡は中期を主体とするものが多いが、上・中流域においては割田原遺跡（静岡市）、下開土遺跡、大島遺跡、山王遺跡、上長尾遺跡（川根本町）、天王山遺跡、家山原遺跡（川根町）などに、下流域では風西遺跡（島田市）に後～晩期の資料がある。これら遺跡の分布から、後～晩期の遺跡は下流域に行くにしたがって減少する傾向が窺える。このような状況の中で、本遺跡から後～晩期の資料が得られた意義は大きい。近接する丘陵上に立地する駿河山遺跡では当該期の資料が得られていないので、中期段階の集落を営むことに適した台地上すべてが後期段階に継続するわけではない。より条件の良い土地が周囲にありながら、彼らがこの地を晩期にいたるまでの居住地とした理由は十分理解できないが、自然条件のほか集落を構成する集団の継続性や、彼らがもつ居住域への専有性が作用していたことも想定しなければならないだろう。また、遺物では土器の割に打製石斧が多量に出土していることが興味深い。このように打製石斧が土器量を凌駕する傾向は、半場遺跡（浜松市:旧佐久間町）、蜆塚遺跡（浜松市）、清水天王山遺跡（静岡市清水区）などにもみられる。

弥生時代の集落

弥生時代の集落は、調査区全域が耕作等によって削平されていることや、周囲の天地返しにより失われている住居跡があることを想定すれば、本来は今回検出された軒数を上回るもので構成されていたと考えられる。今回検出された住居跡16軒中、６軒が中期後半（拡張を含む）、７軒が後期、時期不明が３軒となる。

中期後半の住居跡は、丘陵上部に３軒（ＳＢ１・２・４）、尾根部に３軒（うち２軒は拡張）が分布する。ＳＢ２・４・10はそれぞれが20m前後の隔たりを持つが、ＳＢ10とＳＢ12・18は近接するので、集落の中でも近い関係であったとも考えられる。住居のプランはいずれも楕円形（拡張されているＳＢ２の当初形も楕円形と理解する）であり、入り口を南～南南東側に開いていたと想定できることにも、一定の規範が感じられる。このように、埋まりかかってくぼみとなった埋没谷を取り巻く丘陵部に配置された集落であったと思われる。

後期の住居跡は尾根部に集中する傾向がある。したがって、中期後半の集落のように埋没谷を挟んで

西側にまでも展開するとは即断できない。住居のプランは楕円形状を呈するものと円形〜角の張る円形を呈するものに大別される。特に楕円形状を呈する住居は、10〜20mおきに建てられている。間隔を置くことは中期後半の住居と同様であるが、相互の距離がまちまちであることは異なっている。これらはＳＢ11からＳＢ９、ＳＢ５へと直径40m程度の円弧に沿って建てられているように見える。上ノ山遺跡の場合、住居の乗る尾根の東側には殿ノ沢による谷があるために東側に住居を配置することは不可能であり、東南東を開いた配置とならざるを得ない。しかし、このような配置傾向は、東から東南東に住居を配することが可能な駿河山遺跡にもみられるため（河合2002)、意図的な作用とも考えられる。東〜東南東は太陽が昇る方向であるので、その方向を空けて集落内に生気を取り込むというような自然崇拝に基づいた住居の配置が、当該期のひとつのあり方であった可能性が高い。

彼らの生業を示す情報は少ない。しかし、丘陵を下れば大代川が形成した谷底平野に出ることができるという立地条件から、彼らが水田稲作を行っていたことを想像するのは難しいことではない。また、施孔途中の磨製石鏃や砥石の存在は、ここで石器の制作が行われていたことを示唆するものである。

古代の集落と墓域

古代の遺構は、中世の遺構とは分離が難しいが、おそらくより丘陵の上位にある掘立柱建物群が居住域であったものと推測される。遺物は少ないものの、奈良時代のものが比較的揃っている。特に須恵器の甕が複数個体存在することは、丘陵の下から随時水を汲み上げ溜めていたことを思わせる。また、須恵器の双耳坏は周辺でも出土例が極めて少ないものであり、集落内での特殊な目的に用いられた可能性を思わせる。

平安時代にいたると遺物が少なくなる。このなかで注目されるのが、火葬骨を入れて埋納した蔵骨器と捉えられる椀がかぶせられた灰釉陶器の壷である。当該期の灰釉陶器がこのほかはほとんど出土していないことから、平安時代、特に９世紀以降は集落域が廃絶し、11世紀にいたって墓域として利用されるようになったことを示している。

中世の集落と丘陵部における生活の放棄

この場所が再度集落化するのは中世前期である。近接する横岡窯の山茶椀類が搬入されていることからも明らかである。山茶椀類の中には、これまで「生焼け」として処理されてきた、にぶい橙色を呈しやや軟質に焼きあがる一群がある。特に小皿の形態に多いことは、ほぼ同時期と思われる非ロクロ系のかわらけの存在からも、これらがかわらけを指向して作られ、使用されたものと思われる。

古代〜中世前期のこの地域が質侶荘内に含まれることは先述したところである。上ノ山遺跡から見下ろす平野部には質侶郷が存在したと考えられるため、すでに平野部の積極的な開発は古代以前に開始されていたと思われる。そして横岡付近を中心に営まれる窯業も、荘園経営の一端を担っていたことが想定される。古代以降の平野部の開発がどのように進行していったのかを、上ノ山遺跡の成果から推し量ることは困難である。しかし、大井川の影響を受けにくい大代川の谷底平野や、谷の出口付近と牛尾山の南麓付近に想定される大井川による後背湿地は耕作域としてある程度の安定的な生産力をもっていたことは確かであろう。しかし、台地上に集落が占地することを鑑みれば、中世前期までの沖積地は場所によって居住するにはいまだに不安定であったと考えざるを得ない。

中世後期の集落は、金谷地区ではいまだ把握されていない。おそらく耕地となる沖積地の安定化に伴って丘陵での暮らしに終止符を打ち、丘陵裾部の比較的安定した地域に降りて現集落の母体となったのであろう。

このように今回の調査は、これまで発掘調査例の少なかった金谷地区においては、限られた範囲の調査にもかかわらず新たな発見を多く含んだ、示唆に富む内容となった。特に縄文時代〜弥生時代のあり方は、駿河山遺跡の内容と照らし合わせ熟考することによって、大井川流域の当時の生活を復元する糧

となるであろう。また、古代～中世前期の集落の立地が明らかになったことは、墓域と集落、あるいは窯などの生産域と集落といった、地域の景観を俯瞰するきっかけとなるだろう。

現地調査及び資料整理ならびに本書の作成にあたって、多くの方々のご協力をいただいた。また、次の方々からは、様々に御指導、御教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。(敬称略、順不同)
飯塚晴夫、石田　勉、澁谷昌彦、松井一明、島田市教育委員会のみなさん

参 考 文 献

今村啓爾　1985「五領ヶ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に－」『東京大学考古学研究室研究紀要』第４号　東京大学考古学研究室

岩本　貴　1995「菊川式土器における編年上の問題」『10周年記念論文集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

金谷町教育委員会　1983『駿河山２号墳発掘調査報告書』

金谷町史編さん委員会　2003『金谷町史』資料編四考古・窯業史

金谷町史編さん委員会　2004『金谷町史』通史編本編

加納俊介・石黒立人編　2002『弥生土器の様式と編年』東海編　木耳社

河合　修　2001「青灰色のうつわ～榛原郡金谷町横岡字釜谷の灰釉系陶器について～」『研究紀要第８号』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

河合　修　2002「金谷町駿河山遺跡」『静岡県における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会

菊川町教育委員会　1985『三沢西原遺跡発掘調査報告書』

国土庁土地局、静岡県地震対策課　1984『土地保全図』(静岡県)

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002『年報18』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　2003『すやん沢古窯跡』

静岡県　1992　『静岡県史』資料編９近世１

静岡県　1996　『静岡県史』資料編８中世４

静岡県考古学会シンポジウム実行委員会編　1998『縄文時代中期前半の東海系土器群について－北屋敷式土器の成立と展開－』静岡県考古学会シンポジウム'97

第８回東海埋蔵文化財研究会浜松大会実行委員会編　1991『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』Ⅰ、Ⅱ　東海埋蔵文化財研究会

静岡県考古学会　1983『弥生後期の集団関係』静岡県考古学会シンポジューム５

静岡県考古学会　1979『須恵器－古代陶質土器－の編年』静岡県考古学会シンポジューム２

澁谷昌彦　1982「旗指古窯陶器生産の年代について」『静岡県考古学研究』13　静岡県考古学会

島田市教育委員会　1988『山王前遺跡発掘調査報告書』

島田市教育委員会　1985『田ノ谷遺跡発掘調査報告書』

島田市教育委員会　1983『旗指古窯跡』

鈴木道之助　1991『図録　石器入門事典』縄文　柏書房

寺内隆夫　1987「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ－形式変遷における一視点」『長野県埋蔵文化財センター紀要　１』財団法人長野県埋蔵文化財センター

中嶋郁夫　1988「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』２号

中嶋郁夫　1993「東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模写」－「菊川様式」編－」『転機』４号

平野吾郎　1986「東海地方における弥生時代の石器について」『研究紀要』１　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

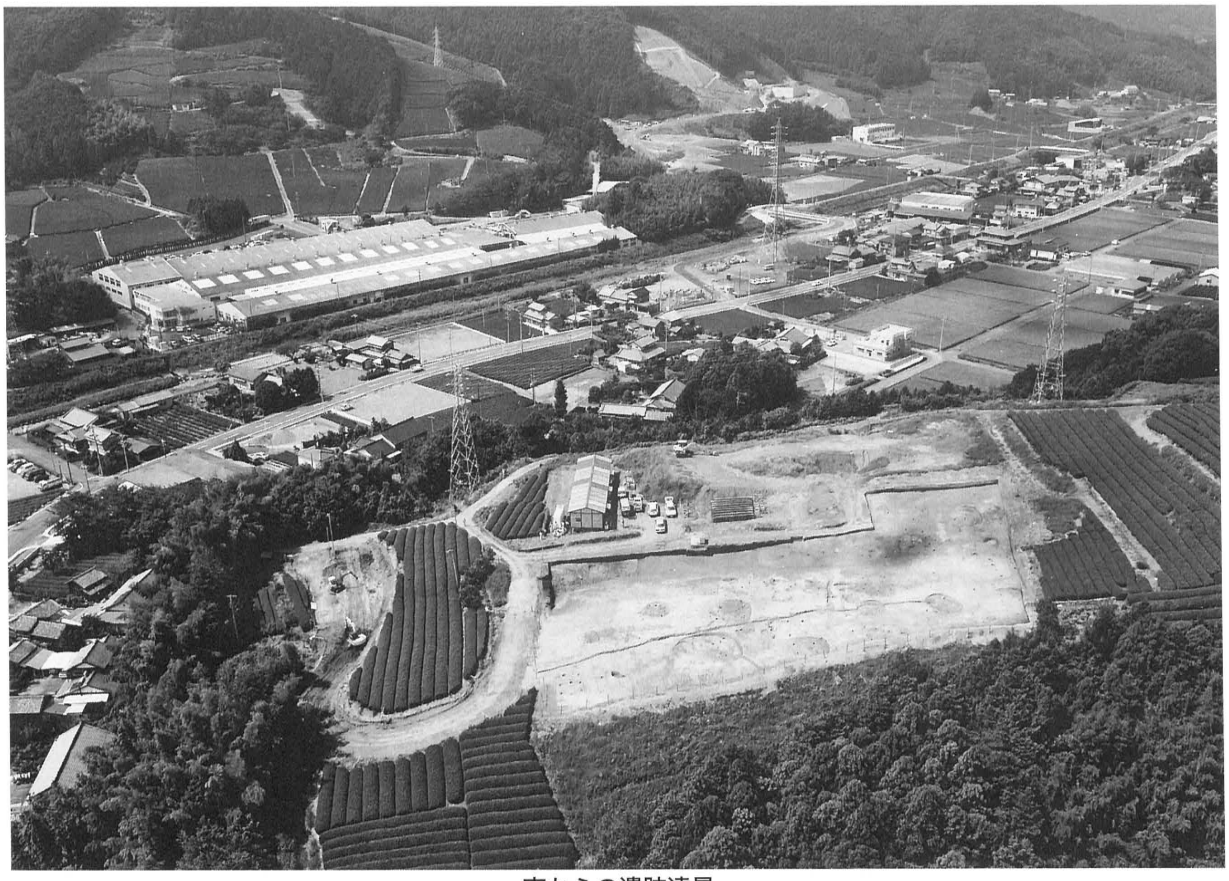
袋井市史編纂委員会　1983『袋井市史』通史編

松井一明　1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25　静岡県考古学会

三上徹也　1986「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51号　長野県考古学会

図　版

南からの遺跡遠景



東からの遺跡遠景

図版 2

西からの遺跡遠景

南からの遺跡遠景

調査区全景（俯瞰）

図版４

ＳＢ１～３

ＳＢ４・５

ＳＢ５～８・19

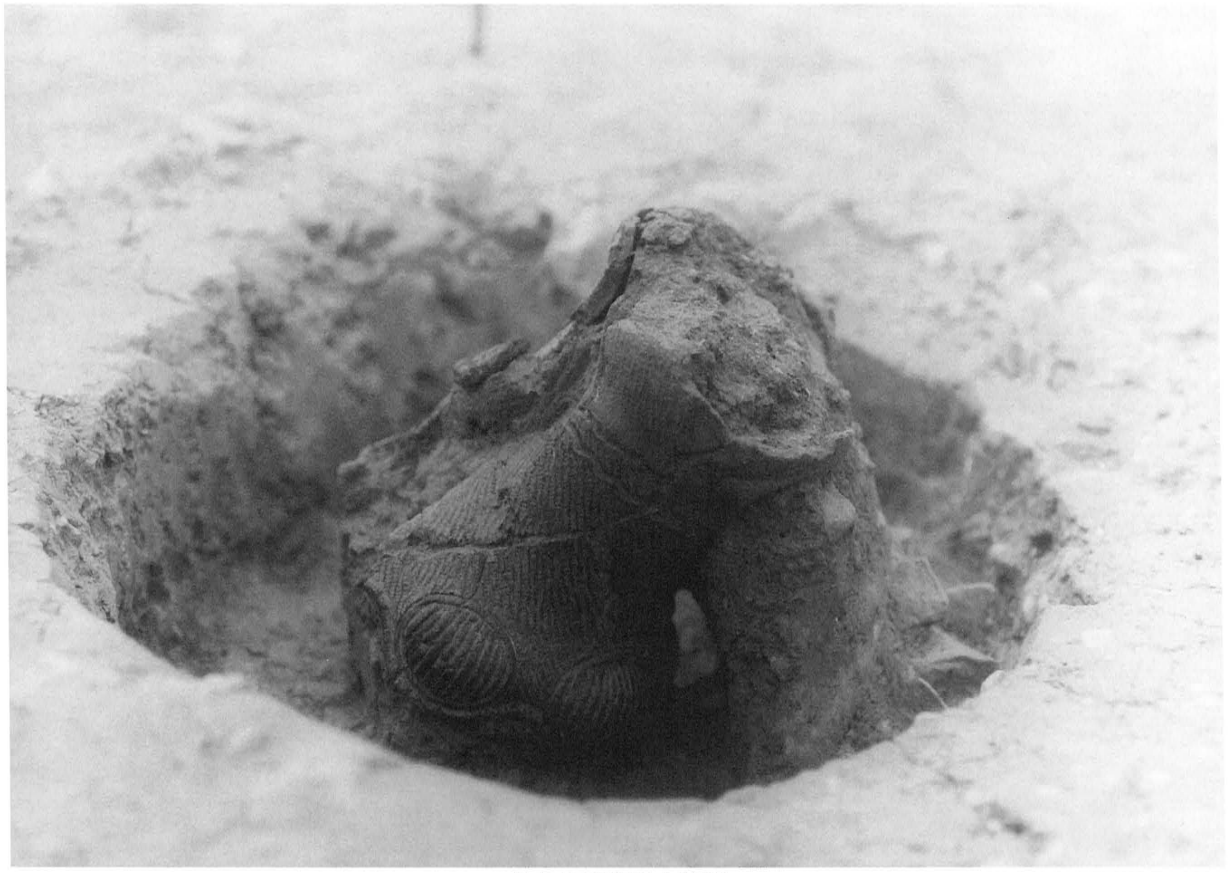
ＳＢ10～13・18

図版 6

ＳＢ12・13・18・15～17、ＳＨ８

ＳＢ11～18

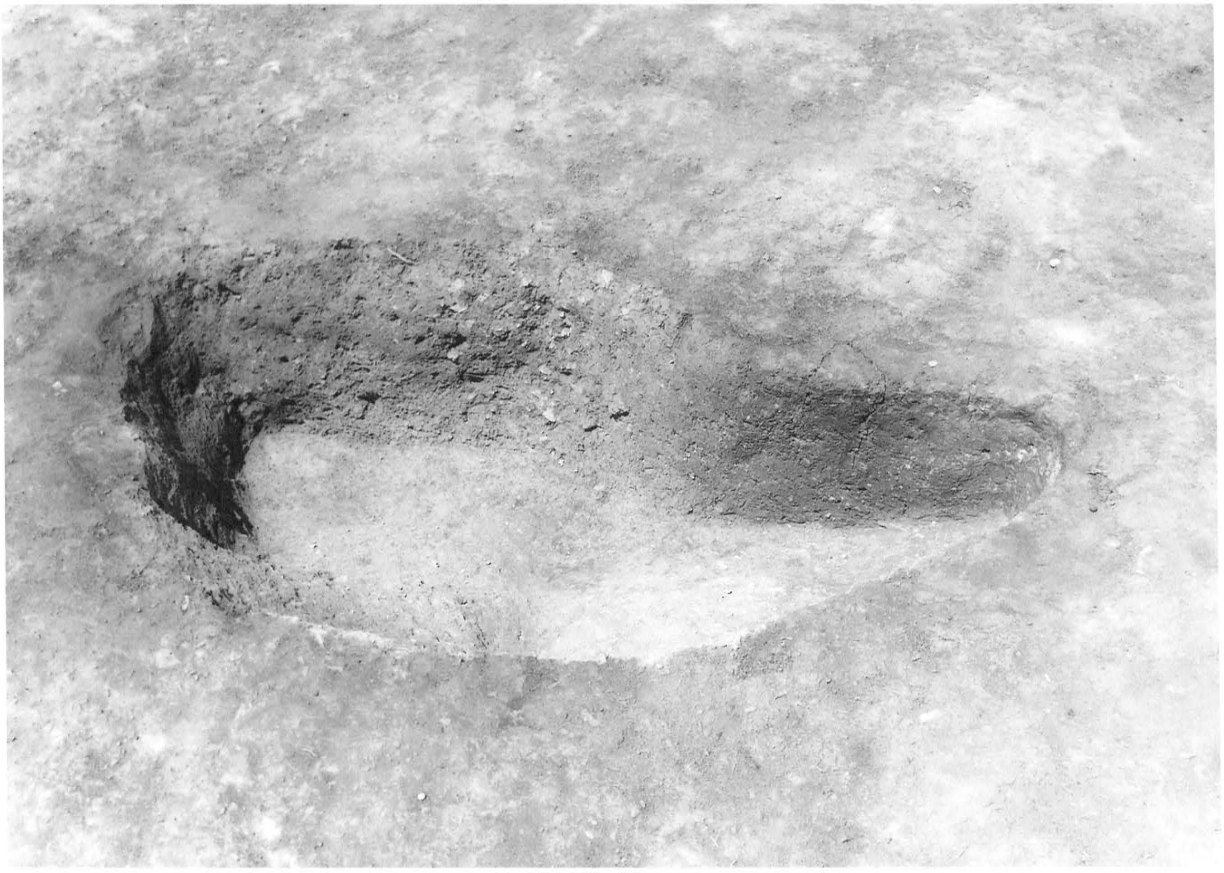
ＳＢ14（北より）



ＳＦ９遺物出土状況

図版 8

ＳＦ11半截状況（北より）



ＳＦ11（東より）

ＳＢ１・２（東より）

ＳＢ２西側炉跡

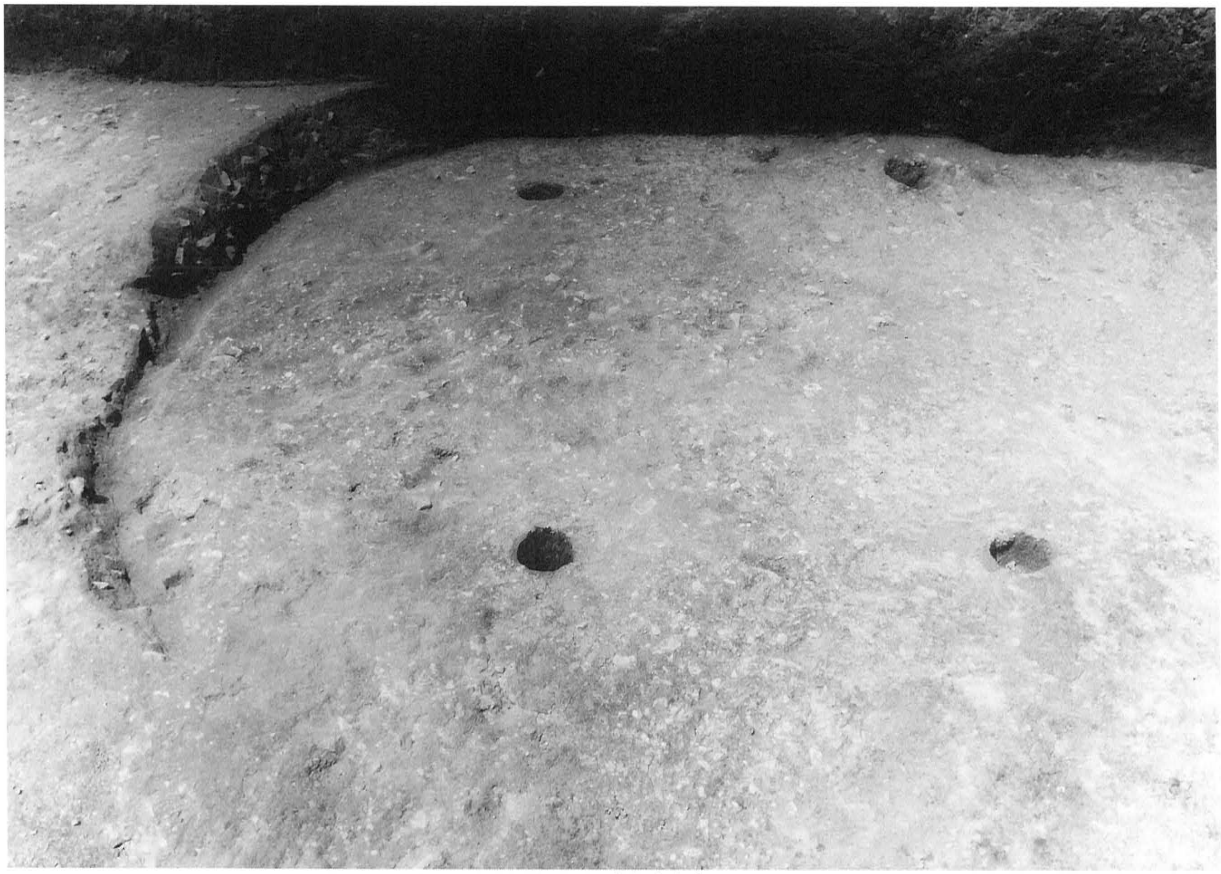
ＳＢ２東側炉跡

ＳＢ２遺物出土状況（壷　南東より）

ＳＢ２遺物出土状況（乳棒状石斧　北より）

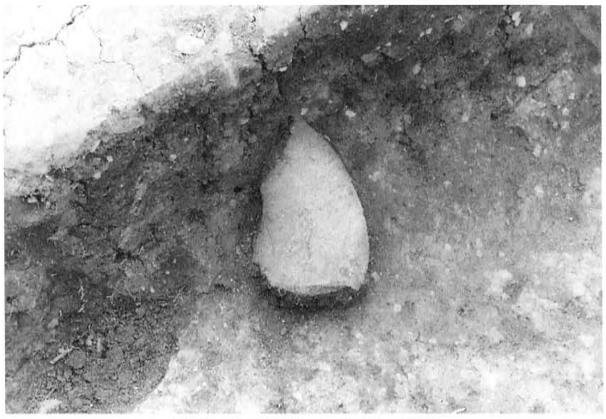
図版10

ＳＢ３（北より）



ＳＢ４（南より）

ＳＢ４遺物出土状況（土器）



ＳＢ５遺物出土状況（壷）

ＳＢ７内小穴Ｐ３遺物出土状況

ＳＢ５（南より）

図版12

ＳＢ６（南より）

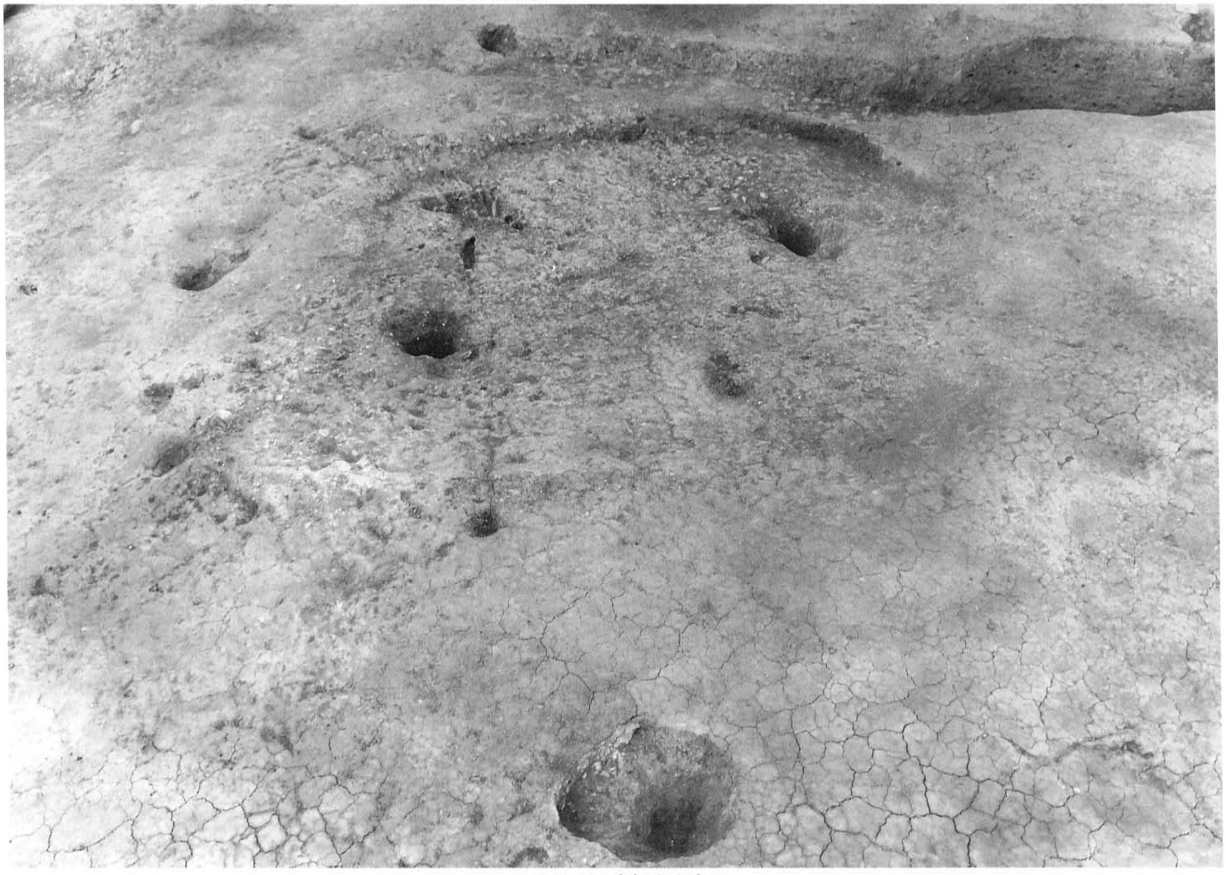
ＳＢ７炭化物検出状況

ＳＢ７（北より）

ＳＢ８（南より）

図版14

ＳＢ９遺物出土状況



ＳＢ９（南より）

ＳＢ９遺物出土状況（壷）

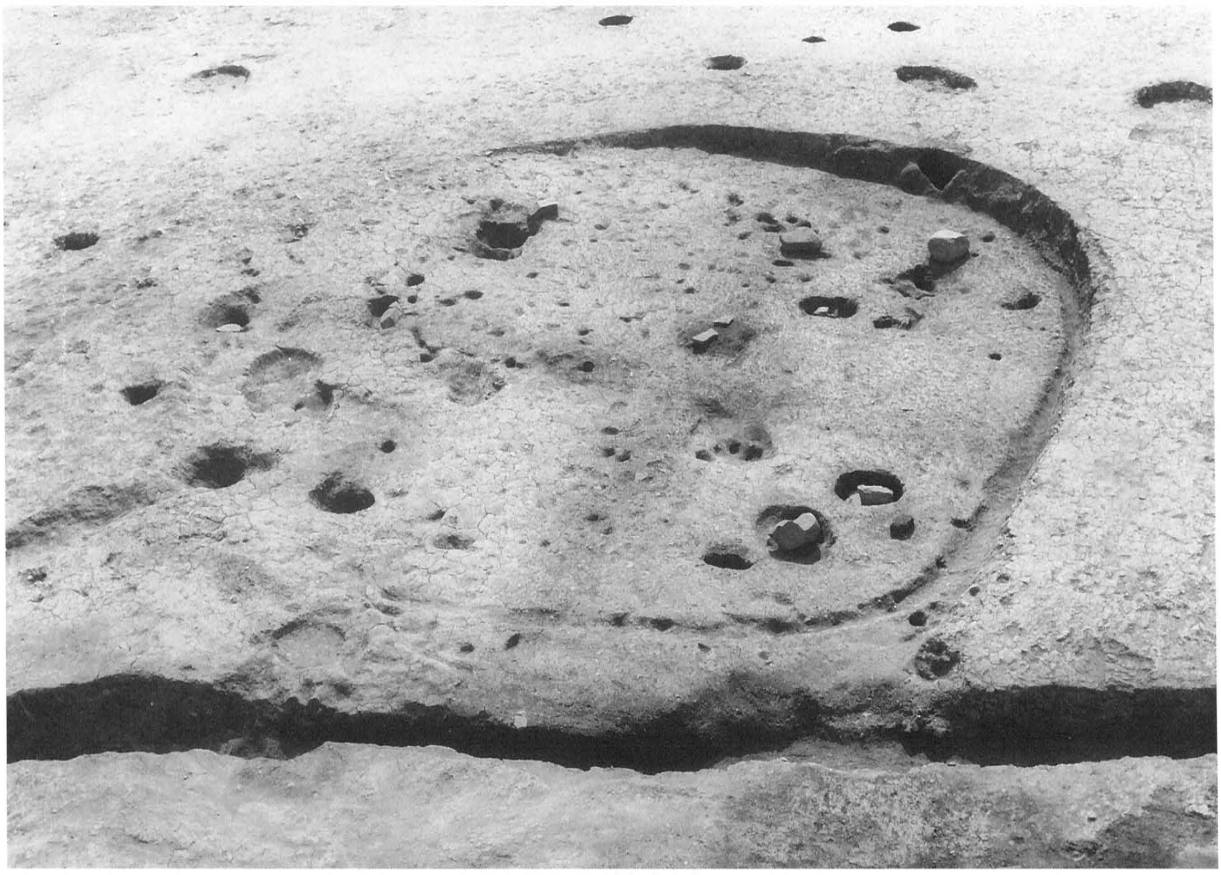
ＳＢ10遺物出土状況（扁平片刃石斧）

ＳＢ11炉跡検出状況

ＳＢ11遺物出土状況

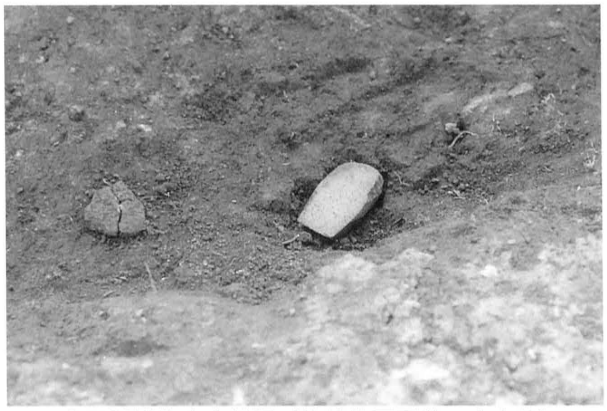
ＳＢ10（南より）

図版16



ＳＢ11（南より）

ＳＢ12・13・18（北より）



ＳＢ12遺物出土状況（柱状片刃石斧　東より）

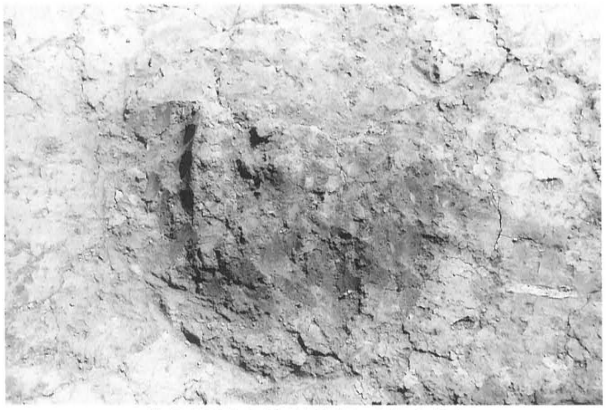
ＳＢ12遺物出土状況（用途不明石製品　東より）

ＳＢ12遺物出土状況

ＳＢ12・13遺物出土状況

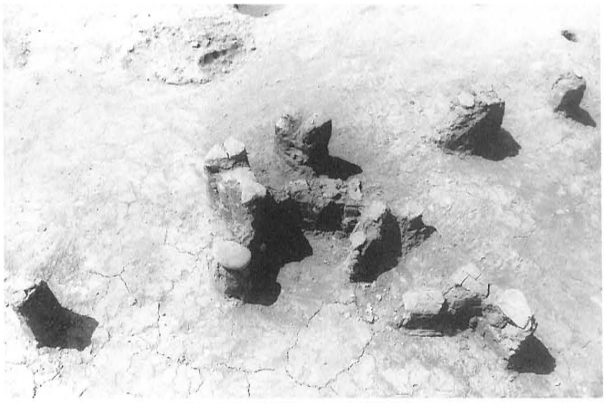
ＳＢ15・17（東より）

図版18



ＳＢ15焼土検出状況（北より）

ＳＢ15遺物出土状況１（壷　西より）



ＳＢ15遺物出土状況２

ＳＢ15遺物出土状況３

ＳＢ16（北より）

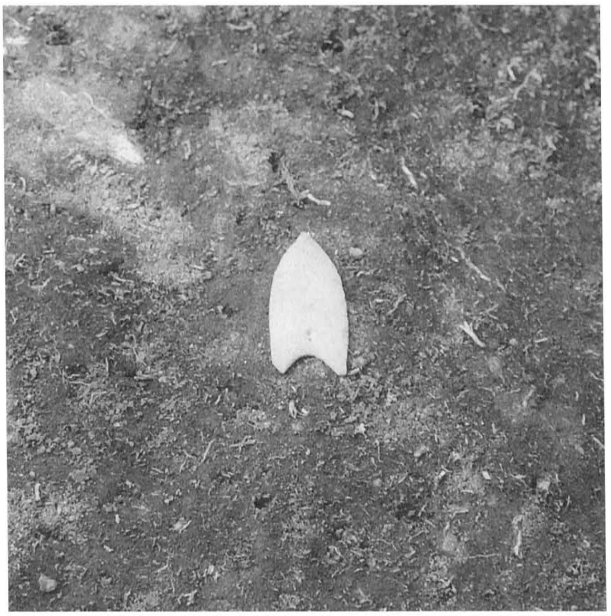
ＳＢ16遺物出土状況

ＳＢ19（西より）

図版20

ＳＦ10

ＳＤ８遺物出土状況（打製石斧）



遺物出土状況（磨製石鏃）

ＳＰ141遺物出土状況（南より）

ＳＨ１・２・３（西より）

図版22

ＳＨ４（南東より）

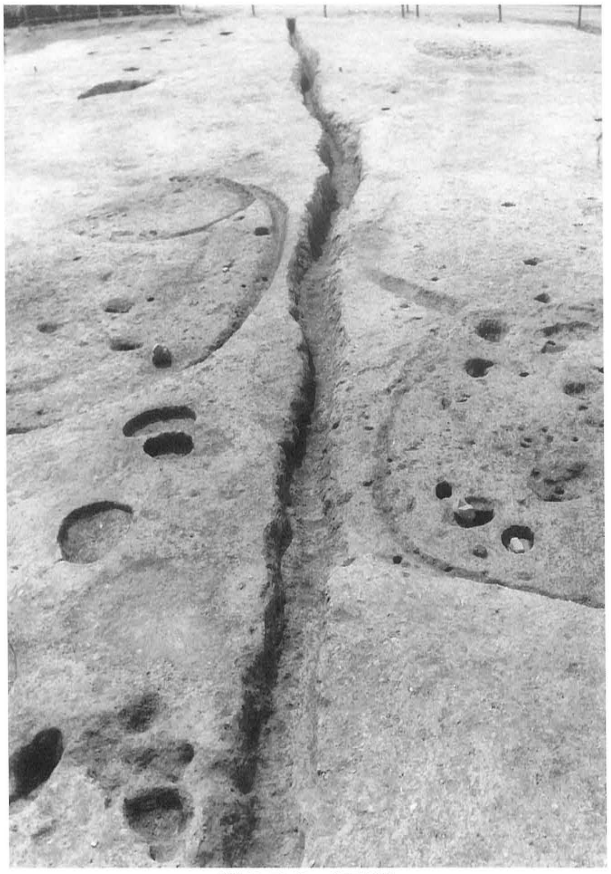
ＳＨ６（北東より）

ＳＰ181遺物出土状況１

ＳＰ181遺物出土状況２

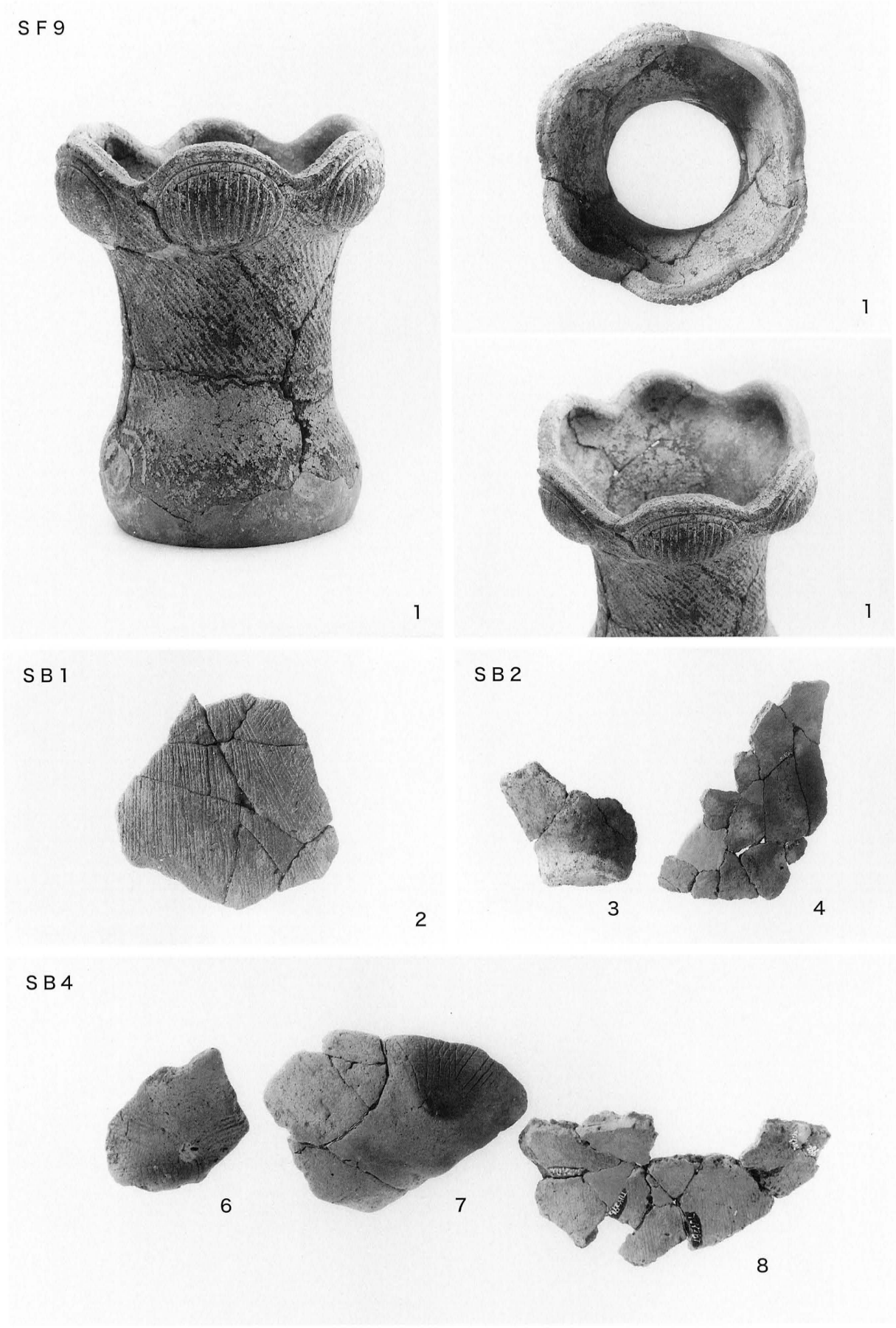
図版24

溝ＳＤ８（北側）

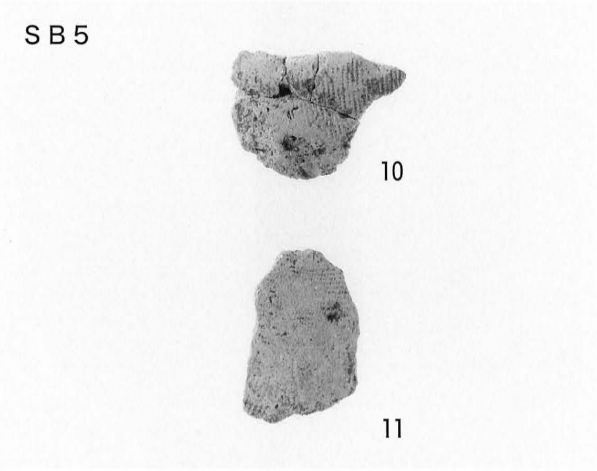


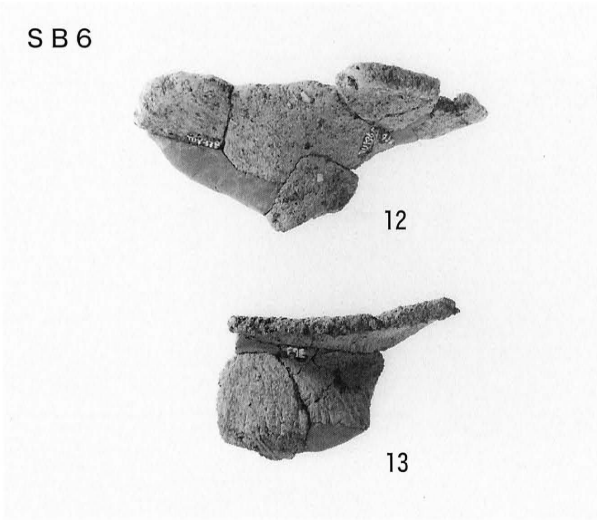
溝ＳＤ８（南側）

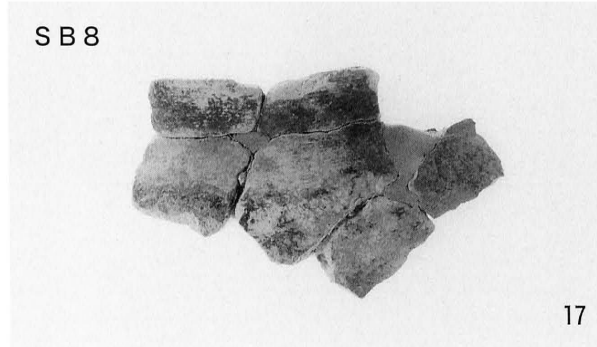
埋没谷と調査状況



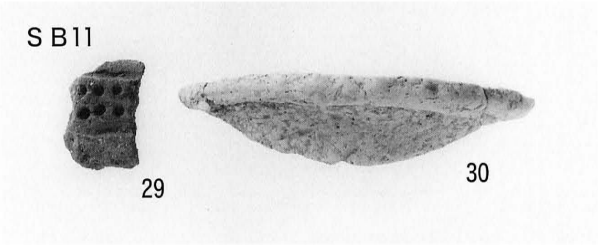
SF9、SB1・2・4出土土器

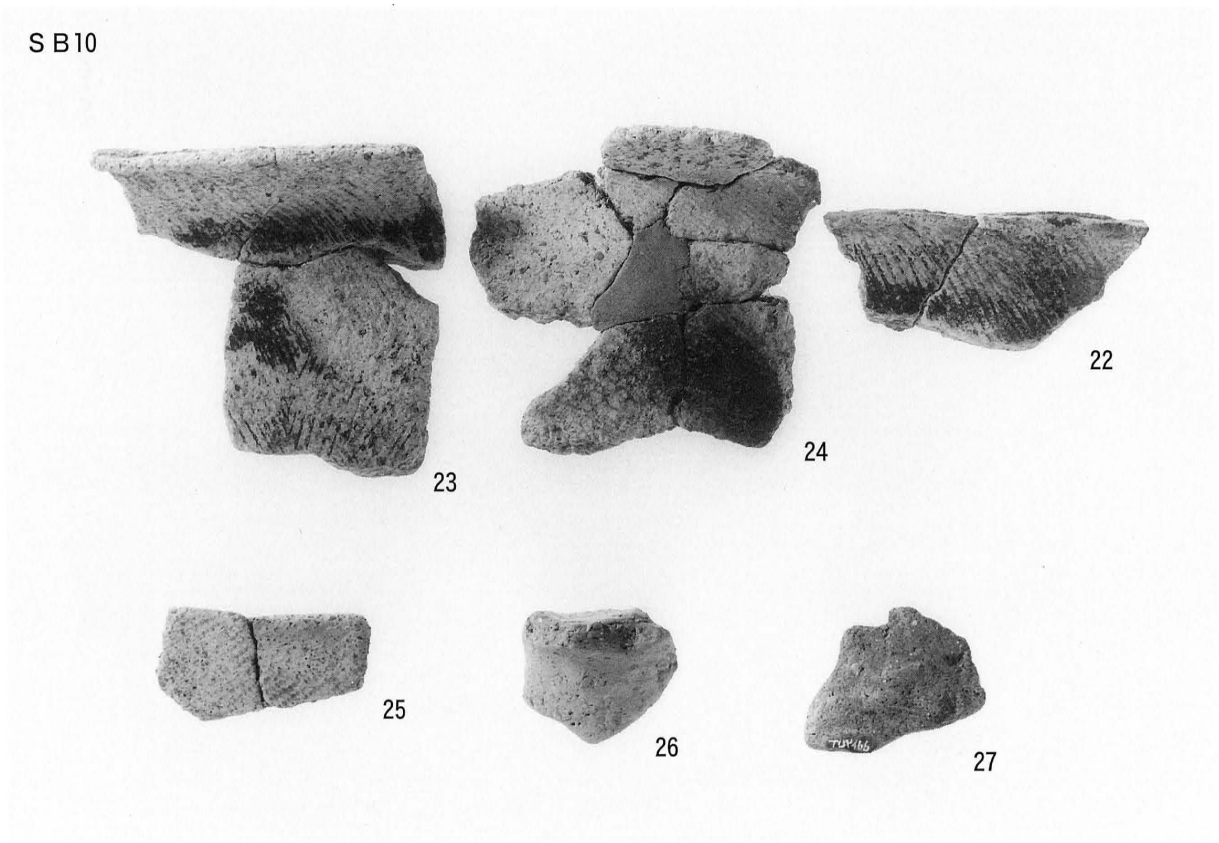






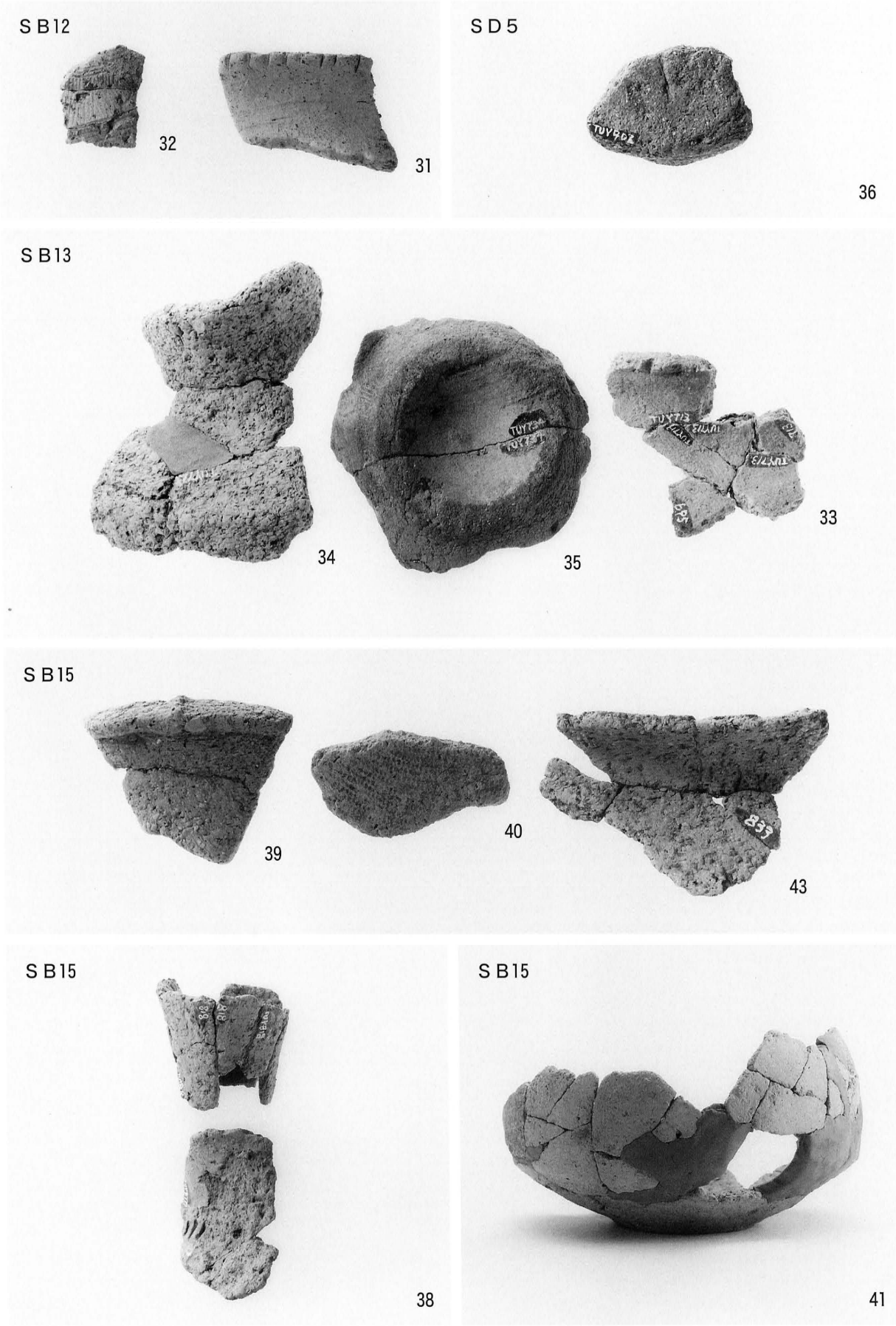
SB5～8出土土器



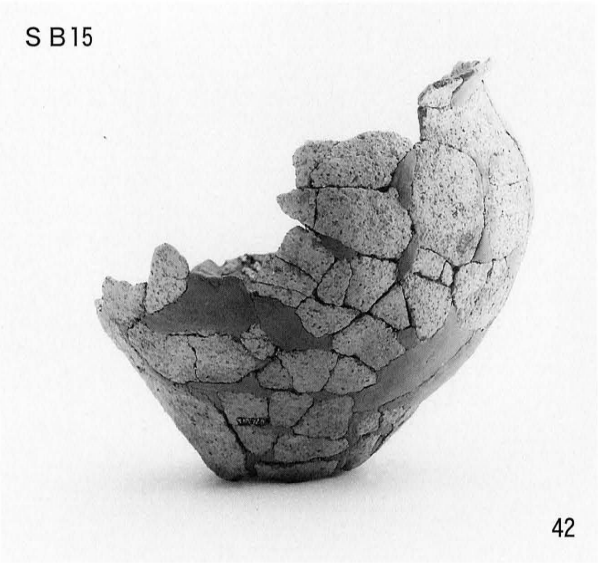


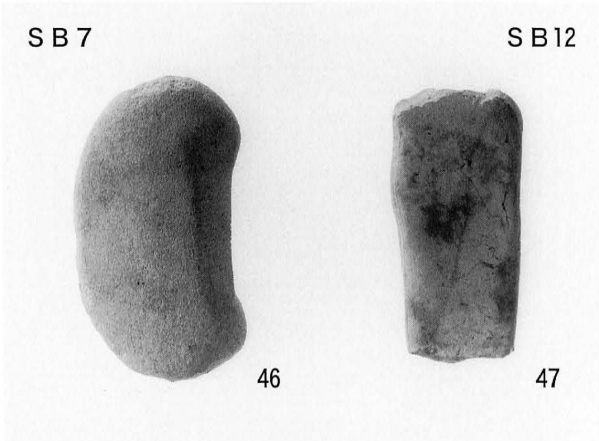
SB9～11出土土器

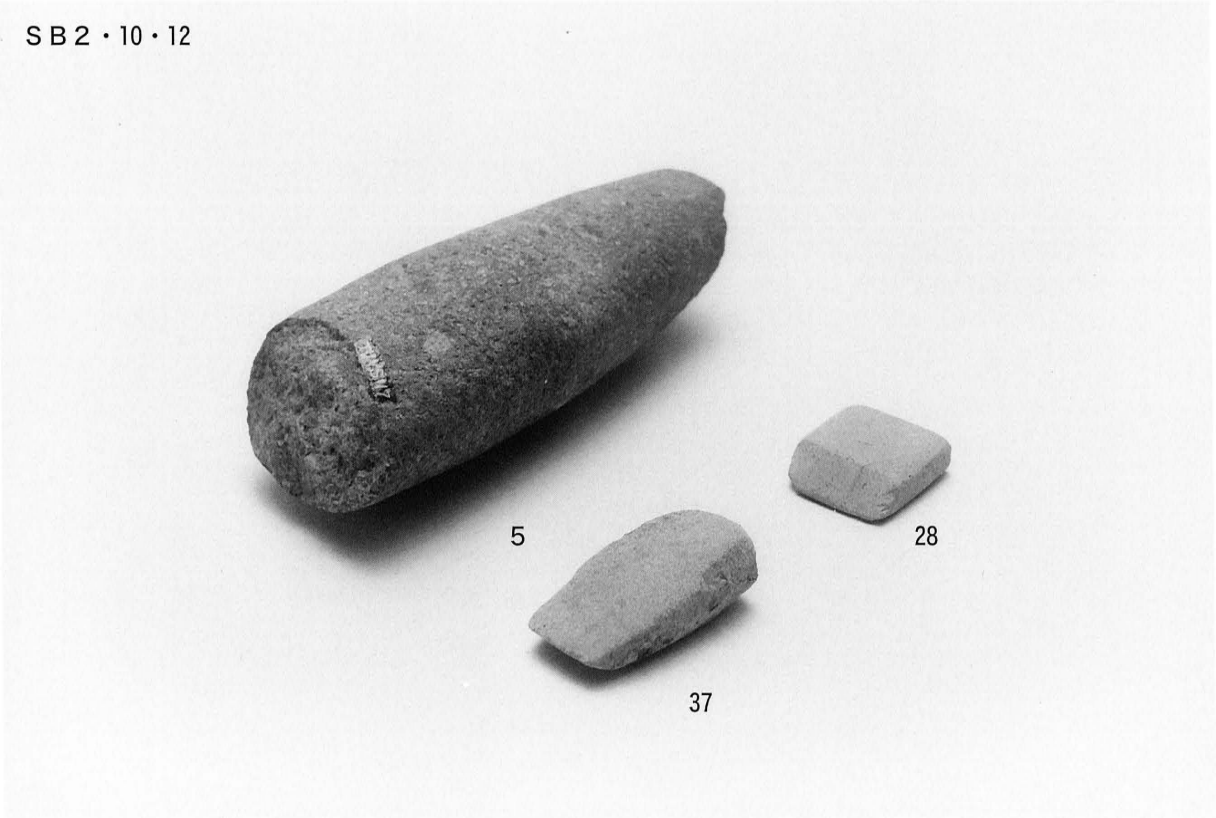
図版28



SB12・13・15、SD5出土土器

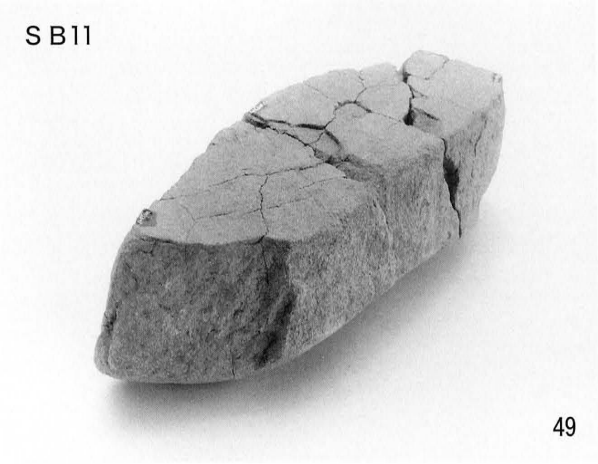


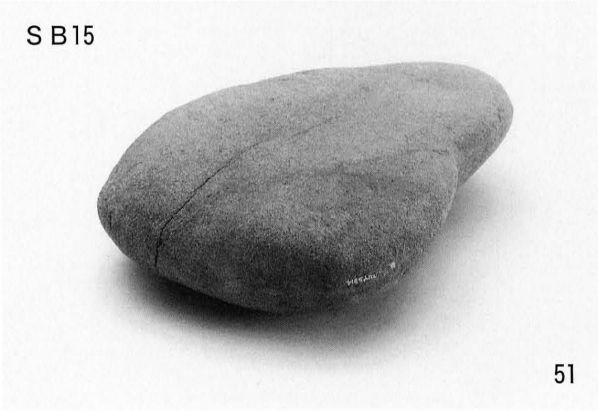


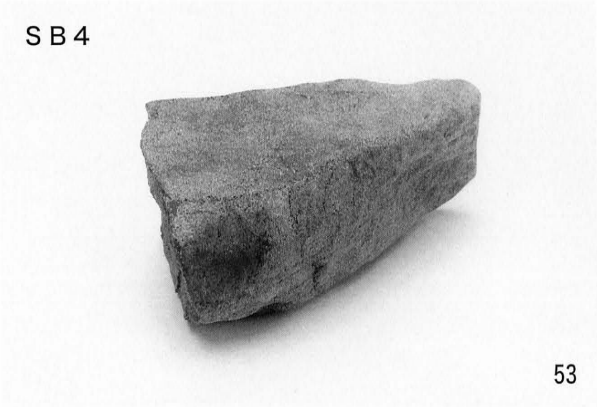


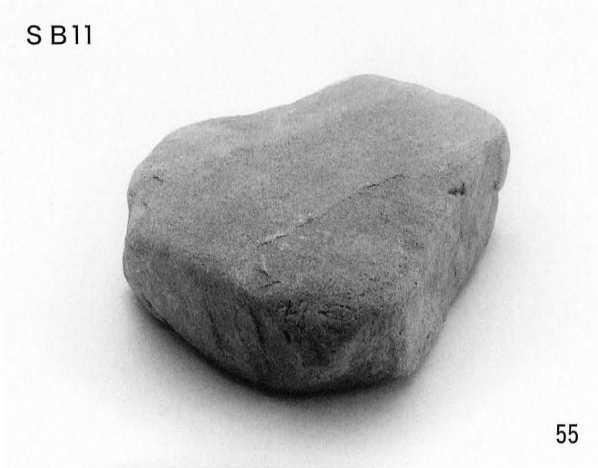
ＳＢ出土土器・石製品

図版30

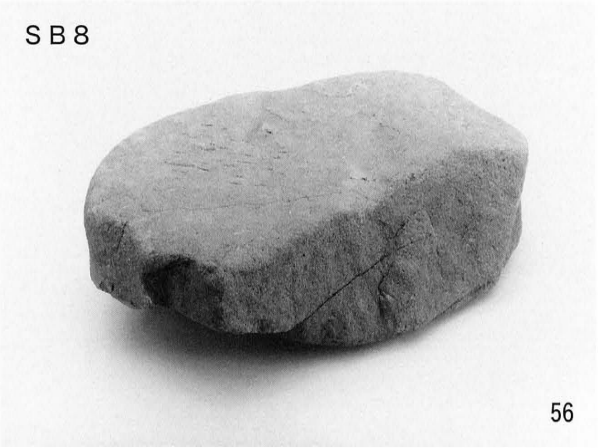


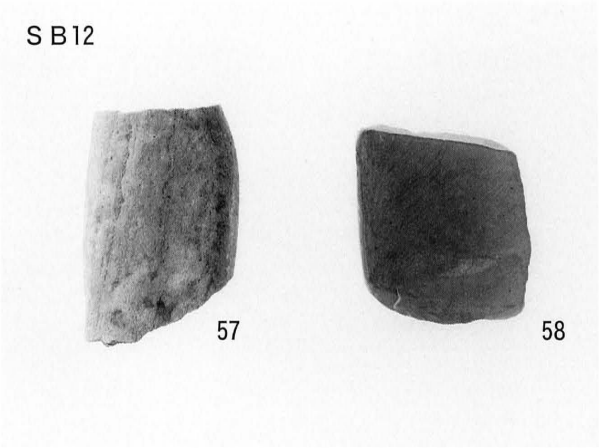


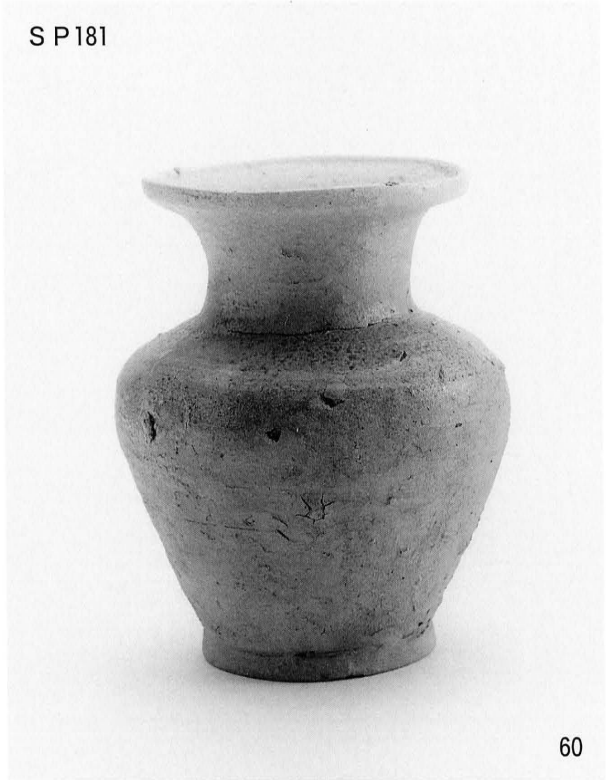


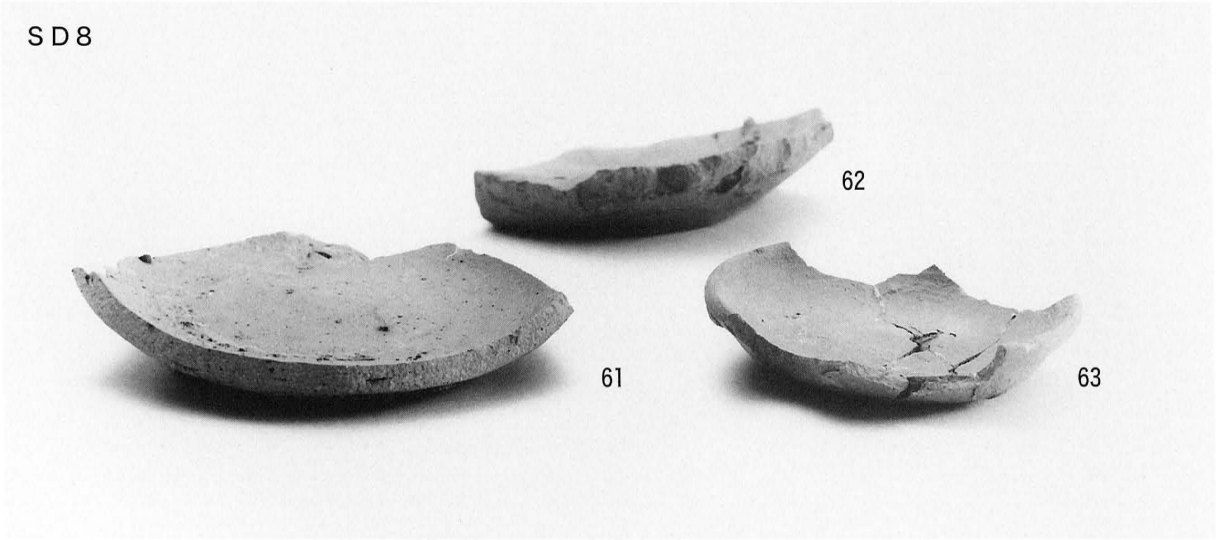


ＳＢ出土石製品



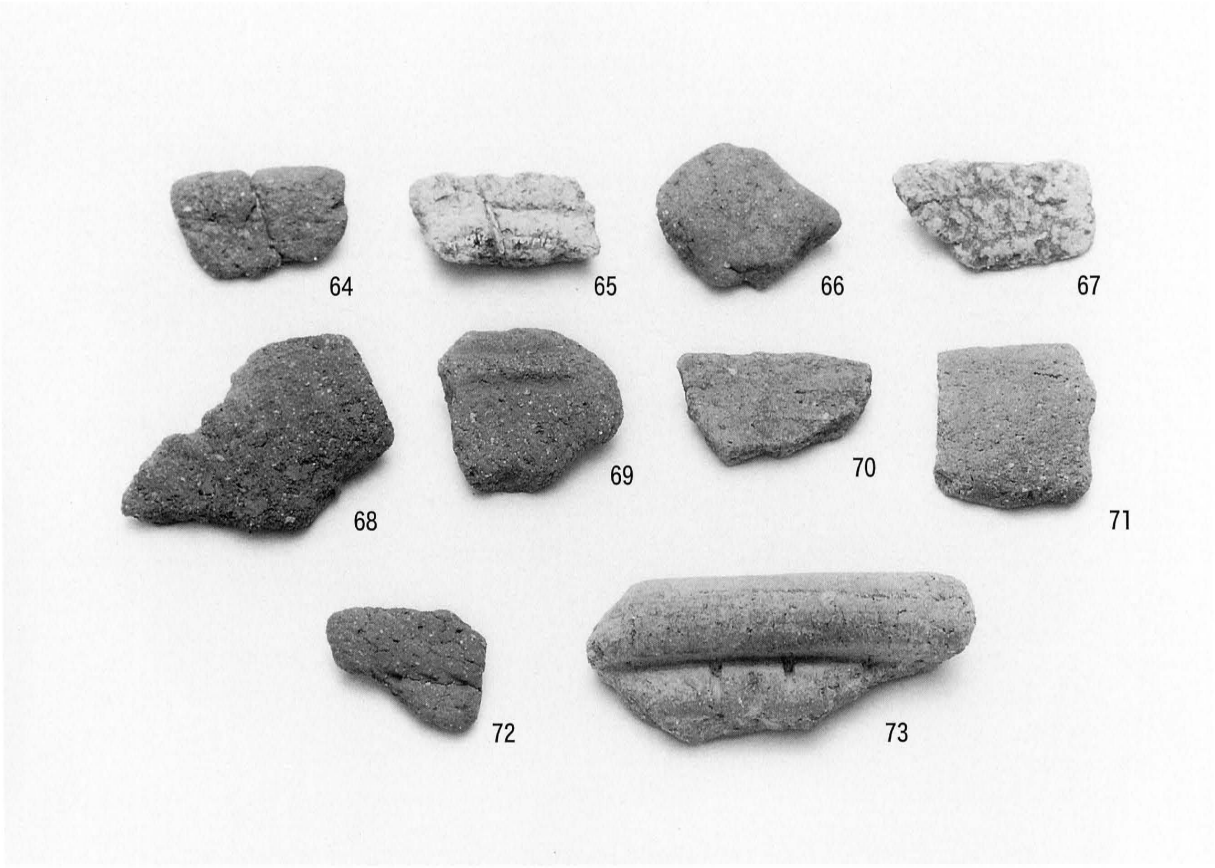




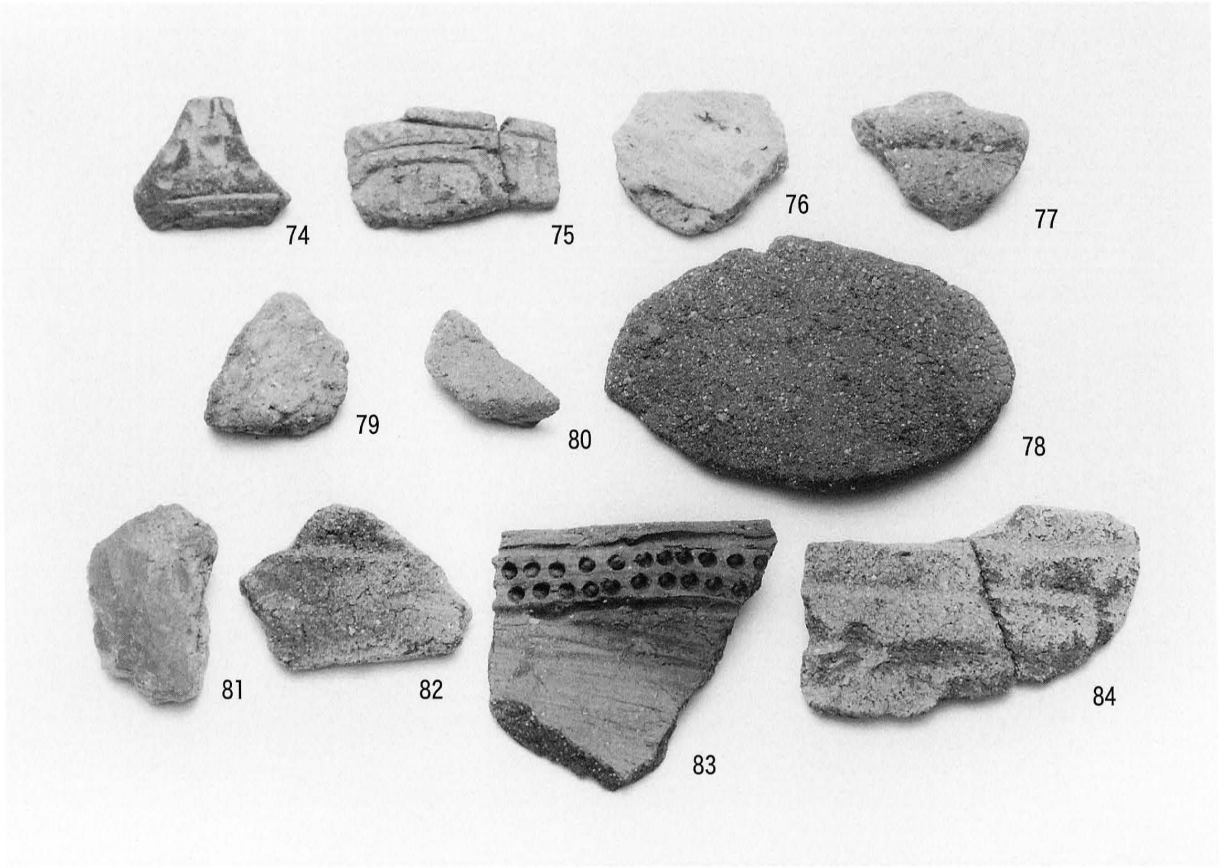


ＳＢ出土石製品、ＳＰ181出土灰釉陶器、ＳＤ８出土土器

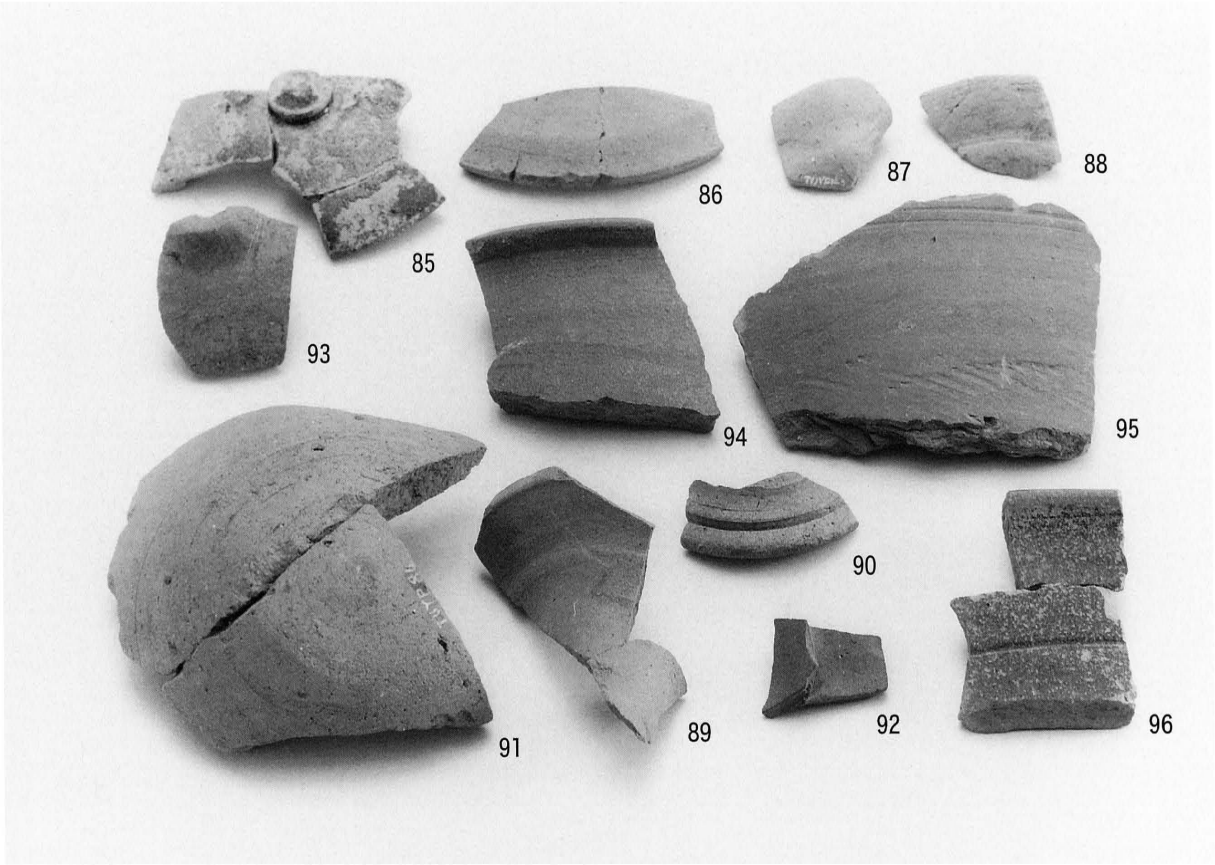
図版32



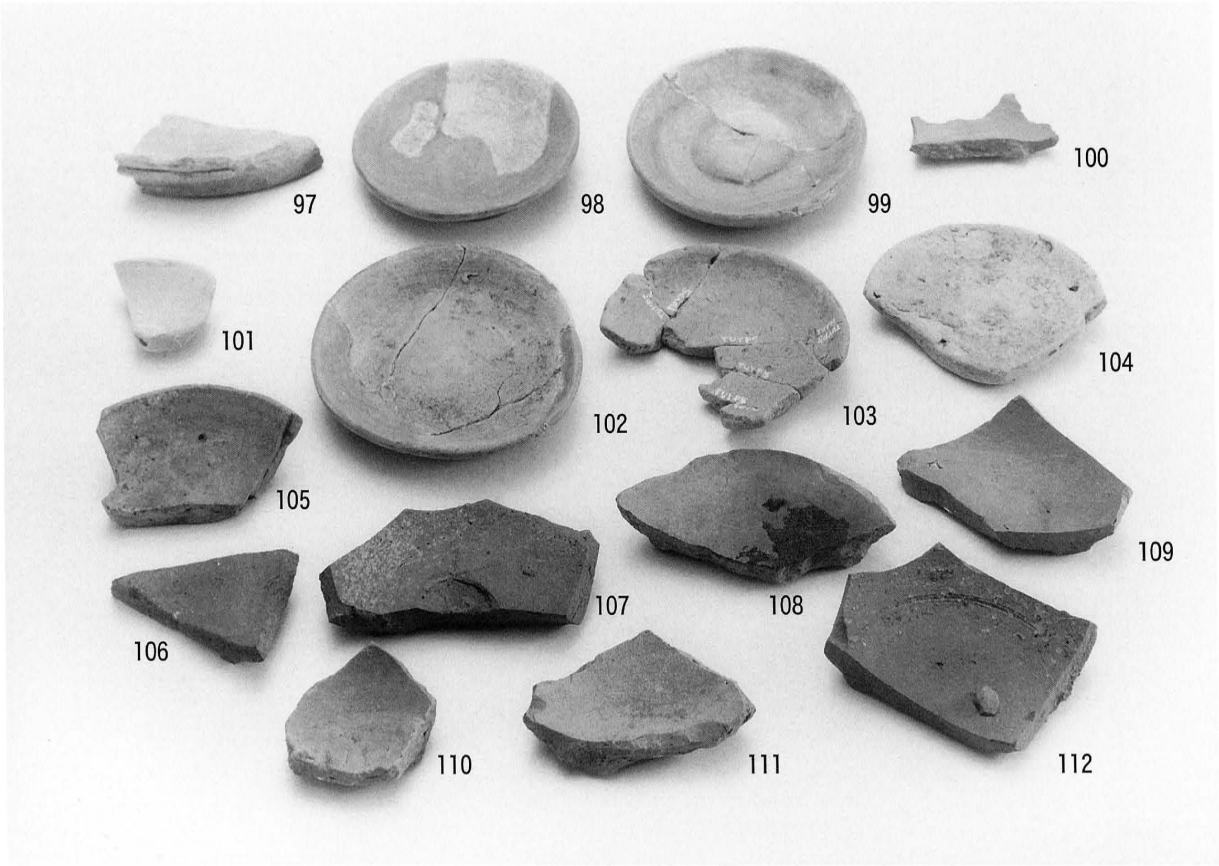
遺構外出土土器１



遺構外出土土器２

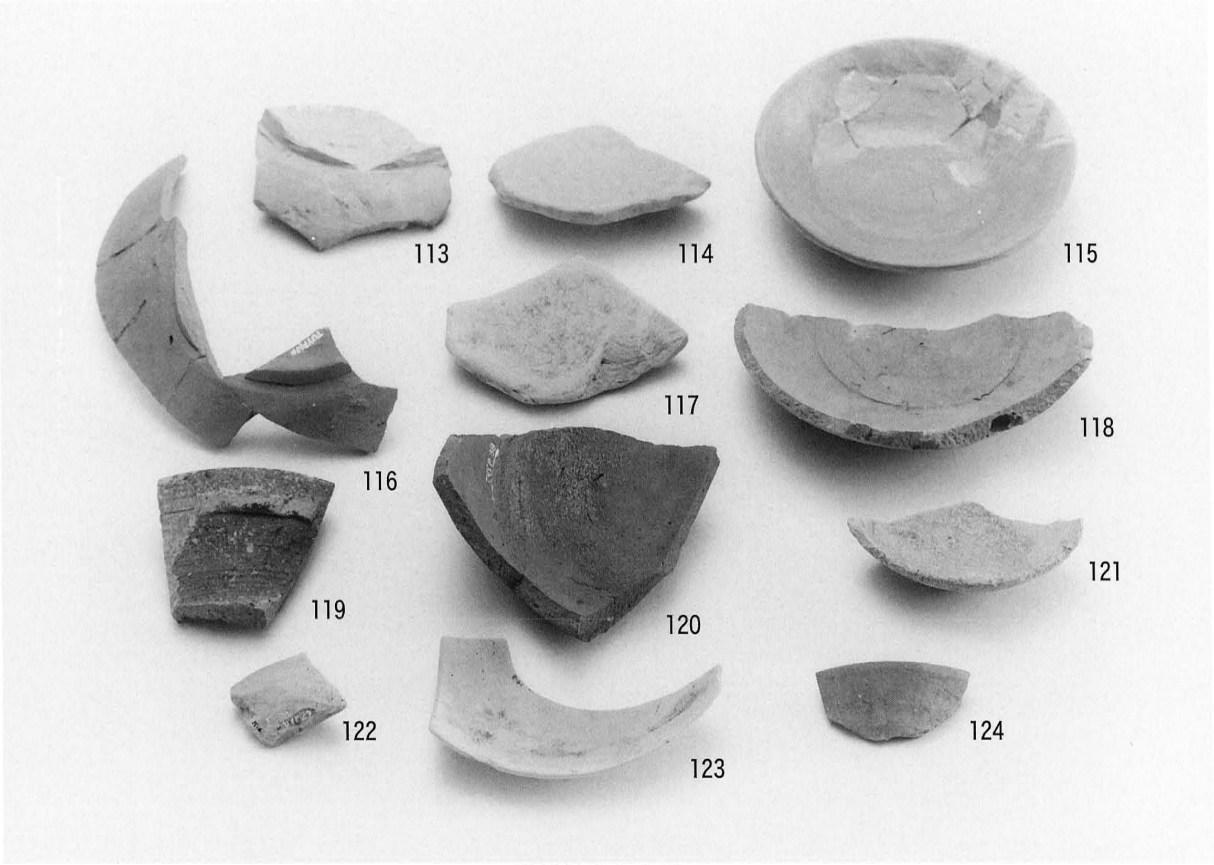


遺構外出土土器３

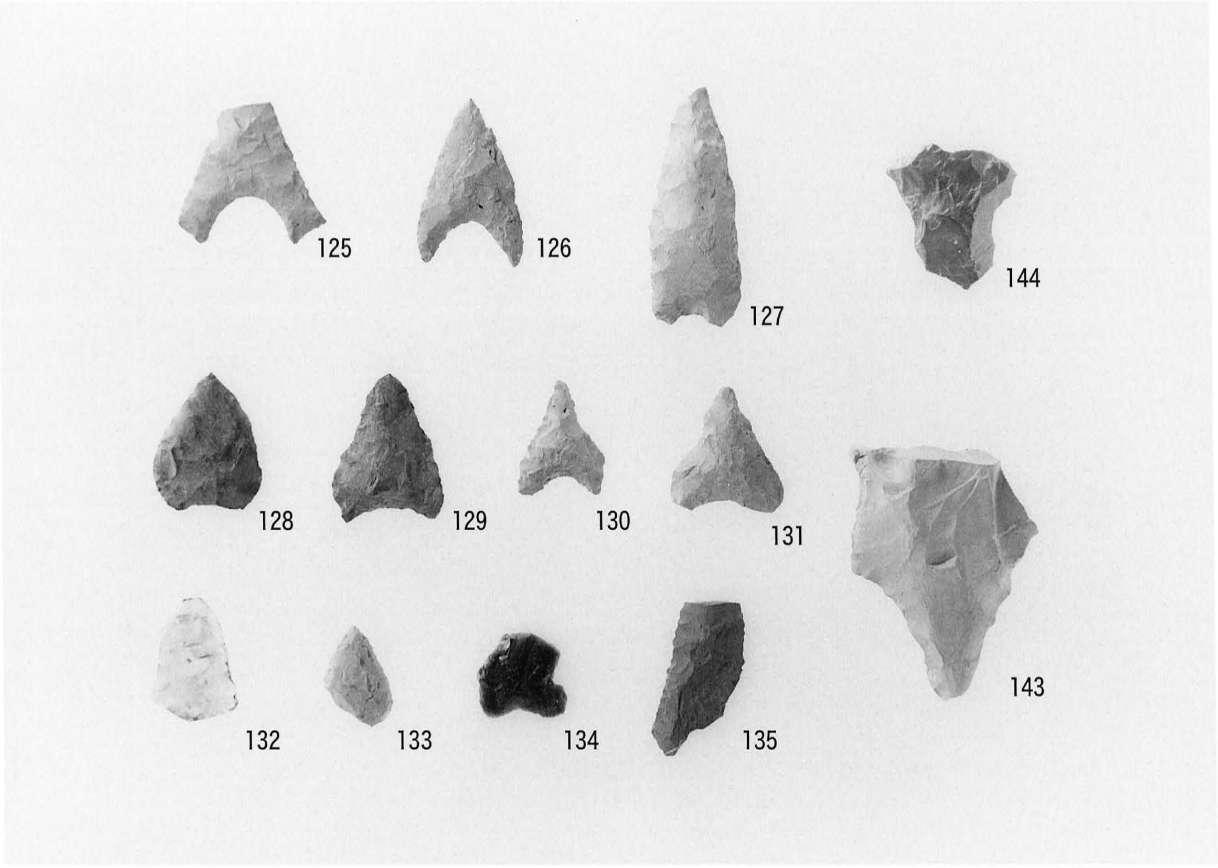


遺構外出土土器４

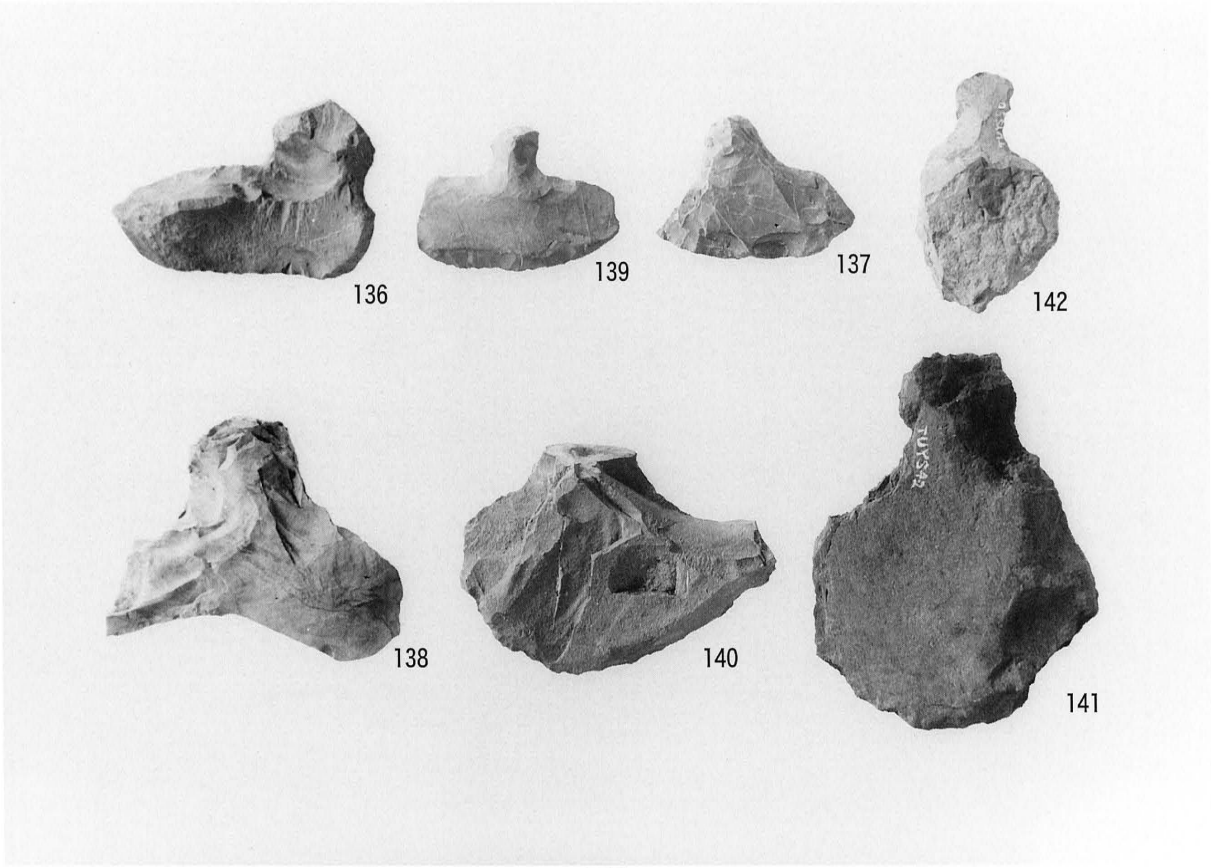
図版34



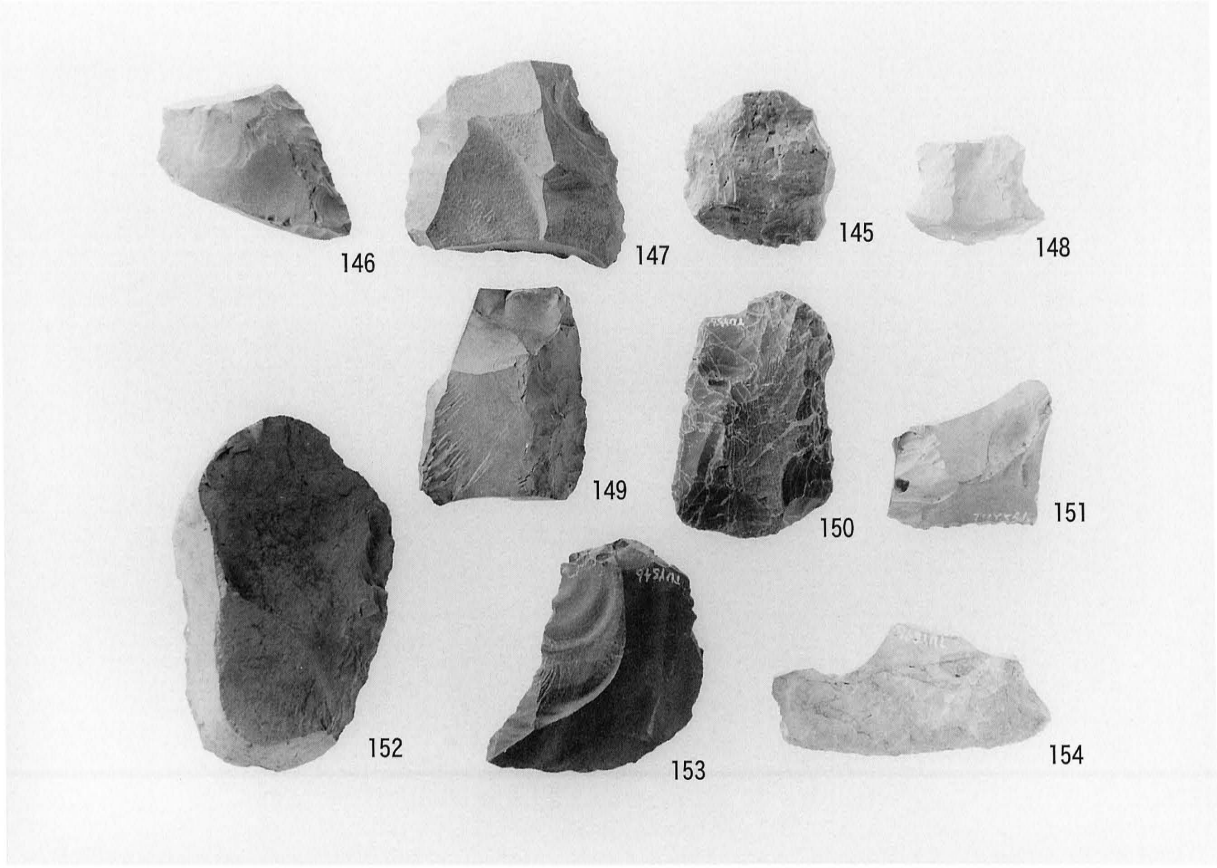
遺構外出土土器５



打製石鏃・石錐

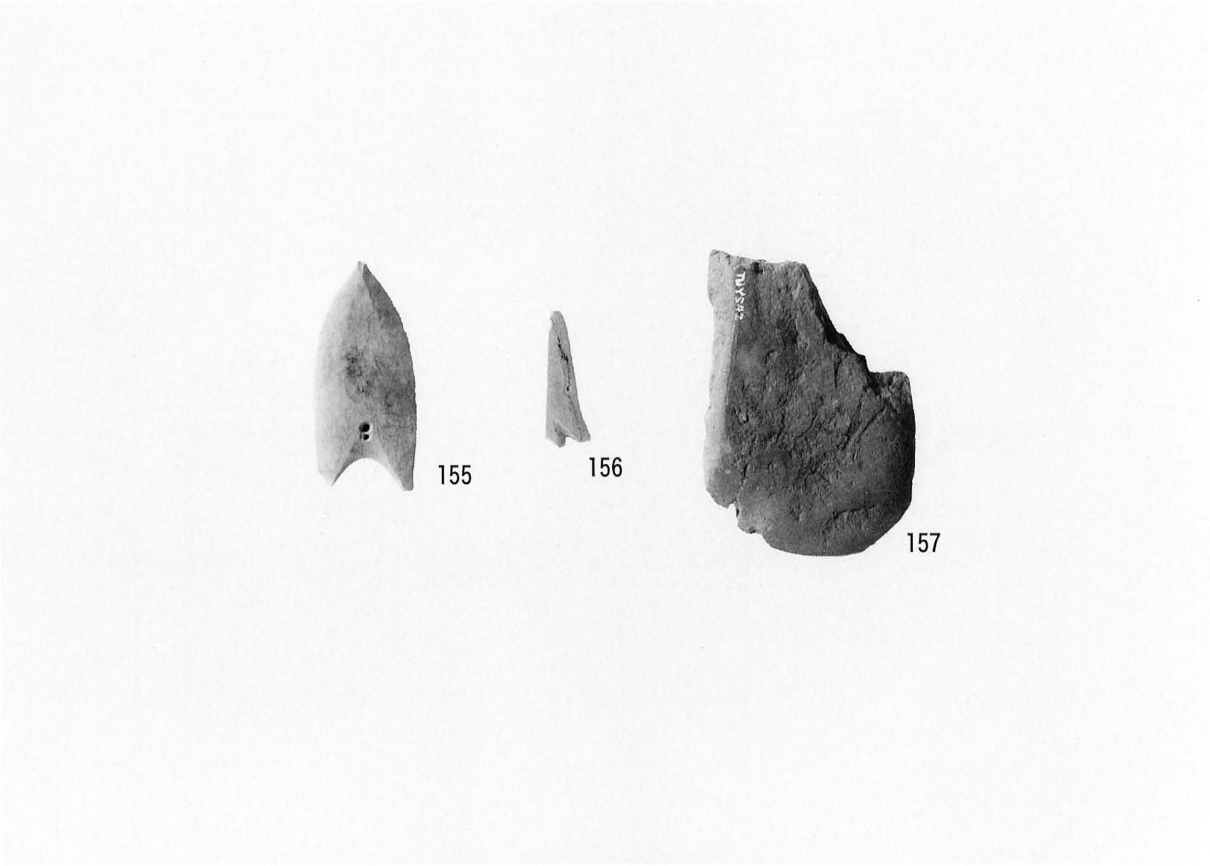

136
139
137
142
138
140
141

石匙

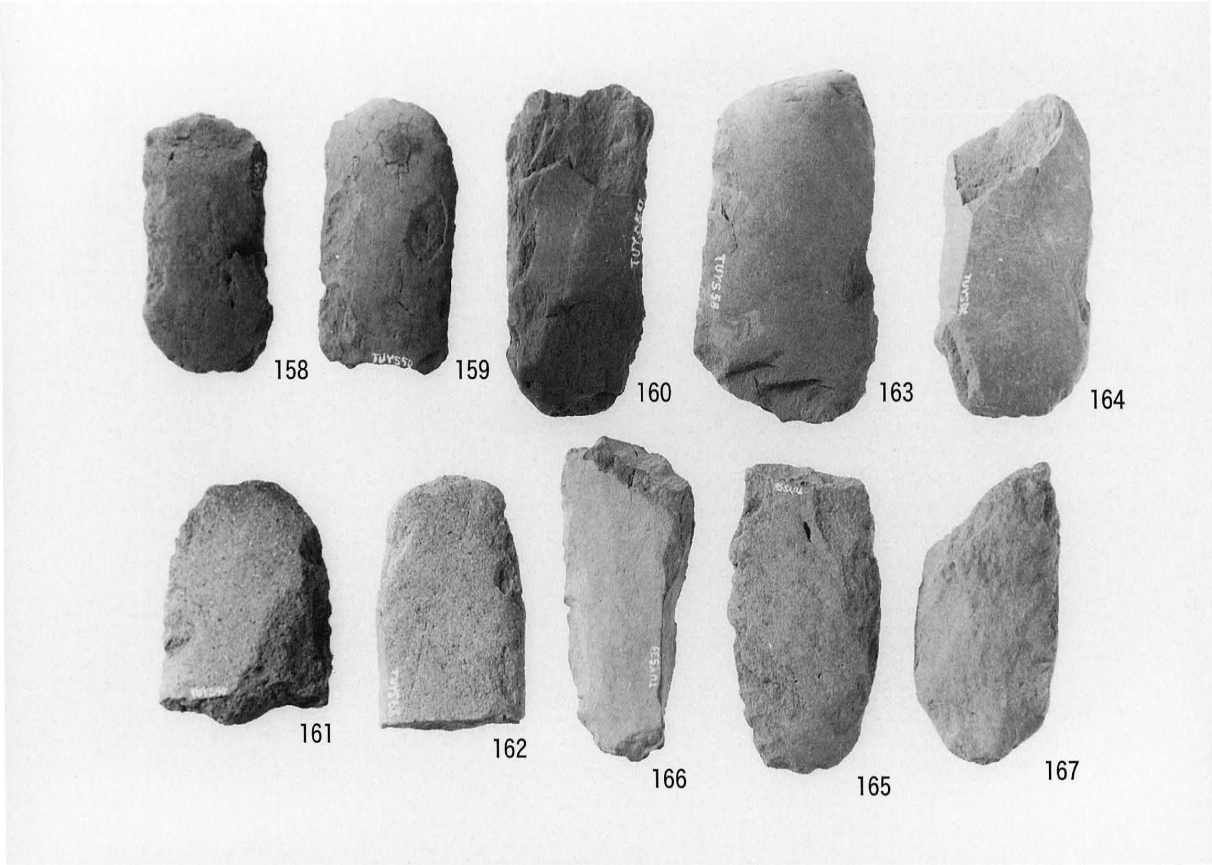

146
147
145
148
149
150
151
152
153
154

スクレイパー

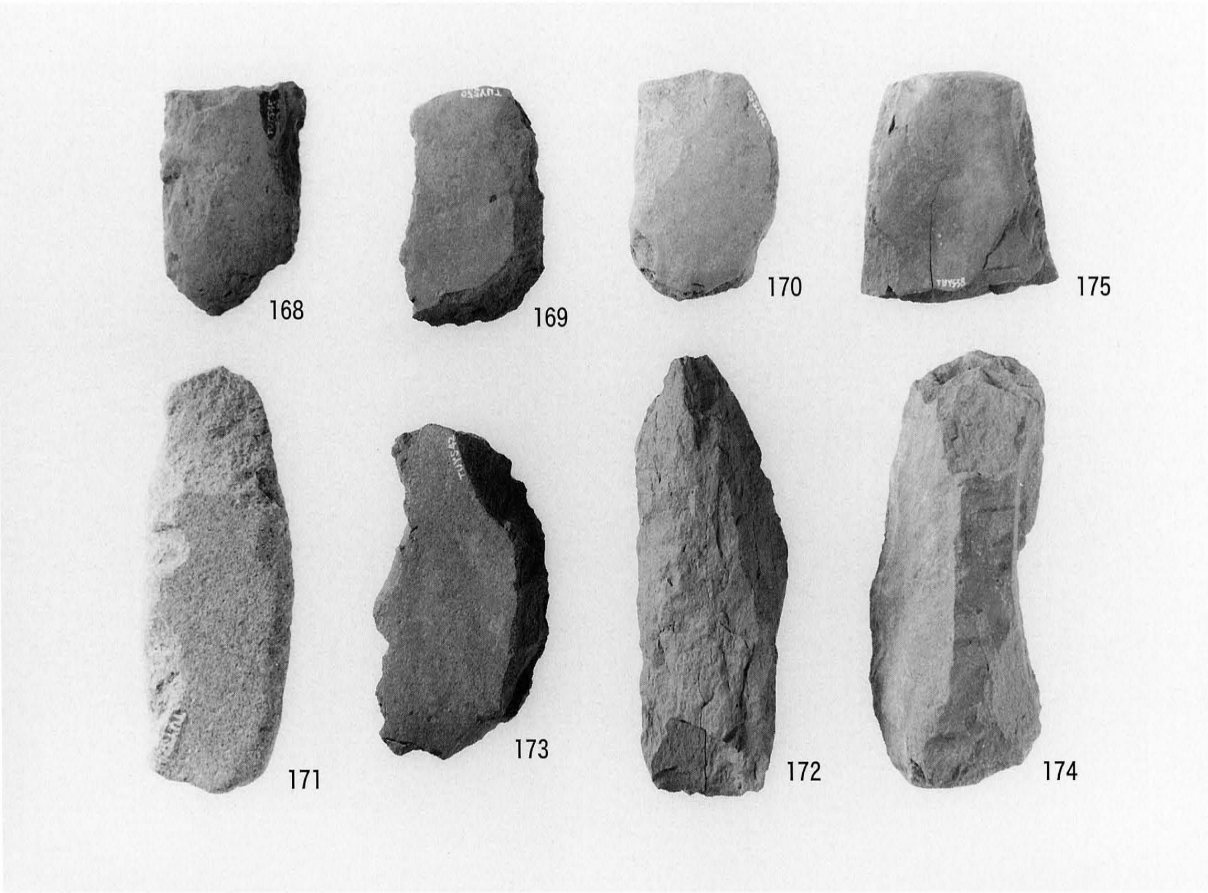
図版36

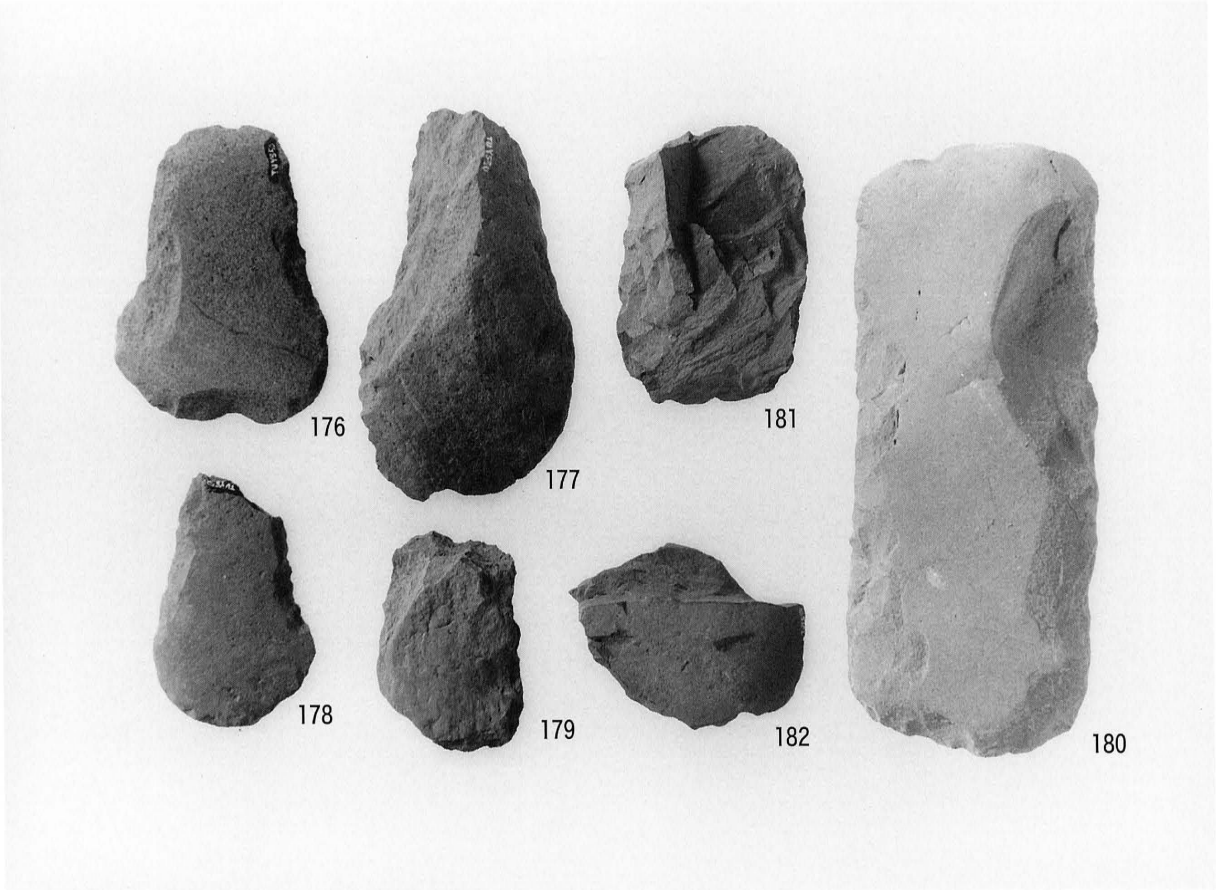


打製石鏃・磨製石斧

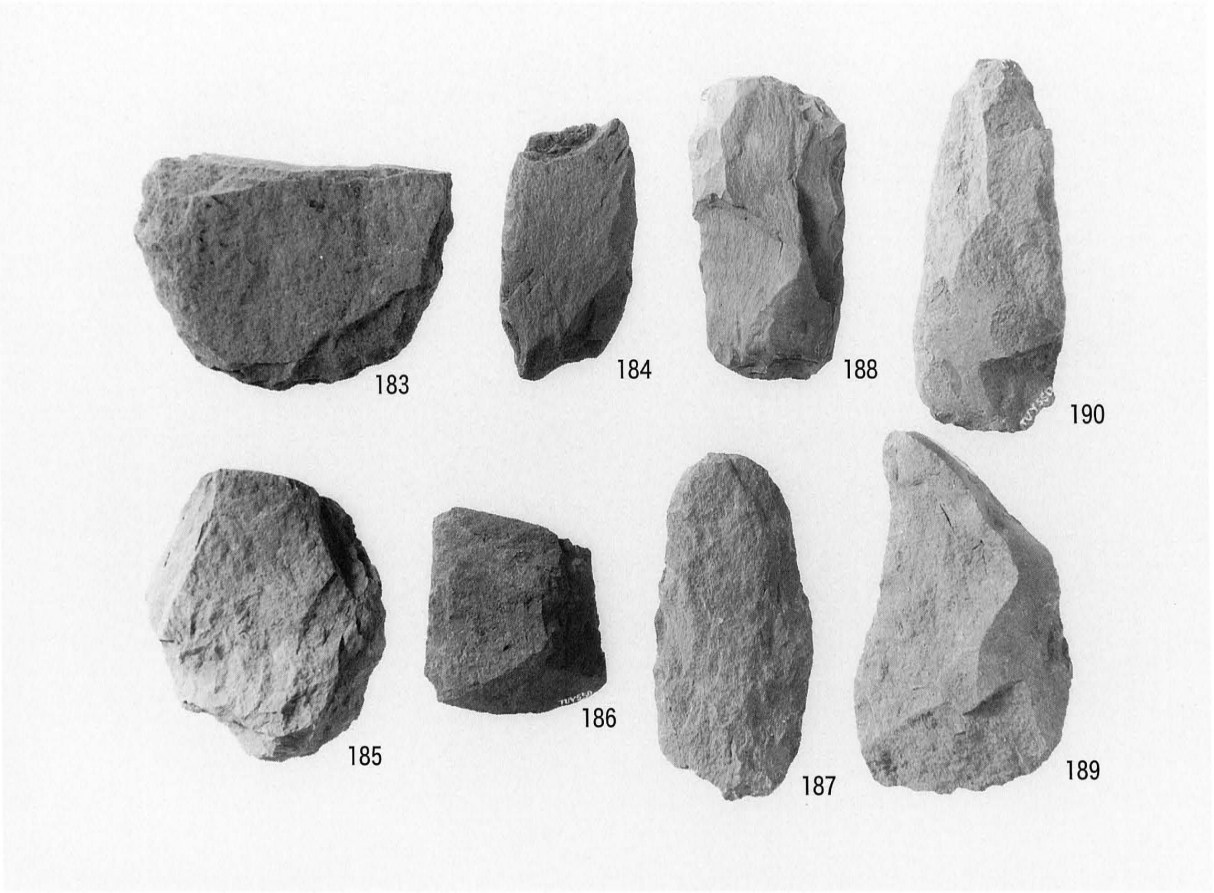


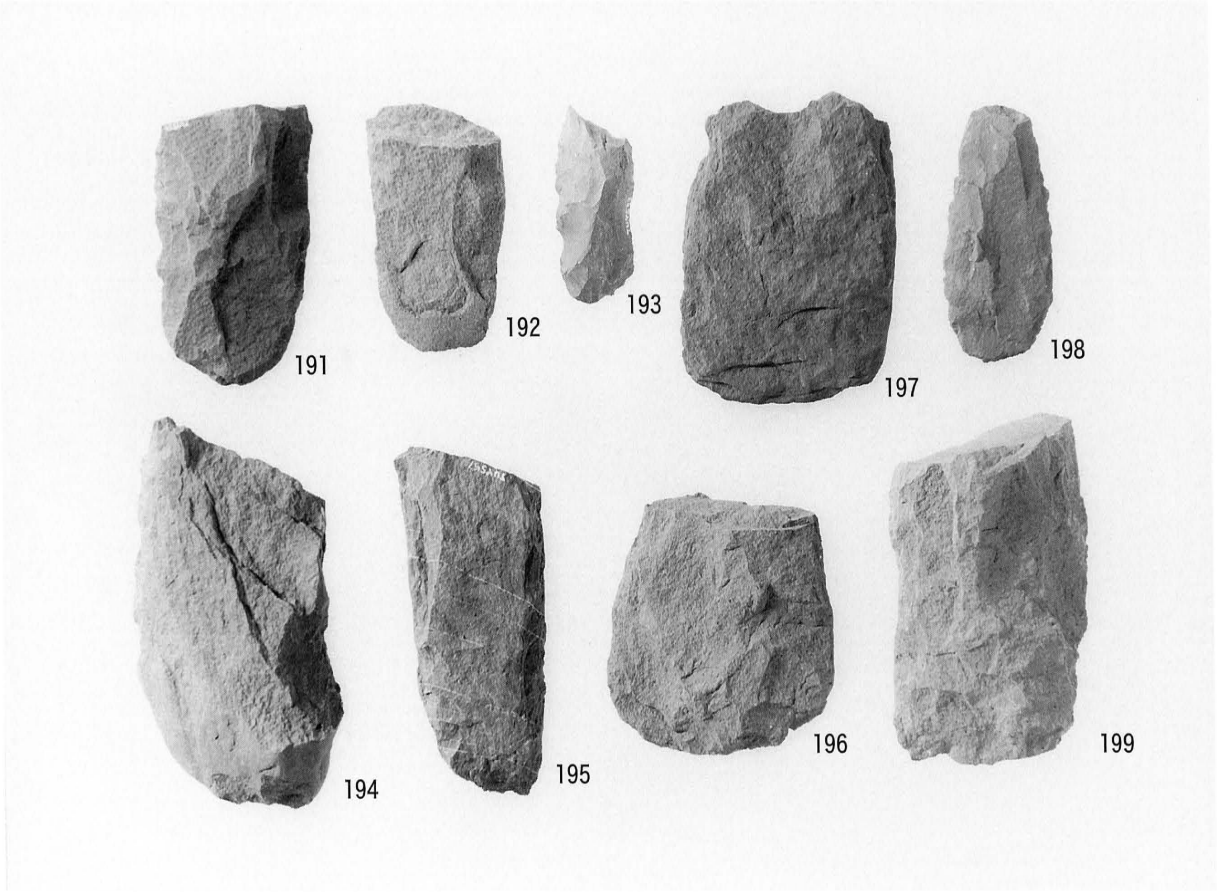
打製石斧１



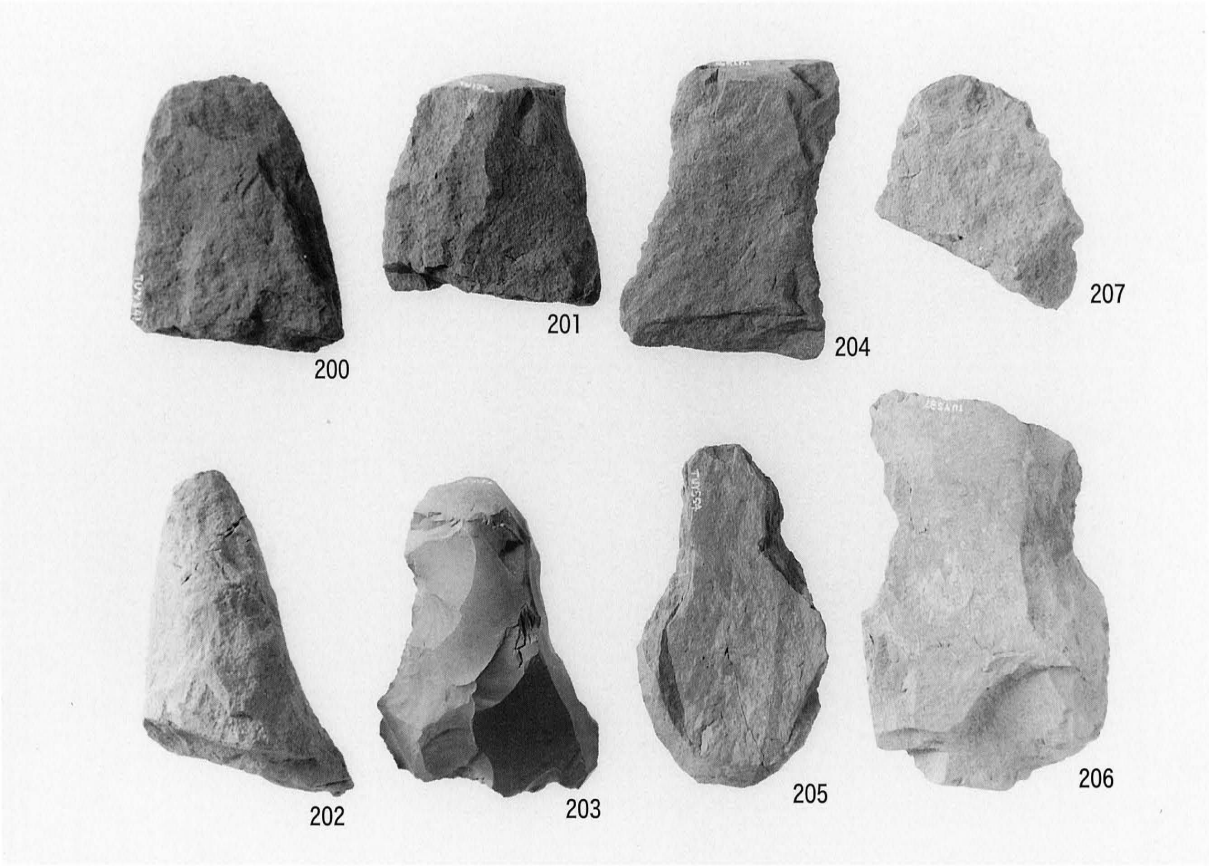


打製石斧２

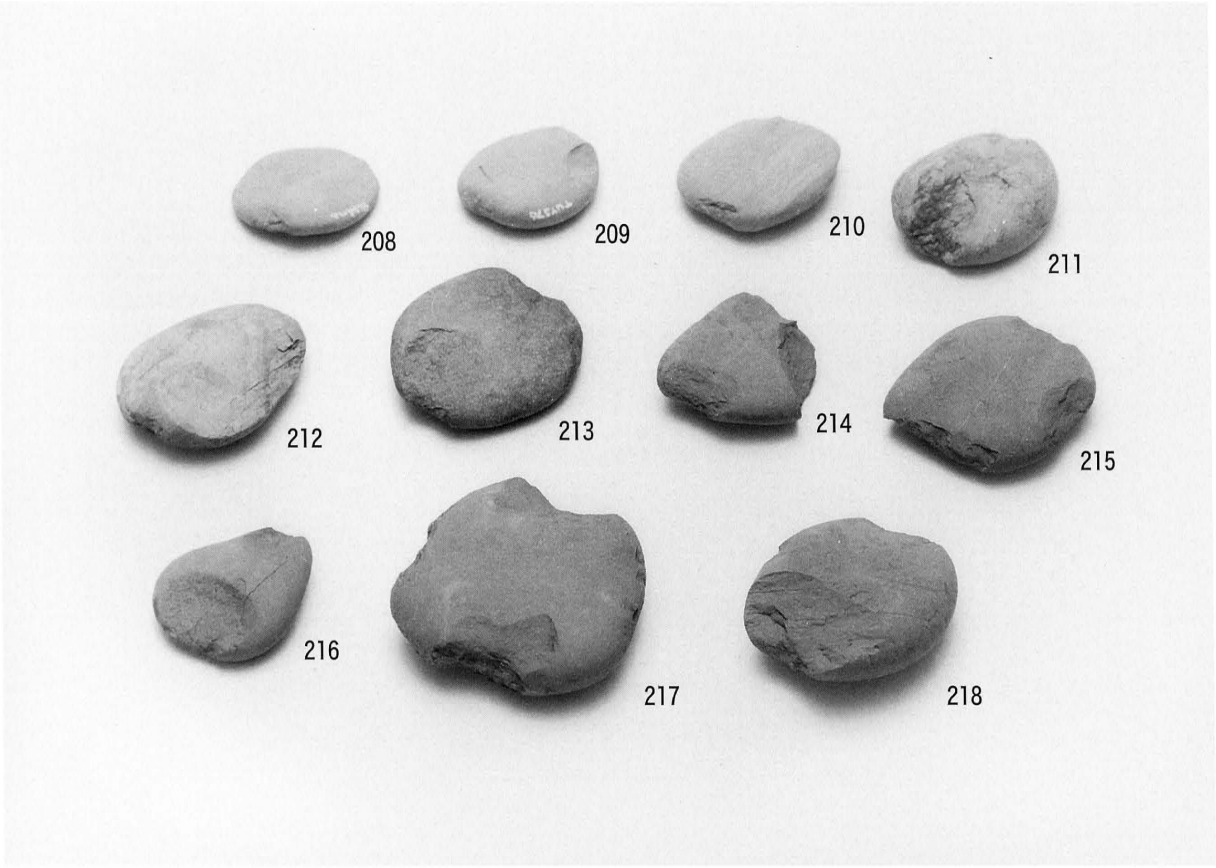

183
184
188
190
185
186
187
189


191
192
193
197
198
194
195
196
199

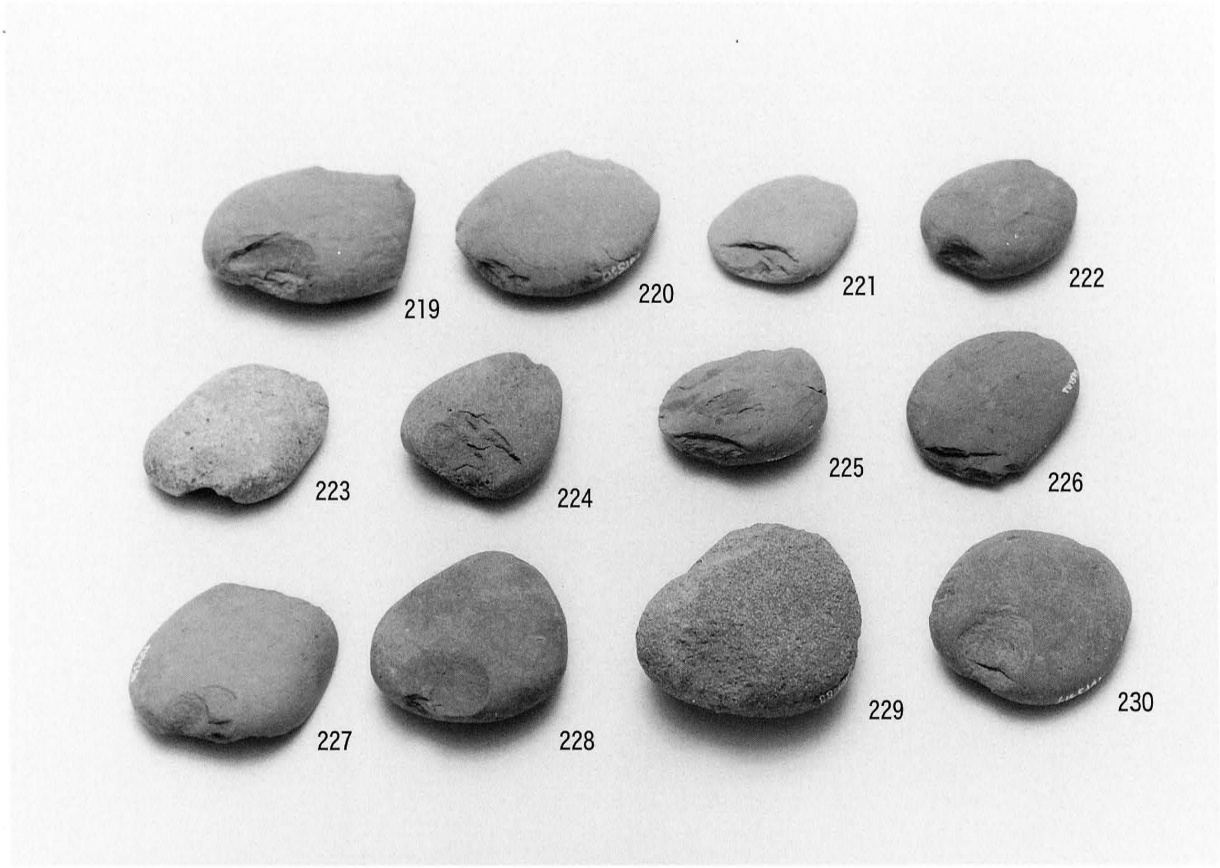
打製石斧３


200
201
204
207
202
203
205
206

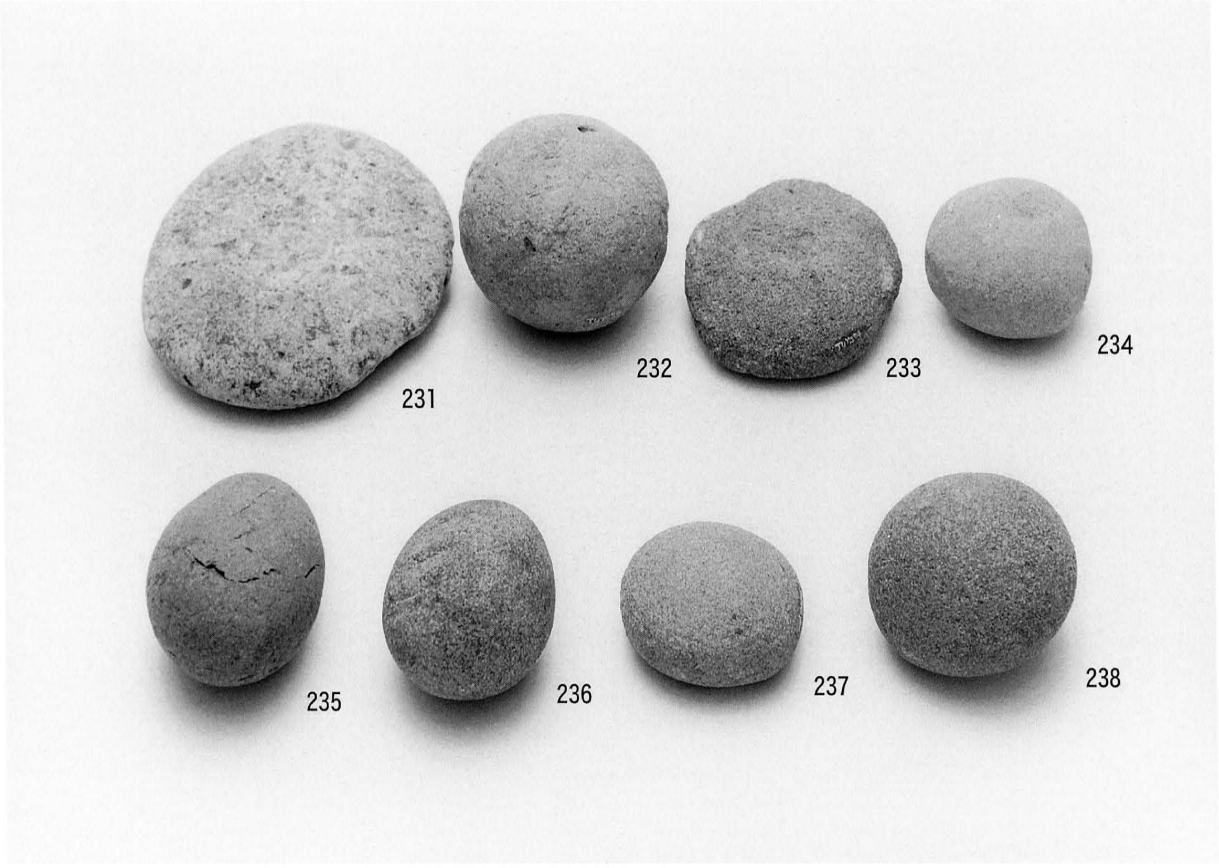
打製石斧４


208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218

打欠石錘１


219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230

打欠石錘２


231
232
233
234
235
236
237
238

敲石

報告書抄録

ふりがな	うえのやまいせき
書名	上ノ山遺跡
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	島田市－1
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第168集
編著者名	川上努／河合修／及川司
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20 ＴＥＬ054－262－4261(代表)　ＦＡＸ054－262－4266
発行年月日	2006年３月24日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町名	遺跡番号					
うえのやま 上ノ山	しずおかけん 静岡県 しまだし 島田市 しとろ 志戸呂	22209	237	世界測地系 34°50′46″ 日本測地系 34°50′38″	世界測地系 138°6′31″ 日本測地系 138°6′42″	19990105 ～ 19990930	3,929	開発等の事業に伴うもの(道路)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ山	集落	縄文中期～晩期	竪穴住居跡２ 土坑４	土器 (五領ヶ台式併行　大洞ＢＣ式併行) 打製石斧　磨製石斧　石鏃　石錐 石匙　石錘	
		弥生中期後半 ～後期	竪穴住居跡16 溝５　土坑１	土器　磨製石鏃　磨石　敲石 砥石　台石	
		古代	掘立柱建物４ 土坑１	須恵器　灰釉陶器	
		中世	掘立柱建物５ 溝４	山茶椀　小皿　かわらけ	
		近世		志戸呂焼　かわらけ	

要約

上ノ山遺跡は、縄文時代中期～近世にいたる複合遺跡。

縄文時代中期～晩期の集落は竪穴住居２軒、土坑４基を検出。後～晩期と思われる打製石斧が多量出土。

弥生時代中期後半～後期の集落は竪穴住居16軒、溝５条、土坑１基を検出。

古代では奈良時代の掘立柱建物4棟、平安時代の蔵骨器を収めた土坑１基を検出。平安時代には集落が断絶し、墓域となることが判明。

中世では前期(鎌倉時代)の掘立柱建物５棟、溝４条を検出。東遠系山茶椀類、非ロクロかわらけが出土。

近世では遺構は検出されなかったが、志戸呂焼、かわらけが少量出土。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第168集

上ノ山遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－1

平成18年３月24日

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
ＴＥＬ（054)262-4261㈹
ＦＡＸ（054)262-4266
印　刷　所　松本印刷株式会社
静岡県静岡市葵区南安倍１－１－18
ＴＥＬ（054)255-4862㈹